

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第568集

さかい
境遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業下門岡地区関連遺跡発掘調査
主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事関連遺跡発掘調査

2010

岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
岩手県県南広域振興局北上総合支局土木部
(財)岩手県文化振興事業団

境遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業下門岡地区関連遺跡発掘調査
主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域と風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発に当たっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業團埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置を取ってまいりました。

本報告書は、岩手県北上市の経営体育成基盤整備事業と主要地方道北上一関線下門岡地区道路整備事業に関連して平成20・21年度に発掘調査を実施した、北上市境遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代晩期末から弥生時代初頭期、中世の遺構が検出され、複合遺跡である特色を裏付ける結果となりました。特に縄文時代から弥生時代にかけては、住居跡とともに石器製作址と想定される集石遺構が、また中世では人骨を伴う墓壙が検出され、これらの資料は岩手県でも類例が少なく貴重なものと言えるでしょう。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成あたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県南広域振興局北上総合支局土木部、農林部農村整備室、北上市教育委員会や北上市埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年3月

財团法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県北上市福瀬町字地蔵堂3-1・190-1ほかに所在する境遺跡の調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業と主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事に関する緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室及び土木部との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け実施した。
- 3 本遺跡の調査成果は、すでに「平成20年度発掘調査報告書」(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集)において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 4 遺跡番号はME86-0069、遺跡略号はSA-08・SA-09である。
- 5 野外調査の面積・期間・担当者、室内整理の期間・担当者は次のとおりである。

平成20年度　野外調査

農林部農村整備室　面積　300m²/調査期間/平成20年8月1日～10月10日
土木部　　面積　1050m²/調査期間/平成20年8月1日～11月14日
調査担当者　鳥居達人・濱浩二郎・吉田泰治

平成20年度室内整理

平成20年11月1日～平成21年3月31日

整理担当者/鳥居達人・吉田泰治

平成21年度野外調査（土木部のみ）

調査面積　1240m²/調査期間/平成21年4月8日～平成21年7月14日

調査担当者/鳥居達人・北村忠昭・菅常久

平成21年度室内整理

平成21年6月1日～7月31日、11月1日～1月31日

整理担当者/鳥居達人・北村忠昭

- 6 野外調査における委託業務は、以下のとおりである。

基準点測量……株式会社キタミ・シーエーディー
航空写真撮影……東邦航空株式会社

- 7 遺物や炭化物の鑑定は、次の機関に依頼した。

人骨鑑定……パリノサーベイ株式会社
石材鑑定……花崗岩協会
炭化材年代測定…(株) 加速器分析研究所

- 8 野外調査・室内整理にあたっては、次の方々のご協力・ご指導をいただいた。

北上市教育委員会、北上市埋蔵文化財センター

- 9 本報告書の執筆については、第Ⅰ章「調査に至る経過」が岩手県県南広域振興局北上総合支局土木部・農林部農村整備室、第Ⅱ章1・2、第Ⅲ章1は吉田が行い、他は鳥居と北村が行った。鳥居以外の文責については()で示している。編集は鳥居が担当した。

- 10 本遺跡調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境と当遺跡過年度調査の概要	1
3 基本層序	13
(1) 平成19年度までの調査による基本層序	13
(2) 基本層序	13
III 調査と整理の方法	16
1 平成20年度調査	16
(1) 野外調査の方法	16
(2) 室内整理の方法	17
(3) 調査区名と遺構名	18
2 平成21年度調査	19
(1) 野外調査の方法	19
(2) 室内整理の方法	20
(3) 調査区名と遺構名	20
IV 平成20年度調査	23
1 調査の経過と概要	23
(1) 調査前の諸事情と調査の経過	23
(2) 検出遺構と出土遺物の概要	25
2 検出遺構と出土遺物	27
(1) 古代以降の検出遺構と出土遺物	27
(2) 繩文・弥生時代の検出遺構と出土遺物	47
3 分析鑑定(中世墓擴出土歯)	105
4 平成20年度調査の成果	107
(1) 中世	107
(2) 繩文・弥生時代	107
V 平成21年度調査	143
1 調査の経過と概要	143
(1) 調査の経過	143
(2) 検出遺構と出土遺物の概要	143
2 検出遺構と出土遺物	147
(1) 坪穴住居跡および坪穴住居状遺構	147

(2) 土 坑	157
(3) 焼 土	193
(4) 溝 跡	195
(5) 柱穴状土坑群	201
(6) そ の 他	208
(7) 造構外出土遺物	209
3 分析鑑定（放射性炭素年代）	233
4 平成21年度の調査の成果	236
(1) 古代・中世	236
(2) 繩文・弥生時代	237
VI 平成20・21年度調査の総括	277
1 中 世	277
(1) 墓塚と火葬跡	277
(2) 堀跡・溝跡と柱穴状土坑	280
(3) 鎌倉時代の近隣の史跡から	281
2 繩文時代晩期末葉から弥生時代初頭	282
(1) 捅 穴 住 居 跡	282
(2) 石器製作址として	282
3 繩文時代中期末葉以前	282
VII 境遺跡調査終了に当たって	283
1 境遺跡全体像	283
2 最 後 に	284
報告書抄録	287

図版目次

第1図 岩手県全図	2	第4図 周辺の遺跡	8
第2図 遺跡の位置	3	第5図 基本層序図	14
第3図 周辺の地形と調査区	4	第6図 グリッド配置図	22

〈平成20年度調査〉

第7図 A 遺構配置図（1）全体図	22	第25図 S K I 01堅穴住居状遺構	64
B 遺構配置図（2）農林部農村整備室	24	第26図 S K I 02・03堅穴住居状遺構	65
C 遺構配置図（3）土木部	26	第27図 S K 68～70土坑	68
第8図 S K 59・62・63墓壙	29	第28図 S K 71～74土坑	70
第9図 S K 60・61墓壙	30	第29図 S K 75～77土坑	72
第10図 S K 64・65土坑	35	第30図 S K I 02～S K 77出土遺物（1）	73
第11図 S K 66・67土坑	36	第31図 S K I 02～S K 77出土遺物（2）	74
第12図 6号堀跡	39	第32図 S N Q 01・02炉跡	77
第13図 S D 14・19溝跡	40	第33図 1・5号集石遺構、3号集石土坑	81
第14図 S D 15～18溝跡	41	第34図 2・4号集石土坑、埋設土器1・2	82
第15図 A柱穴状土坑群2と出土遺物	44	第35図 炉跡・集石遺構	83
第16図 古錢拓本図	45	第36図 S N Q 02炉跡・集石遺構出土遺物（1）	84
第17図 S I 14堅穴住居跡	52	第37図 集石遺構出土遺物（2）	85
第18図 S I 15堅穴住居跡	53	第38図 集石遺構出土遺物（3）	86
第19図 S I 14・15炉跡	54	第39図 A柱穴状土坑群3	88
第20図 S I 16堅穴住居跡	56	第40図 A柱穴状土坑群4	91
第21図 S I 14堅穴住居跡出土遺物（1）	57	第41図 遺構外出土土器（1）	97
第22図 S I 14堅穴住居跡出土遺物（2）	58	第42図 遺構外出土土器（2）	98
S I 15堅穴住居跡出土遺物（1）	58	第43図 遺構外出土土器（3）	99
第23図 S I 15堅穴住居跡出土遺物（2）	59	第44図 遺構外出土土器（4）、土製品	100
第24図 S I 15堅穴住居跡出土遺物（3）	59	第45図 遺構外出土石器（1）	101
S I 16堅穴住居跡出土遺物	60	第46図 遺構外出土石器（2）、石製品	102

表目次

〈平成20年度調査〉

第1表 周辺の遺跡	9	第4表 遺物観察表（古代～中世）	46
第2表 遺構名変更表①	19	第5表 S I 14・15堅穴住居跡柱穴観察表	55
第3表 A柱穴状土坑群2観察表	44		

第6表 遺物観察表（繩文・弥生時代）	(5) 炉跡・集石遺構①土器②石器 ······	87
(1) S I 14堅穴住居跡①土器②石器 ······	61	
(2) S I 15堅穴住居跡①土器②石器 ······	62	
(3) S I 16堅穴住居跡①土器②石器 ······	62	
(4) 堅穴住居状遺構、土坑①土器②石器 ······	75	
第7表 VI層以下柱穴状土坑群	(1) A柱穴状土坑群 3 ······	90
	(2) A柱穴状土坑群 4 ······	91
第8表 遺物観察表（遺構外）①土器②石器 ······	103	

写真図版目次

〈平成20年度調査〉

写真図版 1 空中写真 ······	109	写真図版19 S K 76・77土坑、S N Q01炉跡 ······	127
写真図版 2 調査前風景・西側完掘状況 ······	110	写真図版20 S N Q02炉跡、1・5号集石遺構 ······	128
写真図版 3 基本層序 ······	111	写真図版21 2号集石土坑、堆積土器 ······	129
写真図版 4 S K 59・60・62墓塚 ······	112	写真図版22 3・4号集石土坑、	
写真図版 5 S K 61・63墓塚 ······	113	A柱穴状土坑群 3 ······	130
写真図版 6 S K 64~67土坑 ······	114	写真図版23 A柱穴状土坑群 3・4、その他 ······	131
写真図版 7 6号掘跡 ······	115	写真図版24 土器（1）S I 14堅穴住居跡 ······	132
写真図版 8 S D 14~16溝跡 ······	116	写真図版25 土器（2）S I 15堅穴住居跡 ······	133
写真図版 9 S D 17~19溝跡、A柱穴状土坑群 2	117	写真図版26 土器（3）S I 16堅穴住居跡、	
写真図版10 古代以降の出土遺物（1） ······	118	土坑他 ······	134
写真図版11 古代以降の出土遺物（2） ······	119	写真図版27 土器（4）遺構外 ······	135
写真図版12 S I 14堅穴住居跡（1） ······	120	写真図版28 土器（5）遺構外 ······	136
写真図版13 S I 14（2）・S I 15堅穴住居跡（1）	121	写真図版29 石器（1）S I 14・15堅穴住居跡 ······	137
写真図版14 S I 15堅穴住居跡（2） ······	122	写真図版30 石器（2）S I 16堅穴住居跡、	
写真図版15 S I 16堅穴住居跡 ······	123	堅穴住居状遺構 ······	138
写真図版16 S K I01~03堅穴住居状遺構 ······	124	写真図版31 石器（3）土坑・集石遺構他 ······	139
写真図版17 S K 68~71土坑 ······	125	写真図版32 石器（4）遺構外① ······	140
写真図版18 S K 72~75土坑 ······	126	写真図版33 石器（5）遺構外② ······	141
		写真図版34 石器（6）遺構外③ ······	142

図版目次

〈平成21年度調査〉

第47図 グリッド設定図2、G区トレンチ ······	144	第56図 S K 87・90~93土坑 ······	161
第48図 遺構配置図 ······	146	第57図 S K 88・89土坑、S X 06炭化物 ······	162
第49図 S I 17堅穴住居跡 ······	148	第58図 S K 94~98土坑 ······	166
第50図 S K I 04堅穴住居状遺構 ······	150	第59図 S K 99・101・103~105土坑 ······	168
第51図 S K I 05堅穴住居状遺構 ······	152	第60図 S K 102・106・107土坑 ······	172
第52図 S K I 06堅穴住居状遺構（1） ······	154	第61図 S K 108~110土坑 ······	174
第53図 S K I 06（2）、 S K I 07堅穴住居状遺構 ······	155	第62図 S K 111~114土坑 ······	176
第54図 S K 78~81土坑 ······	156	第63図 S K 115~117土坑 ······	180
第55図 S K 82~86土坑 ······	158	第64図 S K 118~121土坑 ······	182

第65図	S K 122～125土坑	184	第77図	出土遺物（2）	218
第66図	S K 126～130土坑	188	第78図	出土遺物（3）	219
第67図	S K 131～135土坑	190	第79図	出土遺物（4）	220
第68図	S N 01・02焼土、S D 20～22溝跡	194	第80図	出土遺物（5）	221
第69図	S D 23～29溝跡	196	第81図	出土遺物（6）	222
第70図	S D 30～32溝跡	198	第82図	出土遺物（7）	223
第71図	F柱穴状土坑群	202	第83図	出土遺物（8）	224
第72図	H柱穴状土坑群1・3	204	第84図	出土遺物（9）	225
第73図	H柱穴状土坑群2（1）	206	第85図	出土遺物（10）	226
第74図	H柱穴状土坑群2（2）	207	第86図	出土遺物（11）	227
第75図	S X 05・07炭化物	208	第87図	出土遺物（12）	228
第76図	出土遺物（1）	217	第88図	境遺跡全体像略図	285

表 目 次

〈平成21年度調査〉

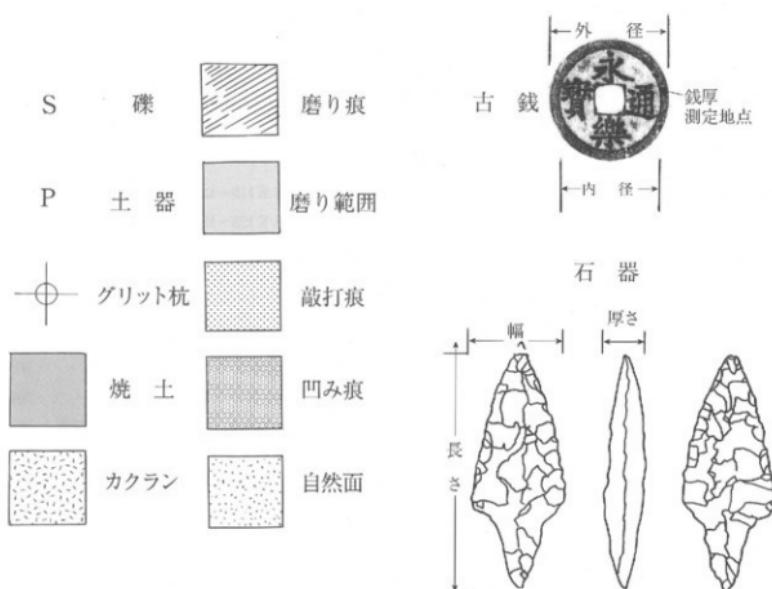
第2表	遺構変更表②	21	第13表	縄文土器・弥生土器・須恵器・ かわらけ・陶磁器観察表	229
第9表	F柱穴状土坑群	211	第14表	石器観察表	231
第10表	H柱穴状土坑群1	212	第15表	羽門・鉄製品・古錢観察表	232
第11表	H柱穴状土坑群2	212	第16表	遺構内出土鉄滓・その他観察表	232
第12表	H柱穴状土坑群3	216	第17表	岩手県内中世墓一覧	277

写真図版目次

〈平成21年度調査〉

写真図版35	航空写真	239	写真図版53	S K 119～122土坑	257
写真図版36	完掘・基本層序	240	写真図版54	S K 123～125土坑	258
写真図版37	S I 17堅穴住居跡	241	写真図版55	S K 126～129土坑	259
写真図版38	S K I 04堅穴住居状遺構	242	写真図版56	S K 130～133土坑	260
写真図版39	S K I 05堅穴住居状遺構	243	写真図版57	S K 134～135土坑・土坑群	261
写真図版40	S K I 06堅穴住居状遺構	244	写真図版58	S N 01・02焼土、S D 20・21溝跡	262
写真図版41	S K I 07堅穴住居状遺構	245	写真図版59	S D 22～25溝跡	263
写真図版42	S K 78～81土坑	246	写真図版60	S D 26～32溝跡	264
写真図版43	S K 82～85土坑	247	写真図版61	F柱穴状土坑群・H柱穴状土坑群1	265
写真図版44	S K 86～88土坑	248	写真図版62	H柱穴状土坑群2	266
写真図版45	S K 89～91土坑	249	写真図版63	柱穴状土坑・S X 05・06炭化物	267
写真図版46	S K 92～95土坑	250	写真図版64	S X 07炭化物・遺物出土状況	268
写真図版47	S K 96～99土坑	251	写真図版65	出土遺物（1）	269
写真図版48	S K 101～103土坑	252	写真図版66	出土遺物（2）	270
写真図版49	S K 104～107土坑	253	写真図版67	出土遺物（3）	271
写真図版50	S K 108～111土坑	254	写真図版68	出土遺物（4）	272
写真図版51	S K 112～115土坑	255	写真図版69	出土遺物（5）	273
写真図版52	S K 116～118土坑	256			

- 写真図版70 出土遺物 (6) 274 写真図版72 出土遺物 (8) 276
 写真図版71 出土遺物 (7) 275



凡例

I 調査に至る経過

境遺跡は、緊急地方道路整備事業主要地方道一関北上線下門岡工区（以下、下門岡工区）及び経営体育成基盤整備事業下門岡地区（以下、下門岡地区）の施工に伴い、その事業区域内に位置することから工事施工前の発掘調査が必要になり、平成20年度・平成21年度に発掘調査を実施した。

主要地方道一関北上線は一般国道4号を補完する重要な幹線道路であり、毎年交通量が増加しているが、下門岡工区は線形が不良で死亡事故を含む交通事故多発し通学における児童の安全が脅かされていることから、下門岡地区と連携して道路の整備を進めている。

下門岡地区は北上川左岸に位置する拓けた肥沃な水田地帯であるが、現況は小区域水田であり、耕作道は狭小、小用水路は殆どが土石路で漏水し、小排水路は水路底が浅く排水不良により湿田化している。このため営農の機械化、耕地の汎用化、農地の流動化、生活環境の向上など高生産性農業を阻害している。これらの阻害要因を解消し、農地の集約化によって土地利用型農業の生産性向上を図ることを目的とし大区域圃場整備を行っている。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、北上総合支局上木部・農林部農村整備室から平成18年3月2日付北総土第298号及び平成19年1月9日付北総農政第686号にて岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課（以下、生涯学習文化課）に試掘を依頼し、平成18年3月14日並びに平成19年1月17日に生涯学習文化課が試掘を実施した結果、工事施工前の発掘調査が必要であることが明らかになった。

その結果を踏まえ、生涯学習文化課の調整のもと財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施したものである。

（岩手県県南広域振興局北上総合支局上木部・農林部農村整備室）

II 立地と環境

1 地理的環境

境遺跡は、北上川の東岸、JR北上駅から南に約4.5km、奥州市江刺区稻瀬と隣り合う北上市稻瀬町地蔵堂に位置する。現況は更地で一部水田となっている。

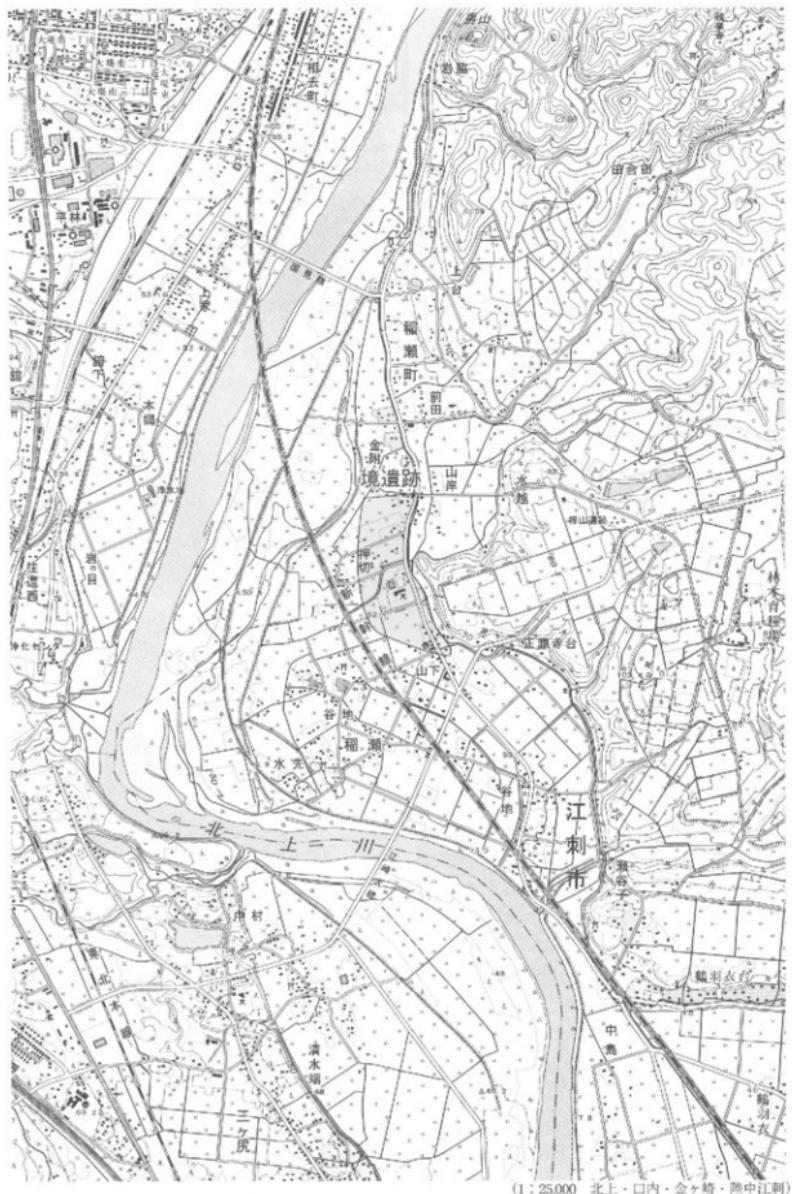
遺跡周辺の地形は谷底平野及び氾濫平野を主とし、東側には砂礫段丘による台地、西側には旧河道が通り、その中に自然堤防が点々と形成されている。平成18・19年度の当遺跡の調査区内においても、東西に延びる自然堤防状の微高地を確認しており、その上面から住居跡などの遺構を検出している。20年度の調査区は遺跡のはば中央に位置するが、やはり調査区の西側に旧河道が検出され、遺構の検出された面を河岸として、なだらかに河床へ落ち込む粗い砂質土の堆積が確認された。堆積土の厚さは、調査区の西側において現表土より2mを超えることがトレンチ調査により明らかになっている。

2 歴史的環境と当遺跡過年度調査の概要

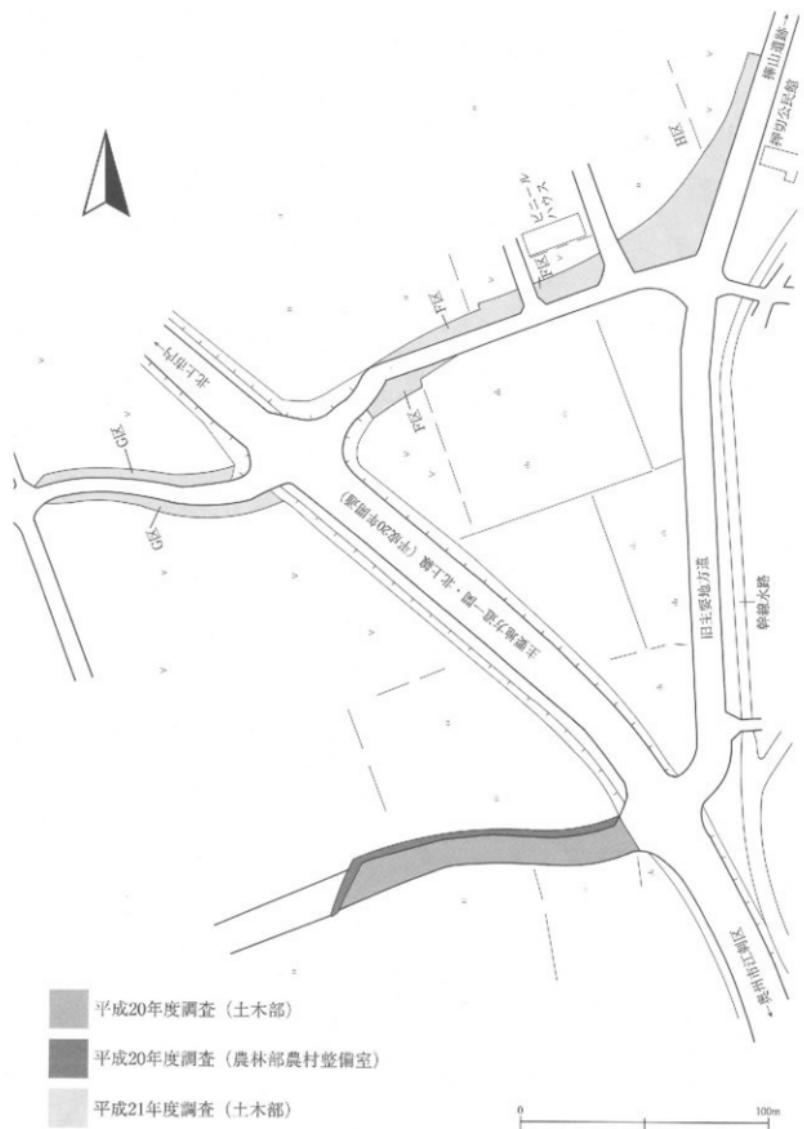
岩手県教育委員会が作成している遺跡台帳（平成19年度版）には、当遺跡が所在する北上市に507箇所、北上市の南に隣接する奥州市江刺区には300箇所、同水沢区には333箇所、金ヶ崎町には158箇所、合わせて1,298箇所と大変多くの遺跡が登録されている。本項では、当地域の歴史とともに周辺の遺跡



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡の位置



第3図 周辺の地形と調査区

としてそれらを概観するが、全てを記載することは困難であり、近年刊行された岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集『金附遺跡発掘調査報告書』（2006 金子ほか）、同第539集『境遺跡発掘調査報告書』（2009 鳥居）等にも同様の内容が詳しく述べられていることから、ここでは、当遺跡が所在する北上市稻瀬町及び奥州市江刺区稻瀬（以下「稻瀬地区」）のもの、前述の文献以降に調査が行われたもの、北上市及び隣接町区の遺跡のうち主なもののみを優先して記載することとする。併せて当遺跡における平成18・19年度の過年度調査の概略についても時代を追って記述します。また複合遺跡の様相を呈する当遺跡と歴史的環境とのかかわりを示していきたい。なお、記載する遺跡名は現行の遺跡台帳に登録されているものを使用している。

（1）縄文時代晚期以前

当遺跡周辺には旧石器時代より人々の生活の痕跡を認めることができる。金ヶ崎町永沢には中期旧石器時代より営まれた柏山館跡（97）があり、周辺では最古の遺跡となっている。また、北上川対岸の相去町下成沢II遺跡（32）、平林I・II遺跡（33）は後期旧石器時代の、稻瀬地区岩脇遺跡（43）は旧石器時代終末期の石器製作跡である。北上市内及び周辺町区には他にも旧石器の出土する遺跡が散見されるが、北上川を挟むこの地域（稻瀬地区と相去町）に、やや集中して分布する傾向が見られる。

縄文時代草創期に入ると、周辺町区まで見渡しても遺物の出土はほとんどなくなり、人々の活動が一時的に活発でなくなる様子が伺えるが、齊羽場館跡（44）に草創期から早期の石器ブロック、岩脇遺跡（43）に草創期の遺物が認められている。

早期は、前述の齊羽場館跡（44）で土坑と遺物が確認されているほか、稻瀬地区の阿弥陀堂遺跡（42）・岩脇遺跡（43）、相去町下成沢II遺跡（32）、北上市仙人・水沢区佐倉河・真城・南矢中・黒石町遺跡に遺物が散布しており、水沢区亘城町の町屋敷遺跡（瀬戸野館）（83）には竪穴住居跡1棟が検出されているが、集落は確認されていない。

当遺跡周辺に縄文時代の集落があらわれるのは縄文前期後葉からである。江刺区岩谷堂の宝性寺跡（56）・金ヶ崎町西根の和光6区遺跡（91）などがこれに当たり、どちらも中期中葉まで営まれる。北上市鳩岡崎の鳩岡崎上の台遺跡（13）の集落は前期末葉に始まり、やはり中期中葉まで営まれる。北上市岩崎の梅ノ木台地II遺跡（22）では前期の埋設土器が検出されている。これらの前期にはじまる集落遺跡の中で最も特筆されるのが、稻瀬地区に所在し、後期初頭まで営まれる国指定史跡樺山遺跡（50）であろう。竪穴住居跡に加えて、検出された中期を中心とする30基余りの配石遺構は埋葬または祭祀を目的とした施設と考えられている。中期を中心とする集落遺跡には、前述のものに加えて北上市横川日の蛭川館（16）・鬼柳町の滝ノ沢遺跡（35）、金ヶ崎町西根の中荒巻遺跡（92）などがある。

当遺跡の過年度調査において出土した遺物も中期中葉のものが最も古いが、摩耗が激しく流入したものと思われる。堆積状況より中期中葉以前において当遺跡の地点は川であったと考えられている。検出した遺構でもっとも古いのは、縄文時代後期の竪穴住居状遺構1基とそれに付随する土抗である。遺構に伴う当期の土器は、完形に近く原位置をとどめていると思われ、当遺跡は、少なくとも後期前半より居住域となっていたと考えられている。同じ後期に属する周辺の集落遺跡には、最大級の円形大型住居が検出され、国指定史跡となっている北上市更木の八天遺跡（7）、配石遺構や土坑墓をともなう江刺区伊出の久田遺跡（67）などがある。祭祀跡のある大文字遺跡（52）や19年度に調査され、前葉の集落であることがわかった宝禄遺跡（54）も当遺跡と同様の、稻瀬地区に所在する縄文時代後

期の集落遺跡である。

晩期の稻瀬地区には前葉～中葉の遺物が散布する相田遺跡（46）がある。周辺の集落遺跡には、晩期中葉に営まれた北上市横川月の大橋遺跡（15）、晩期後半に営まれ大量の生活用具が出土した同市九年橋の九年橋遺跡（37）、墓域を伴う水沢区佐倉河の杉の堂遺跡（78）などがある。当遺跡の過年度調査では、当期の遺構はなく、晩期前葉の土器が出土しているのみである。

（2）縄文時代晩期末から弥生時代初頭

稻瀬地区に所在し、当遺跡の北に隣接する金附遺跡（45）の最盛期と考えられる時期である。同遺跡では当期の土器・石器が大量に出土しており、弥生中期までの石器製作址であることがわかっている。周辺にも同時期の遺跡は比較的多く分布しているが、遺構の検出された遺跡は少なく遺物散布地が主である。平成20年に調査された北上市更木の舟渡I遺跡（5）も、当時の土器の散布が確認されているが流入であるとされている。前述の相田遺跡（46）にも金附遺跡と同時期の遺物の散布が見られ、「相田遺跡が本來の集落で、金附遺跡は石器製作を主とする作業場であった可能性が高い」（2006年金子）と考えられている。集落遺跡としては、北上市更木に所在し、現在は二子城（8）として登録されている馬場野遺跡・物見崎遺跡や北上市里分の牡丹畠遺跡（39）などがある。

当遺跡の過年度調査では、この時期の明確な遺構は出土していないものの、遺物包含層が確認されており、土器や石器の捨て場的遺構と埋設土器の遺構としている。同様の痕跡は金附遺跡にも見られ、前者は石器製作址、後者は墓域の可能性が想定され、近隣にこの時期の居住区がある可能性も指摘されている。

（3）弥生時代

当遺跡の過年度調査では、不明確ながら住居状遺構3基が検出された。うち1棟には地床炉も検出され、前～中期に属するようである。周辺には、中期を主とする土器を伴う土坑がまとまって検出された。また、後期の住居状遺構（S I 09）と旧河道としている窪みの東岸は、土器の捨て場的様相を示している。これらのことから、調査区東側に弥生時代後期集落の存在が想定されている。これら遺構が検出された区域は、旧河道が横切り南～東側が段丘線となる狭い範囲であるが、この中で縄文時代晩期末から弥生時代後期にかけて、南から北へ居住地が変遷している可能性を示している。

周辺の遺跡を見ると、遠賀川系土器の出土が他地域との交流を示す北上市岩崎の兵庫館（一六花館・二日市城）（21）では墓域が、弥生初頭の谷起島式に次ぐ標式遺跡となっている江刺区愛宕の沼ノ上I・II遺跡（60）では集落が、江刺区岩谷堂の反町遺跡（58）では前期、水沢区佐倉河の常盤広町遺跡（77）では後期の水田跡が確認されている。平成19年度には前述の馬場野遺跡・物見崎遺跡に隣接する成田岩田堂館遺跡（1）で2遺跡に次ぐ時期にあたる初頭～前期の集落が見つかっている。

（4）古墳時代

岩手県内には4～7世紀にかけての遺跡は少ないが、この地域には比較的多くの古墳時代の遺跡がある。水沢区佐倉河の高山遺跡（74）には4世紀前半、北上市江鈎子の猫谷内古墳群（28）には5世紀後半、角塚古墳が造った人々の集落と考えられる佐倉河の中半入遺跡（73）には5世紀の痕跡が残されている。同じく佐倉河の面塚遺跡（72）から検出された5世紀後半～6世紀前半の堅穴住居跡は、カマドを持つものとしては県内最古となっている。しかし、これらの集落はいずれも短期で廃絶しているとみられ、この地域で継続的に集落が営まれるようになるのは7世紀からと考えられている。北

上市の岩崎台地古墳群をなす高田坂遺跡（24）には6世紀末～7世紀の集落があり、北方の続縄文文化との交流がうかがわれる。北上市長沼の長沼古墳群（18）、上江釣子の猫谷地古墳群・五条丸古墳群（27）、北鬼柳の八幡古墳群（29）からなる国指定史跡江釣子古墳群は7世紀末から8世紀初頭に営まれた北東北最大級の古墳群となっている。中半入遺跡（73）からは7世紀後半の水田跡、江刺区愛宕の新川Ⅲ遺跡（61）からは畑状造構が検出されている。金ヶ崎西根の道場遺跡（94）・西根縱街道古墳群（96）などは、円墳を主とする7世紀後半から8世紀の末期古墳群であり、江刺区愛宕の愛宕梁川遺跡（62）には、古墳に代わる新しい埋葬形式である土坑墓が登場している。佐倉河跡性遺跡（69）は古墳時代末期に始まり奈良時代の初頭まで、西根の上餅田遺跡（93）は平安時代まで営まれる集落である。

当遺跡の過年度調査では古墳時代の造構は検出されていないが、当期に当たるであろう略完形の土師器が出土している。住居状の大型土坑も検出され、この時期に属する可能性があるとしている。

（5） 古代

奈良時代後半、畿内の政権は本格的に東北への進出を始めたとされ、和賀川下流は、それに対する抵抗勢力の本拠地があったと考えられている。江釣子古墳群の五条丸古墳群（27）や西根縱街道古墳群（96）には、この時期の地方豪族のものと思われる古墳が多数確認されている。上江釣子の塚遺跡（25）や水沢区真城の熊之堂遺跡（81）は8世紀に始まる大集落である。佐倉河の今泉遺跡（68）からは多様な鉄器が出土しており、広い普及がうかがわれる。北上市山口の羽黒山跡I遺跡（17）からは789年の蝦夷と征夷軍との交戦の跡が、同市藤沢の藤沢遺跡（12）からは戦いに関係すると思われる焼失住居が見つかっている。

平安時代の9世紀初頭には中央政権により水沢区佐倉河に胆沢城[遺跡名：胆沢城（方八丁）一国指定史跡]（71）が築城される。稻瀬地区の瀬谷子窯跡（51）は築城に関わる瓦生産をしたとされる窯跡である。水沢区見分森の見分森遺跡（88）や羽田町の外浦洗田遺跡（89）も同時期の窯跡である。北上市上江釣子の下谷地遺跡（26）や水沢区佐倉河の西人畠遺跡（75）は官人に関わると思われる遺跡で、稻瀬地区でも上台遺跡（47）に9世紀初頭の当時では珍しい板谷造りの建物が検出された。

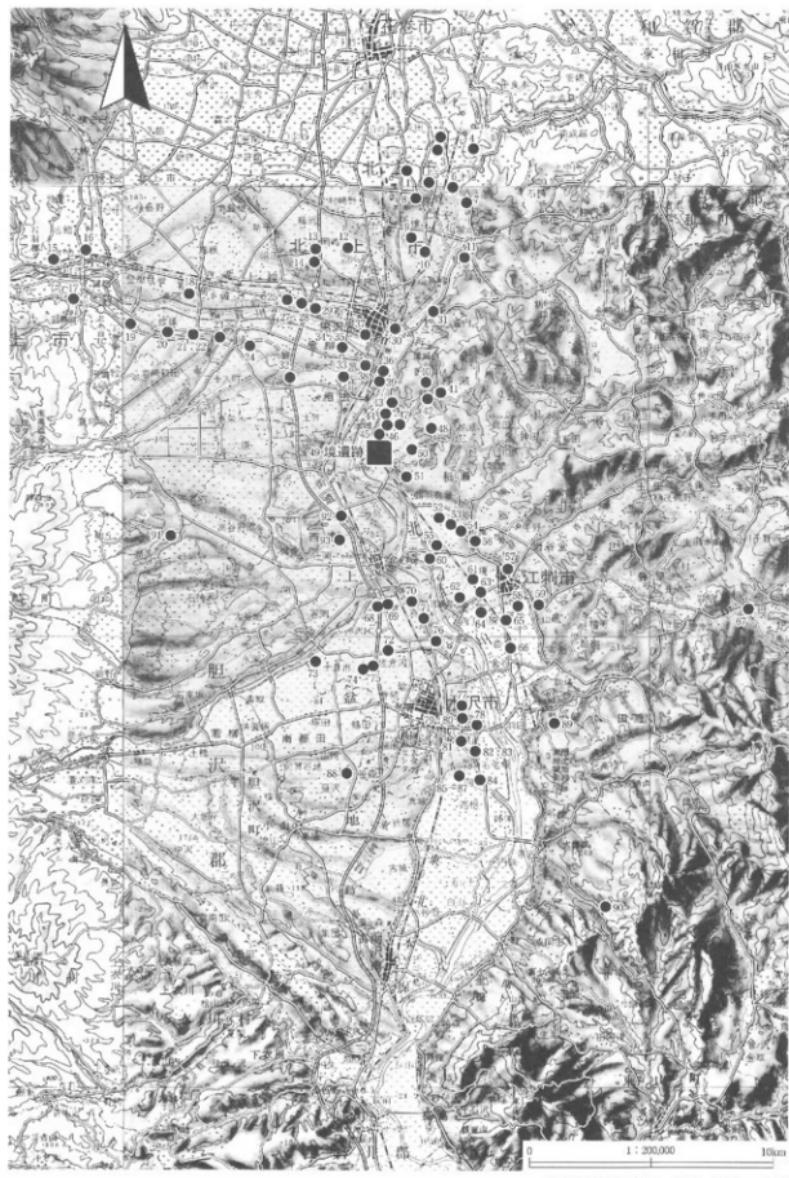
9世紀後半には、多くの集落が形成される。北上市二子には西川目遺跡（9）や平成19年度に当塙文センターの調査が行われた野田I遺跡（10）、立花の横町遺跡（31）、水沢区姉体町の林前南館遺跡（86）などが最近の発掘調査によって判明した集落遺跡である。

集落跡の他に特色的な造構が検出された遺跡がある。江刺区愛宕の宮地遺跡（63）では9世紀後半の畑、落合遺跡（65）では物資の集散地と考えられる造構、力石Ⅱ遺跡（66）では9世紀初頭の鉄牛座跡、北上市更木に所在する山口遺跡（2）では金属器や方形周溝、小川屋敷遺跡（3）では金剛器や墨書き土器、野沢遺跡（6）では畳間や土師器焼成造構が確認されている。

中世期に亘る遺跡では、北上市成田の成田岩山堂館遺跡（1）は、当時の墓域であり、岩崎の岩崎城（23）は9世紀末～11世紀の城館跡である。

胆沢城は、この地域の富裕者に寺院建立を奨励したとされ、多くの寺院が建立されるようになったようである。それらの寺院の遺跡としては、北上市に更木の国指定史跡大竹庵寺（4）、白山庵寺（11）、江刺区に岩谷堂の宝性寺跡（56）などがあるが、この北上川東岸の信仰ゾーンの中心と考えられているのが稻瀬地区の国指定史跡国見山庵寺（40）である。857年には国見山東南にある極楽寺が定楽寺となっている。同じく稻瀬地区にある広岡前遺跡（53）もこの時期の寺院跡である。

11世紀には、この地は安倍氏の支配下となり、前九年合戦（1051～1062年）に関わる遺跡もある。



第4図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

遺跡名	種別・時代・位置・備考	現在地
1 古庄田古墳群	古墳時代・山形・小字古川上郷、庄田	北上市古田
2 蛇口	古墳時代・山形・小字古川上郷、酒呑田	北上市蛇木
3 小川田井	古墳時代・山形・小字古川上郷、小川田井	北上市小川
4 佐野古墳	古墳時代・山形・小字古川上郷、佐野	北上市佐野
5 佐野古墳	古墳時代・山形・小字古川上郷、佐野	北上市佐野
6 新村古墳	古墳時代・山形・小字古川上郷、新村	北上市新村
7 八久保	古墳時代・山形・小字古川上郷、八久保	北上市八久保
8 二子塚	古墳時代・山形・小字古川上郷、二子塚	北上市二子町
9 香田古墳	古墳時代・山形・小字古川上郷、香田	北上市香田
10 関原古墳	古墳時代・山形・小字古川上郷、関原	北上市関原
11 川口西古墳	古墳時代・山形・小字古川上郷、川口西	北上市川口西
12 鶴原	古墳時代・山形・古川上郷、鶴原	北上市鶴原
13 関岡塚古墳の森	古墳時代・平成・山形・古川上郷、関岡塚、森	北上市関岡塚
14 駒岡塚(三郎)	古墳時代・山形・古川上郷、駒岡塚、三郎	北上市駒岡塚
15 大椎	古墳時代・山形・古川上郷、大椎	北上市大椎
16 駒岡塚	古墳時代・山形・古川上郷、駒岡塚	北上市駒岡塚
17 田代山古墳	古墳時代・山形・古川上郷、田代山	北上市田代山
18 長谷寺山古墳	古墳時代・山形・古川上郷、長谷寺山	北上市長谷寺山
19 本郷塚	古墳時代・山形・古川上郷、本郷塚	北上市本郷
20 伏木塚	古墳時代・山形・古川上郷、伏木塚	北上市伏木
21 丹波塚	古墳時代・山形・古川上郷、丹波塚	北上市丹波
22 牧ノ木古墳	古墳時代・山形・古川上郷、牧ノ木	北上市牧ノ木
23 丹波塚	古墳時代・山形・古川上郷、丹波塚	北上市丹波
24 駒岡塚	古墳時代・山形・古川上郷、駒岡塚	北上市駒岡塚
25 墓	古墳時代・平成・山形・古川上郷、墓	北上市上原墓
26 伏木塚	古墳時代・山形・古川上郷、伏木塚	北上市伏木
27 六ヶ木古墳群	古墳時代・山形・古川上郷、六ヶ木	北上市六ヶ木
28 門谷塚古墳群	古墳時代・山形・古川上郷、門谷塚	北上市門谷塚
29 月日塚	古墳時代・山形・古川上郷、月日塚	北上市月日塚
30 月日塚(古文書・安治館)	古墳時代・山形・古川上郷、月日塚	北上市月日塚
31 利利	古墳時代・山形・古川上郷、利利	北上市利利
32 今戸	古墳時代・山形・古川上郷、今戸	北上市今戸
33 今戸川	古墳時代・山形・古川上郷、今戸川	北上市今戸川
34 本郷塚	古墳時代・山形・古川上郷、本郷塚	北上市本郷
35 本郷古墳	古墳時代・山形・古川上郷、本郷古墳	北上市本郷古墳
36 本郷西古墳	古墳時代・山形・古川上郷、本郷西	北上市本郷西
37 大椎塚	古墳時代・山形・古川上郷、大椎塚	北上市大椎塚
38 朝霧	古墳時代・山形・古川上郷、朝霧	北上市朝霧
39 在乃塚	古墳時代・山形・古川上郷、在乃塚	北上市在乃塚
40 田見塚(三郎)	古墳時代・山形・古川上郷、田見塚、三郎	北上市田見塚
41 田見塚(四郎)	古墳時代・山形・古川上郷、田見塚、四郎	北上市田見塚
42 田見塚(五郎)	古墳時代・山形・古川上郷、田見塚、五郎	北上市田見塚
43 田見塚	古墳時代・山形・古川上郷、田見塚	北上市田見塚
44 外割堀塚	古墳時代・山形・古川上郷、外割堀塚	北上市外割堀
45 今井	古墳時代・山形・古川上郷、今井	北上市今井
46 田井	古墳時代・山形・古川上郷、田井	北上市田井
47 一古	古墳時代・山形・古川上郷、一古	北上市一古
48 田井塚(クニ塚)	古墳時代・山形・古川上郷、田井塚、クニ塚	北上市田井塚
49 旗	古墳時代・山形・古川上郷、旗	北上市旗
50 旗山	古墳時代・山形・古川上郷、旗山	北上市旗山
51 須賀子古墳	古墳時代・山形・古川上郷、須賀子	北上市須賀子
52 人文字	古墳時代・山形・古川上郷、人文字	北上市人文字
53 田代山古墳	古墳時代・山形・古川上郷、田代山	北上市田代山
54 朝霧古墳	古墳時代・山形・古川上郷、朝霧	北上市朝霧
55 朝霧	古墳時代・山形・古川上郷、朝霧	北上市朝霧
56 宮代	古墳時代・山形・古川上郷、宮代	北上市宮代
57 今治塚	古墳時代・山形・古川上郷、今治塚	北上市今治塚
58 阿賀野	古墳時代・山形・古川上郷、阿賀野	北上市阿賀野
59 阿賀野	古墳時代・山形・古川上郷、阿賀野	北上市阿賀野
60 今代一・二	古墳時代・山形・古川上郷、今代一・二	北上市今代一・二
61 今代三	古墳時代・山形・古川上郷、今代三	北上市今代三
62 今代四	古墳時代・山形・古川上郷、今代四	北上市今代四
63 今代五	古墳時代・山形・古川上郷、今代五	北上市今代五
64 今代六	古墳時代・山形・古川上郷、今代六	北上市今代六
65 今代七	古墳時代・山形・古川上郷、今代七	北上市今代七
66 今代	古墳時代・山形・古川上郷、今代	北上市今代
67 今代	古墳時代・山形・古川上郷、今代	北上市今代
68 今代	古墳時代・山形・古川上郷、今代	北上市今代
69 今代	古墳時代・山形・古川上郷、今代	北上市今代
70 二代(白山・道樂塚)	古墳時代・山形・古川上郷、二代(白山・道樂塚)	北上市二代(白山・道樂塚)
71 駒岡塚(少八丁)	古墳時代・山形・古川上郷、駒岡塚(少八丁)	北上市駒岡塚(少八丁)
72 駒岡塚	古墳時代・山形・古川上郷、駒岡塚	北上市駒岡塚
73 駒岡塚	古墳時代・山形・古川上郷、駒岡塚	北上市駒岡塚
74 駒岡塚	古墳時代・山形・古川上郷、駒岡塚	北上市駒岡塚
75 今代	古墳時代・山形・古川上郷、今代	北上市今代
76 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
77 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
78 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
79 今代古墳(御前塚)	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳(御前塚)	北上市今代古墳(御前塚)
80 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
81 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
82 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
83 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
84 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
85 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
86 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
87 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
88 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
89 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
90 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
91 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
92 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
93 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
94 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳
95 今代古墳(第三郎)	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳(第三郎)	北上市今代古墳(第三郎)
96 今代古墳(第三郎)	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳(第三郎)	北上市今代古墳(第三郎)
97 今代古墳	古墳時代・山形・古川上郷、今代古墳	北上市今代古墳

金ヶ崎西根の鳥海柵[遺跡名：鳥海柵跡(弥三郎館)]（95）、北上市川岸の黒沢尻柵[遺跡名：川岸遺跡（黒沢尻柵・安倍館）]（30）などが擬定地になっている。

平安時代の末に当たる12世紀は平泉の藤原氏が隆盛を誇った時代である。江刺区岩谷堂の豊田城（59）は藤原經清・清衡父子の居館と伝えられる。同市鳩岡崎の鳩岡崎三館（14）は古代から中世の館跡である。

当遺跡の過年度調査では、平安時代の堅穴住居跡が旧河道をはさんで南側に3棟、北側に5棟検出され、集落であったことがわかっている。南側3棟のうち2棟は平安時代前半のものである。1棟からは墨書き土器が出土し、中核的なものと考えられている。南側の5棟は、不明確であるが、旧河道及び周辺の配石遺構と関わり、何らかの施設を形成していた可能性も考慮している。

（6）中　　世

1189年平泉藤原氏が滅亡し、鎌倉時代以降この地は、北上側が和賀氏、江刺区稻瀬は葛西氏の流れを汲む千葉氏が支配するようになる。このころ稻瀬地区の極楽寺は、源氏方の武将でありながら承久の乱に敗れ配流となった河野通信のあずかり先となっており、通信は1223年同寺で死去している。県指定史跡ひじり塚[遺跡名：下門岡ひじり塚—国指定史跡]（48）はその墓所で、死後彼の孫である時宗開祖一遍もこの地を訪れている。金ヶ崎町西根の柏山館跡（97）と同遺跡内の松本館は領地を接する葛西氏の重臣柏山氏の居城である。南北朝時代になると、北上市鬼柳町の丸子館（34）を居城とする伝えられる鬼柳氏が北朝方に、須々孫氏が南朝方にといったように和賀氏内で同族争いがおこるようになり、和賀氏は一度南朝方につくが後に北朝方についている。水沢区黒石町の正法寺（90）は曹洞宗本寺として1348年に開山している。室町時代の15世紀前半には北上市二子町に和賀氏の本城として二子城（8）が築城されるが安土桃山時代になると奥州仕置により和賀氏は領地を没収されてしまう。和賀氏は北上市岩崎の岩崎城で最後の決戦をしかけるが敗れ、中世の長きにわたる和賀氏の支配は終わるのである。

当遺跡の過年度調査では、断面がV字の薦研堀である中世の堀跡が5条検出されている。直線な3号堀は、区画溝としては大きすぎ水が蓄えられた防御施設であると思われる。4号堀・5号堀は幅一定で小さなうねりを呈し、2号堀は周溝状である。1号堀には関連すると思われる敷石遺構が付随し、水場もしくは小道的な施設であると指摘している。周囲には柱穴状・坑群があり、掘立柱建物跡の可能性を示唆している。1号堀や4号堀周囲の小柱穴群は小建物、1号堀に隣接する柱穴列や4号堀壁面にあり斜めの掘り方を持つ柱穴は橋や板障のようななんらかの施設を構成するものであろうか。3号堀の南側には小規模な館のような居住地があったと考えられ、そこを中心として堀や溝が巡り、自然災害や外敵から防御していたのではないかと考えられている。当遺跡は標高50m以下の低地にあるものの、周辺には稻瀬地区の沼館（55）、江刺区愛宕の池向城（田谷城）（64）、水沢区佐倉河の上館（古館・速瀬館）（70）・白井坂I・II遺跡（76）、神明町の跡呂井館（岩洞館）（79）・跡呂井中陣場遺跡（80）真城の大学II遺跡（82）、姥体町の林前館（85）・市指定史跡上姥体城（館）（84）など類例もあり可能性は否定できない。

前述以外の周辺の中世城館遺跡は、北上市には稻瀬地区の曾館（僧館）（41）、煤孫の下煤孫館（観音館・煤孫城・古館）（20）、江刺区には岩谷堂の岩谷堂城（57）などがある。

その他では、北上市煤孫の本郷野遺跡（上須々孫館・西館）（19）では当時の末法思想を反映した経塼が確認されている。当遺跡の平成20年度の調査では、中世墓が検出されている。同様に中世墓が検出された周辺の遺跡には、北上市には稻瀬地区的金附遺跡（45）・鳩岡崎の鳩岡崎上の台遺跡（13）・

鬼柳町の丸子館（34）・大堤東の南館（38）・水沢区には姉体町の林前Ⅱ遺跡（87）・金ヶ崎町には西根の柏山館跡（97）などがあるが、まとまった検出例が少ないため、県内の検出事例も合わせ、第VI章にて述べることとする。

（7）近世以降

江戸時代には、稻瀬地区は伊達領仙台藩となり、南部領盛岡藩の立花と接する藩境地区となる。1641年には藩境塹が置かれ、そのうち内、野沖大塚は国指定、金ヶ崎城は町指定史跡となっている。黒沢尻河岸は南部藩の主要港となり奥州街道は五街道の1つとして整備される。国指定史跡である北上市成山と二子の一里塙や鬼柳町の鬼柳西浦遺跡（36）にある南部藩御仮屋はその名残である。寿安堀・松岡堀・奥寺堀などと同様、稻瀬地区にも1653年に大堀、それに代わる新堀も1771年に完成し新田開発も盛んに行われるようになっていく。

当遺跡の過年度調査では、畠跡と思われる畠間状遺構2ヶ所、土坑1基、溝3条が検出されている。溝のうち2条は、南一北へ並走しており、道路状遺構の可能性も考えられる。

引用・参考文献（複数の文献を参考にした遺跡もあるが、1遺跡に対し代表的な1文献のみ挙げている）

- 岩手県教育委員会 1957 岩手県文化財調査報告書第4集「猿澤城跡」
- 岩手県教育委員会 1980 岩手県文化財調査報告書第48集「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書IV」
- 岩手県教育委員会 1980 岩手県文化財調査報告書第50集「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VI」
- 岩手県教育委員会 1981 岩手県文化財調査報告書第59・60集「東北復興自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X・XI」
- 岩手県教育委員会 1982 岩手県文化財調査報告書第70集「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XV」
- 岩手県教育委員会 1982 岩手県文化財調査報告書第72集「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XVII」
- 江刺市教育委員会 1995 江刺市埋蔵文化財調査報告書第12集「平成6年度市内遺跡発掘調査報告書」
- 江刺市教育委員会 1996 江刺市埋蔵文化財調査報告書第13集「谷田城跡」
- 江刺市教育委員会 1996 江刺市埋蔵文化財調査報告書第14集「平成7年度市内遺跡発掘調査報告書」
- 江刺市教育委員会 2002 江刺市埋蔵文化財調査報告書第30集「反町遺跡」
- 江刺市教育委員会 2003 江刺市埋蔵文化財調査報告書第31集「新川Ⅲ遺跡」
- 江刺市教育委員会 2005 江刺市埋蔵文化財調査報告書第33集「大文字遺跡」
- 江釣子村教育委員会 1978 「猫谷地・五条丸古墳群（増補刊行）」
- 江釣子村教育委員会 1981 「江釣子遺跡群昭和55年度発掘調査報告」
- （財）奥州市埋文調 2008 奥州市埋文調センター調査報告書第4集「杉の堂遺跡第19次」
- 大島英介監修 2004 岩手県の歴史シリーズ「圓城・胆江・両神の歴史」
- 金ヶ崎町教育委員会 1968 「西根古墳と住居址」
- 金ヶ崎町教育委員会 1990 金ヶ崎町文化財調査報告書第18集「柏山館跡遺跡」
- 金ヶ崎町教育委員会 2004 金ヶ崎町文化財調査報告書第48集「金ヶ崎町西根鳥海橋跡遺跡 平成15年度」
- 鎌田雅夫・ほか監修 2005 岩手県の歴史シリーズ「図説 花巻・北上・遠野・和賀・稗貫の歴史」（郷土出版社）
- 北上市教育委員会 1970 北上市文化財調査報告第8集「北上市稻瀬町上町遺跡調査概報 第1次・第2次」
- 北上市教育委員会 1977 北上市文化財調査報告第18集「九年橋遺跡第3次調査報告書」
- 北上市教育委員会 1978 北上市文化財調査報告第24集「八天遺跡」
- 北上市教育委員会 1981 北上市文化財調査報告第32集「圓見山庵寺跡第1次」
- 北上市教育委員会 1983 北上市文化財調査報告第33集「荒ノ沢遺跡（1977～1982年度調査）」
- 北上市教育委員会 1983 北上市文化財調査報告第34集「川岸遺跡（1981・82年度調査）」
- 北上市教育委員会 1986 北上市文化財調査報告第43集「北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書III」
- 北上市教育委員会 1987 北上市文化財調査報告第46集「北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書IV」
- 北上市教育委員会 1989 北上市文化財調査報告第55集「牡丹棚遺跡（1988年度）」
- 北上市教育委員会 1990 北上市文化財調査報告第59集「佛山遺跡 1989年度」

- 北上市教育委員会 1995 北上市埋蔵文化財調査報告第19集「北上遺跡群」
北上市教育委員会 1997 北上市埋蔵文化財調査報告第27集「南部工業団地内遺跡」
北上市教育委員会 1999 北上市埋蔵文化財調査報告第37集「藤沢遺跡V 1997・98年度」
北上市教育委員会 2004 北上市埋蔵文化財調査報告第61集「丸子遺跡」
北上市教育委員会 2006 北上市埋蔵文化財調査報告第78・79集「八幡遺跡（2004年度）」「上須々孫遺跡」
(財) 岩垣文 1979 岩手県埋文センター文化財調査報告書第5集「江刺市 沼の上遺跡（昭和52年度）」
(財) 岩垣文 1985 「岩手の遺跡」
(財) 岩垣文 1988 岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集「主要地方遺一覧・北上級開遺跡発掘調査報告書」
(財) 岩垣文 1982 岩手県埋文センター文化財調査報告書第34集「金ヶ崎バイパス南遺跡発掘調査報告書2 水沢市勝性遺跡」
(財) 岩垣文 1987 岩手県埋文センター文化財調査報告書第114集「和光6区遺跡」
(財) 岩垣文 1993 岩手県埋文センター文化財調査報告書第180集「兵庫原跡・梅ノ木台地II遺跡」
(財) 岩垣文 1994 岩手県埋文センター文化財調査報告書第197集「鶴音館跡」
(財) 岩垣文 1995 岩手県埋文センター文化財調査報告書第214集「岩崎台地遺跡」
(財) 岩垣文 1996 岩手県埋文センター文化財調査報告書第235集「岩監遺跡」
(財) 岩垣文 1996 岩手県埋文センター文化財調査報告書第236集「横町遺跡」
(財) 岩垣文 1997 岩手県埋文センター文化財調査報告書第248集「白井坂」・「三遺跡」
(財) 岩垣文 2002 岩手県埋文センター文化財調査報告書第406集「久田遺跡」
(財) 岩垣文 2003 岩手県埋文センター文化財調査報告書第430・441集「広岡前遺跡」「宝性寺跡」
(財) 岩垣文 2004 岩手県埋文センター文化財調査報告書第443集「中半人道跡第2次」
(財) 岩垣文 2005 岩手県埋文センター文化財調査報告書第464集「西川呂・塙向II遺跡」
(財) 岩垣文 2005 岩手県埋文センター文化財調査報告書第481集「大橋遺跡」
(財) 岩垣文 2005 岩手県埋文センター文化財調査報告書第482集「金附遺跡」
(財) 岩垣文 2007 岩手県埋文センター文化財調査報告書第506集「野田I遺跡」
(財) 岩垣文 2008 岩手県埋文センター文化財調査報告書第524集「平成19年度発掘調査報告書」
(財) 岩垣文 2008 岩手県埋文センター文化財調査報告書第540集「成田岩田堂館遺跡」
(財) 岩垣文 2008 岩手県埋文センター文化財調査報告書第543集「市の川I遺跡ほか」
(財) 岩垣文 2009 岩手県埋文センター文化財調査報告書第546集「平成20年度発掘調査報告書」
(財) 水沢市埋文調 1995 水沢市埋文調センター調査報告書第2集「常盤広町遺跡…東部地区の発掘調査」
(財) 水沢市埋文調 1999 水沢市埋文調センター調査報告書第12集「向塚遺跡」
(財) 水沢市埋文調 2002 水沢市埋文調センター調査報告書第15集「町屋敷遺跡」
(財) 水沢市埋文調 2003 水沢市埋文調センター調査報告書第16集「林前南施跡」
(財) 水沢市埋文調 2006 水沢市埋文調センター調査報告書第19集「林前II遺跡 寺ノ西遺跡」
(株) シン技術コンサル 2005 「岩手県磐井中陣場遺跡」
水沢市教育委員会 1978 水沢市文化財報告書第1集「高山I遺跡」
水沢市教育委員会 1995 水沢市文化財報告書第29集「水沢遺跡群範囲確認調査 平成6年度発掘調査概報」
水沢市教育委員会 2002 水沢市文化財報告書第36集「水沢遺跡群範囲確認調査 平成13年度発掘調査概報」
富士見歴史研究所 1969 「瀬谷字南跡群緊急調査概報」
和賀町教育委員会 1974 「岩手県和賀町長沼古墳」

3 基本層序

(1) 平成19年度までの調査による基本層序

平成18・19年度調査により判明した境遺跡の基本的な層序をここで記す。

I層は表土でII層は旧表土もしくは耕作土とする。III・IV層は近世から中世の層で、V層は粗い砂、VI層は細砂で黒褐色土を含む。このIV層が大きな堀や溝に入り込む層である。遺物は希薄だが中世の層と考えられている。その下には古代の層（V層）がある。暗褐色の砂質土や黄褐色の粘土層で、平安時代の土器片を包含する。その下に弥生時代の層（VI層）がある。上位は黄褐色の粘土層で後期の土器を出土させ、下位はやや黒みがかり弥生時代中期の土器が出土する。VII層は縄文時代の土器を出土させる層である。VIII層は黄褐色粘土層で無遺物層、IX層は砂、X層が疊（基盤）層となっている。

〔参考資料〕 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第539号境遺跡

(2) 基本層序

①平成20年度調査（第5図A、写真図版3）

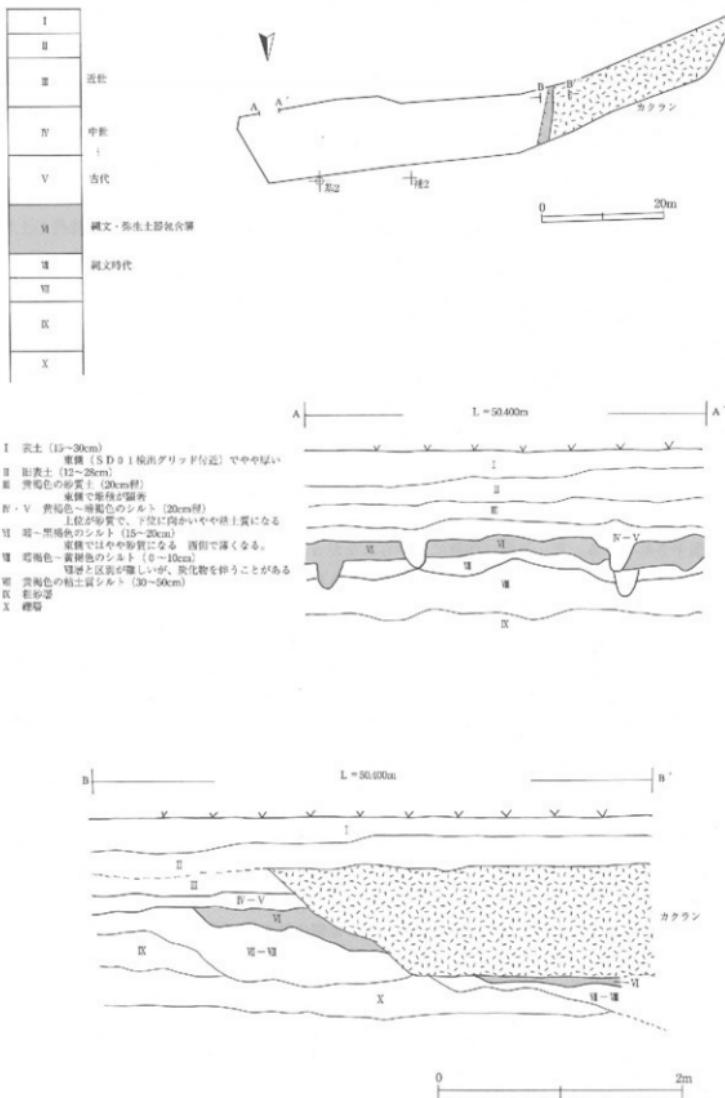
(1) の基本層序に準じて分層した。おおきな相違点は見つからない。以下には区域の特色について述べる。断面図の観測位置は第5図上に示している。

表土下II層は、西側全域で擾乱を受ける。断面B-B'で青色のグライ化層（カクラン）が大きく落ち込む。近隣の方々の話では、昭和の初期頃には、沼地であったらしい。

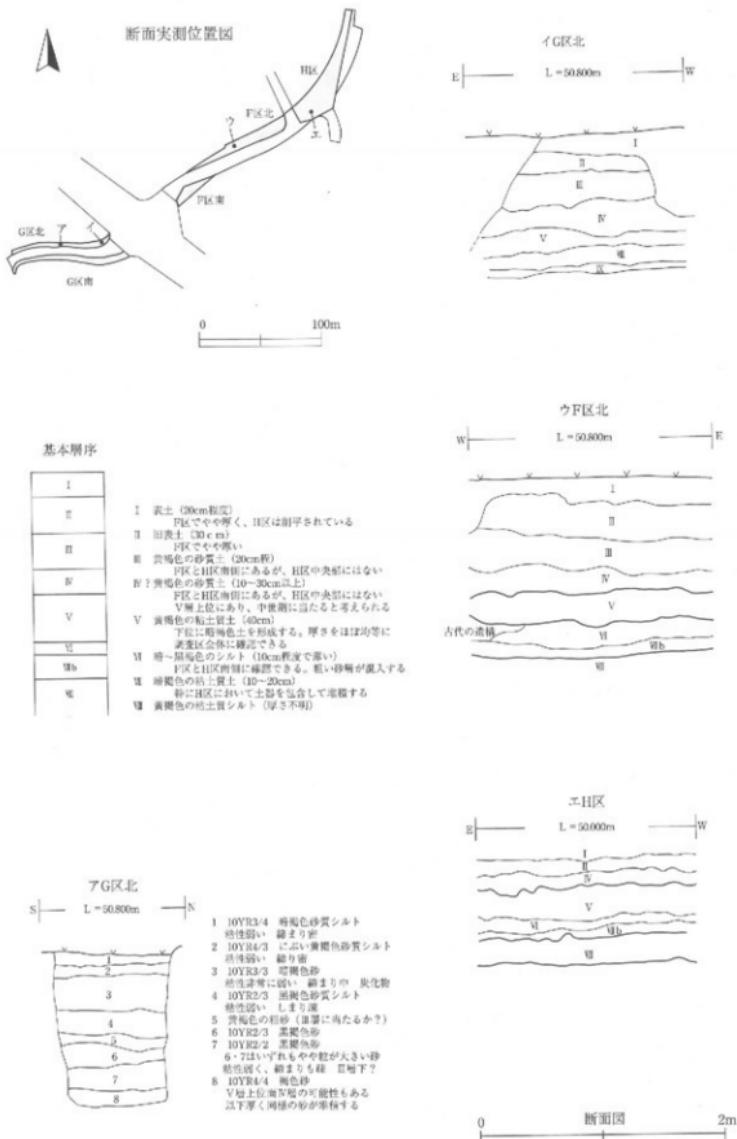
III層は東側の断面で、ほぼ平らに堆積していることがわかる。しかし西側微高地の墓塚検出区域ではやや削平されている。IV・V層は明確に分けられなかった。下位は粘土質になることからV層なのかもしれない。土師器の破片が少量出土していることも裏付けとなる。A-A'の断面で見ると柱穴状の断面が見える。第1次検出はこの面で行っている。このIV・V層は西側でも薄く堆積しており、中世期には、旧河道は埋まっていた可能性を示す。

VI層は、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての土器を出土させる層となる。平成18年度調査したA包含層1・2出土土器はVII層出土となっているが、今回VI層として取り上げた土器とはほぼ同時期であることから、遺跡全体としてVI層を、縄文時代晩期末葉から弥生時代の土器を包含する層と捉え、上層を弥生時代中期から後期、下層を縄文時代晩期末から弥生時代前葉の土器を出土させる層とし、VIII層を、それ以前の土器を包含する層と修正した方が良いようである。

特色は土器片を多く出土させ、炭化物を伴う。前年度までのVI層上位の層は見当たらない。出土土器も中後期の土器ではなく、層位的には合致する。これらの土はIII D 9・10 f・g付近において厚く堆積する。しかし、西側の微高地では薄く、やはり削平されている様子が見える。その微高地のさらに西側で、落ち込んでいることを確認した。B-B'で見るとなだらかに下がっており、下位から弥生時代前期と思われる土器片が出土している。旧河道の東側の落ち込みと見られ、平成19年度に検出した旧河道と方向も一致する。VII層は(1)では縄文時代の包含層としているが、平成21年度の調査の結果、縄文時代中期後葉の土器が出土する層と判明した。この下位面で最終検出を行っているが、A-A'断面で見えるように、VI層面の柱穴はVII層を掘り込んでいることから、最終検出で得られた遺構は、必ずしも縄文時代晩期末より古いものとはいえない。VIII層より下は、(1)と同様の特色を示し、それ以前は川だった可能性を示唆する。



第5図A 基本層序図（平成20年度）



第5図B 基本層序図(平成21年度調査)

② 平成21年度調査（第5図B、写真図版3）

第5図Bのア～エは、本年度の調査区域内における基本層序の実測場所である。断面図のローマ数字は、（1）前年度までの調査による基本層序に合わせている。カギとなる層（Ⅲ下層、Ⅶ層）を中心とし、その特色をとらえたい。

Ⅲ層は、粗い砂層で調査区の中央部（県道沿い）に顕著に分布しているのが分かる。厚さは30cm前後で、40cmを測るところもある。しかし、遺構が多く検出された調査区の東側工には見えない。その下には砂質の黒褐色土が堆積するが、イで最も深く、エでは10cm前後と薄いことから、この2つの層は、西側に向かって厚くなっていく傾向を示している。その黒褐色土を除いた面の標高は、概数でイ付近で48.70m、ウ・エ付近で49.50m前後となり、このことは、中世期の生活拠点は東側にあり、西側は窪地となっていたことが予想される。アの断面では砂が厚く堆積し、Ⅲ層下黒褐色土の下底面がつかめなかった。層位5の粗砂がそれに当たるのかもしれない。

V層は古代の検出面である黄褐色土であるが、上面に薄く暗褐色土を截せる場合が多く、ア～エでは見当たらない。V層下には弥生土器を包含するVI層が、ウとエに見える。

VI層は、アとイには見当たらないが、ウとエにあり、特にエで厚く堆積する。VI層は過年度の調査でも確認しているが、明確な土器の包含層（VI b層）として存在するのは、境遺跡北東側の大きな特色となる。このVI bはエ付近でもっとも厚くなり、北側では薄い。遺構や土器の出土量は北側で多いことから、調査区のエの北側が河岸段丘の微高地になっていた様子が確認された。

また、VI b層のある区域は下位のⅣ層黄褐色粘土の堆積は薄い。

III 調査と整理の方法

1 平成20年度調査

（1）野外調査の方法

① グリッドの設定

調査区は、平成18年度調査区のA区に隣接する形となっている。よってグリッドは、それに付随する形で設定している。

調査区内は5m四方の正方形で分けられる。グリッド名は北西隅の杭であらわすのも、前年度からの継続である。

平成20年度調査では、新たに2点の基準点を設置し、世界測地形による座標値を与えていた。その数値は以下の通りである。

基準点1 X = -84300.000m, Y = 24850.000m

基準点2 X = -84490.000m, Y = 24815.000m

標高は以下の通りである。

基準点1 50.522m 基準点2 50.257m

② 粗掘りと検出・精査

前年度までの基本層序から、Ⅲ層までは重機で剥いだ。そしてIV層面から第1検出面として検出を開始している。

検出は面ごとに鏽簾で丁寧に剥ぎ、プランを確定させた。不鮮明な部分はトレンチを設定して、断面による観察を行っている。登録後、精査を行った。

精査は、基本的には堅穴住居跡は四分法、土坑等は二分法による埋土の観察を行った。溝や堀に関しては、適宜にセクションベルトを設定して掘り進めた。精査終了後、遺構ごとの実測と写真撮影をし、その面の全体写真を撮影した。

第2次検出は、第1次検出で2面の縄文土器包含層が現れていたために、重機を侵入させることができず、手掘りによる粗掘りを行っている。結局最終面まで、手掘りが続いた。

遺物の取り上げについては、遺構内では出土層位を明記して慎重に取り上げたが、底面（住居跡出土のものは床面）出土のものは、できるだけ平面図に載せるように心がけた。遺構外出土遺物は、グリッド単位で層位を記入して取り上げたが、位置が明確でないものは区域名となっているものもある。また出土層位については、調査初段階において把握が困難で、記名後に変更しているものもある。

③ 遺構の記録

検出された遺構は、遺構種別ごとの検出順に連番となっている。柱穴状土坑のみPPを略号として使用している。精査の途中で、遺構ではないと判断したものも削除せずに、連番をとした。

調査の初段階で、1号住居跡、4～6号住居跡と命名した遺構は、登録抹消とし、出土遺物はグリッドに差し替えた。そのグリッド名は（2）室内整理の方法で詳細を述べる。

それぞれの断面図の作成は、遺構の上面に水糸を張り、基点を設定して行った。平面図については遺り方測量とトータルステーションによる実測を併用した。縮尺については20分の1を原則にしたが、範囲や遺構の性格に応じて対応した。

写真では、精査の段階において撮影を行った。使用したカメラは35mmモノクロ、35mmカラーリバーサル、6×7cm判モノクロ、デジタルカメラの4機種である。基本的に35mmとデジタルカメラは全ての遺構について撮影したが、6×7cmについては省略することが多かった。調査な最終段階において空中写真撮影を行った。

（2）室内整理の方法

室内整理作業については、当埋蔵文化財センターの「平成16年度室内整理及び発掘調査報告書に関する改善検討委員会」室内整理作業検討チーム（金子佐知子ほか）によって平成17年3月にまとめられた資料を基準として行った。

① 遺構図面・図版

遺構図面は点検・修正の後、必要に応じて第2原図を作成した。揮圖中の縮尺については、住居跡は50分の1、炉跡や埋設土器は20分の1、堅穴遺構や土坑・集石遺構は平面図・断面図ともに40分の1、溝跡または柱穴状土坑等については、80分の1を基本としているが、その他については任意に縮尺しており、それぞれスケールを付してある。土層注記は基本層位にローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。

② 遺物の処理

出土した土器や石器などの遺物は、水洗して乾燥させ、出土状況に合わせて仕分けをして接合・復元の作業を実施した。土器片の記名は接合した土器や土製品は、同じ出土状況のものに限り1ヶ所とし、他は全点注記した。これらの遺物は、すべて重量を計測した。その重量は、遺構ごとに本文中で明記している。各遺構の特色や出土遺物を観察し、遺物を選択・登録した。遺物は、写真撮影を行い実測図・拓影図・拓影断面図を作成し、トレースして掲載した。遺物の掲載基準については以下の通りである。

土器については、遺構出土の土器は、器種や器形また施文方法などから代表的なものを選んだ。

2つの住居跡が重複しているであろう遺構は、多くの土器を掲載している。また、土坑などは代表的なものを選び、遺構外では、完形土器や口縁部破片を中心に特色的なものを掲載している。

石器については、種類別し属性などを観察したのち、代表的なものを選択して掲載した。石器製作址の様相を示す特色から、礫石器の割合が高くなった。

石製品や土製品についてはすべて掲載し、古銭や古代の遺物については、本文中でその掲載基準を述べている。

尚、調査の初・中段階で、遺構名で取り上げ、後にグリッド名となったものは次の遺構である。

・ 1号堅穴住居跡 検出面	III D 10 g VI層上位
・ 4号堅穴住居跡 検出面から埋土上位	III D 9 f VI層上位
・ 5号堅穴住居跡 検出面から埋土上位	III D 8 f VI層上位
・ 7号堅穴住居跡 埋土中	III D 9 e VI層
・ 8号堅穴住居跡 埋土中	IV D 2 e VI層

③ 遺物図版

遺構内出土遺物は遺構順に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。挿図中の縮尺は、土器は3分の1、剥片石器は2分の1を基本とし、礫石器は3分の1から5分の1と様々で、任意の縮尺についてはスケールを付してある。古銭については表のみの掲載となっているものもある。写真図版のみの掲載となっている遺物に関しては、遺物観察表に明記している。

④ 写真図版

遺構写真は各遺構の平面・断面を中心に、堅穴住居跡は竈や遺物出土状況等も合わせて掲載した。遺物写真では立体土器は3分の1、土器破片や石器その他は2分の1を基本としている。

(3) 調査区名と遺構名

① 調査区名と遺構名（平成18・19年度発掘調査から）

ここでは、平成18・19年度境遺跡発掘調査時の調査区の呼び名と遺構名について記す。

平成18・19年度調査では、南北に延びる調査区を南からA～D、飛び地となった県道脇をE区として報告している。A区とは南側市道と県道に挟まれた平成18年度南側調査区である。

遺構は、中世の堀や平安時代の住居跡、弥生時代の住居跡などを検出しており、堅穴住居跡はS I 01～13、土坑はS K01～58、溝跡はS D01～13、焼上や炭化物範囲はS X01～04と冠名を付して報告している。また堀跡は1号～5号堀跡、配石遺構は1号～4号配石遺構として、冠をつけていない。柱穴状土坑はA区で検出したものをA柱穴状土坑群、D区で検出した2区域のまとまりを、それぞれD柱穴状土坑群1、D柱穴状土坑群2としている。

〔参考資料〕 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第539集境遺跡

② 遺構名の統一と変更

平成20年度調査区は、平成18年度調査区A区の西側に広がる。よって今回報告する調査区を前回報告のA区の範囲内とする。そして、各遺構の呼び名を前年度から連番として報告する。種別名は以下の通りである。

堅穴住居跡	S I 14堅穴住居跡～
土坑	S K59土坑～
溝跡	S D14溝跡～
堀跡	6号堀跡～

今回新たに堅穴状遺構をS K I、炉跡を金附遺跡報告書で使われたS N Qとして表すこととした。柱穴状土坑については、A柱穴状土坑群が前回報告されていることから、今回の報告分はA柱穴状土坑群2~4として、P Pを用いて表す。P Pについては、1からの連番となり、欠番も生じているので注意願いたい。なお、集石遺構と埋設土器は、前年度までの報告にはないので1号から冠をつけず連番で表す。変更は以下のとおりである。

第2表 遺構名変更表①(平成20年度調査分)

新しい遺構名	旧遺構名	新しい遺構名	旧遺構名
S I 14	2号住居跡	S K74	15号土坑
S I 15	3号住居跡	S K75	16号土坑
S I 16	9号住居跡	S K76	19号上坑
S K I 01	7号西住居跡	S K77	14号住居
S K I 02	10号住居跡	6号堀跡	1号溝
S K I 03	12号住居跡	S D14	2号溝
S K59	1号十坑(墓坑)	S D15	3号溝
S K60	2号土坑(墓坑)	S D16	4号溝
S K61	3号十坑(墓坑)	S D17	5号溝
S K62	5号土坑(墓坑)	S D18	2分周溝
S K63	6号土坑(墓坑)	S D19	6号溝
S K64	4号十坑	SNQ01	8号住石開炉跡
S K65	7号土坑	SNQ02	9号住石開炉跡
S K66	14号土坑	1号集石遺構	1号集石
S K67	18号土坑	2号集石土坑	2号集石
S K68	8号土坑	3号集石土坑	3号集石
S K69	9号土坑	4号集石土坑	4号集石
S K70	10号土坑	5号集石遺構	5号集石
S K71	11号土坑	1号埋設土器	埋設土器1
S K72	12号土坑	2号埋設土器	埋設土器2
S K73	13号土坑		

2 平成21年度調査

(1) 野外調査の方法

① グリッドの設定

グリッドは平成18年度に設定したものを応用した。ただし、調査区が大グリッドの枠外になる箇所があることから、北側にむかって(-)グリッドになっている区域がある。詳細はグリッド設定図2(第47図)に示している。なお、グリッドの呼名は、従来通り北東隅としている。

基準点の設置は、前年度の基準点1を利用し、その他に、新たに1点(基準点3)を設置して対応

した。

基準点3 X = -84325.000m、Y = 24820.000m、標高 51.246m

② 粗掘りと検出・精査

西側道路脇の調査区は（G区）は、調査区域が狭く、道路に直面していることから、最初にトレンチを設定し、試し掘りをした後に、重機で広げる形をとった。また、民家前や調査区北隅に関しては手掘りによる粗掘りを行ったが、中央部に関しては重機による表土剥ぎを行った。

検出や精査に関しては、20年度同様である。

第2次検出は、北隅に関しては、調査区が狭いうえ深くなることが予想されたために、3箇所のトレンチを設定して確認した。造構精査後土捨て場としている。中央部は重機による検出、民家前は手掘りによる検出となった。

遺物の取り上げについては、遺構内では出土層位を明記して慎重に取り上げたが、底面（住居跡出土のものは床面）出土のものはできるだけ平面図に載せるように心がけた。遺構外出土遺物は、グリッド単位で層位を記入して取り上げたが、位置が明確でないものは区域名となっているものもある。

③ 遺構の記録

検出された遺構は、区域ごとに区分して、遺構種別ごとの検出順に呼び名とした。連番となっているために、精査後に登録を抹消したことから、欠番となっているものもある。

断面図や平面図については20年度と変わりはない。

写真で、使用したカメラは6×9cm判モノクロ、デジタルカメラの2機種である。調査な最終段階において空中写真撮影を行った。

（2）室内整理の方法

室内の整理については20年度と同様で、21年度に大きく変更されたところはない。挿図中の縮尺も、基本的には同様であるが、枚数の関係で若干変更しており、堅穴住居跡や堅穴住居状遺構は40分の1となっている。また、柱穴状土坑は数が多く、範囲も広いことから100分の1とした。遺物図版においては、2分の1や8分の3など様々で統一性がなく、注意願いたい。

（3）調査区名と遺構名

① 調査区名

平成18・19年度調査の報告書では、調査区をA～E区として報告している。平成20年度はA区に隣接する区域の調査のために同様の呼び名としている。そこで平成21年度に調査した区域をF～Hに区分けした。（第3図参照）

F区は、平成20年度調査区でBと呼んでいた区域で、バイパスから枝分かれした市道の東側を示す。G区はその反対側の西側、H区は旧県道脇の区域とした。

② 遺構名の統一と変更

遺構名は、それぞれの区域で連番として精査している。そこで、各遺構の呼び名を前年度から連番として報告する。種別名は以下の通りである。

堅穴住居跡 S I 17堅穴住居跡～

堅穴住居状遺構 S K I 04堅穴住居状遺構

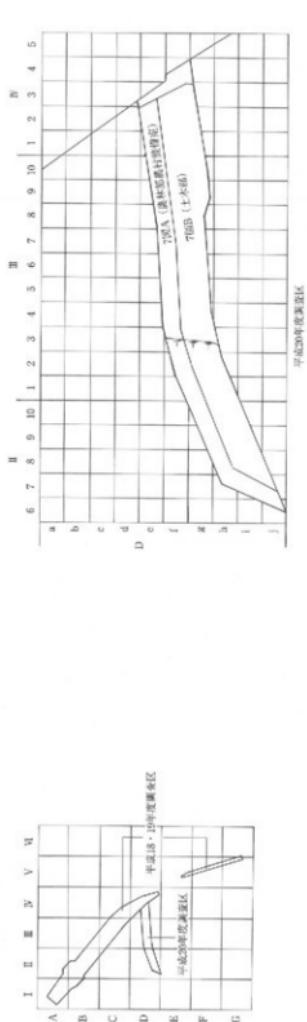
土坑 S K 78土坑～

溝跡 S D 20溝跡～

今回、新たに焼土遺構をS Nとして表すこととした。柱穴状土坑については、F区で検出されたものとH柱穴状土坑群、H区で検出されたものをH柱穴状土坑群として、P Pを用いて表す。P Pについては、1からの連番となり、欠番も生じているので注意願いたい。

第2表 遺構名変更表②(平成21年度調査分)

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
SI17	H1号住居跡	SK101	H8号土坑	SK129	H39号土坑
SKI04	B1号住居状遺構	SK102	H9号土坑	SK130	H40号土坑
SKI05	B3号住居状遺構	SK103	H10号土坑	SK131	H41号土坑
SKI06	H1号不明遺構	SK104	H11号土坑	SK132	H42号土坑
SKI07	H2号不明遺構	SK105	H12号土坑	SK133	H43号土坑
SK78	B2号土坑	SK106	H13号土坑	SK134	H44号土坑
SK79	B3号土坑	SK107	H14号土坑	SK135	H45号土坑
SK80	B4号土坑	SK108	H15号土坑	SK136	H大溝上土坑
SK81	B5号土坑	SK109	H16号土坑	SN01	H2号焼土
SK82	B6号土坑	SK110	H17号土坑	SN02	H3号焼土
SK83	B7号土坑	SK111	H18号土坑	SD20	B1号溝跡
SK84	B9号土坑	SK112	H19号土坑	SD21	F1号溝跡
SK85	B10号土坑	SK113	H20号土坑	SD22	F2号溝跡
SK86	B13号土坑	SK114	H21号土坑	SD23	F3号溝跡
SK87	B101号土坑	SK115	H22号土坑	SD24	F4号溝跡
SK88	F1号土坑	SK116	H23号土坑	SD25	H1号溝跡
SK89	F2号土坑	SK117	H24号土坑	SD26	H北溝跡 1
SK90	F3号土坑	SK118	H25号土坑	SD27	H北溝跡 2
SK91	F4号土坑	SK119	H26号土坑	SD28	H北溝跡 3
SK92	F5号土坑	SK120	H27号土坑	SD29	H北溝跡 4
SK93	F6号土坑	SK121	H28号土坑	SD30	H3号溝跡
SK94	H1号土坑	SK122	H31号土坑	SD31	H4号溝跡
SK95	H2号土坑	SK123	H32号土坑	SD32	H5号溝跡
SK96	H3号土坑	SK124	H33号土坑	SX05	B1号炭化物
SK97	H4号土坑	SK125	H34号土坑	SX06	F1号炭化物
SK98	H5号土坑	SK126	H36号土坑	SX07	H1号炭化物
SK99	H6号土坑	SK127	H37号土坑		
SK100	登録抹消	SK128	H38号土坑		



第6図 グリッド配置図、造構配置図（1）

IV 平成20年度調査

1 調査の経過と概要

(1) 調査前の諸事情と調査の経過

①調査前の諸事情

当遺跡の発掘調査は、平成20年度で3年目になる。平成18年から19年にかけての調査成果は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第539集で報告されている。平成20年度では、新たに3900m²の面積を調査することになった。調査に当たって2つのことが変更となった。

1つは調査期間で、当初は平成20年4月9日から8月31日の5ヶ月で調査をする予定であった。しかし、道路特定財源関係の暫定税率が、平成20年3月31日に失効したことを受け、発掘調査は白紙状況となった。その後、同5月に衆議院の再議決により、道路特定財源が確保されたことを受け、調査が開始されることになった経緯がある。結果、調査予定期間は平成20年8月1日から10月31日となり、期間は短縮されて3ヶ月間で行われることになった。

2つ目は調査面積で、当初の計画では5ヶ月間で3900m²を調査する予定であったが、期間が短くなった上に、予想以上に遺構が重複していることから、すべての面積の調査は不可能となり、実際は道路分半分（850m²）と水路分全部（300m²）の調査終了となった。合わせて1050m²の終了である。

今回の調査報告はA区（1050m²）で検出された遺構と遺物をまとめたものである。引き続き調査を継続し終了した211m²は、平成21年度調査と合わせて、Vでまとめており本報告では触れない。

②調査の経過

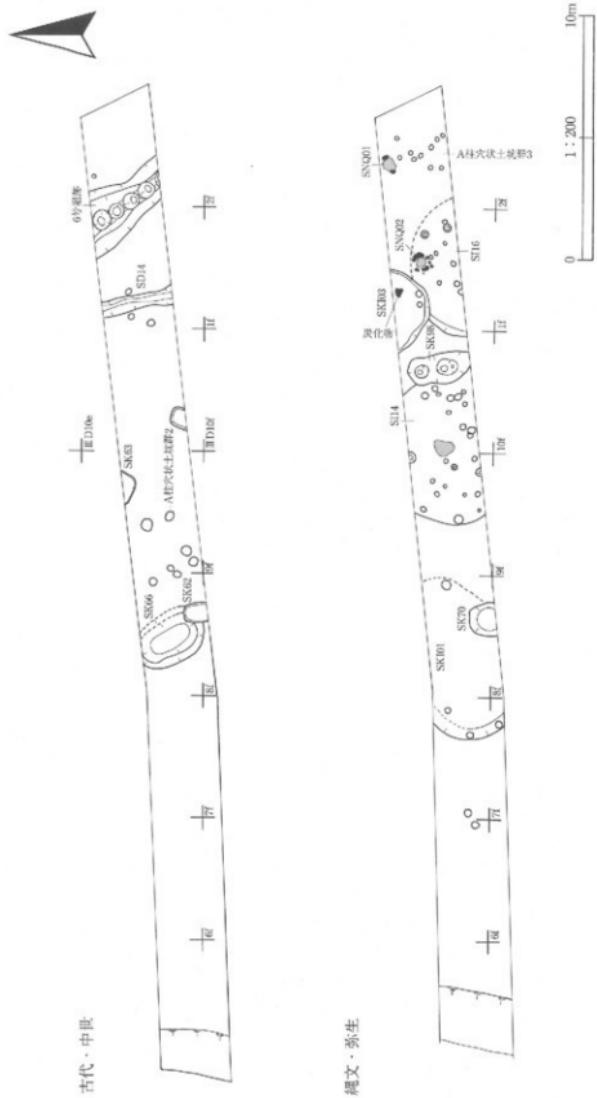
ここからは平成20年度8月1日からの調査経過を記す。

調査区内は平成18年度の調査時の廃土が多く残っていた。そこで、0.7m³バックホーと4トントラック3台を稼働させ、その残土を運び出した。この時点で現道から3m以上の高さがあるところもあり、危険防止のため調査区全体に短管による防護柵をめぐらしている。本格的調査は、8月5日から開始した。調査員は2名、作業員は30名の登録である。

調査区の東側は、平成18年度に2条の大型の堀跡と縄文時代晩期末葉の包含層を検出していることから、少なくとも2面、もしくは3面の検出が見込まれていた区域である。まずは慎重に表土から砂屑（Ⅲ層）まで剥がしたところを、第1次検出面とした。溝や堀状のプランのほかに、長方形の土坑のプランを確認し、墓塚と判明した。5基の墓塚から出土した人骨は、8月28日に、如意輪寺（北上市稻瀬町内門岡68）住職の菊池英寛氏を招き、供養したのち、当寺の無縫仏として埋葬した。歯3個体はセンターに持ち帰り、分析鑑定のため（株）パリノ・サーバイに送付している。

9月から作業員4人減で26名の登録となつたが、調査は順調に進んだ。溝跡や墓塚精査と同時に進行で、下位面の検出を行つたが、ほぼ同じ面で縄文土器の包含層が現れており、第2次検出面まで重機で下げる予定を変更し、手掘りによる掘削となつた。全体的に古代面（V層包含層）は見当たらず結果、VI層下位面が第2次検出面となり、縄文時代晩期末から弥生時代初頭期の遺構を検出し、中世面と同時に進行で精査を継続した。9月25日、現地公開が行われ、北上市立照岡小学校6年生15名他33名、合計で48名の参加があつた。また翌26日には、奥州市立大田代小学校3～6年生19人と引率教諭4名が体験学習として来訪し、発掘作業や土器洗い・接合を行つてゐる。

10月に入り、西側の調査を開始した。西側はトレント精査の結果、擾乱が激しいであろう予測はつ



第7図A 遺構配置図（2）農林部農村整備室分

いていたが、全面剥いだ結果、上位Ⅲ層～Ⅳ・V層（古代～近世層）を切る形で青色のグライ化粘土が、ほぼ全域に厚く堆積していることが判明し、深いところでは3m以上もあった。底面は砂面（IX層）で、Ⅶ層以上が喪失していることがわかり、写真撮影だけで調査を終了している。10月10日には空撮を行い、その後、第2次検出面で検出された住居跡の床下に遺構が確認され、溝底の壁側に土器が出土したことから、Ⅶ層を包含層とする埴層面でのだめ押し検出を行った。土坑や柱穴状土坑を精査し、調査を終了した。終了確認は11月4日、現地で行われ、11月14日に平成20年度の調査をすべて終了し撤収した。

（2）検出遺構と出土遺物の概要

以下に各委託者の検出遺構と出土遺物について記すが、検出遺構については重複しているものもあり、必ずしも合計が総遺構数とはならない。出土遺物についても、はっきり区別して取り上げておらず、グリッドや各遺構の面積の割合によって分配している。

①岩手県南広域地方振興局北上総合支局農林部農村整備室（第7図A）

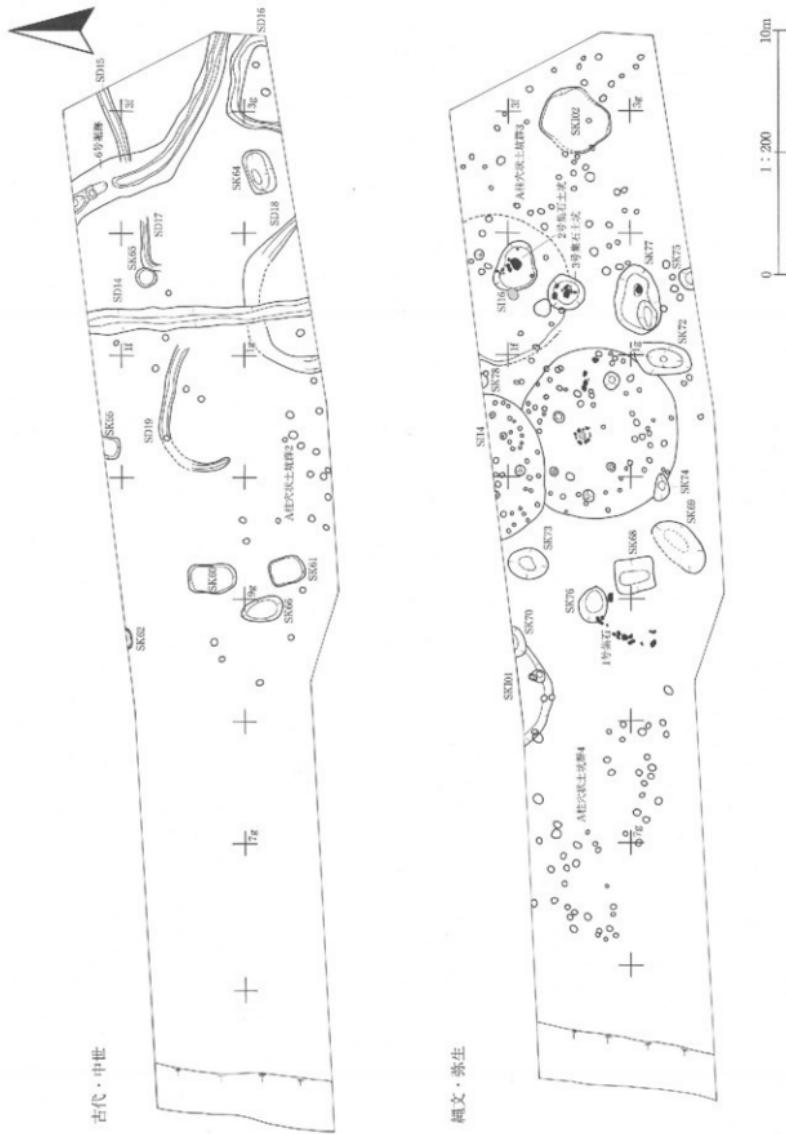
調査面積は、300m²である。調査期間は8月1日から10月10日で、土木部分と同時進行で調査を行った。検出遺構は、古代以降では堀跡1条、溝跡1条、墓壙3基、土坑1基、柱穴状土坑12個である。堀跡は柱穴状の小上坑が列をなして並んでおり、堀跡としたが横跡の可能性もある。また3基検出した墓壙の内1基は、調査区外に広がっていたが、人骨供養のために調査区外にやや広げて精査している。時期は中世で、墓域であった可能性が高い。その他では、近代から現代にかけての地形を改変させた（人工池？）急激な落ち込みも検出されており、調査区域の西側は厚い粘土で覆われ、古代から中世の遺構は搅乱されている様相が見えた。中世期の遺物としては、古銭が14枚出土している。

縄文時代から弥生時代にかけては、堅穴住居跡2棟、堅穴住居状遺構2基、炉跡2基、土坑2基、柱穴状土坑12個で、西側で旧河道を検出している。堅穴住居跡2棟は、縄文時代晚期末葉から弥生時代初頭に属すると考えられ、2棟は時期差をもって存在していたと思われる。2基の炉跡は石窯炉で、住居跡があった可能性を示すが、単独の遺構であることも考えられる。西側では土器包含層が大きく落ち込む箇所が確認され、北東側から続く旧河道と考えられる。

出土遺物は、縄文・弥生土器（土製品含む）が遺構内17586.9g、遺構外11073.7gの合計28660.6g（約28.7kg）出土している。大半が縄文時代晚期末葉から弥生時代初頭に属するもので、土器型式では大洞A・式である。浅鉢や深鉢などがあり、住居跡出土土器は完形品が多い。石器は、遺構内から7332.6g、遺構外から8496.1g 合計15828.7g（約15.8kg）が出土した。石礫や磨製石斧のはか、磨石や敲き石など石器製作に使われていたであろう石器が多く出土している。

②岩手県南広域地方振興局北上総合支局土木部（第7図B）

調査面積は、1050m²である。調査期間は8月1日から11月14日で、農林部農村整備室と同時進行で調査を行った。検出遺構は、古代から中世では、堀跡1条、溝跡5条、中世の墓壙4基、土坑3基、柱穴状土坑30個である。堀跡は南東側からやや屈曲して北に延びる。東側ではあるが、開口部が大きく広がる。5条検出している溝の内、1条は堀跡に直行し、東側で平成18年度調査区に延びる。1条は方形周溝状、2条は円形周溝である。中世の墓壙は隅丸の長方形で2基は継列する。近隣は中世の墓域であったと考えられる。土坑3基のうち1基は、墓壙に添うような位置にあり、関連が考えられる。その他では、近代から現代にかけての地形を改変させた（人工池？）急激な落ち込みも検出されており、調査区域の西側は厚い粘土で覆われ、古代から中世の遺構は搅乱されている様相が見えた。当期の遺物では古銭が、墓壙から22枚、柱穴状土坑から1枚出土した。



第7図B 遺構配置図 (3) 土木部

縄文時代から弥生時代にかけては、堅穴住居跡3棟、堅穴住居状遺構2基、土坑10基、集石遺構（集石土坑含む）5基、埋設土器2基、柱穴状土坑（堅穴住居跡範囲を除く）111個である。その他、北側で旧河道を検出している。堅穴住居跡3棟は、時期は縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭となるが、時期差を持って存在した可能性が高い。集石遺構のうち4基は石器製作に関わるものと考えられる。1基の集石土坑からは、検出面と埋土下位から埋設土器が2基検出され、上記4基と特色を異にする。その他西側では土器包含層が大きく落ち込む箇所が確認され、北東側から続く旧河道と考えられる。

出土遺物は縄文・弥生土器（土製品含む）が遺構内26162.2g、遺構外28081.1gの合計54243.3g（約54.2kg）出土している。大半が縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭に属するもので、土器型式では大洞A'式である。特に堅穴住居跡からの出土が多く、完形の浅鉢や台付き浅鉢、略完形の深鉢などがある。また、土製品としてアケセサリーや円盤型も出土している。石器（石製品含む）は遺構内から53660.0g、遺構外から10024.8g 合計では63684.8g（約63.6kg）が出土している。特色として剥片石器が比較的少なく、磨製石斧や磨石、凹石などの礫石器が多いということが挙げられる。また、遺構外からは管玉や小玉が出土している。

③記載に当たって（第6図）

以上に各調査区域の概要を説明したが、次項2では、各々の遺構と出土遺物の説明を行う。第6図で示した通り、検出遺構は2つの調査区域（農林部農村整備室分と土木部分）に跨っているものが非常に多いために、それぞれ分けずに報告している。2（1）では古代以降の遺構と遺物について、2（2）では縄文～弥生時代の遺構と遺物について説明している。なお、各遺構出土遺物の重量等についても、遺構全体のものである。

2 検出遺構と出土遺物

（1）古代以降の検出遺構と出土遺物

①墓壙

墓壙は5基出土している。出土遺物は人骨と古錢のみである。人骨は、歯以外はもなく崩れた状況であったために、実測後供養して、無縫仏として埋葬した。古錢は状態の良いものは拓本図と写真を併せて掲載したが、酸化が激しく脆いものは、計測値のみを表に記載した。なお、厚さは、本来では何点か測定すべきであるが、鋸びを完全に除去していない状況のために、1点（外縁の厚い部分）のみの計測となっている。同じ理由で量目（重さ）の数値にも考慮願いたい。

古錢の出土位置が明確なものは、図面上に載せている。

S K59墓壙（第8・16図、写真図版4・10）

〔位置・検出状況〕 III D10eグリッドに位置する。検出面はⅦ層上面で、検出面の標高は49.70mである。縄文土器包含層を精査中に検出した。

〔重複・隣接関係〕 S I 14堅穴住居跡の床面を切る。北西方向4m離れて、S K63墓壙がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は上位に、黒褐色土を主体とした砂質の混合土、下位に粘土質の混合土が埋まる。上位は人為的堆積の様相を示し、下位は遺体の土化したものと考えられる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は隅丸の長方形を呈す。南壁側がやや膨らむ形となっているが、遺構の特色なのか判別できない。しかし、S I 14堅穴住居跡の柱穴が切られている状況から掘りすぎの影響も考えられる。主軸方位はやや西側に傾く。大きさは、開口部径で長軸が125cm、短軸が80cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形はピーカー状で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。深さは、東壁で47.4cmを測る。

〔遺体〕 非常に残りが悪く、精査も困難であった。かろうじて、頭蓋骨らしき痕跡と歯を図面上に載せることができた。北を頭に、西側向きで埋められている。頭頂部から推定の下顎までの径は約24cmを測る。表掲載の古銭5~7の3枚は、遺体の胸?の位置に、植物?の袋に入れられた状況が観察でき、イメージとしては手に持たせた感じである。歯の鑑定結果、本人骨は成年から壮年の男性の可能性がある。詳細は3分析鑑定の項を参照していただきたい。

〔出土遺物〕 墓土中から140.4gの土器片と24.5gの石器1点が出土したが、すべて流れ込みである。S 114堅穴住居跡関連の遺物と考えられる。

墓壙に伴う遺物として古銭が7枚出土している。1は北宋錢で元祐通寶と読める。初鑄は1086年となっている。接着していた2~4の3枚は判読不能で無文銭（ごまかし銭）の可能性もある。出土層位は埋土中で位置は明確にできなかった。表掲載の5や6は洪武通寶・元祐通寶と辛うじて読めたが、非常に脆い。洪武通寶の初鑄は1368年となる。

〔時期〕 中世の遺構である。

S K60墓壙（第9・16図、写真図版4・10）

〔位置・検出状況〕 III D 9 f グリッドに位置する。検出面はVI層上面で、検出面の標高は49.70mでSK59墓壙と同じである。繩文土器包含層を精査中に検出した。

〔重複・隣接関係〕 西側でSK71土坑、南側でSK68土坑の縄文時代の土坑を切る。SK61墓壙は、南壁から120cm離れてあり、同時期と推定する土坑のSK67土坑は南西側に1m離れる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、上位に暗褐色土を中心とした混合土が埋まる。下位は炭化物をともなう黒褐色土上で遺体の土化したものであろう。

〔平面形・大きさ〕 平面形は、隅丸の略長方形で中央部にややくぼみが見える。南側の壁は、隣接するSK61墓壙と主軸が同じになる。単なる掘り方なのか、掘り直したものか、2つの墓壙が重複しているか、いずれかの理由と考えられるが判別できない。北側の主軸方位はほぼ北—0°—南となる。大きさは開口部径で、長軸185cm、短軸で115cmを測る。

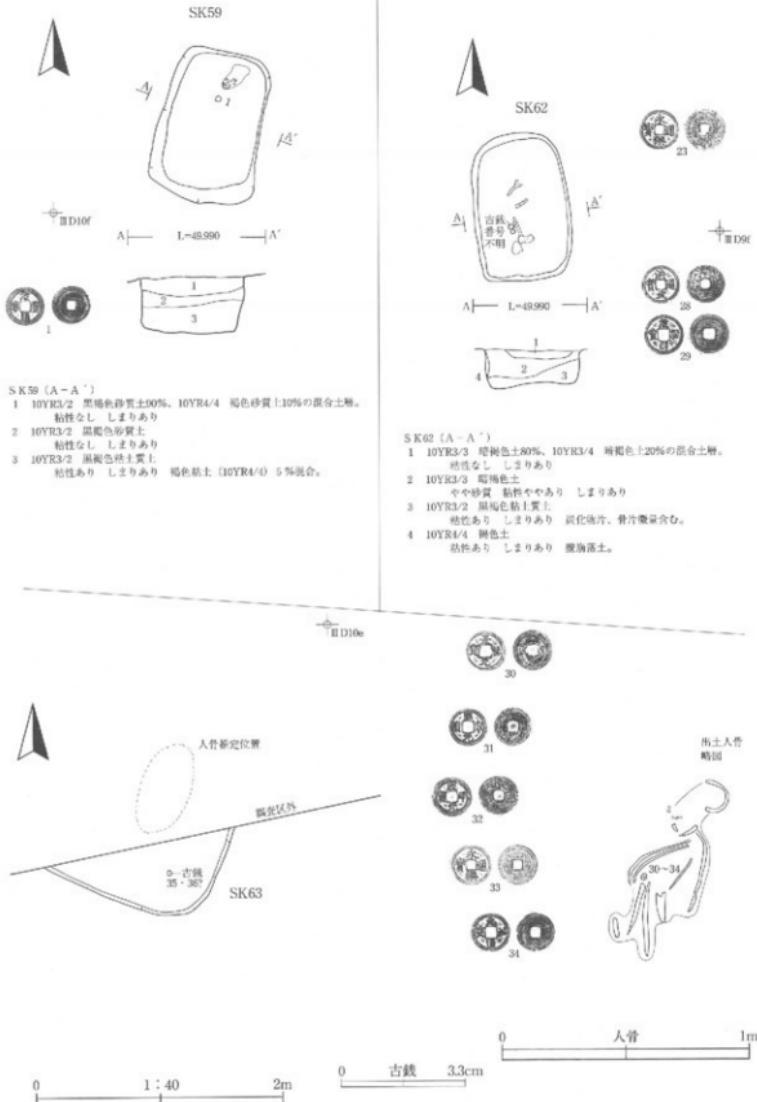
〔断面形・深さ〕 断面形は壁がやや斜めに立ちあがる皿形状で、床面は平坦である。深さは、下位包含層精査の影響が少ない西壁で32.5cmとなる。

〔遺体〕 人骨を形に残すことが不可能なほど非常に範く、頭蓋骨と思われるラインも明確にできなかった。しかし、SK59墓壙や後述するSK61墓壙の例から、北を頭に古銭を手にして埋められていた可能性が高い。歯の鑑定結果、本人骨は女性的であるとしている。詳細は3分析鑑定の項を参照していただきたい。

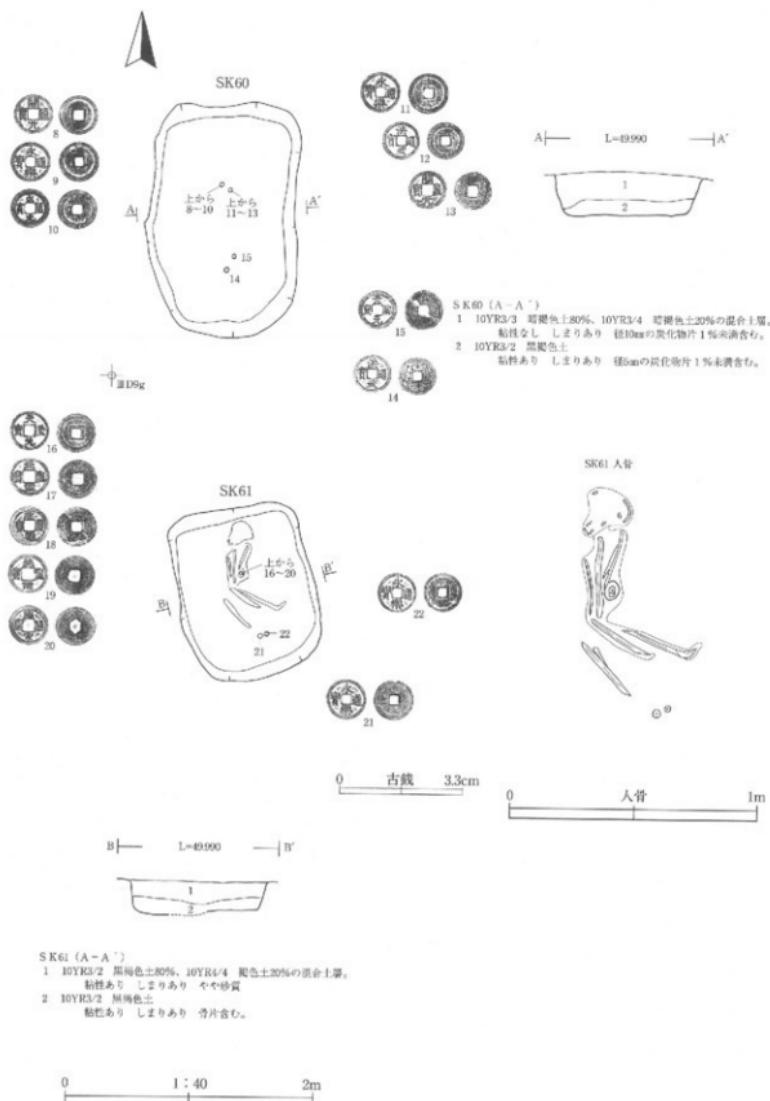
〔出土遺物〕 墓土中から274gの土器片と31.8gの剥片石器1点が出土した。出土土器は磨滅した弥生土器らしい浅鉢の口縁部で他は不明である。

墓壙に伴う遺物として古銭が8枚出土しており、他の墓壙に比較すると1枚多い。8枚すべて解読できた。8~10、11~13の6枚は床面の北側中央部に、14・15は床面南側で検出されている。8~10はSK59墓壙同様に袋に入れられた状況であった。SK61墓壙の状況から8~13は手に、14・15は足側に埋められていた可能性を示唆する。初鑄は8・13・14の開元通寶が960年、9・12の永樂通寶が1408年、10の至道元寶が995年、15の景德元寶が1004年となっている。

〔時期〕 中世の遺構である。



第8図 SK59・62・63墓壙



第9図 SK60・61墓構

SK 61墓壙（第9・16図、写真図版5・10・11）

〔位置・検出状況〕 III D 9 g グリッドに位置する。検出状況や検出面は SK 60墓壙と同じである。

〔重複・隣接関係〕 北側に SK 60墓壙がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、上位に砂質の黒褐色土を主体とした混合土が埋まる。人為的堆積である。下位は人骨分と考えられる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は南壁際が、やや丸みを帯びる略長方形である。主軸方位は北北西に傾く。大きさは開口部径で、長軸が141cm、短軸が108cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、壁が斜めに立ちあがる皿形状で、底は平坦である。深さは、西壁で21.9cmを測る。

〔遺体〕 頭がい骨の形や歯、大腿骨や背骨と思われる部分など比較的の残りがよく、圓面に載せることができた。北側を頭にして西向きに埋葬され、足は折り曲げられていると推測される。頭頂部から頸（歯のある部分）までの長さは22cm、前頭部から後頭部の長さが16cmとなる。胴体部には3本の骨があり、中央部を頭椎と想定すれば、その長さは30~40cm、3足の中央部が大脛骨とすれば、その長さは25cm前後、東側の骨を下肢とすれば、その長さは30cmとなる。あくまでも残った人骨の計測値であるため、誤差は大きいにあるであろうが、遺体は小柄な人物であったと考えられる。歯の鑑定の結果、本人骨は女性的であるとしており、詳細は3分析鑑定の項で示している。

〔出土遺物〕 埋土中から29.9gの土器片が出土したが流れ込みである。

古銭は7枚出土している。16~20は、袋に詰められていた状況で出土している。他の墓壙に比較すると、遺体の腰のあたりにあることが気になる。天聖元寶（初鋲1023年）3枚、元豐通寶？（同1078年）1枚、皇宋通寶（同1034年）の5枚で、すべて北宋銭となっている。21・22の2枚の永樂通寶は遺体の足元からやや離れた南側で出土している。

〔時期〕 中世の遺構である。

SK 62墓壙（第8・16図、写真図版4・11）

〔位置・検出状況〕 III D 8・c f グリッドに跨って位置する。検出面はVI層上面で、検出面の標高は49.64mである。

〔重複・隣接関係〕 繩文時代の遺構である SK I 01堅穴住居状遺構や SK 70土坑を切る。北西に同時期と思われる SK 66土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色土を主体とした混合土があり、人為的堆積である。下位の黒褐色土は遺体分である。西壁際に壁の崩落上が認められる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は北壁がやや丸みを帯びる隅丸の長方形で、他の墓壙と比較すると稍円形状になる。主軸方位は北北西に傾く。大きさは開口部径で、長軸が121cm、短軸が78cmで、SK 59墓壙と同規模である。

〔断面形・深さ〕 断面形は、壁が垂直に上がるビーカー形であるが、底面がやや凸凹している。深さは、搅乱の影響の少ない東壁で27cmを測る。

〔遺体〕 SK 60墓壙同様に、骨が脆く形に残すことが困難であったが、頭蓋骨周辺と古銭出土状況は同化することができた。頭蓋骨の形状や、歯の位置から、西向きに埋葬され、頭が南側に向かっている印象を受けた。胴体や下半身の骨は一部のみ（足か？）形に残すことができたが詳細は不明である。径を測るほど骨が残らなかったが、SK 62墓壙同様に、あまり大きな人ではないと思われる。やや首が曲げられているように観察されるのも特徴である。歯は鑑定に依頼した。結果は不明として

おり、詳細は3分析鑑定の項で示している。古銭出土位置は、SK59墓壙と同様に胸と思われる位置にある。

〔出土遺物〕 埋土から土器・石器ともに出土していない。古銭は7枚出土している。23から27は袋にまとまって出土したもので、最上位は永楽通寶であるが、他は判読不能であった。29は足付近（北側床面）で出土したもので、28も同様である可能性が高い。

〔時期〕 中世の遺構である。

S K63墓壙（第8・16図、写真図版4・11）

〔位置・検出状況〕 III D 9 e グリッドに位置する。SI14堅穴住居跡の精査中に、暗褐色土の長方形のプランを検出したもので、検出面はVI層下位となる。検出面の標高は49.52mとなる。

〔重複・隣接関係〕 SI14堅穴住居跡の床面を切っている。遺構のはば3/4が調査区外に広がる。

〔埋土・堆積状況〕 ほぼ底面が凸した状況のために、埋土断面は実測できなかった。しかし上位の埋土は、SK62墓壙と同じ暗褐色土を確認した。詳細は不明である。

〔平面形・大きさ〕 調査区外に埋葬された遺体は調査したが、壁や形などは精査していないので平面形や大きさは把握していない。しかし、長軸は北北西に傾くと予想され、短軸の長さは120cm前後と推測される。この大きさはSK60墓壙とほぼ同規模である。

〔断面形・深さ〕 断面形も把握できなかった。深さも2～3cm観測したにすぎない。

〔遺体〕 遺体のすべてが調査区外に横たわる。遺体の供養の目的で、調査した。皮肉にも、最も人骨の残る遺体となつたために、簡易実測を行った。方向や位置などは定かではないことから、切り離した形で掲載する。北側を頭にして、西向きに埋葬されている。腕と思われる骨が前方に投げ出され、まるで膝を抱えた状況となる。古銭は手に持っていたかのような位置に出土している。頭頂部と下顎と思われる部分までの径は25cm、前頭部から後頭部まで15cm、胴体部の右側にある頸椎と思われる長さが40cm程度、下半身と思われる3本の骨の内、最も長い右側（大脛骨か）で30cm、中央のもの（下肢か）が22cm、最も左にあるもので8cmを測る。人骨を実測できたSK61と比較すると、やや大柄であり、SK61人骨が女性であるならば、男性である可能性を想定する。

〔出土遺物〕 埋土中から475.4gの土器と砾石器2点（3236.8g）が出土している。一部SI14堅穴住居跡出土土器と接合することから、当遺構の土器の流れ込みであろう。

古銭は7枚出土した。30～34の5枚は遺体の手元にあったと思われるもので、すべて北宋錢となっている。30の景祐元寶の初鋤は1034年で、31・32の熙寧元寶の初鋤は1068年となっている。これらの古銭は、他の墓壙からは出土していない。35・36は判読不能銭で、実測図にその位置を示しているのは、そのうちの1つである。

〔時期〕 出土古銭は、北宋錢のみであるが、34の元祐通寶が他の墓壙からも出土していることを考慮すれば、他の墓壙と同時期で中世と考えられるが、若干他より古いものなのかもしれない。

②土坑

基本層VI・VII層（遺物包含層）上面を検出面とする土坑は4基検出した。大型のものは、楕円木痕と考えられたが、墓壙の周辺で検出されていることから、土坑としているものもある。遺物は少量の縄文土器片を出土させているものもあるが、流れ込みと考え遺構外とした。

S K 64土坑（第10図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕 IV D 2 g グリッドに位置する。第1次検出面の6号堀跡やS D14溝跡の検出面と同じである。検出面の標高は49.65mである。精査後に第2次検出面（VI層面）で、同規模の褐色土のプランを検出し、第1次検出で掘り残した部分として精査をした。実測図には反映させたが、平面写真は上面検出分のみとなった。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。S D16溝跡やS D18溝跡に挟まれた形である。西側には6号堀跡がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色砂質シルト、下位に黒褐色土が埋まる。その形状から墓壙と考えられたが、微細の骨粉が上位から出土するものの、下位からは出土しなかった。2次検出で精査したものは、黄褐色土の單層で、後述するS K 66・67土坑と同様である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は橢円形状で、短軸の壁が並行となる。やや丸みを呈するが5基検出された墓壙に似る。しかし主軸方位が、東一西でやや西北西に傾くのが、墓壙と大きな違いとなる。大きさは開口部径で、長軸が186cm、短軸が107cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は中央部で大きくぼむ。底面がやや平坦になることから、ビーカー状としていいかもしれない。深さは北壁で最大87cmを測る。

〔出土遺物〕 上位から出土した骨粉は、微細で判別できなかった。その他土器や古錢は出土していない。

〔時期〕 古代から中世の遺構と考えられ、中世の可能性が高い。

S K 65土坑（第10図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕 IV D 1 f グリッドに位置する。第1次検出面（VI層面）で捉えた。検出面の標高は49.68mである。

〔重複・隣接関係〕 南側でS D17溝跡と隣接（重複？）する。下位面からは2号埋設土器が検出されており、その上面に当たる。

〔埋土・堆積状況〕 上位の黄褐色土に炭化物や焼土粒が混入する。A柱穴状土坑群2の埋土と同類で、基本層IVに相当する可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は略円形で、大きさは開口部径で、北壁から南壁で82cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。西壁がなだらかに、東壁が角度をもって立ち上がる。深さは18cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 古代から中世の遺構と考えられ、中世の可能性が高い。しかし、第1次検出面とはいえ、繩文住居跡の検出面（SI14は49.60m）と標高的には大差がなく、遺構の真下に、埋設土器が検出されたことが、気になる点である。埋土上位に見える炭化物などは、埋設土器に関連するものであった可能性も否定できない。

S K 66土坑（第11図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕 III D 8 e グリッドに位置する。検出面の標高は49.54mである。第1次検出で大きな円形のプランを得ていたが、当初は風倒木と考えていた。しかし、中世墓壙の近隣にあること、埋土状況や立地状況など同様の特色を持つS K 67土坑の存在から、土坑と登録した。平面図中の波線は、埋土2・3を壁・底面とした場合のプランである。

〔重複・隣接関係〕 SK I 01堅穴住居状遺構を切る。南西側でSK 62墓壙を切るが、波線をプランとした場合は隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 最上位に、砂質の褐色度土、中位に暗褐色土がある。下位には擾乱されたような混合土が入り込む。埋土の中に遺物は出土しない。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状を呈すと考えられ、長軸の方向は北西—南東となる。実線プランの大きさは開口部径で、長軸が314cm、短軸が推定200cmとなる。波線プランは、長軸200cm、短軸120cmとなる。破線プランは、SK 61墓壙などの大きさに似る。

〔断面形・深さ〕 壁がだらかに上がる皿形状を呈すが、底面はやや平坦となる。深さは実線プランの西壁側で、72cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔その他〕 風倒木の可能性がある。SK 62墓壙と隣接しており、墓壙の近くに植樹された樹木が倒れたものであろうか。上位は削平されているが、塚状の遺構かもしれない。

〔時期〕 不明であるが、中世の可能性が高い。

SK 67土坑（第11図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕 III D 8 gグリッドに位置する。第1次検出で、標高は49.50mである。SK 66土坑同様に、風倒木の影響を受けた自然作用と考えていたが、墓壙との関連性を考え、中世の遺構として登録した。

〔重複・隣接関係〕 北東部でSK 60墓壙と南東部でSK 61墓壙と隣接する。縄文の遺構であるSK 68土坑や風倒木状の土坑であるSK 69土坑が東側にある。また、北側に開むように5号集石遺構がある。

〔埋土・堆積状況〕 褐色シルトのはば單層で、やや粘土質である。暗褐色シルトの混合割合で3層に細分できる。上位に炭化物が観察される。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、主軸方位は北北西に少し傾く。これは隣接するSK 61墓壙と同軸となる。大きさは開口部径で、長軸170cm、短軸95cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、南側壁がほぼ垂直にたち上がる逆台形状で、底面は平坦となる。深さは40cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔その他〕 上述した隣接する遺構の内、検出面や埋土の状況または出土遺物がないことから、墓壙との関連を考えざるを得ないであろう。SK 64土坑やSK 66土坑と同類と考えられる。

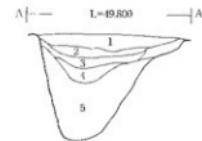
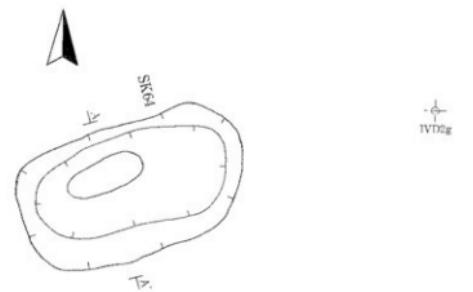
〔時期〕 不明であるが、中世の可能性が高い。

③堀跡

6号堀跡（第12図、写真図版7）

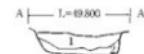
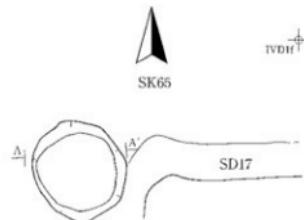
〔位置・検出状況〕 IV D 1 eから、IV D 2・3 fに跨って位置する。第1次検出で、検出面の標高は49.70m前後となる。平面でのプランはすぐ判別できたが、埋土や断面形、深さなどは、把握するのが難しく、第2次検出面（VI層下～VII層面）でも精査し、平面実測や写真撮影を繰り返している。図面は合成したが、平面写真は上位検出完掘と2次検出完掘の2段階となった。

当初は溝跡として報告の予定だったが、堀跡とした理由は、前年度調査において、1・2号堀跡が検出されており、規模や断面形なども類似することに倣っている。



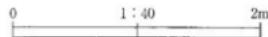
SK64 (A-A')

- 1 10YR4/9 暗褐色砂質シルト
粘性なし しまりあり
炭化物微量含む
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト
粘性ややあり しまりあり
炭化物・黄褐色鉄質土質微量含む
- 3 10YR3/2 黑褐色粘質シルト
粘性強い しまりあり
- 4 黄褐色の粘土質シルト
- 5 黄褐色の砂質シルト層

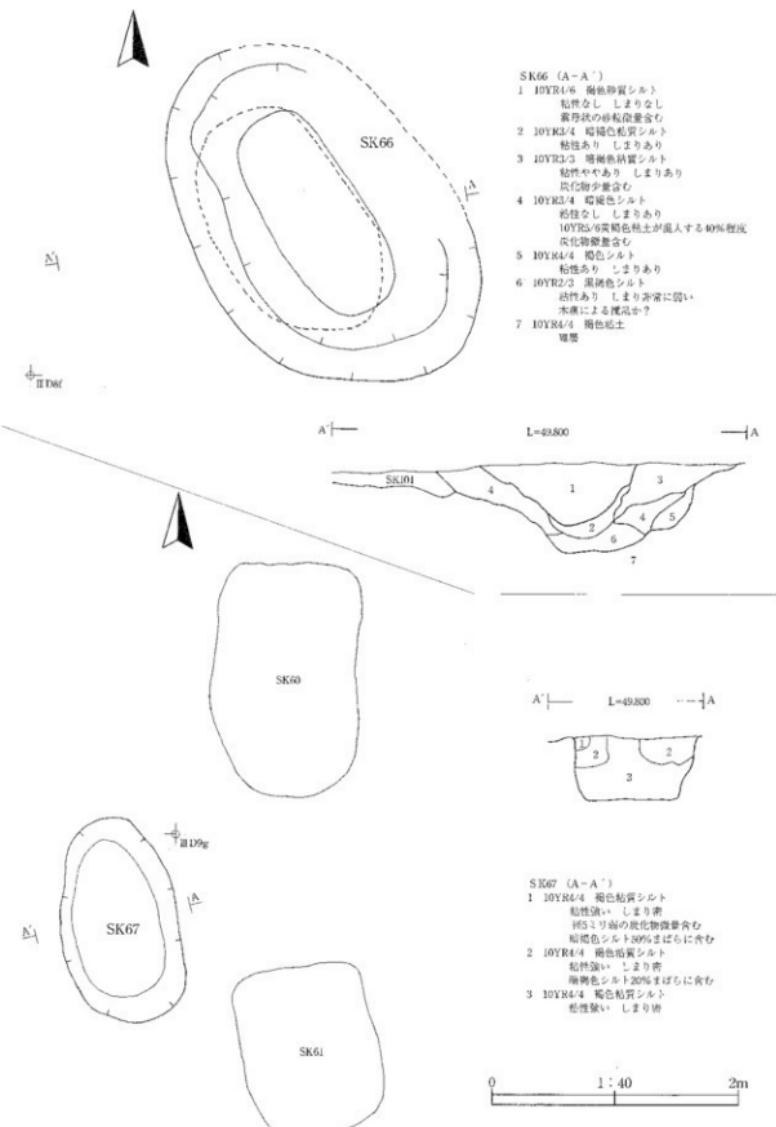


SK65 (A-A')

- 1 10YR4/3 に赤い黄褐色砂質シルト
粘性なし しまりややあり
炭化物や淡土色ブロックで少量含む
- 2 10YR4/4 黄褐色シルト
粘性ややあり しまりあり



第10図 SK64・65土坑



第11図 SK66・67土坑

〔重複・隣接関係〕 繩文時代の多くの遺構を切る。代表的なものでは、住居跡では S I 16、堅穴住居状遺構では S K I 02が堀跡によって壊されている。S N Q01も住居に関連すると考えられたが、掘により判別できずに、炉跡としている。同時期のものとしては、SD15・16の溝跡が隣接するか重複する。

〔埋土・堆積状況〕 最上位には褐色の砂が覆う。特に北側断面C-C'に厚く堆積しているのを観測できる。その下に砂質の暗褐色シルトがある。この暗褐色土が第1次検出面でプランとなってあらわれるものである。下位に行くに連れ黒みが強くなり、炭化物も増えてくる。この黒褐色土は、縄文時代の包含層と酷似しており、時に掘りすぎ、もしくは掘り足りないという事態を起こす。最下位にはグライ化した粘土が埋まる区域もある。

〔延長・幅〕 南東から西北西に約6m、屈曲してやや北西に向きを変え7mほど検出した。総延長は13mほどで、延長はそれぞれ調査区外へ延びる。幅は開口部径で、南東側は0.88~1.02mで屈曲区域方向に向かって、少しづつ幅が大きくなる。北側は1.52~1.64mを測り、北部でいったん1.32mまですばみ、底から北側に放射状に広がる。調査区外との境で、最大となり2.82mを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、南側は壁が斜めに直線的に立ち上がり、底面はやや丸みを帯びている。中央部の屈曲部分では、壁は緩やかになり、皿形状を呈す。北側に向かってふたたび壁の立ち上がりが角度を持ち、底面が平坦になる。深さは東側壁で、南側が66.1~72.7cm、屈曲区域が浅く概ね30cm程度、北側が、柱穴列状土坑の上場との比高で73~75cmを測る。底面の標高は、南側で48.90m、北側で48.80~48.70mとなり、若干ではあるが北側が低い。この高低差は、埋土断面に見えるグライ化粘土の堆積となってあらわれている。

※平成18年度調査1号堀跡の底面の標高は、南側で48.80mとなっている。

〔下位の柱穴列〕 北側の底面でグライ化粘土のプランで検出した。開口部径が、最大値で54~70cm、底部径が最大値で26~38cmの6基の土坑が、ほぼ80cm間隔で列をなしている。深さは最大値で31~49cmであり、北側ほど深い。

〔その他〕 深さが異なる中央部を境にして、南北に違う遺構の可能性が高い。南側が平成19年度5号堀跡から続く遺構、そして北側が柵跡の可能性がある。

〔出土遺物〕 埋土中から縄文土器が693.8g出土した。磨滅した深鉢の破片や壺形土器の小破片などがある。土師器片は見つかなかった。石器は367.5gの出土である。石核や剥片・磨製石斧なども出土している。これらは流れこみや擦を掘りすぎて得たものであり、遺構外として取り上げている。遺構の時期に想定できる遺物はない。検出グリッドから40の須恵器が出土しているが、これも流れ込みと考えられる。

〔時期〕 中世の遺構と考えられる。

④溝跡

S D 14溝跡（第13図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕 IV D 1 e・f・gグリッドに跨って位置する。第1次検出で、検出面の標高は49.50m前後となる。

〔重複・隣接関係〕 縄文時代の2つの堅穴住居跡（S I 14・15）を切る。南側でS D 18溝跡と重複する。その前後関係は不明である。周間に小型の柱穴状土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に黄色、中位に暗褐色の砂質のシルトが埋まる。断面に見えるやや明るい色調を持つ土は、他の遺構には見えない。基本層V層に相当する可能性もある。

〔延長・幅〕 ほぼ北一南にやや蛇行しながら延びる。検出された長さは約12mで、南北それぞれに調査区外に延びる。幅は開口部径で、中央部で84~102cm、北・南側で70cm前後となる。30cm前後の差はあるが、南北側では、縄文土器包含層を精査の際に、上面が若干下がった結果と考えられ、遺構の特色的なものではないと思われる。

〔断面形・深さ〕 北側はU字状、中央部から南側は皿形状の断面となる。しかし、北側は底面が平坦になる様相が見えた。深さは40cmを測る。

〔出土遺物〕 墓上中から152.7gの土器片が出土した。粗製土器を中心であるが、中には弥生時代中期に属する可能性のある上器片もある。また、上師器のような破片も1点出土しているが詳細は不明である。石器は剥片1点(8.7g)の出土である。すべて流れ込みや壁の掘りすぎで得られたものと判断した。

〔時期〕 墓土の特色は古代(平安時代)を示す。出土遺物からも古代の可能性が高いが、ここでは古代から中世の遺構とする。

S D 15溝跡（第14図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕 IV D 2・3 e・f の4つのグリッドに跨る。第1次検出で、検出面の標高は6号堀跡と同じである。

〔重複・隣接関係〕 西側で6号堀跡と重複する。新旧関係は判別できなかった。東側は調査区外に広がるが、平成18年度調査した溝跡(S D05)に接続する可能性が高い。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色と黄褐色土の自然堆積である。

〔延長・幅〕 東北東から西南西に、直線的に延びる。検出された総延長は3.24mである。幅は開口部径で、概ね46cm前後、底部径で20cm前後となる。

〔断面形・深さ〕 断面形は、壁が角度をもって立ち上がる、ビーカー状となる。深さは25cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 中世の遺構と考えられる。

S D 16溝跡（第14図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕 IV D 2・3 f・g グリッドに跨って位置する。第1次検出であるが、6号堀跡精査中に判明したもので、面としてはやや上位を下げた状況での検出であり、平面形は若干推定せざるを得なかった。

〔重複・隣接関係〕 6号堀跡と隣接(重複?)する。遺構の南半分は調査区外にある。内部に小型の柱穴状土坑2個を検出した。

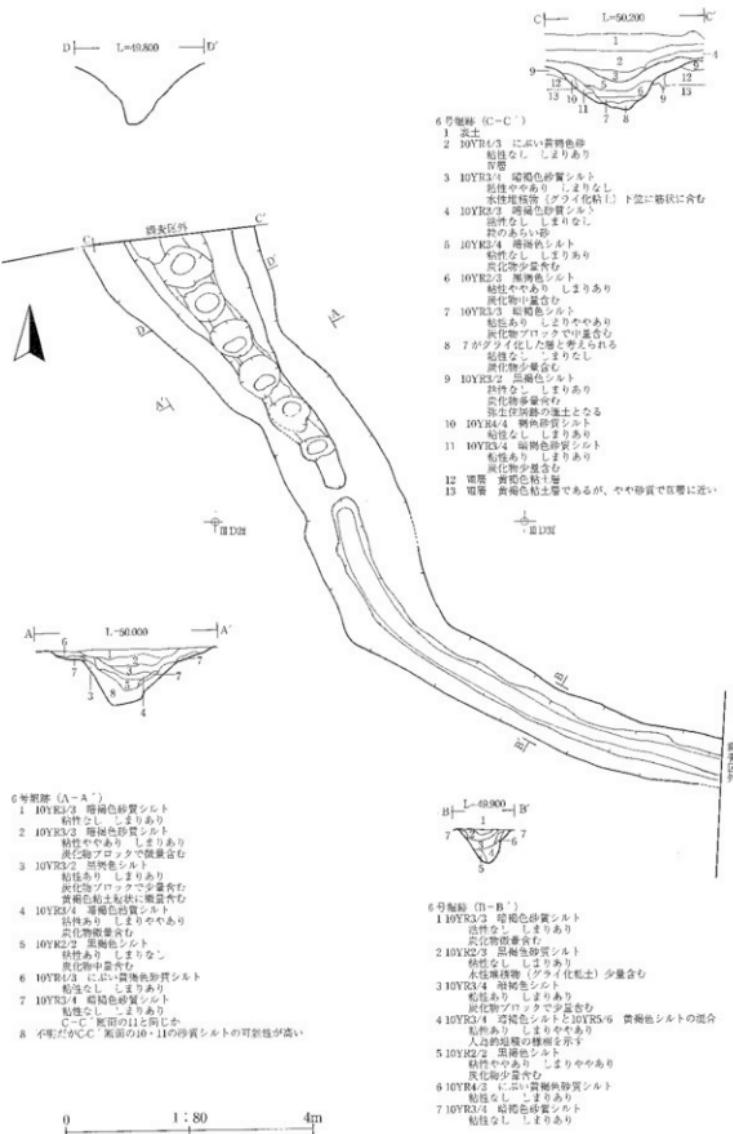
〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土の単層で、自然堆積である。

〔平面形・幅〕 延長の平面形は、隅丸の方形周溝状である。西から東に延びる溝の延長が3.50mほどで、北から南に延びる溝は2.50mを確認した。幅は非常にうねりが大きく、開口部径で25~60cmと一定していない。しかし、底部の径は20~30cm(一部が狭くなっているが)内と比較的安定している。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは、最大でも8cm程と浅い。

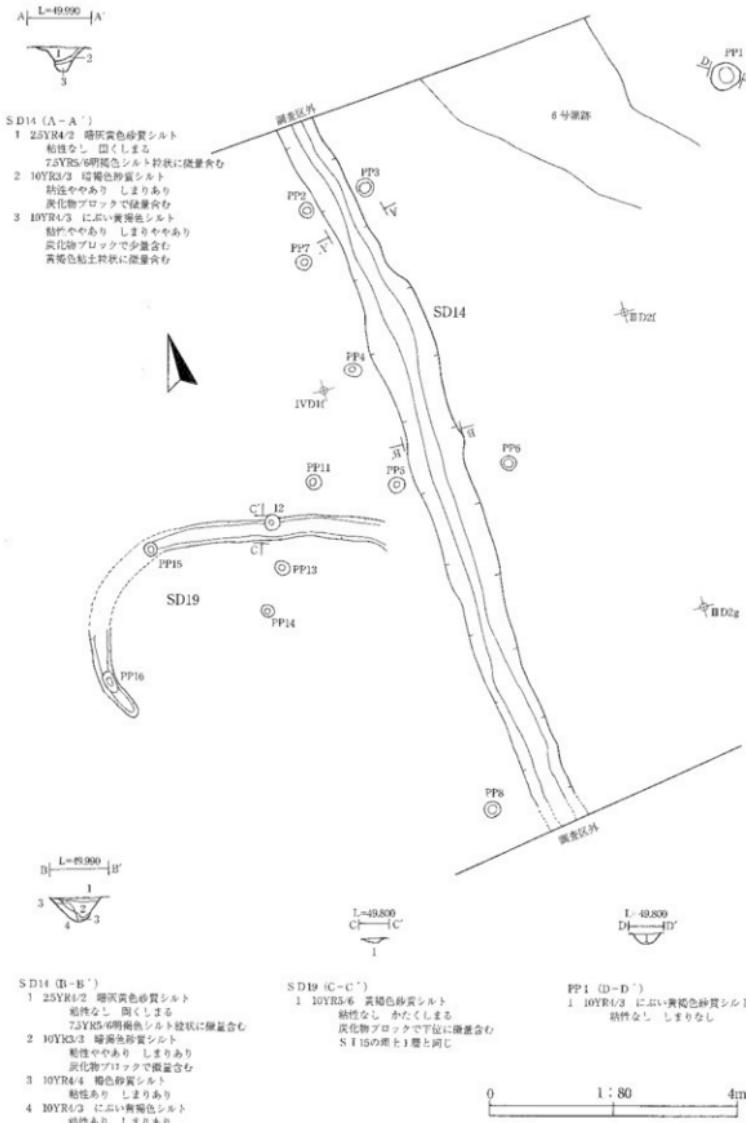
〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 6号堀との関連は定かではないが、古代から中世の遺構と考えられる。

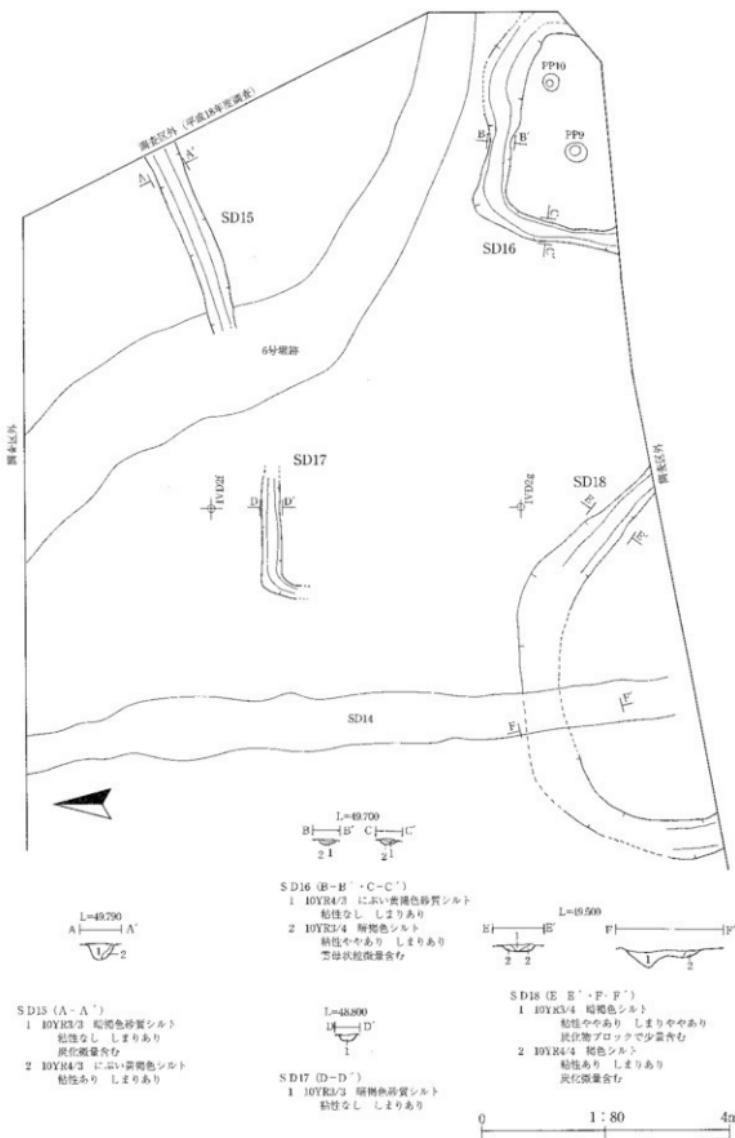


第12図 6号煤跡

2 検出道構と出土遺物



第13図 SD14・19溝跡



第14図 SD15~18溝跡

S D17溝跡（第14図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 IV D 1・2 fに跨って位置する。第1検出面であり、6号堀跡やS D15溝跡とはほぼ同標高で検出されている。

〔重複・隣接関係〕 S K65と隣接もしくは重複する。6号堀跡と14号溝跡に挟まれた位置にある。

〔埋土・堆積状況〕 砂質の暗褐色シルトの単層でS D16溝跡に似る。自然堆積である。

〔延長・幅〕 東西に延び、西側で屈曲する。屈曲の角度や方向はS D16溝跡とはほぼ同じである。検出した総延長は、240mほどである。幅は開口部径で、26~34cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大で10cmと浅い。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 古代から中世の遺構と考えられる。

S D18溝跡（第14図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 IV D1gグリッドに位置する。第2次での検出である。周囲にはS D14溝跡や、後述する縄文時代晩期の上坑であるSK72土坑やSK78上坑があり、その精査後に検出した遺構である。よって遺構のほとんどが、削平されているが、断面から縄文時代の上坑より上位にあると判断し、推定線を絡めて登録した。

〔重複・隣接関係〕 上記のとおり多くの遺構と重複する。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色から褐色のシルトが埋まる。他の溝跡の埋土に比べれば、若干粘性があることと、炭化物を含むという違いがある。

〔延長・幅〕 延長は、東側と西側に弧を描くように延びると想定している。円形周溝状である。遺構の半分が南側の調査区外に延びると考えられ、総延長は9m前後となる。幅は開口部径で、東側が40cm、西側が60cm程になる。円形周溝となる場合は、直径が東一西軸で6m前後と推定される。

〔断面形・深さ〕 皿形状である。深さは最大でも20cm前後で、特に東側で浅い。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 古代から中世の遺構と考えられるが、木痕などによる自然作用の可能性もある。

S D19溝跡（第14図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 III D10 fグリッドに位置する。検出面はVI層上面である。S I 15の炉跡を囲むように位置することから、住居跡の周溝的な遺構と考えたが、床面上位（住居跡埋土上位）からの掘り込みが確認できたかとから、VI層面を検出面とする古代以降の遺構と捉えた。

〔重複・隣接関係〕 S I 15堅穴住居跡の床面を切る。S D14溝跡と隣接（重複？）する。周囲で小型の柱穴状土坑を6個検出した。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、砂質の黄褐色土の単層で、S I 15堅穴住居跡の埋土断面にも、住居跡の上位の遺構である様相が見えた。

〔延長・幅〕 楕円形状にゆるやかに屈曲して東西に延びる。延長は把握できなかった。幅は、開口部径で35cm前後と狭い。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは、S I 15堅穴住居跡の断面で見ると最大28cmを測るが、精査後では2~3cm前後となった。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 円形周溝状であるS D18溝跡と同時期で、古代から中世の遺構と考えられる。

⑤柱穴状土坑

A柱穴状土坑群2（第13～16図、写真図版9・11）

〔検出状況〕 柱穴状土坑は、大きく3回の検出を行っている。1回目は第1次検出面上（VI層上面）、2回目はVI層精査中（VI～VII層上面）に検出したもの、最後にVII層面で検出したものである。A柱穴状土坑群2は、1回目に検出したすべて（P P01～P P16）と2回目に検出したもののうち、埋土の特色から、時期を古代以降と捉えたもの（P P301～P P329）を集めた。

〔位置〕 表に示した通りである。

〔埋土・堆積状況〕 基本的にP P01に見える砂質の暗褐色またはにぶい黄褐色シルトの自然堆積である。特にS D19溝跡周辺のものは砂質の黄褐色土が埋まる。P P301～329は、縄文時代の柱穴状土坑を除外し、炭化物が混入しない砂質の暗褐色土のものを登録した。

〔平面形・大きさ〕 表に示した通りである。

〔断面形・深さ〕 断面形は柱穴状である。深さは表に示した通りである。

〔出土遺物〕 P P318から古銭が1枚（37）出土した。至和元寶で北宋銭（初鑄1054年）である。

〔性格・時期〕 P P04～07には規則性があり、溝跡に関わるなんらかの施設であろう。同じようにP P12・15・16も溝跡関連と考えられる。時期は古代から中世にかけての遺構と考えられる。墓壙周辺に散らばるP P301～329のうち、SK62・63墓壙に挟まれた7個の柱穴状土坑は掘立て柱建物跡である。古銭が出土したP P318周辺にも、規則的な配置が見えるが詳細は不明である。ただし、墓壙の空白区域（III D10 g グリッド杭の南側）に建物跡が広がっている可能性も指摘できる。

⑥古代から中世以降の出土遺物（第16図、写真図版10・11）

中世期の遺物は古銭のみで、陶磁器などは出土していない。また、古代期の遺物も小破片のみで、平成19年度調査で出土した完形の土器はない。

古銭は37枚出土した。内訳は南唐銭3点、北宋銭15点、明銭7点、判読不能銭（惡銭？含む）が12点である。出土古銭の初鑄年の幅は960年から1408年となる。もっとも古いのが南唐銭の開元通寶で、3点の径を見れば、外縁外径・内縁内径には差がないが、14のみ他の判読不明銭のように量目（重さ）がない。北宋銭は9種類と多い。最も初鑄年の早いものが、景祐元寶の1034年となる。15点の計測値では、外径は元祐通寶の23.76mmから天聖元寶の24.93mmで1.07mmの違いとなる。しかし、内径では至道元寶の17.44mmを最小に、最大は同じく天聖元寶の20.58mmと3mmほどの幅がある。北宋銭の特色であろうか。

明銭は洪武通寶と永樂通寶である。洪武通寶は外径が24mm以上のものがないが厚さがあり、永樂通寶は径が大きくて、薄いという特色があらわれた。

判読不能銭はSK59・62墓壙で多い。SK59墓壙出土の3・4は厚みや量目がなく惡銭（ごまかし銭）であろうか。SK62墓壙の永樂通寶の下に重なっていた4点は、径や量目から北宋銭かもしれない。

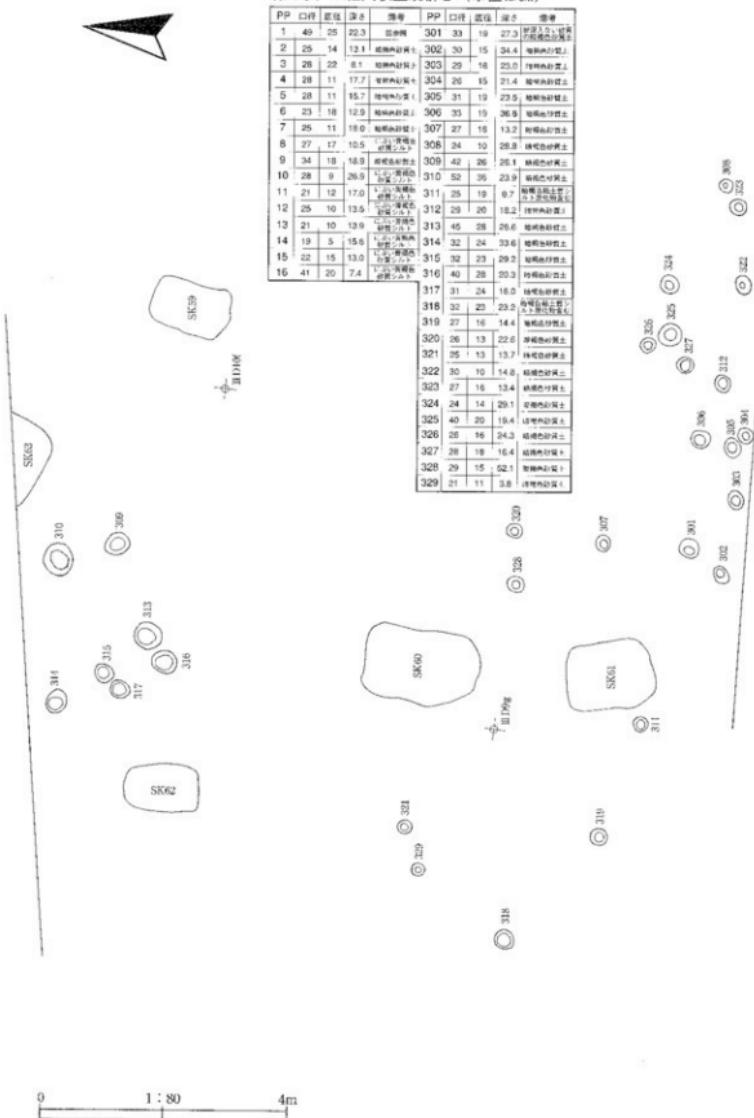
上記のとおり墓壙から出土した古銭は北宋銭が多いが、北宋銭は最も流通した渡来銭で、出土銭種順位は、1位が皇宋通寶、2位が元寶通寶、そして3位が熙寧元寶となるようである。（鈴木公雄「出土偏蕃銭と中世後期の銭貨流通」『史学第61巻第3・4号』1992三田史学会）

古代の土器は非常に少なく3点のみの掲載となった。38は、S I 14竪穴住居跡の埋土上位に混入する形で出土したもので、ロクロ土師器の壺である。39は排水から拾った須恵器片で詳細は不明である。40の須恵器は6号施設検出グリッドでの出土である。

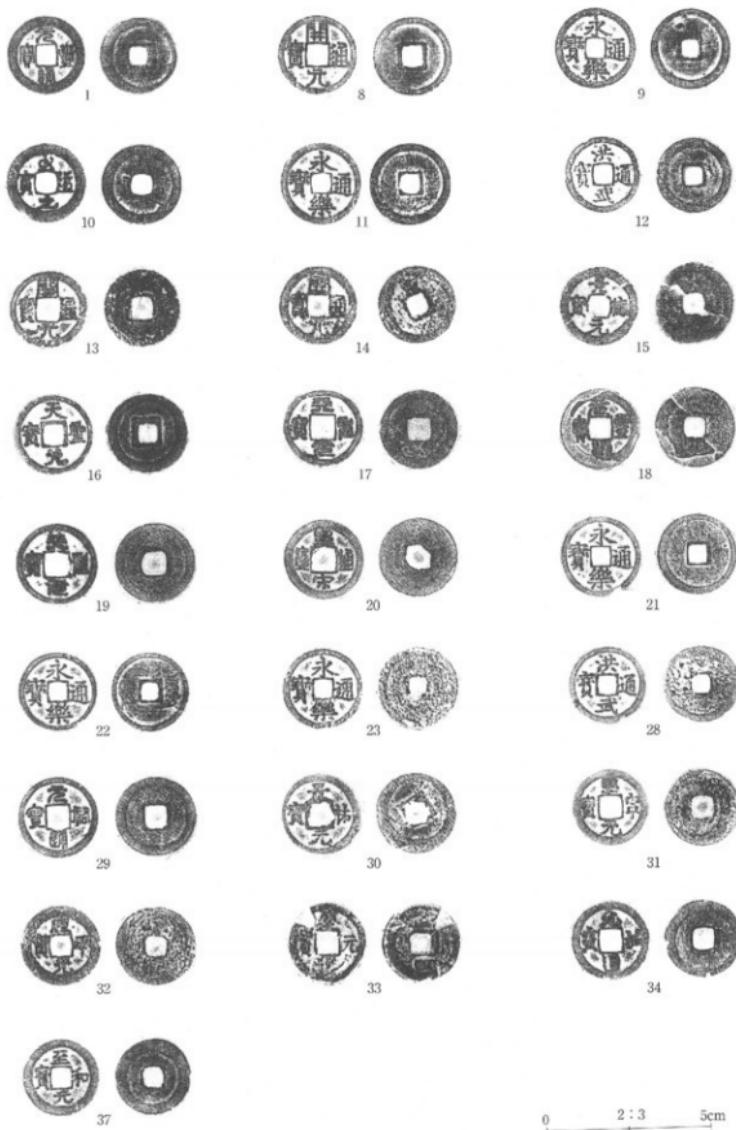
近世から現代の遺物は2点で、41は簪か何かの装飾品、42は西側挖削から出土したもので、西側の挖削構築時期に当てはまる可能性を持つものである。（38～42は写真掲載）

第3表 A柱穴状土坑群2 (単位はcm)

PP	口径	底径	深さ	番号	PP	口径	底径	深さ	備考
1	49	25	22.3	301	33	19	27.3	壁面3.5cm、底面 2.5cmの傾斜	
2	25	14	13.1	302	30	15	34.4	傾斜の傾斜	
3	28	22	8.1	303	29	16	25.0	傾斜の傾斜	
4	28	11	17.7	304	26	15	21.4	傾斜の傾斜	
5	28	11	15.7	305	31	19	23.5	傾斜の傾斜	
6	23	11	12.9	306	33	19	36.9	傾斜の傾斜	
7	25	11	18.0	307	27	15	13.2	傾斜の傾斜	
8	27	17	10.3	308	24	15	28.5	傾斜の傾斜	
9	34	18	18.9	309	42	28	25.1	傾斜の傾斜	
10	28	9	26.9	310	52	36	23.9	傾斜の傾斜	
11	21	12	17.0	311	25	18	9.7	傾斜の傾斜	
12	25	16	13.5	312	29	26	18.2	傾斜の傾斜	
13	21	10	13.9	313	45	28	26.6	傾斜の傾斜	
14	19	5	15.4	314	32	24	33.6	傾斜の傾斜	
15	32	15	13.0	315	32	23	29.2	傾斜の傾斜	
16	41	20	7.4	316	40	28	20.3	傾斜の傾斜	
				317	31	24	18.0	傾斜の傾斜	
				318	32	23	23.3	傾斜の傾斜	
				319	27	16	14.4	傾斜の傾斜	
				320	26	13	22.6	傾斜の傾斜	
				321	25	13	13.7	傾斜の傾斜	
				322	30	10	14.8	傾斜の傾斜	
				323	27	16	13.4	傾斜の傾斜	
				324	24	14	29.1	傾斜の傾斜	
				325	40	20	19.4	傾斜の傾斜	
				326	26	16	24.3	傾斜の傾斜	
				327	28	18	16.4	傾斜の傾斜	
				328	29	15	52.1	傾斜の傾斜	
				329	21	11	3.8	傾斜の傾斜	



第15図 A柱穴状土坑群2と出土遺物



第16図 古銭拓本図

第4表 遺物觀察表（古代～中世）

(① 古鏡（網は表掲載 番の計測位置は凡例参照）

番号	出土地点	出土層位	通貨名	径			重量(g)	参考
				外径(mm)	内径(mm)	鍼厚(mm)		
1	S K59	埋土下位	元祐通寶	23.76	17.51	1.12	3.20	北宋
2	S K59	埋土下位	明成不鏽	24.26	19.62	0.95	2.98	以下3点接觸
3	S K59	埋土下位	判讀不確	21.68	17.75	0.96	1.84	疑問
4	S K59	埋土下位	判讀不確	23.38	18.98	1.21	1.20	疑問
5	S K59	埋土中	洪武通寶？	23.58	20.00	1.71	2.98	明 植物の袋の中にまとまって接觸
6	S K59	埋土中	天祐通寶？	24.33	19.29	1.16	2.69	北宋 植物の袋の中にまとまって接觸
7	S K59	埋土中	判讀不確	24.92	19.09	0.86	2.62	植物の袋の中にまとまって接觸
8	S K60	床面	開元通寶	24.12	20.37	0.99	2.46	南唐
9	S K60	床面	永泰通寶	24.64	20.26	1.06	3.27	明
10	S K60	床面	嘉祐元寶	24.53	17.44	1.00	2.73	北宋
11	S K60	床面	永樂通寶	25.07	20.61	0.99	3.26	明
12	S K60	床面	洪武通寶	23.56	18.65	1.38	3.45	明
13	S K60	床面	開元通寶	23.65	19.09	1.21	3.01	南唐
14	S K60	床面	開元通寶	24.36	19.20	1.13	1.60	疑問
15	S K60	床面	崇寧五寶	24.43	18.52	1.14	2.18	北宋
16	S K61	床面	天聖元寶	24.30	20.17	1.17	3.44	北宋
17	S K61	床面	天聖元寶	24.41	20.24	1.07	2.55	北宋
18	S K61	床面	天聖通寶？	24.81	18.09	1.07	3.18	北宋
19	S K61	床面	天聖元寶？	24.93	20.58	1.21	3.29	北宋
20	S K61	床面	皇宋通寶	24.38	19.09	1.18	3.38	北宋
21	S K61	床面	永興通寶	24.66	21.28	1.06	2.28	明
22	S K61	床面	永興通寶	24.27	20.93	1.33	2.92	明
23	S K62	床面	永祐通寶	24.88	20.84	1.21	2.40	明 接觸資料上位
24	S K62	床面	判讀不能	25.45	20.43	1.89	3.61	接觸資料上から 2枚目
25	S K62	床面	判讀不能	24.81	20.28	1.39	2.65	接觸資料上から 3枚目
26	S K62	床面	判讀不能	24.50	20.75	1.42	3.35	接觸資料上から 4枚目
27	S K62	床面	判讀不能	24.55	21.48	1.24	3.18	接觸資料上から 5枚目
28	S K62	床面	洪武通寶	23.60	19.73	1.44	2.74	明 里村近
29	S K62	床面	元祐通寶	24.75	20.54	1.08	2.90	北宋 里村近
30	S K63	埋土下位	景祐元寶	24.71	20.56	1.23	3.34	北宋
31	S K63	埋土下位	熙寧元寶	23.45	18.36	1.32	2.89	北宋
32	S K63	埋土下位	熙寧元寶	24.52	17.99	0.84	2.43	北宋
33	S K63	埋土下位	熙寧元寶？	24.12	18.84	1.42	3.37	北宋
34	S K63	埋土下位	元祐通寶	23.58	17.57	1.36	2.27	北宋
35	S K63	埋土下位	判讀不確	23.33	19.02	1.18	1.99	出土地点不明（里元？）
36	S K63	埋土下位	判讀不確	23.58	18.80	1.56	3.28	出土地点不明（里元？）
37	P P318	埋土中	至和元寶	24.16	19.08	1.27	2.93	北宋

(② その他

番号	出土地点	出土層位	器種	種類	剖位	熟度	重量	時期	参考
38	SII4	株出面	土師器	环	口縫部	赤陥きの坯	—	平安時代	ロクロ痕 写真
39	廢土監場	埋土	須弥壇	坐	体部	色調は灰色	—	平安時代	タタキ目 写真
40	ND 1 e	Vf上	須弥壇	坐	体部	色調は赤茶色	—	平安時代	ロクロ痕 写真
41	III D 8・9 f	H層?	裝飾品	簪?	先端		2.01	昭和?	写真
42	西側挖孔	I層	西磁器	碗	口縫部		2.96	昭和?	写真

(2) 縄文・弥生時代の検出遺構と出土遺物

縄文・弥生時代の遺構は竪穴住居跡3棟、住居状だが炉跡がなく、遺物も少ない竪穴住居状遺構3基、土坑10基、炉跡2基、集石遺構5基、埋設土器2基である。柱穴状土坑はV層以下面で検出され、VI層包含層（炭化物を多く含む黒～暗褐色土）を埋土とするものと、最終面（Ⅳ層面）で検出されたものを区域ごとに2つに分けて説明している。

遺物図版は、①竪穴住居跡出土の土器と石器、②竪穴住居状遺構と③十坑出土の土器と石器、④炉跡・⑤集石遺構出土土器と石器、という具合にそれぞれまとめて表とともに掲載している。

写真図版は、遺構内の出土土器、遺構内の出土石器・石製品、遺構外の出土土器・石器と分けて掲載していることを留意願いたい。

①竪穴住居跡

竪穴住居跡は3棟検出した。これらは壁の立ち上がりは不明瞭で、2棟は重複している。柱穴の配列も判別できていない。しかし、土器の出土状況や炉跡の存在から、それぞれ独立した遺構として登録した。よって規模や平面形は推定線となっているところが多くなった。また、その他にも不明なところが多々あり、他の遺構との関連については本文で示している。

S I 14竪穴住居跡（第17・19・21・22図、写真図版12・13・24・29）

〔位置・検出状況〕 Ⅲ D 8・9 e・f グリッドに跨って位置する。VI層上面から遺物が出土しあり、その状況から竪穴住居跡と登録した。平面形のプランが確定できず、断面観察でも壁の立ち上がりが明確にできなかった。最終的には、土器の出土状況と炉跡を中心に、一定の距離を持って巡る小柱穴状の遺構を住居跡の範囲とした。

〔重複・隣接関係〕 南側でS I 15竪穴住居跡と重複する。北側が調査区外に広がる。床面南東部と北西部が中世の墓壙によって搅乱される。東側にはS K76土坑が隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 上位に黄褐色の砂質のシルトが載る。この層の下位からすぐ下の黒褐色土が最も多くの土器片を出土させる。これらは自然堆積層と考えられる。A-A'で見ると、一部混合土（埋土5）が見られるが、これは墓壙の掘削土の可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形を呈すると想定した。柱穴の範囲で推定したために不整となったが遺構の特色的なものではない。最も大きなプランで推定線を引いているが、それによれば6mほどどの径となる。埋土断面A-A'の南側が準状に立ち上がるが、その範囲で推定すれば5mほどになろうか。

〔壁・深さ〕 壁の形状や高さなどは検出できなかった。

〔炉跡〕 床面の、やや北側と推定する位置に地床炉が検出された。平面形は不整な椭円形で、北東側が突出する。焼土の規模は、南一北74cm、東一西64cmを測る。深さは6~12cmと厚い。掘り方はある大きくなり、ほぼ焼土の範囲内に収まり、深さも浅い。

〔柱穴〕 周辺で、埋土に炭化物を含む黒褐色土をもつ、多くの柱穴状の土坑を検出した。総数は138個となる。当遺構に関連すると想定しているものはそのうち71個で、南側の一部はS I 15竪穴住居跡と重複している。主柱穴となりそうのが北側のP 8と南側P 12である。どちらも開口部径が40cmを超える大型の柱穴となる。P 5・7や対角線上にあるP 14も開口部径は小さいが主柱穴になるかもしれない。その他の小柱穴は壁際に巡ると思われるものや、床面中央部にあるものに分かれるが詳

縄は不明である。炉跡の北と北東側は空白域となる。

〔出土遺物〕 土器の出土量は、12425.6 g（約12.4kg）となる。内訳は、検出面から埋土中位として取り上げたもの43.3%で、56.7%（7045.7 g）は埋土下位から床面として取り上げた。比較的、床面出土として同化できたものが多い。掲載は23点で、本文中の（ア）～（オ）は、平面図に対応している。

44は床面で取り上げたもの（ア）で、検出グリッドから出土した土器43と同一個体と考える。台付き浅鉢で太い沈線と大柄な貼瘤が特徴的である。台部は間隔をあけて平行沈線が2条施文される。底部に欠損が見られる。45も台部片と考えられ、46は厚みがあり底径も大きい。47は変形工字文が中位まで施文され、無文体を作り、最下位に沈線が巡る。沈線が乱雑で、内部も爛れており、蓋の可能性もある。これら浅鉢は、大洞A'式土器の新しい段階？に当たる上器で、金附遺跡出土土器のⅢ群に当てはまりそうなものである。

49は床面（イ）の口唇部に刺突のある山形口縁の鉢型土器、浅鉢とした48は49同様の鉢形上器かもしれない。50の鉢は、皿形（ぐい飲み形）で碗であろうか。52は浅鉢かもしれない。

深鉢形土器は床面で多く出土している。53～55は床面（ウ）出土のものである。平口縁となりそうのは53で、床面（エ）の56・57も同様である。これら深鉢形の特徴は、口唇部をなすことなく、小さなうねりを持つことと、口縁部が無文体となり、体部との境をハッキリさせることである。また口縁部は小さく外反するが、最大径が体上部になり、いわゆる肩を持つことも特色である。山形口縁となる床面ウの54は口唇部や突起の頂部に施文する。その他、小さな手づくね土器（58）も出土している。

59～65は粗製土器の体部片と底部である。そのうち59（オ）は、肩が張る器形となり、壺形土器となる可能性が高い。またS I 15堅穴住居跡の埋土上部出土土器と接合するものや、S K 63墓塚埋土から出土したものもある。

石器は、剥片石器が定形石器や剥片含めて59点、石核が6点、磨製石斧2点、磨石が2点出土した。総重量は4188.6 gとなる。掲載は定形石器6点、不定形石器1点、石核は1点、磨製石斧1点、磨石1点である。

66は石礫で67は石錐となる。69のスクレーバー（楔形石器？）を含め3点とも赤色頁岩を石材としている。68は形状から石鏡としたが、定かではない。70はスクレーバーとしたが、石礫の未成品かもしれない。71は原石面が残るもので、不定形石器に分類してもいいかもしれない。72は不定形石器としたものである。このような石器は当遺構から8点ほど出土している。

73の石核は、片面のみ細かい剥離がなされている。大きな剥片を得ようとしたものではないと考えられる。74は石材から磨製石斧の未製品としたが、小ぶりである。75の磨石は床面での出土で大型である。明確ではないが凹みも若干見受けられ、台石としても利用されていたのではないかと推測される。

〔遺構の性格・時期〕 遺構のプランとしての可能性は3つほど考えられる。1つは図版の実線で引いた推定線のもので、最も大きな可能性を示したものである。もう1つはやや小さめに破線で引いたものである。これが拡張を意味するのかどうかは判別しがたい。もう1つの可能性は、堅穴住居ではなく平地式の住居であったとも考えられるであろう。

時期は出土土器から縄文時代晚期末から弥生時代初頭の遺構で、後述するS I 15堅穴住居跡より新しいと考えられ、弥生時代初頭期に属する可能性が高い。

S I 15堅穴住居跡（第18・19・22～24図、写真図版13・14・25・29）

〔位置・検出状況〕 III D 8・9 f・g グリッドに跨って位置する。S I 14堅穴住居跡同様にVI層上面から多くの上器を出土させたことから、堅穴住居跡と仮登録し精査を開始した。埋土ベルトの観察では壁の立ち上がりを明確にできなかったが、中央部に炉跡が検出され、一括で上器が出上していることから堅穴住居跡と認定した。

〔重複・隣接関係〕 埋土上位を中世と考えられる S D 19溝跡が弧を描いて走る。また、中世と思われる小柱穴も確認できる。同時期では、北側で S I 14堅穴住居跡と重複する。南東部で S K 72土坑と隣接（重複？）する。床面東側には5号集石遺構があり、住居跡に関連する可能性もある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土上位に砂質の黄褐色土が載る。この層は S I 14堅穴住居跡には見られないもので、下位から土器片が出土する。もっとも厚く堆積するのが S I 14堅穴住居跡埋土 1 に相当する黄褐色土である。表中の埋土上位出土上器としているものは、この層からのものである。主体は黒褐色土で、この層の広がりを住居跡の範囲としている。S I 14堅穴住居跡と比較して、搅乱を受けていたように様々な土が堆積している印象を受けた。

〔平面形・大きさ〕 埋土断面では北西と南西側に壁の立ち上がりが見えたが、明確ではなく、推定線（実線）は上器が出土している範囲と、柱穴状土坑の範囲を鑑みて、最も大きなプランとして円形で引いたものである。埋土断面からは梢円形の可能性を示している。

平面形が円形とした場合は最大直径6.70m、炉跡を中心として規模を縮める（点線）と直径5m前後となる。やや北一南を縮めた梢円形とすれば、6.50m×5.30m前後となると想定している。

〔壁・深さ〕 壁の形状や高さなどは検出できなかった。

〔炉跡〕 床面は中央部で検出された。円形に礫で囲われる。長さ20～24cm、幅12～16cmの大型の礫と、長さ10～15cmほどの小型の角礫で構築される。大型の礫は埋め込まれ、小型の角礫は置かれている。平面形は梢円形で、崩落縁を除いた規模は、南一北68～70cm、東一西70～72cmを測る。焼土は北寄りに礫から離れて位置する。平面形は梢円形で、規模は26×28cmと S I 14炉跡と比較して極端に小さい。焼土の厚さは3cm程度で浅く、礫が混入し、締まりがない。掘り方は、埋土 5 をプランと考えた。集石土坑のように大型となる。平面形は円形で大きさは122×128cmとなる。埋土 5 はVI層で、掘り方は埋土 4 を底面とする小規模なものであった可能性もある。

〔柱穴〕 大小合わせて74個検出した。実測したP137・138は炉跡から等間隔に位置する。P13・87・110は、口径が大きく主柱穴になる可能性がある。S I 14堅穴住居跡とは逆の南東部に空白域がある。遺構の南側には古代以降と想定したA柱穴状土坑群2があり、それらに含まれる柱穴も存在する可能性も否定できない。

〔出土遺物〕 土器の出土量は、13085.8g（約13.1kg）となる。内訳は検出面から埋土中位として取り上げたものの41.2%で、58.8%（7697.2g）が埋土下位から床面として取り上げたものである。埋土下位から床面の出土割合が高いが、一括で出土し固化できた（ア）と（イ）の重量（2496.3g）によるもので、全体的に破片資料となつた。また、遺構外やSI14堅穴住居跡の上層で出土した上器とも接合するものも多い特色がある。掲載は25点で、本文中の（ア）・（イ）は、平面図に対応している。

76は床面（ア）で上から押しつぶされたように出土した大型の浅鉢である。口径は32.45cm、器高は19.90cmを測る。平口縁だがややうねる。口縁部の立ち上がりは、丸みを帯びており、やや内湾する。変形工字文で貼彫はやや大柄である。上段4単位、下段4単位が交互に施文される。口縁内側にしっかりとした沈線が巡り、体部も丁寧に磨かれる。底部がやや欠損するが、台付きとはならない様子が伺える。周囲には深鉢か浅鉢の底部が3個体出土している。77は大型であり、口縁部や体部には、見

合う個体が見つからないが、78は後述する87の底部の可能性がある。その他（ア）では79の深鉢も出土している。

遺構の西側床面（イ）では80・81が出上している。80は略完形の台付き浅鉢である。口径は20.60cm、器高は10.55cmを測る。台部と浅鉢部がほぼ同じ高さである特色を持つ。平口縁で、あまり屈曲せずに、ほぼ垂直に立ち上がる。変形工字文で貼瘤と穿孔で施文される。穿孔は、浅鉢部は円形、台部は三角形もしくは逆三角形となる。内側が丁寧に磨かれ、煤や黒斑の跡もなく火を受けた形跡がない。81の浅鉢は、口縁部がやや内消して外反するもので、底部が張り出す。底面がただれた感じであり、蓋として転用されていた可能性がある。破片資料でも浅鉢は平口縁で、変形工字文を施文し小さな貼瘤を持つもの（82～85）がほとんどである。ただし、86は大きな貼瘤で巾が抉られており、他の破片と違う。また87は山形口縁で、体部の中位まで施文されている特徴がある。88の台部は埋土上位からの出土、89は浅鉢の脚部としたが不明である。

以上、出土した浅鉢は、86や87そして88が若干違う様相を示すが、大概は大洞A'式土器の古段階で、金附遺跡出土の第II群に相当する土器である。

深鉢は平口縁のもの（90・91）と山形口縁のもの（92～94）がある。90はやや長く外反するもので厚手である。91はあまり外反せずに短く立ち上がる。92は山形の突起を持つもので、口縁部のくびれがあまりなく、最大径は口縁部となる。93はくびれを持ち、やや大きく外反し変形工字文を施文する。最大径は体上部になる。94は大きく外傾し開く形の口縁部となる小型の鉢形土器である。94・95はやや時期が下る可能性がある。97・98は鉢形土器の底部資料である。

98は壺と思われる底部で、99は無文の小型鉢、100は土製品である。

石器は、剥片石器が、定形石器や剥片含めて74点、小型石核が5点、礫石器では磨石が2点、凹石が1点、台石のような大型の石1点、その他磨石の欠けたものなど6点出土した。総重量は2597.2gとなる。掲載は定形石器4点、不定形石器1点、磨石と凹石各1点である。

101は小型の石鐵で、黒曜石を石材としている。形態が他の石鐵と異なることから、持ち込まれた可能性が強い。102の石鐵は、最も多く出土している頁岩製で、形態が凸基有茎のものである。103は石鐵の未製品か。104は円形のスクレーパーで、原石面が認められる。105もスクレーパーのようであるが、剥離が微細であり不定形石器とした。このような石器が他に2点出土している。

磨石の106は、〔算盤型〕（⑥出土遺物の特色参照 以下同じ）をしており、同様の石器が遺構内外含めて11点出土しており、特に2～4号集石遺構周辺に多い。石器製作のための道具であろうか。また、107の門石は敲き痕も認められ、やはり石器製作に関わるものと思われる。

〔遺構の性格・時期〕 炉跡を中心にプランを立てているが、一括出土土器は、炉跡より若干ではあるが低い位置で検出されており、矛盾を感じている。出土土器でも、S I 14堅穴住居跡類似のものが炉跡の同一面で出土することから、炉跡は一括出土土器より新しい可能性もある。ここでは、一括出土土器の様相から、縄文時代晩期末から弥生時代初頭で、遺構の時期としてはS I 14堅穴住居跡より古く、縄文時代晩期末葉に属すると考えられるとするが、その住居跡が炉跡を敷設するかどうかには疑問が残る。

S I 16堅穴住居跡（第20・24図、写真図版15・26・30）

〔位置・検出状況〕 IV D 1・2 e・f グリッドに跨って位置する。検出面はVI層下面である。中世の堀跡や溝跡、縄文時代の集石遺構や炉跡が検出されている区域で、当初は S N Q 02 炉跡を中心としたプランを想定していたが得られず、もう一つ検出された焼土遺構を中心としたプランで北西側の職

が立ちあがったので住居跡とした。住居床面北側にある S N Q02 炉跡や集石遺構と埋設土器は切り離している。関連性については本文で述べる。

〔重複・隣接関係〕 床面と想定した北東側を 6 号堀跡に、西側床面を S D14 溝跡に切られる。また北側で S K I 03 堪穴住居状遺構と重複する。床面北側には S N Q02 炉跡があるが時期は新しいと判断した。同じように 2・3 号集石土坑も新しい遺構と想定した。

〔堆土・堆積状況〕 上位に黄褐色砂質シルトを載せ、主体は炭化物を含む暗褐色土となる。自然堆積であろう。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形と推定される。大きさは、推定で北一南が 6.05m、東一西が 5.98m を測る。

〔断面形・深さ〕 検出されたのは西壁のみで、壁はなだらかに立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、西側床はやや攢乱されている感がある。

〔炉跡〕 推定床面の中央部やや南寄りに焼土が検出された。炉跡とみられる。平面形は梢円形で、大きさは 45×37cm を測り、S I 14 堪穴住居跡と比較して小規模で、焼成も悪い。

〔柱穴〕 大小 11 個の柱穴状の土坑を検出した。断面実測した P 1 は口径 34cm、深さ 54cm となり、P 3 は、口径は大きいが浅い。他は小規模であるが、想定した範囲内を巡る。

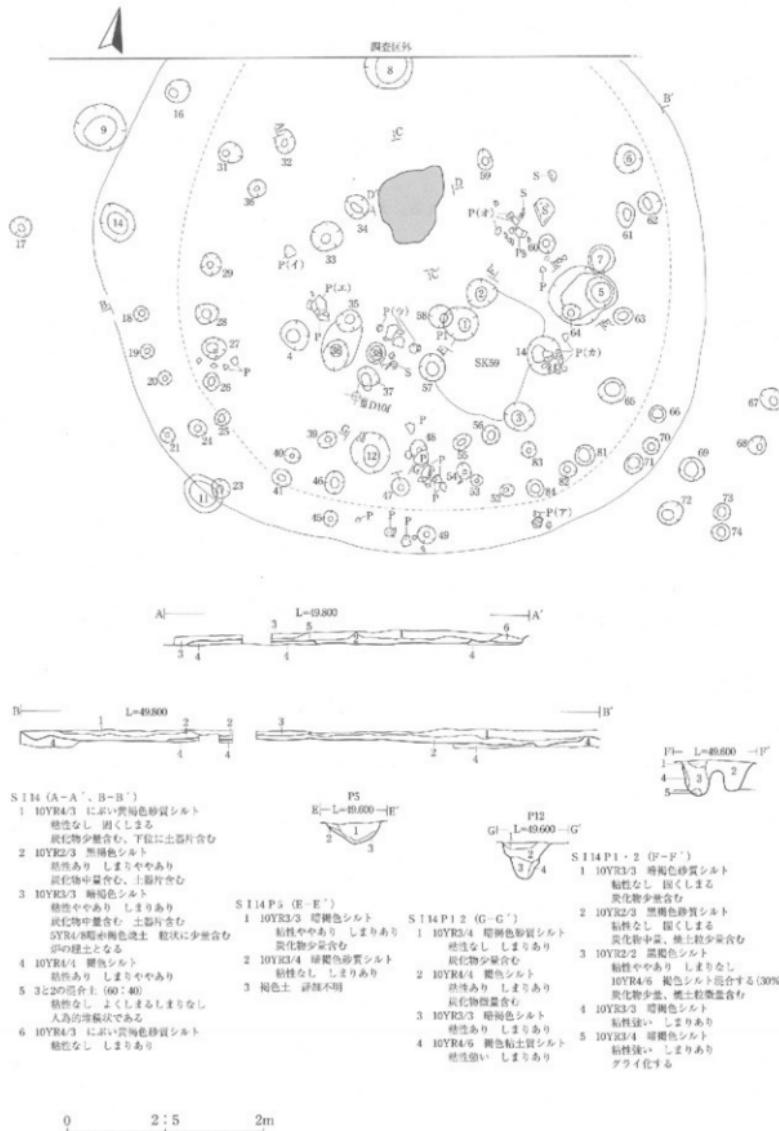
〔出土遺物〕 遺構の中央部を S D14 溝跡が、東側を 6 号堀跡が横切っているせいか、比較的土器の出土量が少ない。また、遺構と捉えるのが遅かったため遺構外としてグリッドで取り上げているものも多い。それでも大型深鉢の破片など 1701.6g の土器が出土している。掲載は 5 点。

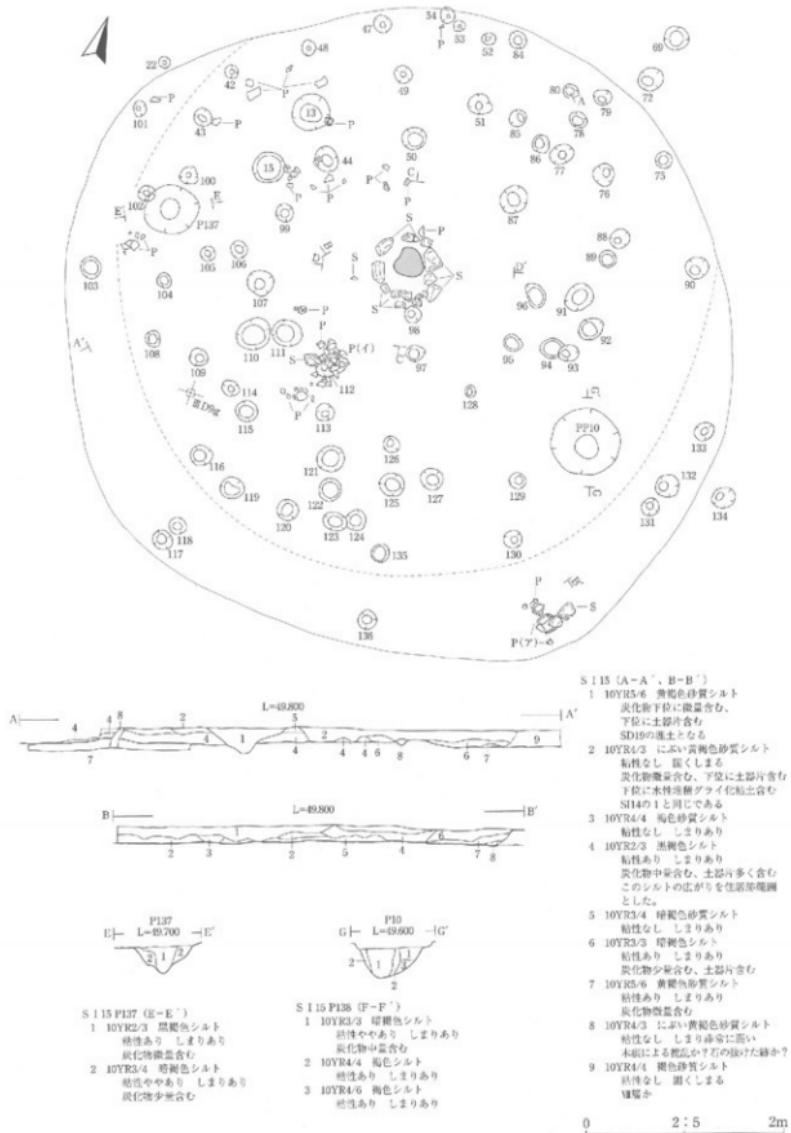
108 は小型浅鉢（碗）で穿孔される。109 と 110 は変形工字文の浅鉢で、どちらもやや大柄な貼瘤で、109 はやや幅が広くなる。112 は小型の破片で詳細は不明だが、弥生土器であろうか。これらの特色は S I 14 堪穴住居跡の出土土器の時期に当てはまりそうなものが多い。

石器は、土器出土量と比較して 1734.5g と多い。内訳は剥片石器 26 点、小型の石核 2 点、磨製石斧の未成品 2 点、磨石 4 点である。住居跡出土として登録したが、集石遺構関連のものかもしれない。掲載は 6 点である。

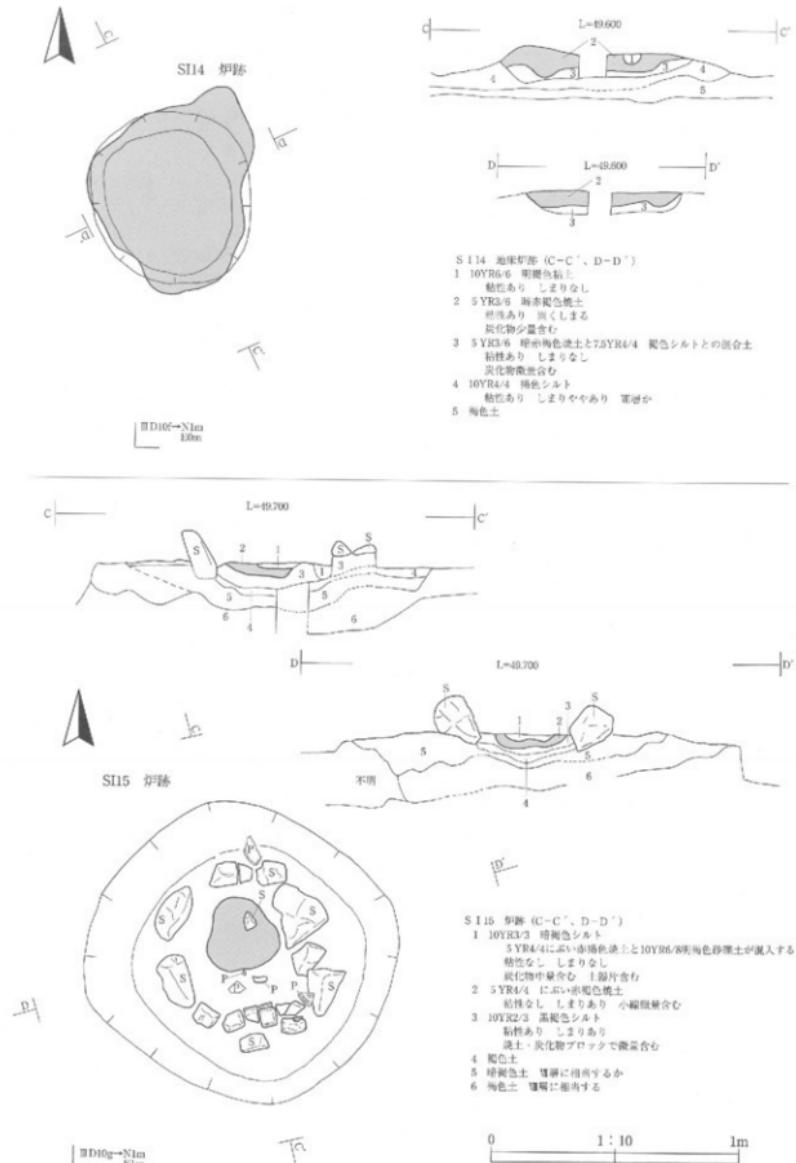
113 の石鏃は基部が破損しているが、細長く剥離も細かい。頁岩製である。114 の石錐はつまみ部が台形状で幅広く、出土した石錐の中で最も大型である。115 は不明であるが木の葉状の石鏃であろうか。小型尖頭器の可能性もある。磨石は 3 点。116 は算盤状の磨石で、他のものより大型で重い。117 の磨石は火を受けたであろうか。赤く変色している。118 も 117 と同様の磨石と思われる。

〔遺構の性格・時期〕 検出面などから判断すると、S I 15 堪穴住居跡と同時期と考えられる。しかし、出土遺物は S I 14 堪穴住居跡出土に類似することから、S I 14 堪穴住居跡の推定ラインが当遺構まで伸び、同一遺構となる可能性もある。その場合は、S I 14 堪穴住居跡は、S N Q02 炉跡や集石土坑の関連から、石器製作に関わる作業場的な遺構（平地住居）となるが、判別は難しい。





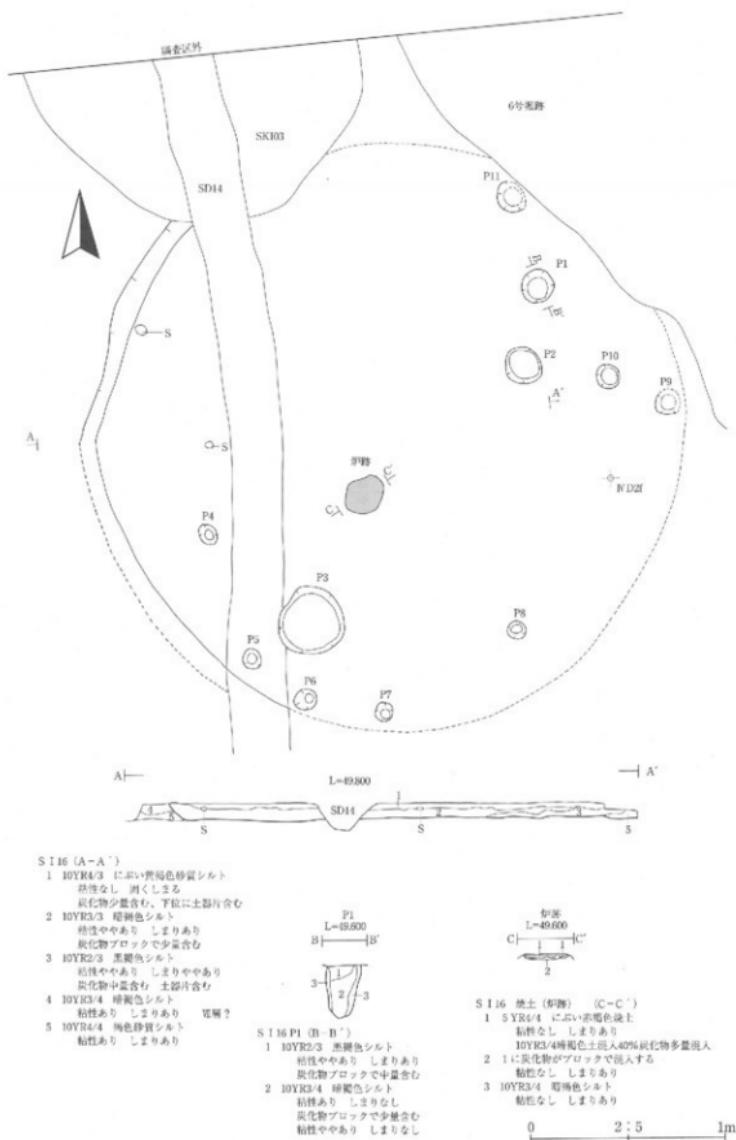
第18図 SI15竪穴住居跡



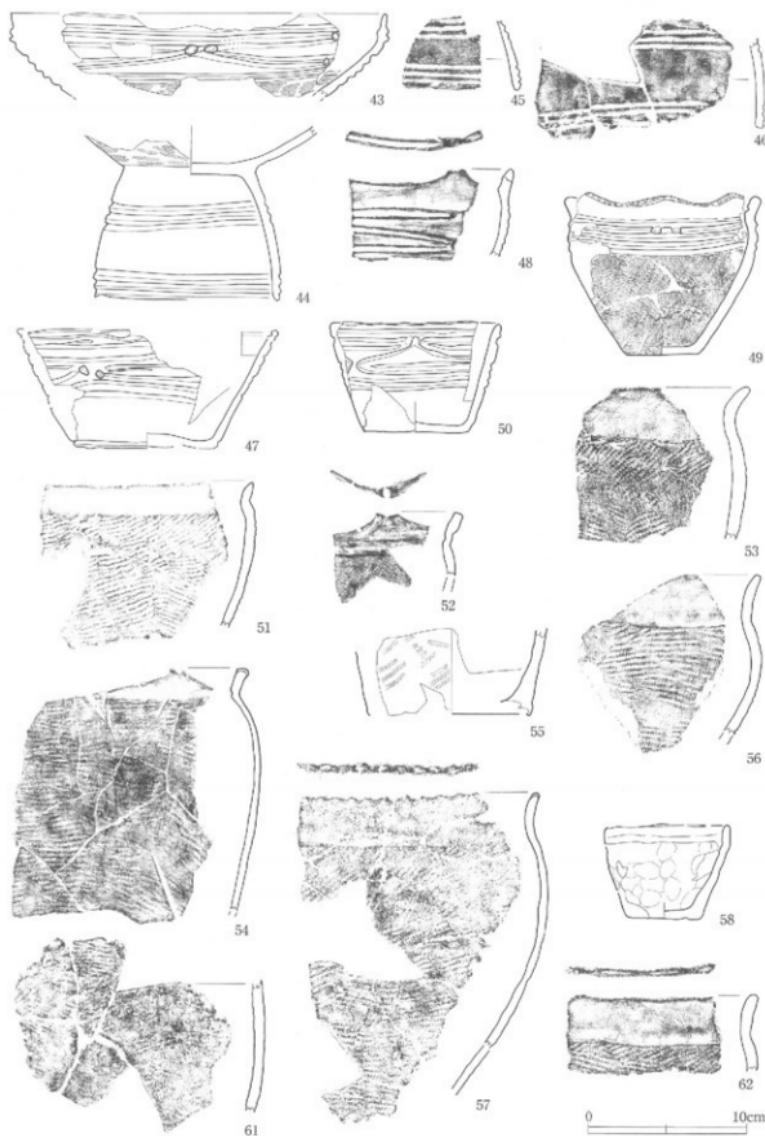
第19図 SI14・15炉跡

第5表 SI14・15堅穴住居跡柱穴観察表

P	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	備考	P	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	備考
1	37	14	16.0	SI14	69	26	17	26.1	SI14, SI15
2	32	16	24.2	SI14	70	18	9	19.3	SI14
3	32	17	2.2	SI14	71	23	13	12.2	SI14
4	32	15	33.7	SI14	72	26	14	12.5	SI14, SI15
5	34	21	28.0	SI14	73	18	14	7.8	PP344, SI14
6	31	11	20.4	SI14	74	20	11	8.4	PP345, SI14
7	30	24	20.7	SI14	75	18	14	17.3	SI15
8	49	35	32.0	SI14	76	24	11	15.1	SI15
9	52	35	0.2	SI14	77	26	10	17.0	SI15
10	41	24	16.4	SI15	78	20	14	11.8	SI15
11	42	32	30.8	SI14	79	20	10	11.2	SI15
12	43	23	12.9	SI14	80	16	10	11.6	SI15
13	39	22	35.0	SI15	81	23	15	16.3	SI14
14	39	18	27.7	SI14	82	19	8	10.0	SI14
15	34	26	14.6	SI15	83	18	7	16.5	SI14
16	26	10	20.3	SI14	84	19	11	13.3	SI14, SI15
17	22	8	23.0	SI14	85	19	11	10.0	SI15
18	11	7	16.2	SI14	86	19	12	17.7	SI15
19	11	7	9.8	SI14	87	30	15	23.5	SI15
20	16	6	8.1	SI14	88	21	9	8.9	SI15
21	16	6	17.6	SI14	89	19	14	9.4	SI15
22	13	5	10.5	SI15	90	25	12	16.0	SI15
23	20	10	13.5	SI14	91	31	14	23.8	SI15
24	18	8	8.4	SI14	92	27	18	16.7	SI15
25	17	9	20.0	SI14	93	21	10	17.7	SI15
26	19	10	22.4	SI14	94	25	18	14.6	SI15
27	25	13	23.8	SI14	95	21	15	18.6	SI15
28	25	11	19.4	SI14	96	27	20	11.0	SI15
29	23	7	24.6	SI14	97	20	12	16.8	SI15
30	19	6	13.3	SI14	98	18	8	17.8	SI15
31	25	7	15.7	SI14	99	20	11	17.5	SI15
32	25	9	22.4	SI14	100	20	6	24.1	SI15
33	33	12	15.4	SI14	101	16	6	10.5	SI15
34	26	14	24.3	SI14	102	18	7	16.0	SI15
35	27	11	24.1	SI14	103	22	16	10.9	SI15
36	32	13	21.7	SI14	104	17	11	13.4	SI15
37	25	18	22.0	SI14	105	16	7	10.8	SI15
38	22	15	7.3	SI14	106	20	10	14.0	SI15
39	20	7	11.1	SI14	107	27	12	23.6	SI15
40	12	5	22.5	SI14	108	17	11	12.5	SI15
41	21	8	23.7	SI14	109	19	10	13.2	SI15
42	15	7	14.2	SI15	110	36	25	11.9	SI15
43	19	11	11.5	SI15	111	30	19	39.1	SI15
44	27	13	17.9	SI15	112	27	12	14.2	SI15
45	17	7	6.9	SI14	113	20	10	20.2	SI15
46	25	11	13.4	SI14	114	19	8	8.4	SI15
47	19	7	15.1	SI14, SI15	115	24	16	17.6	SI15
48	20	7	18.3	SI14, SI15	116	23	14	11.9	SI15
49	19	7	12.6	SI14, SI15	117	21	12	15.9	SI15
50	25	17	24.2	SI15	118	18	11	18.2	SI15
51	27	9	21.3	SI15	119	28	17	9.8	SI15
52	16	6	9.0	SI14, SI15	120	22	14	15.2	SI15
53	14	6	18.2	SI14, SI15	121	28	20	21.2	SI15
54	18	6	22.8	SI14, SI15	122	24	18	17.1	SI15
55	21	12	7.4	SI14	123	26	16	7.9	SI15
56	20	11	17.1	SI14	124	22	14	6.4	SI15
57	26	16	18.7	SI14	125	26	17	12.7	SI15
58	25	11	—	SI14	126	15	9	13.2	SI15
59	23	10	20.7	SI14	127	24	14	8.6	SI15
60	20	9	21.2	SI14	128	13	9	13.3	SI15
61	28	9	26.3	SI14	129	17	9	8.6	SI15
62	24	14	23.2	SI14	130	19	9	14.9	SI15
63	21	12	11.6	SI14	131	19	9	12.4	SI15
64	20	8	33.9	SI14	132	26	11	26.5	SI15
65	39	18	23.8	SI14	133	21	10	10.5	SI15
66	19	12	12.5	SI14	134	23	9	11.3	SI15
67	25	11	10.7	SI14	135	20	15	15.0	SI15
68	19	7	13.4	PP342, SI14	136	20	12	22.3	SI15



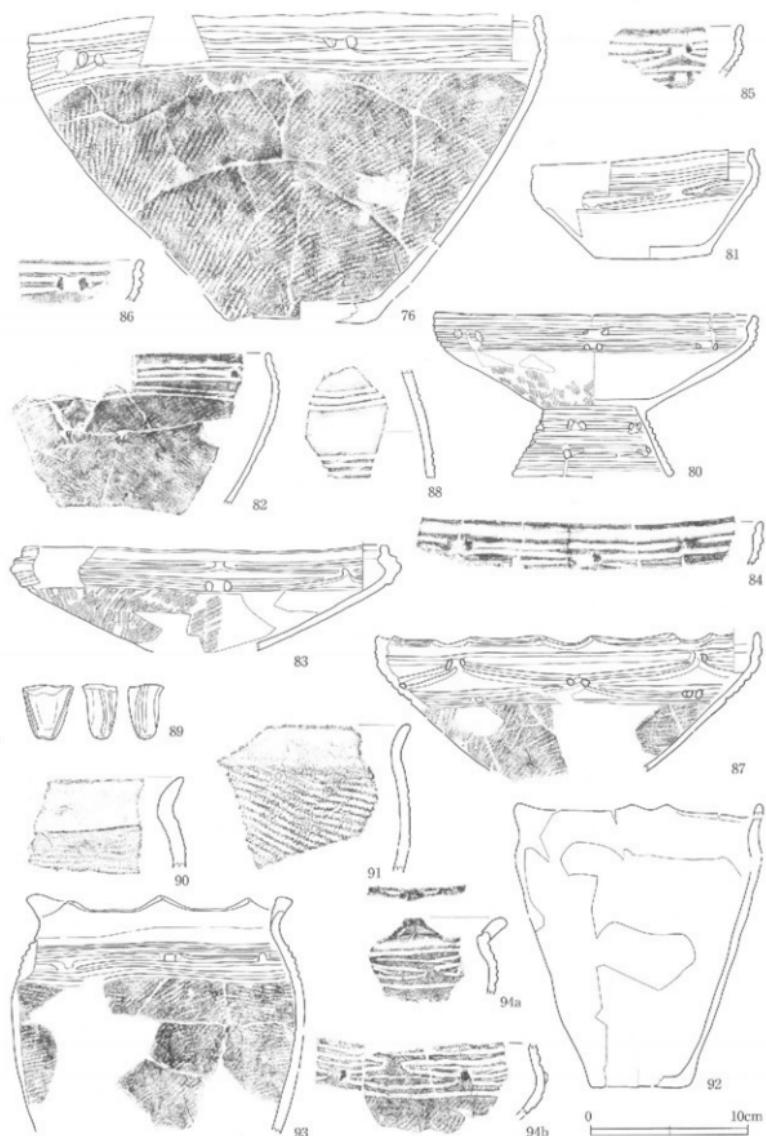
第20図 SI16竪穴住居跡



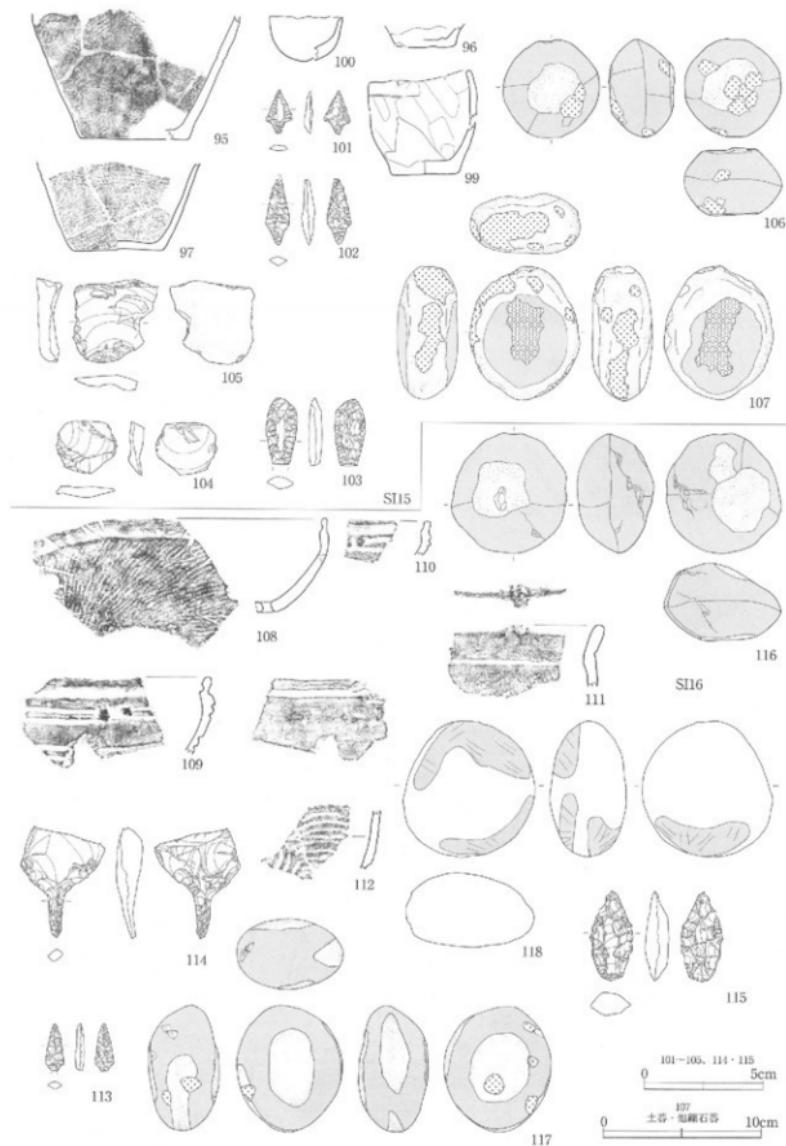
第21図 SI14竪穴住居跡出土遺物（1）



第22図 SI14 (2)・SI15竪穴住居跡出土遺物 (1)



第23図 SI15竪穴住居出土遺物（2）



第24図 SI15 (3)・SI16縦穴住居跡出土遺物

第6表遺物観察表(1) S-14出土①土器

番号	遺物名	出土層位	種類	部位	土色	地文	特徴	備考	
43	S14	II D10e・1	台付浅鉢	台無完形	細砂金雲母 白	L-R 赤	内面して短く裏面に上かる 平口縁となるか 变形工字文 太い 底盤 大柄を貼り組み	A' 新	
44	S14	床面(ア)	台付浅鉢	台盤	細砂金雲母	-	赤	3本の太いシッカリとした注脚 間隔をあけて2条 底部堅固的な 欠損3箇所	
45	S14	理土中	台付浅鉢	台盤	細砂	-	黄色	3本の平行底線 繋げて2条	
46	S14	理土上位	台付浅鉢	台盤	細砂金雲母	-	黒	深くしきりとした3本の平行底線 繋げて2条	
47	S14	理土中	浅鉢	輪窓形	小柄	無文 白	平口縁 ばら斜めに規則的に立ち上かる 变形工字文 貼籠 施 地文を作り上げ、下部に底盤	田D10e ブリッド出土土 理更	
48	S14	理土下位	浅鉢?	口縁部	細砂金雲母	-	茶	山形口縁 底部にへこみ 口唇部沈線 やや外反する 貼籠小さい	
49	S14	床面(ア) 一括	鉢	半完形	砂	L-R 黄色	平行口縁 口唇部剥離状況 内沈線 などから外反する 線 削除文字 ヨコナデ 变形工字文2条 太い工字縫に貼り籠は離 れ、貼籠曲線から押しつぶされる	外 黒斑 内保溝 底部た れ	
50	S14	床面+理土 下位	鉢	半完形	砂	無文	赤	一括ではあるが、外反する 变形工字文 貼籠つぶれる 沈 線や底盤 体部下部で変形 痕?	A' 新?
51	S14	理土③	鉢	口縁	細砂	L-R 黒	小さくなじみで底盤に貼り籠 やや内溝する。内そき風で圓くなる。 全体		
52	S14	床面+理土 下位	鉢?	口縁	細砂金雲母	L-R 黒	山形口縁 底部剥離 大きく外反する 口縫部文字 ヨコナデ 内沈線		
53	S14	床面(ア) 一括	深鉢	口縁部	細砂金雲母	L-R 黑	平行口縁 口唇部に摩耗痕状の剥み 口縫と体部間にナデ 内部 以降ミカキ		
54	S14	床面(ア) 一括	深鉢	口縫+底盤	細砂	L-R 茶	山形口縁 底部に剥離 穴開き沈線 外傾する 内沈線部上部が 底盤に接する	田D8e 出土土器片接合	
55	S14	床面(ア)	深鉢	底部	小砂多い	L-R 黄色	やや張りだす 底面剥離もしくは再調整 内底端なミカキ		
56	S14	床面(エ)	深鉢	口縫+底盤	小少	L-R 黄色	小さくなじみを持つ口縁 やや張く小さく外反する。口縫部と 体部の底ははっきりさせ、体上部が最大径となる。下部はひざむか	A' 新	
57	S14	床面(エ)	深鉢	口縫+底盤	多	L-R 白茶	小さくなじみを持つ口縁 やや小さく外反する。短い頭部		
58	S14	床面(エ) (手づな)	小形鉢	輪窓形	小砂多い	無文	赤黄色 平口縁 やや内溝する ハラ工具でのナデ	SI15理土出土土器と接合	
59	S14	床面(オ)	深鉢	体部	金雲母多 い	L-R 黒	背が張る西端となると内溝する。全般的に丸みを持ち 底部径 は小さい 背幅 もしくは背の可能性もある	外保溝	
60	S14	床面(カ) 理土下位	深鉢	体部上部	小砂石灰石 少	L-R 黒	内鍛なケズリ	外保 内底溝	
61	S14	床面(カ)	深鉢	体部下部	小砂+石 英	R-L 赤	内鍛なケズリ	SI15理土出土土器と接合	
62	S14	理土下位	深鉢	口縁部	金雲母石 英	L-R 茶	小さくなじみを持つ口縁 やや外反する 体上部が最大径 へ ラク工具で目印にナデ		
63	S14	理土下位	深鉢	口縫部欠 損	小砂	L-R 赤	いびつな形態 外唇くぼけただれる感じ 内底溝	SI15理土出土土器と接合	
64	S14	理土中	深鉢	底盤	無	L-R 赤	61の底盤か	SK62出土土器合	
65	S14	理土中	深鉢	底盤	小砂石灰石	L-R 茶	やや外反して立ちあがる 体部に最大径がある? 下部まで施文	SK62精査時に出土	

第6表遺物観察表(1) S-14(2)石器

番号	遺物名	出土層位	種類	部類	計測値			石質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
66	S14	床下	刮片	石核	3.21	1.3	0.6	1.6	赤色頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀 凸基有茎
67	S14	理土下位	刮片	石核	3.15	0.85	0.65	0.9	赤色頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀
68	S14	理土中	刮片	スクレーバー	1.8	1.6	0.55	1.1	赤色頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀
69	S14	理土下位	刮片	石核	8.65	3.95	2.00	80.4	頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀
70	S14	理土中	刮片	スクレーバー	2.95	1.7	0.6	3.4	頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀
71	S14	株出面	刮片	スクレーバー	4.8	3.9	1.4	20.3	頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀
72	S14	床面	刮片	不定形	5.2	4.6	1.2	20.8	頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀 分類A
73	S14	理土中	石核	石核	-	-	-	634.6	頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀 写真掲載
74	S14	理土中	礫	磨製石片	9.55	4.4	1.90	85.6	ホルンブルース 北上山地 古生代に堆積 中生代丘陵紀に変成
75	S14	床面	礫	砾石	-	-	-	1964.5	デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀 写真掲載 自然石?

第6表遺物観察表（2）S I 15出土①土器

番号	遺物名	出土層位	種類	部位	胎土	地文	色	特徴	備考
76	SII15 床面（ア）	浅鉢	完形	細金鑄	L-R	白	平口縁だがやうねるやややわらかな底面で内溝気味に立ちあがる。変形工文字やや大型の粘壁。腹下單なし。ヨリ	A 古?	
77	SII15 床面（ア）	台付浅鉢	台部	細砂	無文	赤	太い大柄な平行外縁。小さな貼縫と大きめ貼り縫直	書? A 古?	
78	SII15 床面（ア）	台付浅鉢	台部	細砂	無文	赤	下位に2本の平行線。中位無文体。上位に1本の熱易注跡	87と同一個体?	
79	SII15 床面（ア）	深鉢	底部	小穂多	L-R	白	おおとなしい。底みをもつて上がる。下位まで拡文 内縮なミガキ		
80	SII15 床面（イ）	台付浅鉢	完形	細金鑄	母少	L-R	黄色	平口縁。やや丸のある底面で内溝し外反。内沈縁 変形工文字	金剛3633・3635と同じ
81	SII15 床面（イ）	浅鉢	半完形	細金鑄	無文	黄色	平口縁。やや丸のある底面で内溝し外反。内沈縁 変形工文字 小さな貼縫 底面や腰に残す	金附1208と同じ	
82	SII15 壇土下位	浅鉢	口縁部	細砂	L-R	赤	うねりのある平口縁 内沈縁 変形工文字 大柄な貼り縫	A 古 外黒里 内煤墨	
83	SII15 床面	浅鉢	口縁部	細砂	L-R	赤茶	平口縁 丸みのある底面で内溝し直立 変形工文字 小さな貼縫	SH4 ほり土上位、6号掘削	
84	SII15 壇土下位	浅鉢	口縁部	小穂金鑄	一	赤	平口縁 丸みな立ち上がる。つぶされた貼縫	A 古?	
85	SII15 壇土中	浅鉢	口縁部	小穂金鑄	一	赤	平口縁 変形工文字 小さな貼り縫 中抜き	A 古	
86	SII15 壇土下位	浅鉢	口縁部	細砂金鑄	一	赤	平口縁 変形工文字 大柄な貼縫 中抜き	A 古?	
87	SII15 床面—壇土下位	浅鉢	底部枝抜	細砂	L-R	赤	2割一例の山形剥離 8単位 口唇部沈縫 あみのある底面で内溝し直立 変形工文字 小さな貼縫 腹が上で彎う	A 古?	
88	SII15 壇土上位	浅鉢	台部	細砂	無文	黒	3本の平行線 上下2条	A 新	
89	SII15 壇土下位	四脚付浅鉢?	裏部?	細砂	一	黒	内沈縁 脱のが立ちもらしない	A 古?	
90	SII15 床面	深鉢	口縁部	小穂金鑄	L-R	白	平口縁 大きく長く外する 無文体 ナデ		
91	SII15 壇土下位	深鉢	口縁部	小穂金鑄	L-R	赤	やや底打つ平縁		
92	SII15 壇土下位	深鉢	半完形	細砂石英	少	赤茶	山形剥離 地面をひこせせる 延び不明 不規則な底面に上りやや外反。口縁部無文体 最大径は口縁部と肩部同じくらい	写真掲載	
93	SII15 壇土上位	深鉢	縦縫×全体	細砂石英	一	赤茶	山形剥離 8単位 やや内凹し直立 変形工文字 山形突起下8	Ⅲ ⑩ 9.10年夏と緑合	
94	SII15 壇土上位	深鉢	口縁部	細砂 石英	L-R	黒	山形剥離 (突出) 大きく外傾く小さく外反 変形工文字 貼縫	A 新	
95	SII15 壇土上位	深鉢	底下部	細砂	L-R	黒	17.前時代は口縁落ち		
96	SII15 床面	小型鉢	底部	細砂	一	白	94の底部か		
97	SII15 壇土中	深鉢	底部	小穂多	L-R	白	小型 廉波		
98	SII15 壇土上位	壺?	底部	細砂	無文	白	直線的に斜めに立ち上がる 上げ底波	写真掲載	
99	SII15 壇土上位	小型鉢	底部	小穂石英	無文	白	ややうねりを持つ平口縁 やや外反し内削がれる でづくね	手づくね	
100	SII15 床面	土製鍋	ミニチコ	細砂	無文	白	小型		

第6表遺物観察表（2）S I 15②石器

番号	遺物名	出土層位	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
101	SII15 壇土上位	測片	石板	石板	1.8	1.1	0.35	0.4	黒曜岩 売地不明	平基有基
102	SII15 壇土上位	測片	石板	石板	(2.7)	1.0	0.55	1.1	珪質岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	凸基有基
103	SII15 P10埋土中	測片	石堆?	(2.85)	1.3	0.55	2.2	2.1	真岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	石堆?
104	SII15 壇土下位	測片	スクレーパー	石	3.5	3.5	1.1	10.3	めのう 奥羽山脈 新生代新第三紀	
105	SII15 壇土下位	測片	不走形	石	2.2	2.55	0.55	3.1	真岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	分類C
106	SII15 壇土上位	礫	磨石	石	6.1	6.0	4.0	215.5	ホルンフェルス 北上山地 古生代に堆積	分類A
107	SII15 壇土上位	礫	石板	石板	11.3	9.25	5.10	666.7	花崗岩 北上山地 中生代白堊紀	

第6表遺物観察表（3）S I 16出土①土器

番号	遺物名	出土層位	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
108	SII15 壇土下位	浅鉢	半完形	細金鑄	L-R	赤	平口縁 口縁部は短く垂直に上がる。伴頭との接合がはつきりしている。最大径は伴頭部と肩部同じくらい	蓋? 譜構外193の小型版		
109	SII16 壇土中	測片	口縁部	細砂	一	美	平口縁だがやうねる様子が見える 変形工文字 やや大型の貼縫			
110	SII16 壇土中	測片	口縁部	細金鑄	一	白	平口縁だがやうねる様子が見える 変形工文字 やや大型の貼縫	A 新		
111	SII16 壇土中	深鉢	口縁部	小穂多石	L-R	赤	ボタン状突起をもつ山形口縁 やや外反 体感との落差に沈縫			
112	SII16 壇土中	鉢形	体部	細砂	一	赤	平行線 波巻き沈縫 陣手	写生?		

第6表遺物観察表（3）S I 16②石器

番号	遺物名	出土層位	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
113	SII16 壇土中	片剝	石板	石板	(2.2)	0.9	0.45	0.7	珪質岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	凸基有基
114	SII16 壇土上位	測片	石板	石板	4.65	3.55	1.1	11.0	真岩 黒羽山脈 新生代新第三紀	
115	SII16 壇土下位	測片	石堆?	石堆?	3.8	1.8	1.05	5.7	真岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	尖端?
116	SII16 壇土下位	測片	礫	磨石	7.5	7.2	4.7	319.4	赤玉質岩 黒羽山脈 新生代新第三紀	分類A
117	SII16 床面	礫	磨石	磨石	7.80	6.70	4.40	305.5	ディサイト 黒羽山脈 新生代新第三紀	分類A
118	SII16 床面	礫	磨石	磨石	8.60	8.10	4.60	466.1	安山岩 黒羽山脈 新生代新第三紀	分類C

②堅穴住居状遺構

ここでは大型の土坑遺構をあえて、住居状の遺構として登録している。遺物は、後述する土坑とともに土器と石器に分けて掲載している。

S K I 01堅穴住居状遺構（第25図、写真図版16）

〔位置・検出状況〕 Ⅲ D 7・8・9 e・f に跨って位置する。検出面はⅦ層面である。

〔重複・隣接関係〕 中央部が中世の S K 62墓壙と S K 65土坑に切られる。遺構の北東部は調査区外に広がる。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色や黒褐色土が埋まる自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は橢円形状で、主軸方位は北東—南西となる。規模は、開口部径で長軸7m程度、短軸で5m程度と推定され大型である。

〔断面形・深さ〕 唯一検出された南西壁はなだらかに上がる。全体的に削平されたいたため壁の形状はつかめない。深さも浅い。

〔付属施設〕 略際に10個の柱穴状土坑を検出している。口径は25~40cm、深さは10cm程度である。

〔出土遺物〕 登録が最後になったために、出土遺物の登録はない。しかし、検出グリッドではVI層中で多くの土器や石器を出土させている。土器はⅢ D 8 eグリッドで420.4g、Ⅲ D 8 fグリッドで3989.6g出土している。大型の粗製土器の破片や磨滅した浅鉢などの出土が観察できた。石器はⅢ D 8 eグリッドでは、磨石や敲石のほか、めのうの小型石核、磨製石斧の未製品など208.2gが出土しており、Ⅲ D 8 fグリッドでは247の石鎌や254のスクレーパーなど306.6gの出土量となった。

〔時期〕 繩文時代晩期末葉から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K I 02堅穴住居状遺構（第26・30図、写真図版16・26・30）

〔位置・検出状況〕 IV D 2・3 f・g グリッドに跨って位置する。検出面はVI層下面である。6号堀跡の壁に現われたプランをもとに精査した。

〔重複・隣接関係〕 6号堀跡に遺構の中央部を切られる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は粘性の強い暗褐色土を主体とし、炭化物を多く含む特色があり人為的堆積の可能性もある。

〔平面形・大きさ〕 平面形は、不整な橢円形状を呈する。主軸方位はほぼ北東—南西となり、大きさは開口部径で長軸2.85m、短軸は推定2.40mを測る。

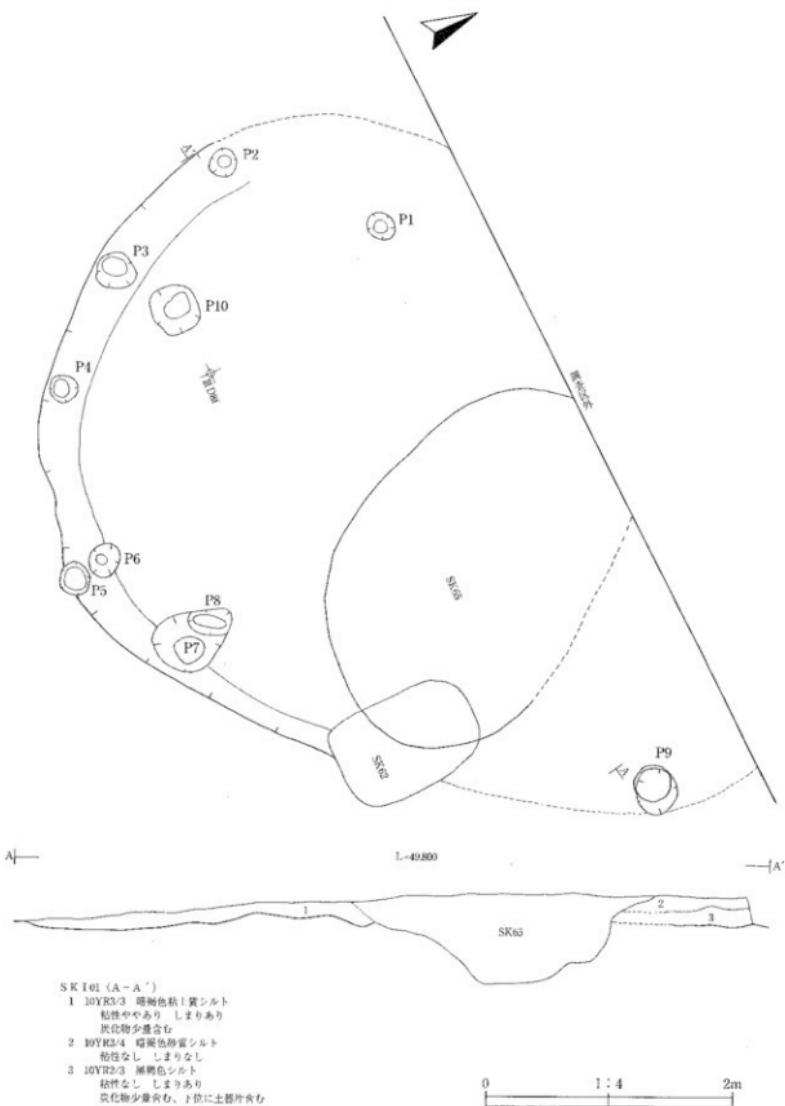
〔断面形・深さ〕 壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは北壁で22cmを測り、床面は平坦である。

〔付属施設〕 北東壁際に炭化物を伴う礫が検出された。また、周囲には同様に炭化物を伴う形で柱穴状土坑（A柱穴状土坑群3 P 201など）が検出されている。

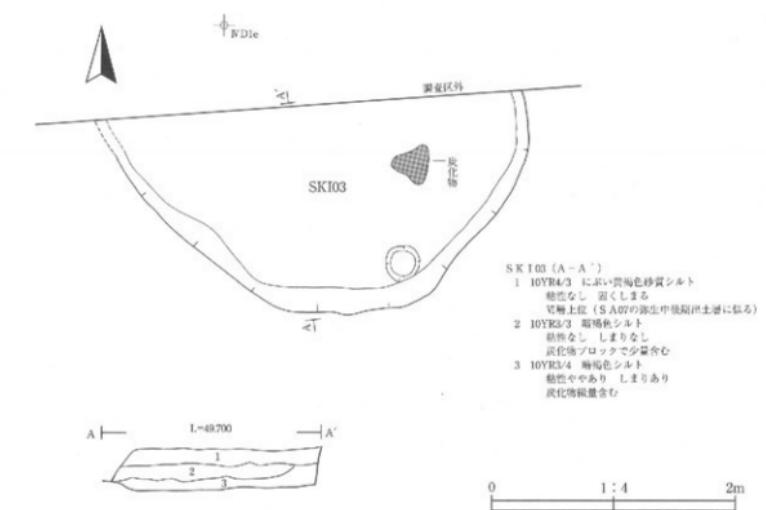
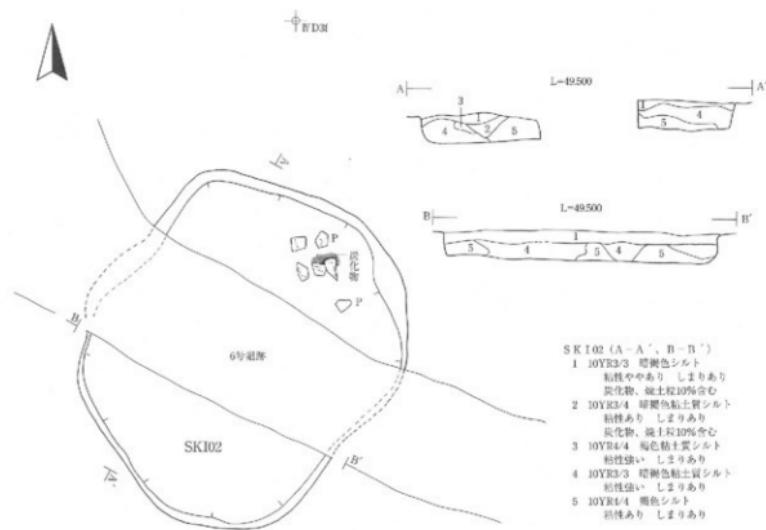
〔出土遺物〕 粗製土器を中心に440.5gの出土量となった。そのうち6点を掲載した。119は浅鉢で変形工字文と予測される。120は、やや長く延びる口縁の深鉢、121は沈線が巡る。122は深鉢の体部片で大柄であり、床面で出土している。壺資料は2点。123は繩文晩期末葉の特徴的なものであるが、124はやや時期が下り、弥生土器の可能性が高い。

石器は1112gの出土量となった。内訳は不定形石器1点、剥片7点、磨石2点と敲石1点である。掲載は2点で、140は〔算盤〕型の磨石でS I 15堅穴住居跡出土の106に類似するものである。141の敲石は、磨りを併用しており、S I 16堅穴住居跡の117に類似し、赤く変色している。

〔時期〕 繩文時代晩期末葉から弥生時代にかけての遺構と考えられる。



第25図 SKI01駁穴住居状造構



第26図 SKI02・03竪穴住居状遺構

SK 103堅穴住居状遺構（第26・30図、写真図版16・26・30）

〔位置・検出状況〕 III D 10 e・IV D 1 e グリッドに跨って位置する。検出面はVI層面で、断面観察からVI層上位となる。

〔重複・隣接関係〕 遺構の北側半分が調査区外にある。中世の S D 14溝跡に切られる。S N Q 02炉跡に南側で隣接し、S I 14堅穴住居跡は西側にある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に砂質の黄褐色シルトが載る。この層はVI層上位になる可能性をもつ。遺物は少ない。主体は暗褐色土である。

〔平面形・大きさ〕 半分が調査区外にあるために平面形は判別できないが、楕円形となると想定する。大きさは短軸で250cmぐらいか。

〔断面形・深さ〕 遺構の把握が遅かったために壁の形状は判別できなかった。深さも、南壁で20cmと浅い。

〔付属施設〕 遺構の南東部に小規模の炭化物の広がりを確認した。

〔出土遺物〕 廉減した土器片314.9gが出土した。石器はない。125と126は小型の土器で詳細は不明である。その他127の土製品が出土している。

〔遺構の性格・時期〕 壁上位にみえる砂質のシルトは、S I 14堅穴住居跡には確認されないもので、VI層の上位にあると考えられる。よってやや新しい弥生時代の遺構である可能性が考えられる。

③土坑

検出された土坑の内、中世と想定されるものを除いたものを取り上げる。時期は縄文時代中期末葉から弥生時代前葉までの可能性を示すものとなる。

SK 68土坑（第27・31図、写真図版17・26・31）

〔位置・検出状況〕 III D 9 f・g グリッドに位置する。検出面はVI層下位面で、S K 60・61墓壙の墓際に2つの遺構に跨って検出された。

〔重複・隣接関係〕 前述通り、中世墓壙に切られる。南側で風倒木状の大型土坑としたS K 69土坑、北側でS K 71土坑と隣接する。北西側に1号集石遺構が土坑を囲むように広がる。

〔埋土・堆積状況〕 上位に炭化物や焼土粒を含んだ黒褐色土がある。VI層に相当すると考える。下位には、遺物を含まない褐色～黄褐色土が埋まる。最下層には暗褐色土が確認できる。上位1・2が土坑の埋土で、3～5は掘りすぎなのかもしれない。

〔平面形・大きさ〕 平面形は、やや開丸の正方形を呈する。長軸はやや北北西～南南東に傾き、大きさは開口部径で長軸が166cm、短軸が138cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大24cmと深い。

〔出土遺物〕 埋土1・2から、やや多めの1500.3gの土器片が出土している。やや厚みのある粗製土器が中心で、土師器らしい破片もある。128・129は深体もしくは甌の口縁部である。129はS I 14堅穴住居跡出土土器などで見られる口縁部の下位をナデて境目を作り上げるような感じではない。130は無文の甌の口縁部で、土師器のような調整（ケズリ）が観察される。石器は10点（775.9g）が出土している。142は石鏃、143は北上山地産の頁岩を石材とした竪状石器、144の磨製石斧は折れた状況で出土したものを受け合した。143と144は埋土中層で出土したものとしているが、底面に近い位置での出土である。

〔遺構の性格・時期〕 1号集石遺構に関わる可能性が高く、底面？で出土した2点の石器は、埋め

られたものと判断したい。時期は、弥生時代初頭のものと考えられる。

S K69土坑（第27・30図、写真図版17・26・31）

〔位置・検出状況〕 III D 9 g グリッドに位置する。風倒木と考えたが、不明確ながら壁が確認できたことから土坑とした。同様の土坑に S K72がある。図版や写真図版では完掘の状況で示しており、土坑のプランは-----となっている。

〔重複・隣接関係〕 中世の墓壙（SK61）の床下にある。北側で S K68土坑と隣接する。

〔坪上・堆積状況〕 炭化物を含む黒～暗褐色土が主体となる。最下位にある褐色土もしくは暗褐色土をプランとした。最下層は固くしまる褐色シルトに黒褐色土などが混合し、攪乱されている。木痕などの影響があると考えられる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、長軸は北東一南西に傾く。大きさは開口部径で、長軸が226cm、短軸が推定で116cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は略逆台形状で、西壁がなだらかに立ち上がる。東壁ははっきりしない。深さは、西壁で推定48cmとなる。

〔出土遺物〕 墓土中から破片を中心に472.8gの土器が出土した。132は小型の鉢、131は口縁部が外反する深鉢であり、S K68土坑の129の特色と似る。石器は剥片3点と145の凹石が出土し、総重量は645.8gである。

〔遺構の性格・時期〕 遺構の性格としては、中世墓壙ができる前の風倒木痕であるかもしれない。ただし後述する S K71土坑の存在から、縄文時代晩期末葉から弥生時代の土坑の可能性もある。

S K70土坑（第27・31図、写真図版17・31）

〔位置・検出状況〕 III D 8 e・f グリッドに跨って位置する。検出面はVI層下面である。

〔重複・隣接関係〕 上位に中世の墓壙 S K62があり、若干壁が切られているような印象がある。西側で S K101堅穴住居状遺構と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 黄褐色の砂質シルトが主体となる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は略円形で、規模は開口部径で164×135cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は匣形形状で、深さは西壁で10cmと浅い。

〔出土遺物〕 墓土中から浅鉢片や磨滅した粗製土器片など、全部で132.7gの出土である。すべて小破片で掲載は無とした。石器は剥片3点と磨製石斧が出土した。総重量89.2gとなる。146の磨製石斧は S K68土坑出土と同じ砂岩を利用している。

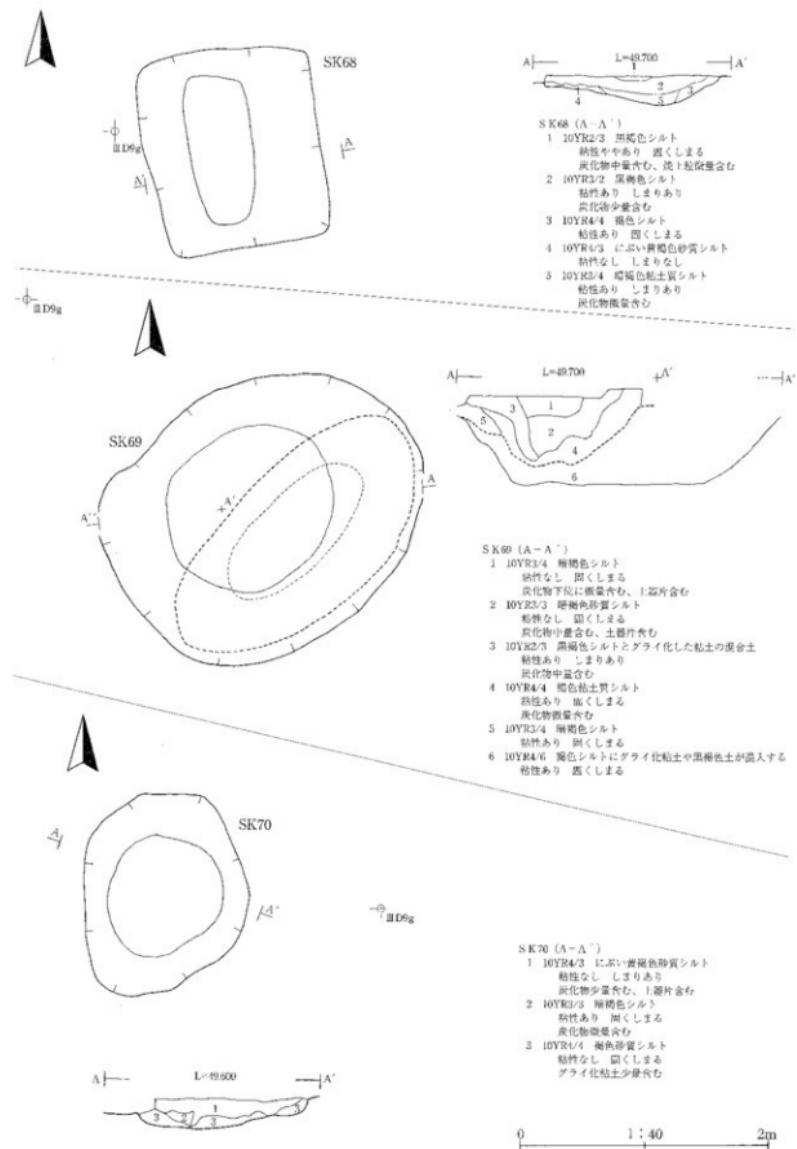
〔時期〕 時期は縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭期と考えられる。

S K71土坑（第28図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕 III D 8・9 f グリッドに跨って位置する。検出面はVI層下でVII層面に近い。1号集石遺構の精査中にプランを確定させた。集石遺構との関わりは不明である。

〔重複・隣接関係〕 1号集石遺構の北側に位置する。北側に S K70土坑、南側に S K68土坑がほぼ等間隔で位置する。

〔埋土・堆積状況〕 上位と中位に炭化物を含む黒～暗褐色土が埋まる。下位にグラウヒ化した粘土があり、全体的に自然堆積の様相を示す。



第27図 SK68~70土坑

〔平面形・大きさ〕 平面形は略円形で、規模は開口部径で147×116cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、底部がやや平坦になる逆台形状であるが、南壁が丸みを帯びて立ち上がる。深さは北壁で40cmを測り、隣接する土坑の中では深い。

〔出土遺物〕 土器・石器とともに出土はない。

〔遺構の性格・時期〕 上位の縁の状況から、2・3号集石土坑と同類の遺構である可能性が高いが判然としない。時期は縄文時代晩期末葉から弥生時代と考えられる。

S K 72土坑（第28・30・31図、写真図版18・26・30）

〔位置・検出状況〕 III D 10 g と IV D 1 g グリッドに跨って位置する。検出面はVI層下で、SK 69土坑同様に風倒木状であるが、壁の立ち上がりが確認され遺構としたものである。

〔重複・隣接関係〕 中世のS D 18溝跡が上位にあると推定する。同時期ではS I 15堅穴住居跡と北西側で隣接もしくは重複する。また北東側にはSK 77土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土の主体は、炭化物を含む黒褐色と褐色の混合土である。それらは遺物を混入させる。人為的堆積の可能性がある。下位はグライ化した褐色土で水の影響を受けている。壁際や最下層にしまりのない混合土があるのはSK 69土坑に似る。

〔平面形・大きさ〕 平面形は略椭円形状で、大きさは開口部径で、長軸240cm、短軸133cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、西・東壁が角度をもって立ち上がるビーカー状で、北南側はなだらかにあがる皿形状となる。深さは東壁で70cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土中から649.8gの土器が出土している。破片のみで掲載は2点のみとなった。133は深鉢か壺の底部、134は壺と思われる破片で変形工字文が施される。石器は9点3914.4gの出土である。内訳は剥片石器および剥片4点、石核2点、礫石器3点である。147は石錐で頁岩製、148は磨石で、149は敲き痕が観察される。

〔遺構の性格・時期〕 平面形が椭円形状であることなど、特色は後述するSK 76土坑に類似する。出土遺物は縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭のものであるが、時期は不明であり中世に関わる可能性もある。

S K 73土坑（第28・30図、写真図版18・26）

〔位置・検出状況〕 III D 9 f グリッドに位置する。検出面はIV層面である。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。西側に約3m離れて、SK 70土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は上位に黄褐色の砂質シルトが覆う自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は不整な円形で、規模は138×128cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、壁はなだらかに立ち上がる。深さは西壁比高で20cmを割り、全体的に浅い。

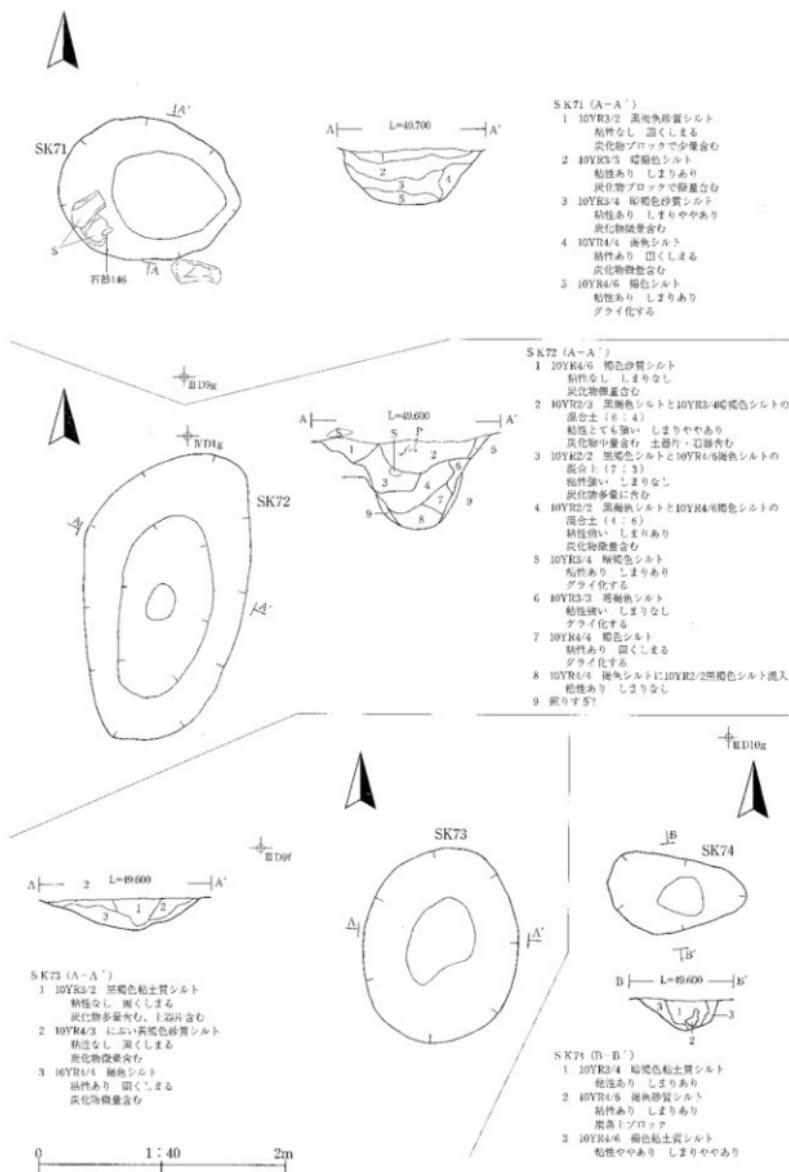
〔出土遺物〕 埋土中から820.7gの土器片が出土した。石器の出土はない。135は浅鉢の破片で磨滅している。136の深鉢の破片は、縄文時代晩期より時期はさかのばる印象を受ける。

〔時期〕 出土土器からは時期不明となるが、検出面などから縄文時代の遺構と考えられる。

S K 74土坑（第28図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕 III D 9 g グリッドに位置する。検出面はVI層下位である。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。西側でSK 69土坑と隣接する。



第28図 SK71~74土坑

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色シルト主体の自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、大きさは開口部径で112×60cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは北壁で17cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土中から鉢形土器の破片(23.8g)が出土した。石器は安山岩の磨りらしき疊石器が出土しているが掲載は無とした。

〔時期〕 不明であるが、縄文時代から弥生時代の可能性が高い。

S K 75土坑（第29図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕 IV D 2 g グリッドに位置する。検出面はVI層下位面である。

〔重複・隣接関係〕 南側半分が遺構外となる。周溝状であるS D 18溝跡の内部にあり、周囲には柱状土坑群（A柱穴状上坑群3のPP 105~109・339）が遺構を跨むようある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土断面に見える1は中世の柱穴状土坑群に見える特色と同じである。主体は2~4の暗褐色土であり、炭化物を多く含む特色はVI層に似る。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形と推定される。大きさは東西壁の開口部径で99cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは東壁で30cmを測る。

〔出土遺物〕 土器・石器とともに出土なし。

〔遺構の性格・時期〕 検出面はVI層下位としたが明瞭ではなく、遺物の出土もない。縄文時代の土坑に入れているが、S D 18溝跡に関連する可能性もある。

S K 76土坑（第29~31図、写真図版19・26・31）

〔位置・検出状況〕 III D 10 e グリッドに位置する。検出面はⅥ層面でS I 14堅穴住居跡床面と推定される面の下になる。

〔重複・隣接関係〕 S I 14堅穴住居跡と重複するのか隣接するのかは判別できなかった。東側にはS D 14溝跡を挟んで、S K I 03堅穴住居状遺構がある。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色や褐色シルトが主体となる。炭化物を含む暗褐色シルトはS K I 03堅穴住居状遺構埋土に類似する。グライ化粘土を含む特色はS K 72土坑に似る。南側にあるS I 14堅穴住居跡の柱穴を切っているように観察されたが不明瞭である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、大きさは開口部径で、長軸279cm、短軸127cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形はV字（逆三角形状）で、壁は角度をもって立ち上がる。下位に柱穴状土坑が並ぶ形は、6号堀跡の北側の形態に似る。

〔出土遺物〕 埋土中から磨滅した深鉢の体部片を中心に808gの土器が出土した。そのうち掲載は2点。137は浅鉢か鉢の口縁部で、突起を持つ山形口縁となる。138は深鉢か甕の底部である。

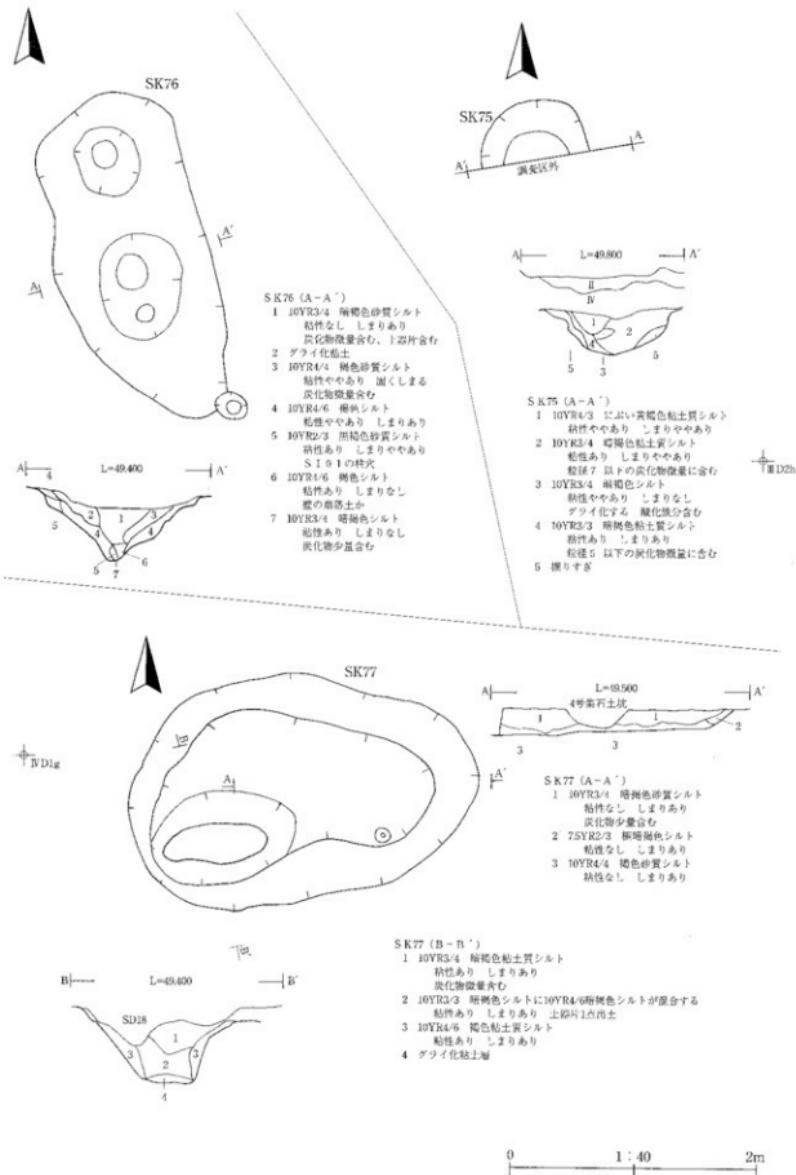
石器は剥片と151の磨石、152の凹石の3点で計1014.7gの出土である。

〔遺構の性格・時期〕 検出面から縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭であると考えられるが、6号堀跡と同類の、中世遺構の可能性もある。その場合はS K 72土坑と同類となると予測する。

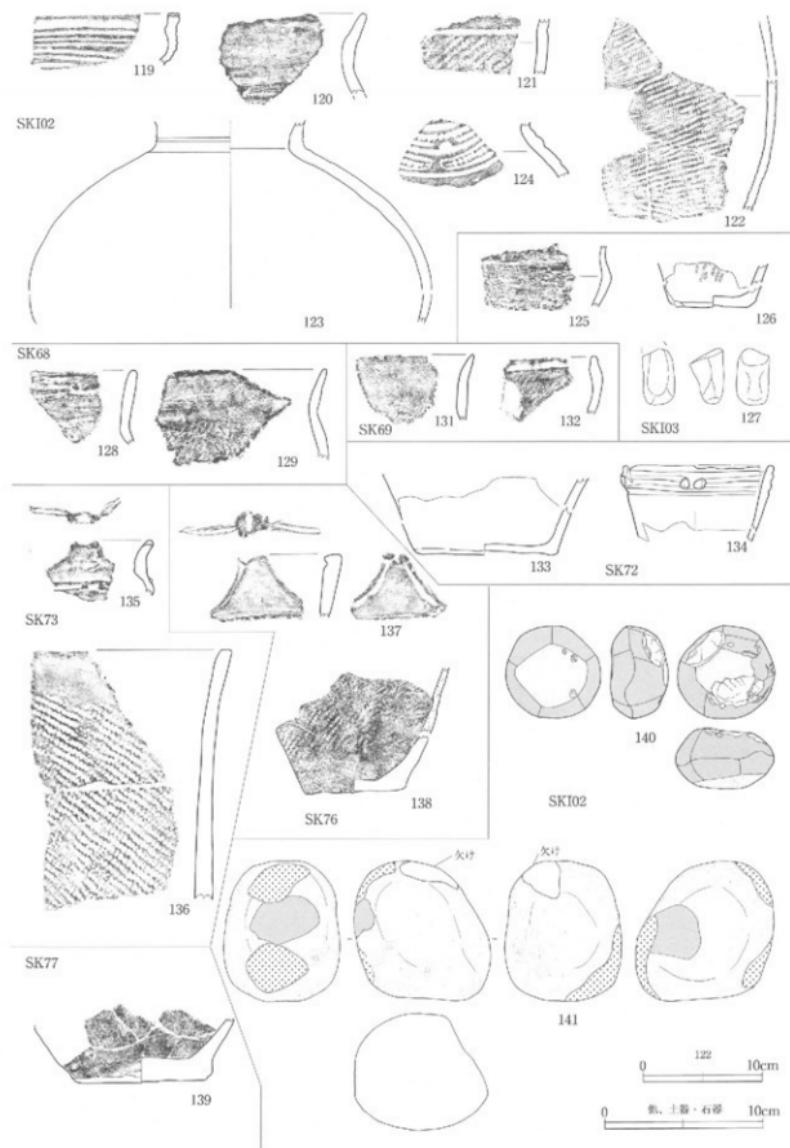
S K 77土坑（第29~31図、写真図版19・26・31）

〔位置・検出状況〕 IV D 1 f・g グリッドに跨って位置する。検出面はVI層下面である。当初はS I 16堅穴住居跡の南側にある住居状の遺構として精査した箇所であり、規模から土坑と変更した。

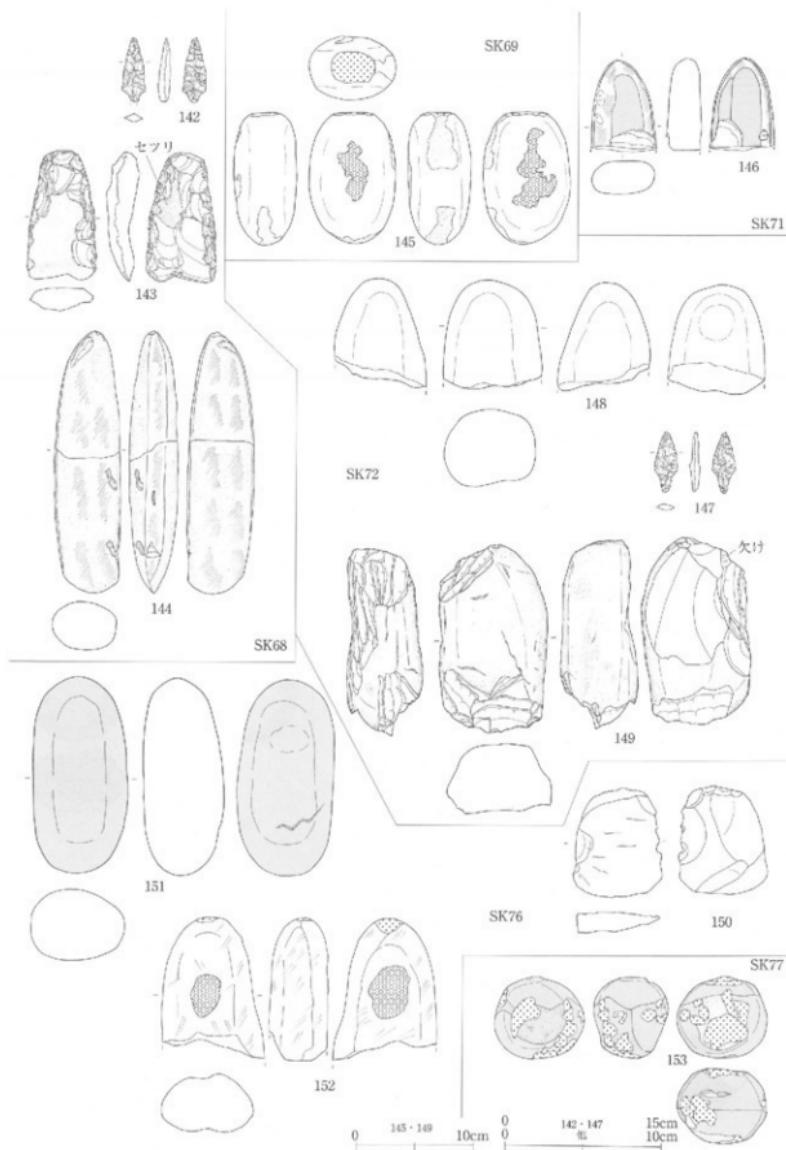
〔重複・隣接関係〕 溝跡（S D 14・18など）や縄文・弥生時代の堅穴住居跡・土坑（S I 16・3号



第29図 SK75~77土坑



第30図 SKI02～SK77出土遺物（1）



第31図 SK102～SK77出土遺物 (2)

第6表遺物観察表（4）SK102・03、SK68～77出土①土器

番号	遺物名	出土層位	呂理	部位	出土	地文	色	特徴	備考
119	SK102	埋土中	深鉢	口縁部	粗砂金雲母	赤	山形口縁 やや外反 口唇部沈線 内沈線 やや丸みを帯びて屈曲する 雄立式	A 吉	
120	SK102	埋土中	深鉢	口縁部	小峰多石	黄赤	山形口縁（山形突起） やや長く外反 体部横にナデ 口縁部やや凸起する		
121	SK102	埋土中	深鉢	体上部	小峰石英	白	沈線		
122	SK102	床面	深鉢	体部	小峰石英 L-R	黒	大型深鉢 地文交差？	団あり 織文後期？	
123	SK102	埋土中	壺	肩部下～肩部	小峰石英	黄色	体中央部最大径 口縁部下 沈線		
124	SK102	埋土中	壺	肩部	金雲母	茶	変形工字文 刺突穴 小型	弥生前期？	
125	SK103	埋土中	小型鉢	口縁部	小峰石英 L-R	茶	体上部に最大径 手づくね風		
126	SK103	埋土中	鉢	底部	砂	無文？	黄色 小型 直線的に斜めに立ち上がる 壁斑		
127	SK103	埋土下位	土器品	土偶手？	粗砂	一	褐色（2.4）cm 高さ（1.3.5）cm 厚さ（9.5）cm		
128	SK68	埋土中	深鉢	口縁部	小峰石英	黄赤	平口縁だがやや波打つ ほぼ規則的に外傾する 2本の平行沈線		
129	SK68	埋土中	深鉢	口縁部	粗砂金雲母	L-R	集 小波状口縁 口唇部へL字工具でナデ 口唇部先細る		
130	SK68	埋土中	壺？	口縁部	小峰多い	無文 褐色	厚みがあるが軽い感じ ケズリ風の調整	土器西風の痕跡だが詳細不明 等身	
131	SK69	埋土中	深鉢	口縁部	小峰多い L-R	赤黄	平口縁だが強烈な刻み あまり外傾せず立ちあがる		
132	SK69	埋土中	小鉢	口縁部	粗砂金雲母	L-R	赤茶	平口縁だが波打つ 口唇部へL字工具でナデ 短い口縁部 体部との連続性 内凹部	
133	SK72	埋土中	深鉢	底部	小峰石英	L-R	黄色	ほぼ直線的に斜めに立ち上がる 壁減薄しい	
134	SK72	埋土中	壺	口縁部	砂	無文	赤黄 变形工字文 貼瘤 内沈線無		
135	SK73	埋土中	浅鉢	口縁部	砂	一	山形口縁（突起） 变形工字文 貼瘤 中柱する 壁減		
136	SK73	埋土中	深鉢	口縁部	小峰石英	茶	平口縁 ほぼ直線的に斜めに立ける 口唇部平らに傾むる やや内そぞり	時代や上がる？	
137	SK76	埋土下位	浅鉢	口縁部	金雲母	一	黄色 山形口縁 大柄な突起 底部削み 口唇部沈線 内沈線	鉢かもしれない	
138	SK76	埋土上位	深鉢	底部	砂	L-R	底部再調整		
139	SK77	埋土下位	深鉢	底部	小峰	一	黄色 下位にくびれがある 接合だけ詳細不明 内外とも保蓄		

第6表遺物観察表（4）SK102・S K68～77②石器

番号	遺物名	出土層位	種類	器種	計測値			石質	備考	
					長さcm	幅cm	厚さcm			
140	SK602	VI層	礫	磨石	6.0	6.1	3.7	169.7	ホルンフェルス 北上山地 古生代に堆積 分類A	
141	SK602	埋土中		敲石	9.00	8.50	7.50	775.4	ディサイト 富羽山脈 新生代新第三紀	
142	S K68	埋土上位		剥片	(2.75) 0.95	0.55	1.0		頁岩 富羽山脈 新生代新第三紀	
143	S K68	埋土上位		剥片	7.95	4.10	1.40	69.5	頁岩 北上山地 古生代	
144	S K68	埋土上位	礫	磨製石斧	16.8	4.2	3.0	361.8	砂岩 北上山地 古生代	
145	S K69	埋土中	礫	刮石	11.30	7.45	5.30	605.2	安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
146	S K70	埋土中	礫	磨製石斧	5.8	4.0	2.1	85.0	砂岩 北上山地 古生代	
147	S K72	埋土中位		剥片	石頭	2.6	1.0	0.5	0.7	頁岩 富羽山脈 新生代新第三紀
148	S K72	埋土中	礫	磨石	6.70	6.20	4.80	343.1	安山岩 富羽山脈 新生代新第三紀	
149	S K72	埋土中	礫	敲石	16.00	6.50	5.70	1317.0	ホルンフェルス 北上山地 古生代に堆積 中生代白堊紀～完成	
150	S K76	埋土中	剥片	不定形	6.95	5.65	1.20	70.6	ホルンフェルス 北上山地 古生代に堆積 中生代白堊紀～完成	
151	S K76	埋土中	礫	磨石	12.60	6.00	4.50	604.7	安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
152	S K76	埋土中	礫	刮石	(9.20)	6.40	3.80	306.6	安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
153	S K77	埋土中	礫	磨石	5.2	5.8	4.7	216.5	頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	

集石土坑など)と重複もしくは隣接する。埋土上位には4号集石土坑がある。

〔埋上・堆積状況〕 炭化物を含む暗褐色土が主体となる。この暗褐色土は4号集石土坑に切られる。よって遺物の出土するVI層より古い層と考えられるがⅦ層であるかどうかは判別できない。

〔平面形・大きさ〕 平面形は不整な梢円形状を呈する。南西壁際に同じく梢円形状のくぼみがある。大きさは開口部径で、長軸288cm、短軸186cmを測る。南側のくぼみは116×75cmである。

〔断面形・深さ〕 断面形は、底面が平坦になり、東壁はなだらかに立ち上がる。深さは東壁で16cmと浅い。一方南側は断面形がビーカー状となる。深さは北壁で60cmとやや深い。

〔出土遺物〕 磨滅した浅鉢の小破片や粗製深鉢の体部片など375.9gの土器が出土した。掲載は139の深鉢の底部だけとなった。石器は、不定形石器2点と磨石2点の505.2gの出土である。153の磨石は、4号集石土坑のものに似ており、関連がある可能性が高い。

〔時期〕 3・4号集石土坑より古い、縄文時代晩期末葉の遺構と考えられるが、判然としない。

④炉跡

石囲炉は3基検出しているが、1基はS I 15堅穴住居跡に付属するものとして説明している。ここでは住居跡に関わりを持たないと判断した2基を取り上げる。

S N Q01炉跡（第32図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕 IV D 2 e グリッドに位置する。検出面はVI層下面である。6号堀跡の壁上位に住居状のプランが見え、精査中に検出した。住居跡の範囲は把握できず単独の遺構として登録した。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。ほぼ西方に4m離れてS N Q02炉跡がある。

〔規模〕 20cm大の礫が南西側と北東側に設置されている。南側には大型の、北側には小型の礫が埋め込まれていた痕跡が見える。それから推測すると、規模は74×82cmのやや梢円形に近い形状であったと思われる。

〔燃焼部〕 燃焼部は礫の内側に広範囲に広がり。規模は50×60cm程を測る。焼土は3~7cm程の厚さを持ち、よくしまる。燃焼部内に土器片などは出土していない。

〔掘り方〕 明確にできなかったが、ほぼ礫の範囲内を掘りこんでいたであろう。やや不整となっている。

〔出土遺物〕 炉の埋土中から出土した土器は、明確に把握できなかった。しかし、周囲は住居跡として登録した経緯がある。その埋土から浅鉢や深鉢の破片、また無文の壺形土器など439.1gの土器が出土している。

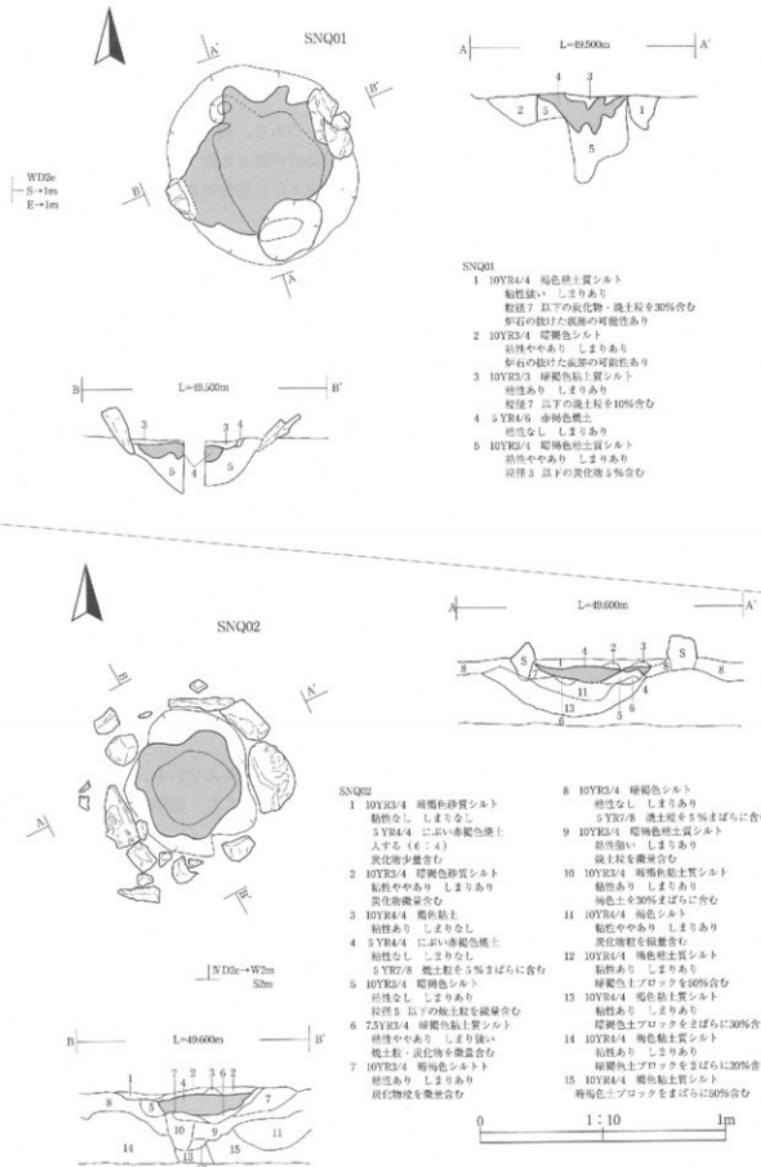
〔遺構の性格・時期〕 6号堀跡に搅乱されているため住居跡と認定できなかったが、検出状況から縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭期の遺構で、集石遺構と同時期と見ている。

S N Q02炉跡（第32・36図、写真図版20・26）

〔位置・検出状況〕 IV D 1 e グリッドに位置する。S I 16堅穴住居跡の推定範囲内にあり、SK I 03堅穴住居状遺構などとの関連も考えられたが、単独の遺構とした。検出面はVI層下面である。

〔重複・隣接関係〕 S I 16堅穴住居跡の上位の遺構と判断した。北側でSK I 03堅穴住居状遺構と隣接する。南側に3m離れて2号集石土坑が、東に4m離れてS N Q01炉跡がある。

〔規模〕 20×30cmの大型の丸礫や長さ30cmの板状の礫、15cm程度の角礫などで構築される。空白部があるが、本来は隙間なく設置されていたであろう。掘り方断面で観察すると、大型の礫は差し込ま



第32図 SNQ01・02戸跡

れている（埋められている）様相があるが、小形の礫は置かれている状況であった。規模は、崩落したであろう礫を除いて南一北78cm、東一西80cmを測り、ほぼ円形に近い形状となる。

〔燃焼部〕 磚の内側に、礫からやや離れた状況で広がる。平面形は不整な円形で、規模は44×42cmを測る。焼土の厚さは6～8cmほどあり焼成は良い。

〔掘り方〕 磚外側に炭化物を含む暗褐色土（埋土断面8）があり、掘り込まれているように観察できなかった。その下位面での掘り込みがみられる。S N Q01炉跡と比較すると、掘り方は小規模で開口部径は礫範囲に収まり、深さは24cm前後となる。燃焼部下位に粘性のある暗褐色土や褐色土があり、磚の外側を含めて人為的に埋め立て構築されたものであろうか。

〔出土遺物〕 S N Q01炉跡と同様に、S I 16堅穴住居跡出土土器として取り上げたものには、炉周囲で出土したものも含まれている。炉の周辺出土と明確に把握できた土器は49.2gとなる。揭露の154は炉の埋土中から出土した山形突起を持つ小型鉢の破片である。

〔遺構の性格・時期〕 形状や規模はS I 15堅穴住居跡の炉跡に似る。住居跡と重複する点も同じで、同時期と判断する。縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭期の遺構である。

⑤集石遺構と埋設土器

5基の集石遺構と2基の埋設土器の内、2～4号集石遺構は下位に掘り込みが観察できたことから集石土坑とする。また、2基の埋設土器は2号集石土坑で検出されたものであるために、2号集石土坑の中に組み入れた。これらの遺構は、住居跡に付属する可能性を示すものもあるが、単独の遺構として切り離して説明している。

1号集石遺構（第33・36図、写真図版20・31）

〔位置・検出状況〕 III D 8 f・gグリッドに跨って位置する。検出面はⅥ層面であるが、VI層精査時に礫を確認しており、土器も出土することから堅穴住居跡と考え精査した。しかし住居跡には至らず登録を抹消し、集石遺構と再登録した。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。集石に連絡すると考えられる遺構としてSK68土坑（図参照）が東側に隣接する。また、北側にはSK71土坑が隣接する。

〔集石範囲・規模〕 集石は北東側から北西にかけて弧を描くように並んでいる。南側の延長上には小さな礫が散在していたが、集石の範囲外もしくは破壊されたものとした。規模は北東隅から南西隅まで2.50mを測る。

〔礫の特色〕 中心となる礫のほとんどが同種の石材を利用している。大形の礫は、石質は安山岩である。大きさは20～30cm程度で、3号集石土坑の161と同様の形状を示す。

〔出土遺物〕 北側隅の大型の礫の脇に置かれたような状況で155の磨製石斧が出土した。156の磨石、157の敲石は、弧を描く集石の内側で出土している。

検出グリッドでは6点(566.2g)の欠けた磨石（磨製石斧？）の破片、磨製石斧の破損品や磨石、敲石なども出土している。

〔遺構の性格・時期〕 石器製作に関わる遺構と考えられる。石器出土の特色から磨製石斧を作製していた可能性がある。時期は検出面や周辺の遺物出土状況から弥生時代初頭と考えられる。

2号集石土坑（第34・35図、写真図版21・26）

〔位置・検出状況〕 IV D 1・2 e・fグリッドに跨って位置する。検出面はVI層下位面である。S

I 16堅穴住居跡の精査中に検出した。住居跡の施設とも考えられたが、切り離している。精査は2度行われ、2つのプランを同一遺構と捉え合せたものである。

〔重複・隣接関係〕 S I 16堅穴住居跡の上位の遺構と判断した。北側に3m離れてS N Q02炉跡がある。南側に3号集石土坑が隣接する。

〔集石範囲・規模〕 大きな砾（安山岩）から北西方向に0.8m延びる。砾の数は8個である。範囲は土坑内に収まる。

〔埋土・堆積状況〕 砾下に炭化物を多く含む黒褐色土がある。この層をS I 16堅穴住居跡の埋土と判断した。その下に暗褐色土があり、周囲はグライ化粘土で覆われる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は不整な椭円形状で、2つの土坑が重複している可能性を示す。大きさは、開口部径で長軸212cm、短軸164cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は底部が平坦な皿形状で、深さは東壁で17cm、西壁で10cmを測る。

〔出土遺物〕 集石の砾では、明確に石器となるものはない。遺構の東隅の検出面から1号埋設土器（158）が、南東隅の埋土下位から2号埋設土器（159）が出土した。他の遺物はない。

〔1号埋設土器〕（158） 検出は集石遺構と同一面である。断面で見ると、埋土1を掘り込んでいる。掘り方の平面形は椭円形で、深さは20cmを測る。土器の口径は15.5cm、器高が19.9cm、底径は欠損しているが7cm前後となろう。口縁部はなだらかに外反する。口唇部がやや先細り、ヘラ状工具で小波状風に撫でる。長い無文の頸部を持ちヨコなでされる。体上部で膨らみ最大径となる。地文はL-Rで磨り消されている箇所がある。外側に煤が付着する。

時期はS I 14堅穴住居跡同時期の弥生時代初頭期に近い様相を示すが定かではない。

〔2号埋設土器〕（159） 2度目の精査で検出した。検出面は埋土1を外した暗褐色上面である。1号埋設土器とは20cmの標高差がある。1号埋設土器と比較してつぶれた状況で出土している。土器の口径は17.5cm、器高が22.3cmで1号埋設土器より大きい。底部は欠損されず7.6cmを測る。口縁部は、やや外傾するが、1号よりは垂直である。口唇部が棒状工具で押し引きされ小波状となる。頸部下位に棒状工具でナデを施し、体部との境を作り出す。体部の膨らみがなく最大径は口縁部となる。地文は1号とは真逆のR-Lとなり、磨り消さない。煤が内面に付着するのも、1号埋設土器と逆になる特色がある。

時期はS I 15堅穴住居跡と同時期の繩文時代末葉期に近い様相を示すが定かではない。

〔遺構の性格・時期〕 集石からは石器製作に関わるものと判断できず、2つの埋設土器に関わる遺構と考えられる。1号埋設土器は、1~5号集石遺構と同時期で、2号埋設土器はやや古いS I 14・16堅穴住居跡と同時期と見る。時期は繩文時代晩期末葉から弥生時代初頭である。

3号集石土坑（第33・36図、写真図版22・31）

〔位置・検出状況〕 IV D 1 g グリッドに位置する。検出面はVI層下面である。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。北東側に2号集石土坑がある。

〔集石範囲・規模〕 2個の大型の砾が「こ」の字に並べられ、片方の砾の周囲には小型の砾が敷き詰められている。規模は土坑の開口部範囲に収まる。

〔埋土・堆積状況〕 砾の下には炭化物を多く含む暗褐色土が埋まる。人為的堆積か。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形で、規模は東一西の開口部径で142cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは西壁で15cmを測る。

〔出土遺物〕 集石中央部にある161は台石であろうか。傍らにある162は砥石とみられる。163の肩

石はS I 16堅穴住居跡に関わるものかもしれない。上坑内には遺物は出土しなかった。

〔遺構の性格・時期〕 集石は石器製作に関わるものと考えられる。工程の中で磨りを中心に行われた場所なのかもしれない。時期は検出面から縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭である。

4号集石土坑（第34・36・37図、写真図版22・32）

〔位置・検出状況〕 IV D 1 g グリッドに位置する。検出面はVI層下面である。2・3号集石土坑検出面とほぼ同じ標高で検出している。

〔重複・隣接関係〕 SK77上坑の上位にある。北に3m離れて3号集石土坑が、北西に3.6m離れて5号集石造構がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色シルトで、人為的堆積の可能性が大きい。

〔平面形・大きさ〕 平面形は梯円形で、規模は開口部径で48×32cmである。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは東壁で16cmである。

〔出土遺物〕 石器8点がまとまって検出された。北側163を頂点に三角形状に並べられている。内訳は磨石6点、不定形石器1点、不明1点である。163は圓形の磨石で、縁辺が摩耗しており、断面形が〔算盤〕形を呈す。石材は頁岩である。同じような形態に166がある。167と169は小型のもので、全体的に磨られており、断面形は同じく〔算盤〕型となる。169には敲き痕が認められ、兼用している例である。168も下部が欠損しており、同じように敲いたものであろうか。165は全体的に磨られ、特に上部と下部が摩耗して、平坦になっている。敲いた末に磨っている様相が見え、意図的に形を作り出したものであろうか。同じように164も上部が敲かれている。また2箇所の凹みも確認できる。166は不定形石器である。縁辺に微細な剥離が認められる。170は、168同様の磨石様であるが、周りが剥離され石核として利用されたものであろうか、もしくは多面体石器の可能性もあるが不明である。171は同一検出面で近隣から出土した磨製石斧である。製作途中である可能性があり、遺構に関連が高いとみている。

〔遺構の性格・時期〕 石器は埋められた可能性が高く、埋納的遺構（デボ）と考えられる。磨石が多く、統一された形態を示す。それらには敲き痕や凹痕が観察でき、近隣からは磨製石斧の破損品が出土している。磨製石斧を作る道具を埋めたものであろうか。時期は検出面から縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭である。

5号集石遺構（第33・37図、写真図版20・32）

〔位置・検出状況〕 III D 10 f グリッドに位置する。S I 15堅穴住居跡の床面精査中に検出したものである。疊上の標高はS I 15堅穴住居跡の炉跡よりも若干低い。

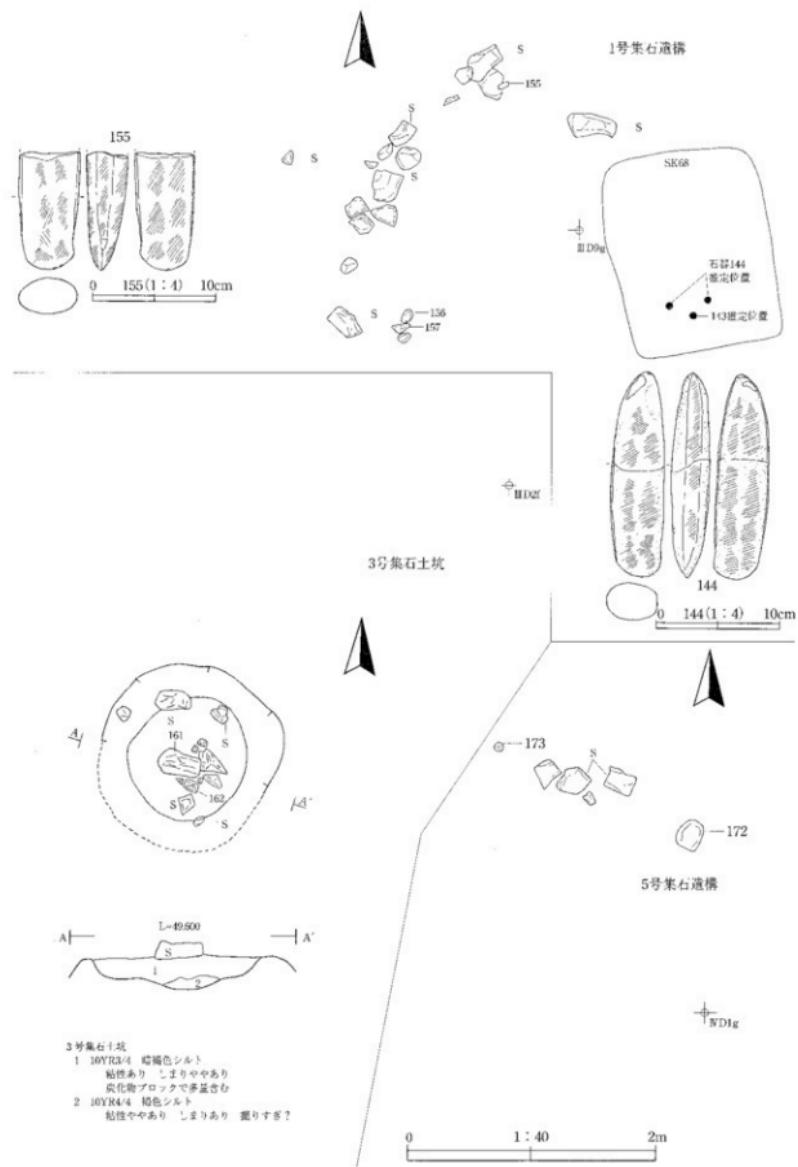
〔重複・隣接関係〕 S I 15堅穴住居跡の上位にある遺構と判断した。西側でS I 15堅穴住居跡の炉跡と隣接する。東側には3号集石土坑がある。

〔集石範囲・規模〕 ほぼ西から東に1列に並ぶ。規模は西端から東端まで1.45mを測る。

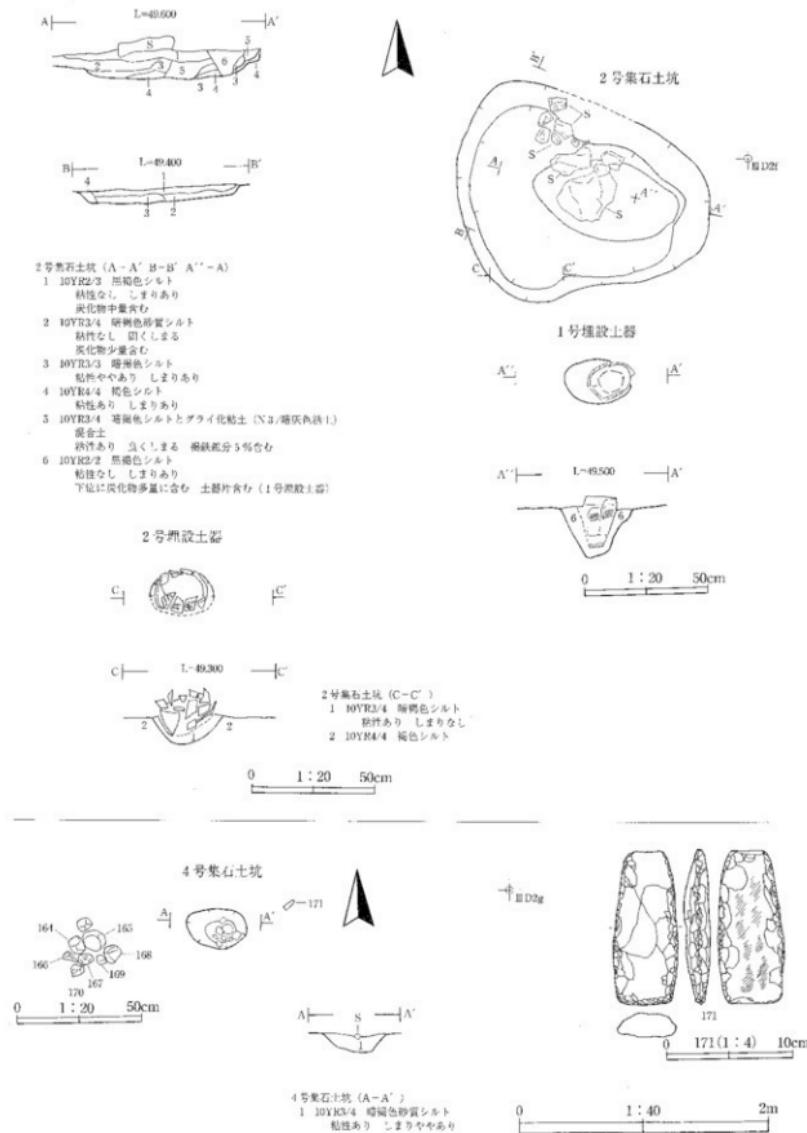
〔疊の特色〕 疊は大小6個検出している。中心となる4個は、1～3の集石遺構と同じ安山岩を利用している。

〔出土遺物〕 東隅で検出された172は磨石で安定しており、台石としての利用が考えられる。西隅にある173は凹石で4面がくぼみ、炭化物が付着しており、火熱を受けている。

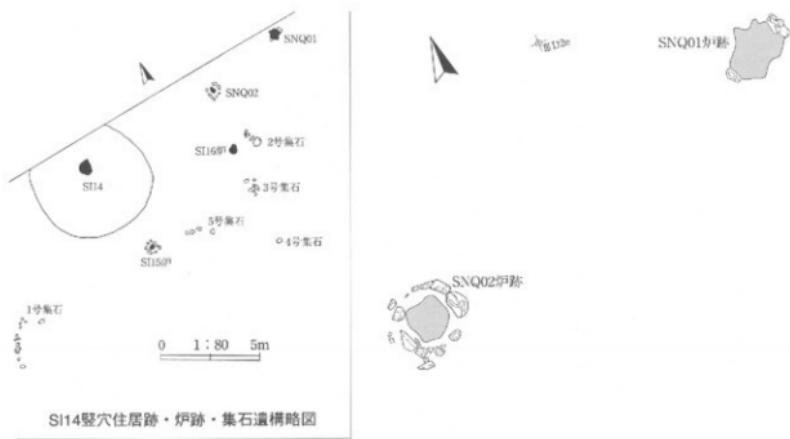
〔遺構の性格・時期〕 石器製作に関わるものであるかは判別できない。S I 15堅穴住居跡の床面施設とも考えられる。時期は縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭である。



第33図 1・5号集石造構、3号集石土坑



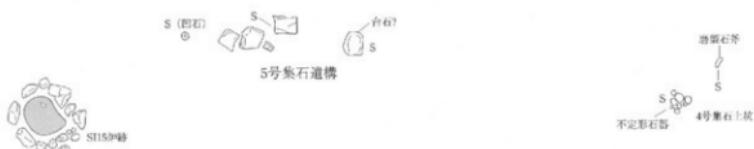
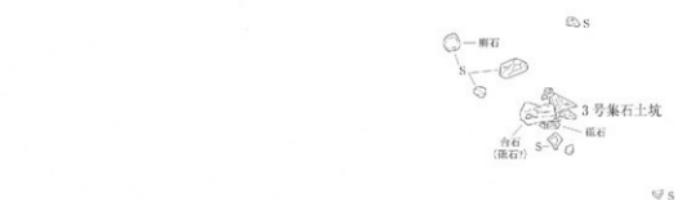
第34図 2・4号集石土坑、埋設土器1・2



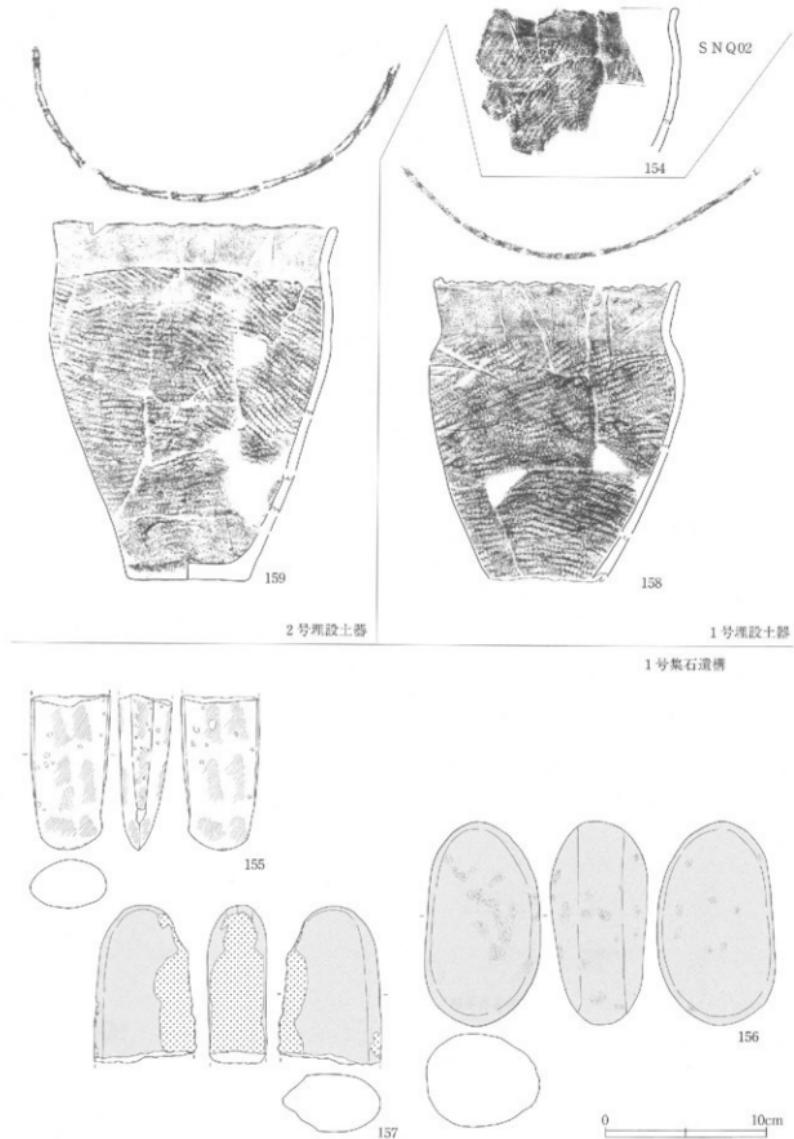
SI14 竪穴住居跡・炉跡・集石遺構略図



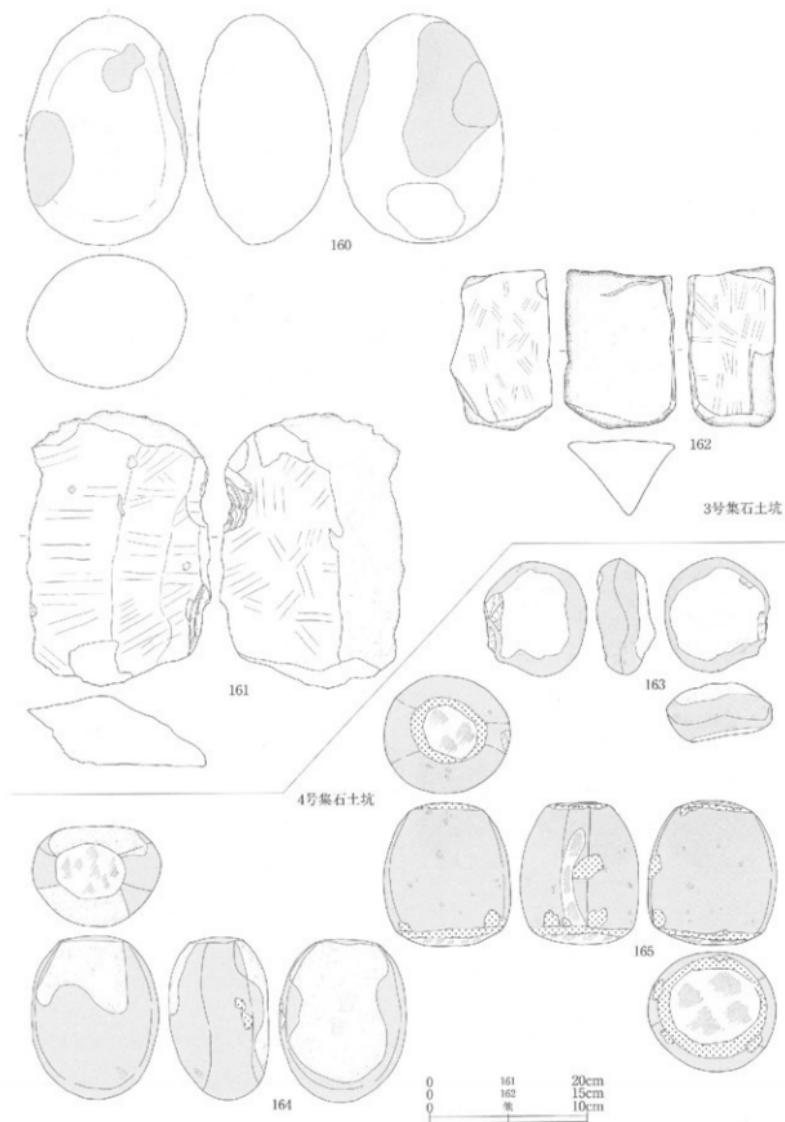
SI16P跡



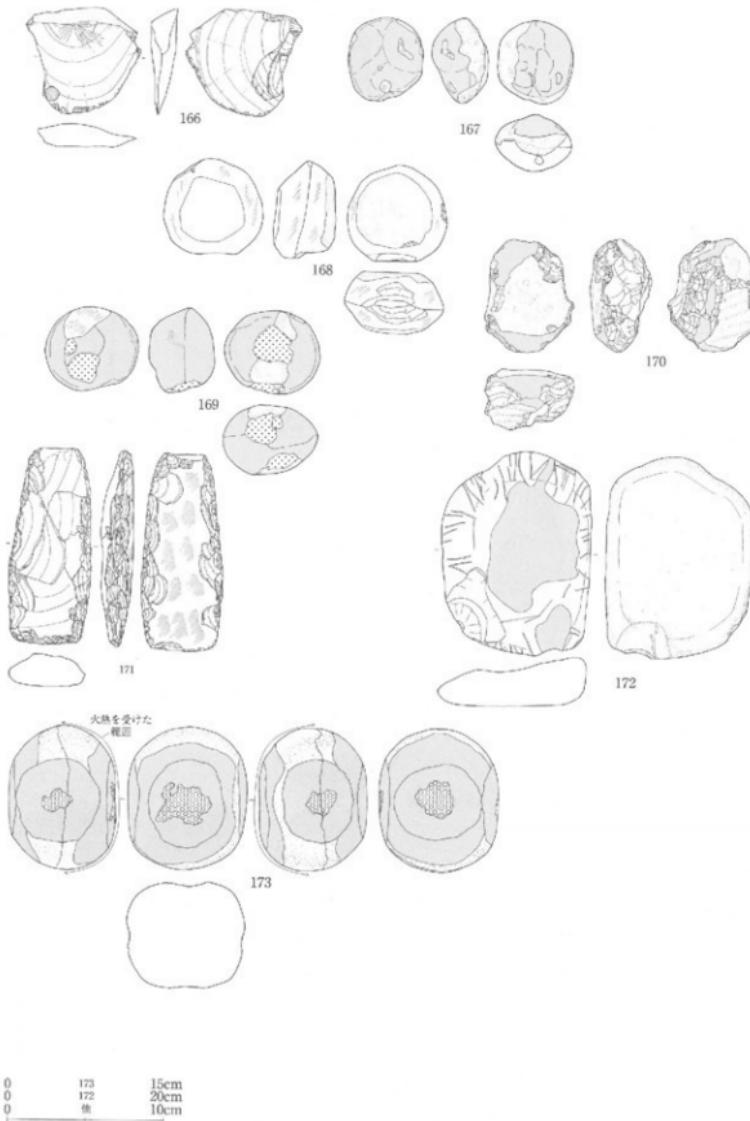
第35図 炉跡・集石遺構



第36図 SNQ02炉跡、集石遺構出土遺物（1）



第37図 集石遺構出土遺物 (2)



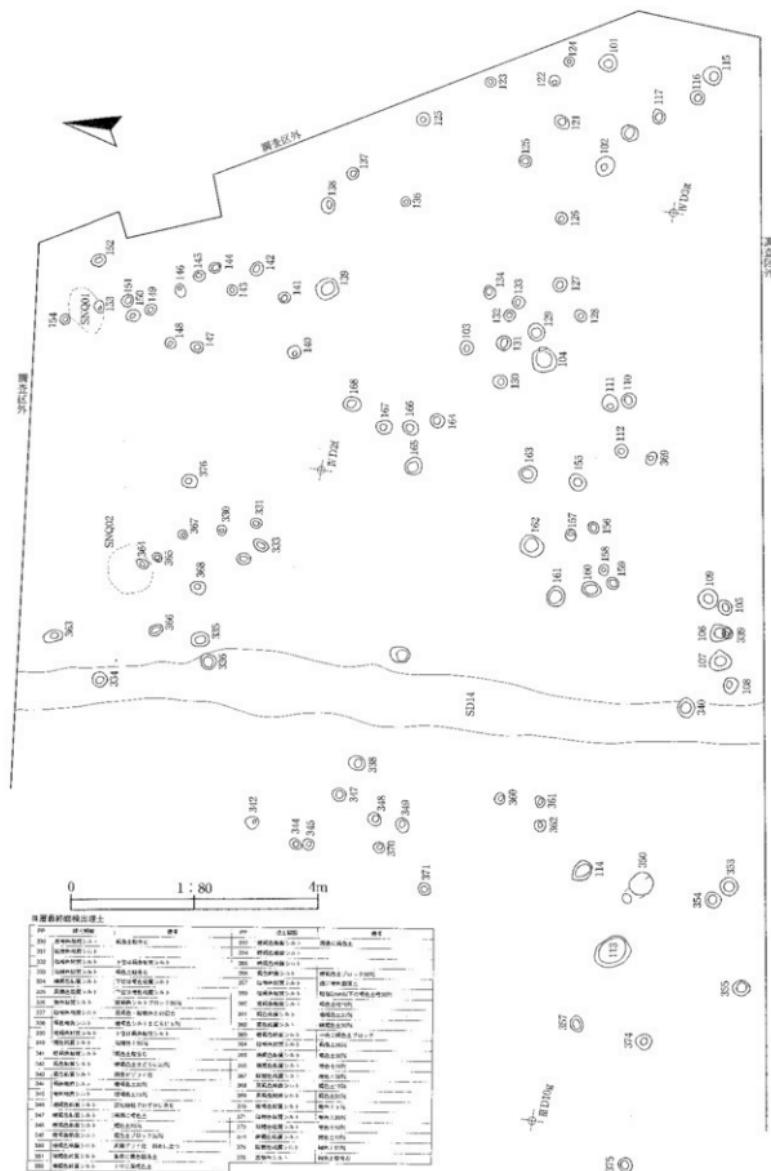
第38図 集石遺構出土遺物 (3)

第6表遺物観察表（5）炉跡、集石遺構、その他①土器

番号	出土地点	出土層位	器種	部位	胎土	地文	色	特徴	備考
154	SNG 02	炉埋土中	鉢	口縁部	小標石英	L-R	黒	山形突起 短く外傾する 烧けただれる	石原伊の埋土中
158	1号墳 段上部	突出面	深鉢	完形	織	L-R	黒	小さなうねりを持つ小波状口縁 などらかに外傾しやや外張する 最大径は柱上部にある 焼品が欠損する	
159	2号墳 段上部	突出面	深鉢	完形	織	L-R	黒	小さなうねりを持つ小波状口縁 などらかに外傾する 最大径は 口縁部にある 底部欠損しない	

第6表遺物観察表（5）集石遺構、その他②石器

番号	出土地点	出土層位	種類	谷理	計測値				石質	備考
					長さcm	幅cm	厚さcm	重量g		
155	1号集石	突出面	礎	磨製石斧	(9.6)	4.8	3.00	250.0	閃緑岩	北上山地 中生代白堊紀
156	1号集石	突出面	礎	磨石	12.8	7.2	5.8	821.4	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
157	1号集石	突出面	礎	敲石	9.9	6.3	3.60	373.8	閃緑岩	北上山地 中生代白堊紀
160	3号集石	突出面	礎	磨石	14.45	10.00	8.40	3699.0	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
161	3号集石	突出面	礎	台石?	35.00	22.70	8.70	10000	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
162	3号集石	突出面	礎	敲石?	13.40	9.50	6.30	942.5	ディサイト	奥羽山脈 新生代新第三紀 分類D
163	4号集石	突出面	礎	磨石	7.3	6.5	3.3	208.3	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀 分類D
164	4号集石	突出面	礎	凹石	10.3	8.0	6.3	774.9	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
165	4号集石	突出面	礎	磨石	9.0	7.9	7.5	866.3	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀 分類B
166	4号集石	突出面	剥片	不定形	6.8	7.3	1.6	76.8	頁岩	北上山地 古生代 分類A
167	4号集石	突出面	礎	磨石	5.3	4.8	3.6	101.7	ディサイト	奥羽山脈 新生代新第三紀 分類A
168	4号集石	突出面	礎	磨石	6.1	6.3	3.9	209.3	めのう	奥羽山脈 新生代新第三紀 分類A
169	4号集石	突出面	礎	磨石	5.3	6.0	4.1	215.1	蛇紋岩	北上山地 平池崎山周辺 古生代 分類A オルドビス紀
170	4号集石	突出面	礎	石核	—	—	—	183.2	めのう	奥羽山脈 新生代新第三紀 写真撮載
171	4号集石	突出面	礎	磨製石斧	12.5	5.2	2.0	196.8	砂岩	北上山地 古生代
172	5号集石	突出面	礎	磨石	25.90	16.30	5.80	4800	ディサイト	奥羽山脈 新生代新第三紀
173	5号集石	突出面	礎	凹石	12.25	10.30	9.15	1773.6	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
174	P P 101	埋土下位	礎	敲石	8.2	10.1	6.5	720.5	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀
175	P P 201	埋土中	礎	磨製石斧	12.7	5.5	2.6	279.5	ホルンブリルス	北上山地 古生代に堆積 中生代白堊紀に変成



第39図 A柱穴状土坑群3

⑦柱穴状土坑群

柱穴状土坑群は、VI層面で捉え、埋土の特色がIV層（砂質の褐色もしくは暗褐色シルト）となるものの中世の柱穴状土坑群（A柱穴状土坑群2）として前述しているが、ここではVI層下からVII層面で捉えた柱穴状土坑をまとめた。これらの土坑は、現近代、中世から古代もしくは弥生時代前期から縄文時代晩期末葉、可能性として縄文時代中期後葉までの幅広い時期観が与えられる。

A柱穴状土坑群3（第39図、写真図版23・32）

〔位置・検出状況〕 位置は遺構密集区から東側となる。VI層面で捉えた柱穴状土坑（P P 101～168）と、VII層面で捉えた柱穴状土坑（P P 330～337）のうちS I 14～16堅穴住居跡に関連すると考えたものの除外したものである。

〔重複・隣接関係〕 上位には中世の堀跡や溝跡、縄文時代晩期末葉の堅穴住居跡や集石遺構がある。それらに關わるものも若干含むと考えられる。

〔埋土・堆積状況〕 P P 101～168は、おもに黒褐色または暗褐色シルトの単層で、自然堆積である。P P 101や104は炭化物が入り込む。P P 330～376では、それぞれ埋土の観察を行い表に記した。黒～暗褐色土と褐色土のものに分かれる。埋土が褐色土になるものは、VII層面のP P 103・106・107・109、VIII層面のP P 336・338・340・342～345・356・361・362で、その内P P 103は6号堀跡、P P 106～109は周溝状のS D 18溝跡、P P 336・338・340・360・361はS D 14溝跡周辺にある。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形もしくは円形で、大きさは表の通りである。

〔断面形・深さ〕 断面形は柱穴状で、深さは表のとおりである。

〔出土遺物〕 P P 101から174の敲石が出土した。

〔時期〕 検出面から縄文時代中期後葉から晩期末葉までの時期観が与えられ、一部堅穴住居跡状の配列を示す。P P 101や104はS K I 02堅穴住居状遺構に関連するものか。S N Q 01・02堀跡周辺のものは、縄文時代晩期末葉の堅穴住居跡になるかもしれない。埋土観察で褐色土のものは、中世期の可能性もあり、6号堀跡やS D 14・18・19などの溝跡、またA柱穴状土坑群2との関連も考えられる。

A柱穴状土坑群4（第39図、写真図版23・32）

〔位置・検出状況〕 III D 6・7 f・gグリッドに広がる。調査区の中央部であるが、西側は搅乱されており、遺構集中区の西端となる。検出面はVII層面であるがVII層ではなくVI層下面に近い。

〔重複・隣接関係〕 北側にS K I 01堅穴状遺構が、東側では中世墓塚S K 60～62や縄文時代晩期末葉の上坑S K 68・69などが広がる。また、A柱穴状土坑群2と東側で隣接する。

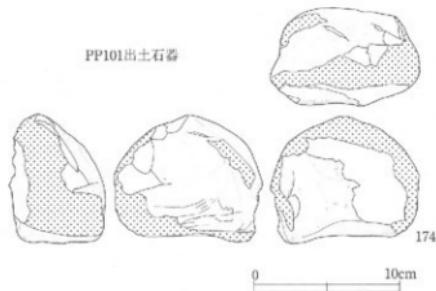
〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色～黒褐色シルトの単層で、自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形もしくは楕円形であるが、1個方形のものある。大きさは表に示す通りである。

〔断面形・深さ〕 断面形は柱穴状であるが、一部皿形状のものもあり、自然作用とも考えられたが遺構と登録した。深さは表に示す通りである。

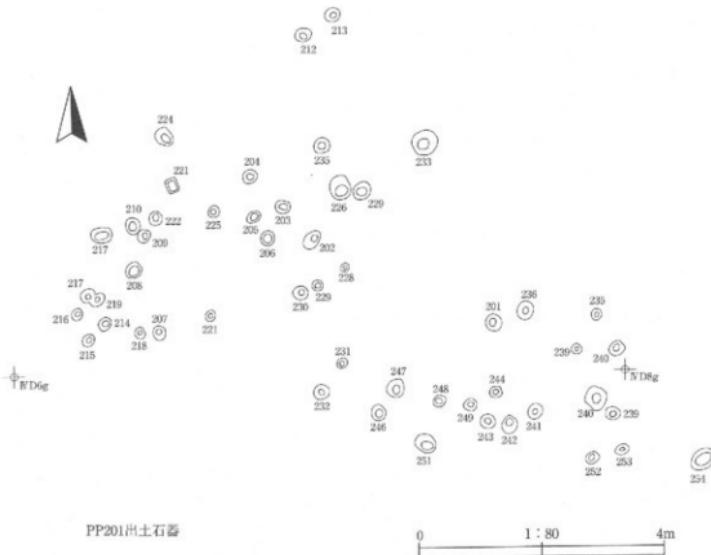
〔出土遺物〕 P P 201から磨製石斧（175）が出土した。当グリッドの周辺はVI層で比較的土器の出土が多く、特色として弥生時代前期？の土器（遺構外183や219）が出土する。

〔時期〕 時期は、P P 201周辺の柱穴状土坑群は縄文時代晩期末葉から弥生時代前期にかけてのものと考えられ住居状の遺構があった可能性を示す。北西側は方形の配列が見えるが、判然とせず、時期は古代・中世のまで下るかもしれない。



第7表(1) 柱穴状土坑群3

PP	口径(cm)	深さ(cm)	PP	口径(cm)	深さ(cm)	PP	口径(cm)	深さ(cm)
101	30	12.1	139	37	18.3	336	27	14.7
102	34	31.1	140	23	18.8	339	16	8.3
103	21	27.1	141	18	10.0	340	30	10.3
104	40	10.6	142	23	10.6	341	24	12.3
105	24	7.9	143	19	9.7	342	17	13.4
106	35	13.3	144	18	7.8	343	26	7.3
107	36	15.9	145	20	13.6	344	18	7.8
108	24	11.0	146	20	12.7	345	19	8.4
109	32	13.3	147	19	20.6	346	16	17.3
110	22	11.1	148	15	12.0	347	20	6.2
111	27	15.0	149	17	5.6	348	22	11.7
112	22	24.5	150	20	19.2	349	21	20.0
113	63	17.9	151	21	12.7	350	40	40.0
114	41	16.4	152	25	21.4	351	16	18.4
115	30	20.2	153	18	12.0	352	18	17.7
116	26	19.6	154	17	11.6	353	29	18.9
117	21	24.4	155	26	21.4	354	25	18.6
118	27	8.1	156	17	14.8	355	28	18.7
119	29	9.0	157	18	16.4	356	22	7.3
120	29	13.0	158	19	25.6	357	27	17.5
121	23	14.4	159	19	23.4	358	16	12.4
122	18	19.4	160	30	4.9	361	17	7.8
123	17	9.0	161	33	8.8	362	17	12.0
124	14	9.2	162	37	9.0	363	32	12.1
125	21	13.0	163	29	20.9	364	18	5.3
126	20	12.4	164	22	17.5	365	12	5.6
127	21	9.3	165	28	5.8	366	23	10.2
128	20	12.1	166	27	19.3	367	17	7.8
129	27	13.7	167	24	22.8	368	20	27.2
130	23	11.5	168	27	21.6	369	19	11.9
131	24	10.4	169	15	11.3	370	17	20.8
132	17	10.8	170	19	6.6	371	18	9.6
133	20	11.4	171	21	10.0	374	24	12.6
134	19	18.0	172	25	22.1	375	23	5.5
135	21	14.4	173	23	8.4	376	24	15.3
136	16	17.4	174	28	27.3			
137	18	10.3	175	24	7.0			
138	23	14.8	176	31	20.8			

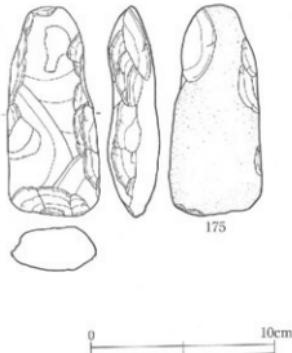


PP201出土石器

0 1:80 4m

第7表(2) 柱穴状土坑群4

PP	口径(cm)	進深(cm)	深さ(cm)	PP	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
201	27	20	14.3	228	15	9	4.1
202	31	11	24.3	229	19	11	8.3
203	27	16	9.8	230	23	11	15.1
204	23	14	6.1	231	17	8	7.9
205	20	14	6.4	232	27	9	11.3
206	25	18	2.3	233	43	20	26.1
207	25	9	9.7	234	欠	欠	欠
208	27	16	3.6	235	16	8	13.3
209	23	10	14.7	236	33	19	24.8
210	29	20	9.9	237	16	7	12.6
211	29	22	10.1	238	29	15	14.0
212	27	11	7.2	239	24	12	24.2
213	24	14	11.8	240	17	39	15.0
214	21	13	7.8	241	27	12	15.7
215	20	10	10.0	242	29	15	18.8
216	18	10	4.9	243	26	13	12.1
217	35	24	5.0	244	20	12	8.1
218	26	11	15.4	245	欠	欠	欠
219	23	8	14.2	246	27	12	18.5
220	20	8	9.5	247	28	13	12.7
221	18	7	10.5	248	20	12	不明
222	22	11	17.7	249	21	13	7.6
223	18	9	12.4	250	19	7	12.9
224	34	20	21.5	251	36	22	4.1
225	25	12	17.8	252	11	21	14.6
226	40	20	18.5	253	9	22	9.8
227	30	18	18.2	254	29	41	不明



第40図 A柱穴状土坑群4

⑥ 遺構外出土遺物と出土遺物の特色

遺構外として取り上げた遺物は、位置や出土状況によっていくつかに分けられる。まずはⅦ層出土のもので、非常に少ないが調査区の東隅で出土した。磨滅が激しかったことから土器2点のみの掲載となった。

次に竪穴住居跡認定前にグリッドで上げたものである。出土位置Ⅲ D 8・9 e・f グリッド出土遺物は S I 14・15 竪穴住居跡のどちらかに所属し、とくに S I 15 竪穴住居跡の時期に当たる可能性が高い。Ⅳ D 1・2 e・f グリッド出土の遺物は S I 16 竪穴住居跡もしくは 2号集石土坑に関連するであろうか。しかし、これらの遺物は上層で出土しているゆえに、擾乱の影響を受けていることも考えられる。土器は住居跡出土のものと接合する場合が多かったが、遺構外で取り上げた土器と同一の可能性のある個体もある。

3日は、遺構として仮登録したのちにグリッド出土に置き換えたものである。特にⅢ D 7・8 e・f グリッドが多く、出土層位はⅥ層上位から下位と幅広くなる。遺構にはならなかったが、若干新しい雰囲気のある土器や石製品が出土しており、遺構外として取り上げる率が高くなっている。そして最後に古代以降の遺構である壙跡や溝跡から出土したもので、流れ込みや掘り過ぎの影響と考えられるものである。

以上のように出土状況は違うが、土器は縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭期が中心となる。また、弥生時代の前期に当たるようないくつかの土器も若干出土している。石器や石製品は、遺構内に出土したものと類似するものが多く出土しているために、掲載数は少ない。

以下に土器・土製品・石器・石製品に分けて紹介する。土器・土製品はⅦ層・Ⅵ層出土に分け、Ⅵ層出土は、器種ごとに小分類している。石器は個々の器種ごとに、遺構内を合わせて全体の出土数からみた特色を本文中に述べている。

土器・土製品（第40～43図、写真図版27・28）

まずはⅦ層出土の土器である。遺構全体でⅦ層と捉えた土器は296gと少なく、全体の出土量の0.4%でしかなく、磨滅され小破片となる。その中で176と177はほぼ同区域で出土しており、縄文充填などの特色から縄文時代中期後葉の深鉢の破片と考えられる。

次にⅥ層出土の土器である。ほぼ同時期（縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭）のものが多いため、浅鉢や壺類はやや新旧が判別できそうである。ア 浅鉢、イ 深鉢・鉢、ウ 鉢形土器の内時期の新しい土器、エ 壺、オ 土製品の順で述べたい。

ア：浅鉢

平口縁のものと山形口縁のものに分かれる。平口縁の178と179は口縁部の屈曲状況が定かではないが、変形工字文で178は匹字状に施文される。180や181は、口縁部上部が丸みを帯びて屈曲し内湾する。180は貼瘤がつぶされており、沈線により集められた感がある。182は大柄な貼瘤であり、施文も幅広い。同じく平口縁の183～185は口縁部があまり内湾せずに垂直に立ち上がる。上記した182より施文が広く、体中部上位まで沈線が巡る。184は小型の浅鉢（鉢）で変形工字文が中位まで施文され、185は無文体があり、下位に沈線が巡り、蓋の可能性もある。186は上位が欠損するが、平口縁と思われる下部の縄文原体に他にない特色がある。

山形口縁の187は欠損しているが変形匹字文であろうか。文様体が非常に狭くなっている。188、189は沈線も深く太い。あまり内湾しないと思われる。

体部破片では190は大きな貼瘤を持ち幅広い文様体と無文体が特色である。器形に丸みがあり浅鉢

ではなく、壺形土器かもしれない。台付き浅鉢の台部資料は、遺構外では2点の掲載で、磨滅がはげしい。193は変形工字文のない浅鉢で、口径30cmの大型である。これら上器は大洞A'式に比定するが、平口縁の178や179、山形口縁の187は占い部分、金附I群のC類に、平口縁の183、184、185や山形口縁の188、189、また壺形土器の可能性のある190は、A'式の新しい部分で金附遺跡出土のIII群に相当する可能性がある。

遺構内に見ると、SI14堅穴住居跡出土やSI15堅穴住居跡埋土上位出土の一部は金附遺跡III群に、SI15の床面の完形品などは金附遺跡II群に当たる。

イ：鉢・深鉢類

ここで鉢としているのは口径と器高がほぼ同じになりそうなもので、深鉢は器高が勝るものである。口縁部破片は小型のものを鉢としているが深鉢になる可能性もある。

鉢とした194や195は口唇部に原体圧痕や刻みのような施文が認められる。196は沈線がある小型のもの、197は深鉢になるかもしれない。198と199は小波状口縁となりそうである。

深鉢で遺構外出土の中で器形が分かるものは少なく。唯200が復元できた。出土状況は一度住居跡として登録後にグリッドに置き換えたものである。出土位置や層位はSI15堅穴住居跡埋土上層に似る。小波状口縁で口縁部がすぼみ、肩が張る器形で、体下部は復元できなかつたが、ややしむ形になると予測される。口縁部破片は平口縁と小波状口縁に分かれる。平口縁では、201～203は、口唇部に手が加えられ短く外反する。これらの特色は、遺構内出土の粗製土器（SI14の47・51、SI15の91・92）にも顕著に見える。変形工字文を持つ204・205は、やや長めの口縁部を持ちあまり外反しない。206は小型の深鉢と考えられる。これらの土器は、遺構としてとらえ後にグリッドに置き換えたもので、SI15堅穴住居跡検出の西側グリッドで出土している。

小波状口縁とした207は上記した200同様の器形となるが、やや肩の膨らみがない。突起を持つ208～212は突起の特色は違うが、口縁部が無文体で、あまり外反しないという共通点がある。遺構内で突起を持つ破片は、S I 14堅穴住居跡出土の52・54がある。体部片の213は貼瘤が1つの深鉢である。これら鉢や深鉢の完形品や口縁部破片は、そのほとんどが堅穴住居跡のあるグリッドとその周辺から出土したものであり、大洞A'式に属すると考えるが新旧は難しい。197はやや古い時期で、縄文時代晩期末葉以前のものかもしれない。

ウ：鉢形土器の内、時期の新しい土器

同じⅦ層出土でも、Ⅲ D 8・9 e・fグリッドでは、やや時期の違うような破片が出土している。218の浅鉢は波状沈線が見える。219は入り組み文状の沈線と磨消しが施される。大きく外反する222・223の深鉢（甕？）や丸みを帯びる224の壺形土器などである。225の粗製土器も含めて、弥生時代前期から中期にかけての土器と考えられる。よって同グリッド周辺で出土しているイに分類した粗製土器には、大洞A'式より新しい時期のものも含まれている可能性もある。

エ：壺

228はⅣ D 1 eグリッドで出土した壺の口縁～肩部破片で、やや外反する口縁部には沈線が施され変形工字文となりそうである。水平に大きく張り出した肩部は変形工字文と連続刺突文が見える。褐色の器表面に特色がある。229の口縁部破片は228と同一破片の可能性が高い。230は工字文の壺破片である。228や229はA'の新しい部分か砂沢式土器、230はA'の占い部分の上器と考えられる。

オ：土製品

232はいわゆるミニチュア土器の浅鉢で、変形工字文が施文される。特色からA'式の古い部分に相当しよう。233は小型の壺で、穿孔か破損か判断付かないが、口縁部が欠ける。

234の円盤型土製品は、口唇部に刻みのある土器を転用したものであろうか。比較的弥生土器の出土割合の高いグリッドで出土した。235のスタンプ型土製品は、調査区東側の出土である。237や238の土製品は、S I 15堅穴住居跡埋土上位に当たる層位でのグリッド出土土器で、A'式の新しい部分に比定できる。238~240の土偶らしき破片は、スタンプ型土製品とはほぼ同グリッドでの出土である。241・242の孔のある円盤型土製品も比較的弥生土器の出土割合の高いグリッドで出土している。

石器・石製品（第44・45図、写真図版33・34）

前述したとおり遺構内で多くの石器を掲載しており、遺構外としての掲載は少ない。よってここでは遺構外出土の説明に合わせて、器種ごとに遺構内を含めた特色を述べたい。ア：剥片石器 イ：石核と剥片、ウ：礫石器、エ：石製品の順で記す。

ア：剥片石器

まずは石鎚で、遺構外では6点掲載した。243~248は、すべて茎を持ち、基部がなだらかないとゆる凸基有茎のものであるが、先端部分や断面形に相違が認められる。243はやや先端部が丸く、244も先端部は丸い。245~247は細くなり、特に246は細く尖る。断面形では上記4点が菱形を呈するのに対し、248は扁平である。長さは一番短い244の1.6cmから247の4.1cmまで幅がある。243・246にはアスファルトらしき付着物が認められる。石鎚は全体では不掲載を併せて17点の出土であるが、1点除けばすべて凸基有茎の形で、石質はめのうもしくは頁岩（赤色・珪質を含む）に限られる。その1点はSI15堅穴住居跡埋土上位で出土した黒曜石を石材とした101で、平基有茎となり搬入品の可能性が高い。

次に、石鎚の大型のものである。249は木の葉状をしたもので、未製品の可能性が高い。また250も同類と考えるが、石鎚の未成品かもしれない。同類にSI15堅穴住居跡出土の103やSI16堅穴住居跡出土の115がある。これら4点はすべて頁岩製である。

石錐は3点掲載した。251はつまみ部のない石錐で長さは3.5cm、252も石錐としたがつまみ部が欠損しており不明で、石錐の未成品かもしれない。253は継長のつまみのあるものである。石錐は遺構内外合わせて7点出土している。遺構内114や遺構外の253以外はつまみ部がない。また、7点すべてがSI14~16堅穴住居跡検出グリッドで出土しており、また石質はすべて奥羽山脈の頁岩となる。

スクレーパーとして登録しているのは、遺構内の3点と遺構外の2点のみで、他は不定形石器として取り扱っている。ここでは継長の254と三角形状の255を取り上げる。254は断面形が三角形状で両縁辺に剥離が施される。255は片面のみの剥離が見られ削器とした。

上記の定型石器に当てはまらないものを不定形石器として一括で取り上げる。ここで言うところの不定形石器とは、Rフレーク（細部加工剥片）と言われているものである。加工が非常に微細（施されていない？）なものを含めると106点になる。刃部を有すると仮定して、その刃部の形態から分類すると以下のようになる。（ ）内のアルファベットは表に示している。尚、点数は遺構内を含める。

まずは、縁辺が鋸歯状になるもの（A）である。19点出土した。遺構外256は珪質頁岩のもので、原石面が残り、刃部が鋸歯状となるが、剥離調整されているように見えない。掲載資料では、S I 14堅穴住居跡出土の72や4号集石土坑の166があり、どちらも円形で大型である。S I 14堅穴住居跡から72を含めて4点出土している。石材には頁岩やめのうが利用されている。

次に縁辺に微細な調整があるもの（B）である。10点が出土している。257と258は台形状の石器で、原石面を残し、2度の剥離が行われた形跡がある。どちらも原石面とは逆側に微細な連続剥離調整を施す。遺構内のS I 15出土の105も同様の特色がある。住居跡や集石遺構の周りからの出土が多い。

10点の内8点を石質鑑定しており、すべて頁岩となっている。

3番目は、剥離調整が1箇所（ノッチ状）のもの（C）で、遺構外から2点出土している。259は1号集石造構付近で出土した。1箇所のみくぼみがあり、剥離調整されている。260は3号集石土坑検出グリッド付近で出土したものである。

遺構外では登録はないが、やや大型で、片方の縁辺が凹むだけのもの（D）が8点出土している。代表としてS K 76土坑出土の150を取り上げた。ホルンフェルスを石材としている。礫石器の剥片を加工しているのであるか。他の7点も石材や大小の違いはある、同様の特色を示す。石材鑑定した他3点は頁岩製である。石器にはならないものかもしれない。

最後に、縁辺が鋸歯状にならないもの（E）である。登録はないが、遺構内外合わせて67点と、多くの出土を得た。形態は分類Aの剥離のないものであり、原石面が残る特色も同様である。使用痕の有無は明確ではない。遺構内ではS I 14堅穴住居跡の4点、S I 15堅穴住居跡の12点、S I 16堅穴住居跡の2点、その他4点となり、S I 15が多い。遺構外でもIII D 9・10e・fの出土が21点と多く出土している。石器製作の際にでた剥片の可能性がある。しかし、分類AやBに似た形態を示していることから、石器として利用していたのかもしれない。

その他、遺構内出土であるが、石籠がS I 14堅穴住居跡とS K 68土坑からそれぞれ1点ずつ出土した。他の石器と違い、北上山地産の頁岩を利用している。

イ：石核と剥片

遺構内外で多くの石核や剥片が出土している。石核では6号掘跡の最下層から出土した261や2・3号集石土坑検出グリッドであるIV D 1 fグリッドから出土した262がある。261の石質はめのうで、表面を削ぎ落とした剥離がなされる。石材確保を目的とするのではなく、何かの未成品の可能性もある。めのうを石質とする石核は他に5点（原石面を持つ70g以上のもの）出土している。剥片はすべて石質鑑定していないが、ガラス質の剥片は全体で255.6g出土している。262は頁岩製である。当初は礫岩とも考えたが、剥片を得るために石核とした。

遺構内S I 14堅穴住居跡から出土した73を含めて、70g以上の頁岩（赤色頁岩を含む）の石核は13点である。遺構内外から多くの剥片が出土しているが、上述しためのうを除けば、ほとんどが頁岩製（石質鑑定していないので明確ではなく、調査員の観察によるもの）である。その他石核にホルンフェルスのものがあるが、これは磨製石斧の製作に関わるものであろう。

ウ：礫石器

263の磨製石斧は、長さ16.8cmのホルンフェルス製で、調査区北東隅グリッドでの出土である。細身の継長で、形態としてはS K 68土坑出土の144に似る。調査区全体で磨製石斧は完形品、製作途中と思われるものや破損品を含めて15点出土している。また、遺構内外で16点の欠け（破片）も出土したが、復元できなかった。石質はホルンフェルス8点、砂岩4点、閃緑岩3点である。

磨石や砥石類は、遺構内で28点出土し15点を登録掲載している。遺構外でも21点出土しているが、遺構内出土と相違がなく、磨面が明確でないものが多いために登録していない。登録掲載15点の個々の詳細は各遺構内で述べているので、ここでは、特色ごとに分類したい。（ ）内は表中にも示している。

まずは、球形で断面形が〔算盤の珠〕形のもの（A）である。遺構内外で14点出土し、遺構内で9点掲載した。S I 15堅穴住居跡から1点（106）、S I 16堅穴住居跡から2点（172ほか）、S K 1

02堅穴住居状遺構から1点(140)、SK77上坑から1点(153)、4号集石土坑からは4点(167~170)が纏まって出土している。出土の特色は2~4号集石土坑とSI15・16堅穴住居跡周辺がほとんどである。石質は奥羽山脈産の頁岩1点、赤色頁岩2点、めのう2点、デイサイト2点で、北上山地産はホルンフェルス2点と蛇紋岩1点となる。形態の特色は、球形の石材が利用され、角が扁平に磨られて、断面形が菱形になる。横から見ると、天地が平らになるが「算盤の珠」のような形となる。一部磨る前の段階で、敲いて整形した跡や、原石面が残る場合もある。4号集石土坑の170は、剥片石器の石材として再利用された可能性がある破損品である。

これらの石器は、4号集石土坑で纏まって出土したことなどから、石器の製造に使われた可能性を指摘しておきたい。その石器とは磨製石斧であると考えられる。

次に、円柱状のもの(B)である。4号集石土坑の164と165が該当する。この2個体は磨石Aに挟まれるような形で出土したもので、円柱状の石器の上面と底面が扁平になる。敲いて整形した後に、磨ったような形跡がある。どちらも安山岩を石材としている。やはり石器製作に関わるものと考えられ、台石として利用された可能性もある。

その他(C)では、全面を磨っているものや片面や縁辺のみを磨っているものがある。石質は、安山岩やデイサイトを石材としている。

磨石の中でも、砥石(D)の機能を持っていたのではないかと推測されるのが、3号集石土坑の検出面で大型の砾に挟まれて出土した162で、デイサイトを石材としている。断面形が三角形となり、底面は自然面で側面に磨り痕が認められる。

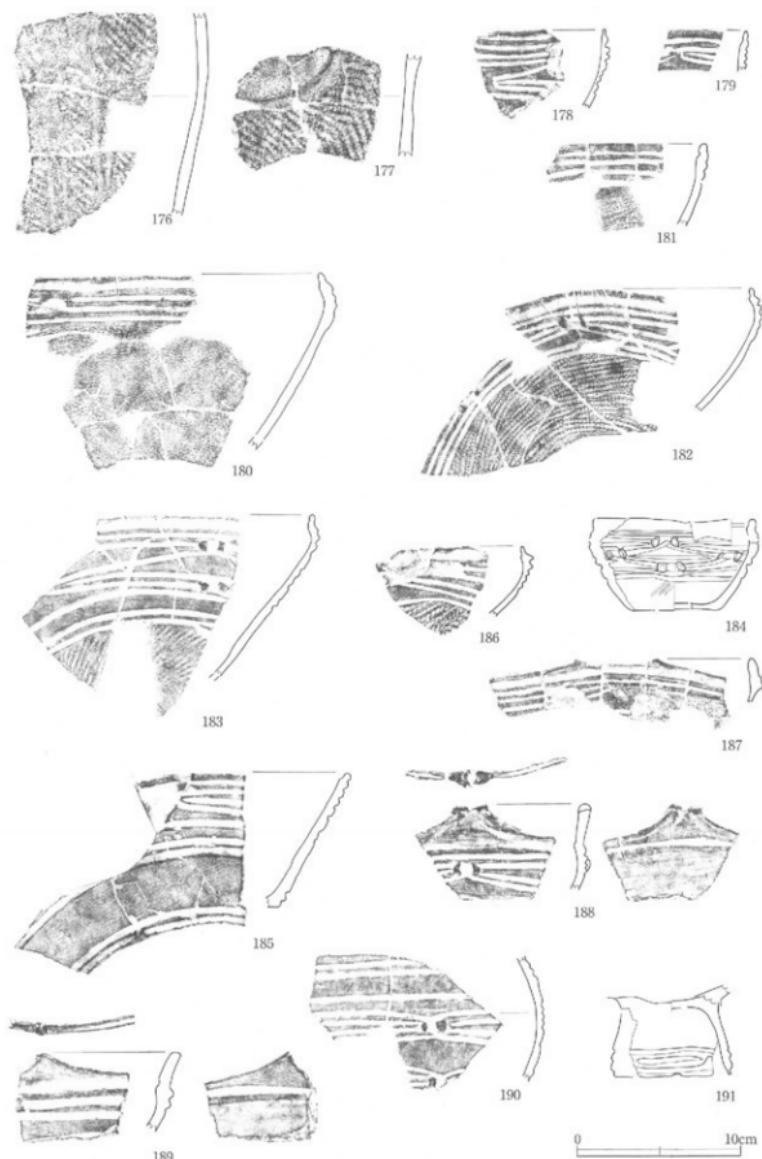
ハンマーのような役割を果たし、側面に使用面のあるものを敲石とし、遺構内外で8点出土した。砾の中心部に窪みのあるものは凹石としている。遺構外での掲載は1点のみである。264はデイサイトを石材としたもので、円形礫の縁辺に敲き痕が認められる。遺構内では4点で、SK102堅穴住居状遺構出土の141は264と同様の円形礫のもの、SK72土坑出土の250は、石核もしくは磨製石斧の未成品かもしれない。同じく磨製石斧の未成品の可能性のある1号集石遺構検出157は、破損品であるが、磨られた棒状砾の側面が剥がれている。PP101出土174は、頁岩製で角礫を利用している。その他、遺構外出土の3点は、上記の特色を備えている。

砾の中心部がくぼんでいるものを凹石とした。遺構外266は、凝灰岩を石材としており軽い。円形礫の中心部に、円形のくぼみがある。上底対称となることから石製品の可能性もある。267・268は、破損しているが継長の砾の中心部がくぼんでいる。269は前面が磨られ、中心部がくぼんでおり、敲き石に分類できるかもしれない。石材は267がデイサイト、268と269が安山岩である。遺構内では4点出土している。SI15堅穴住居跡出土の107は花崗岩でもろい。SK69土坑出土の145は、上記269同様にハンマーの可能性がある。SK76土坑出土の152は、遺構外268の同様の特色を持つ。どちらも安山岩を石材にしている。5号集石遺構の173は、他の凹石と特色を異にする。石質は安山岩であるが、砾の半分が火を受けた形跡があり、4面に窪みがある。台石に分類できるかもしれない。

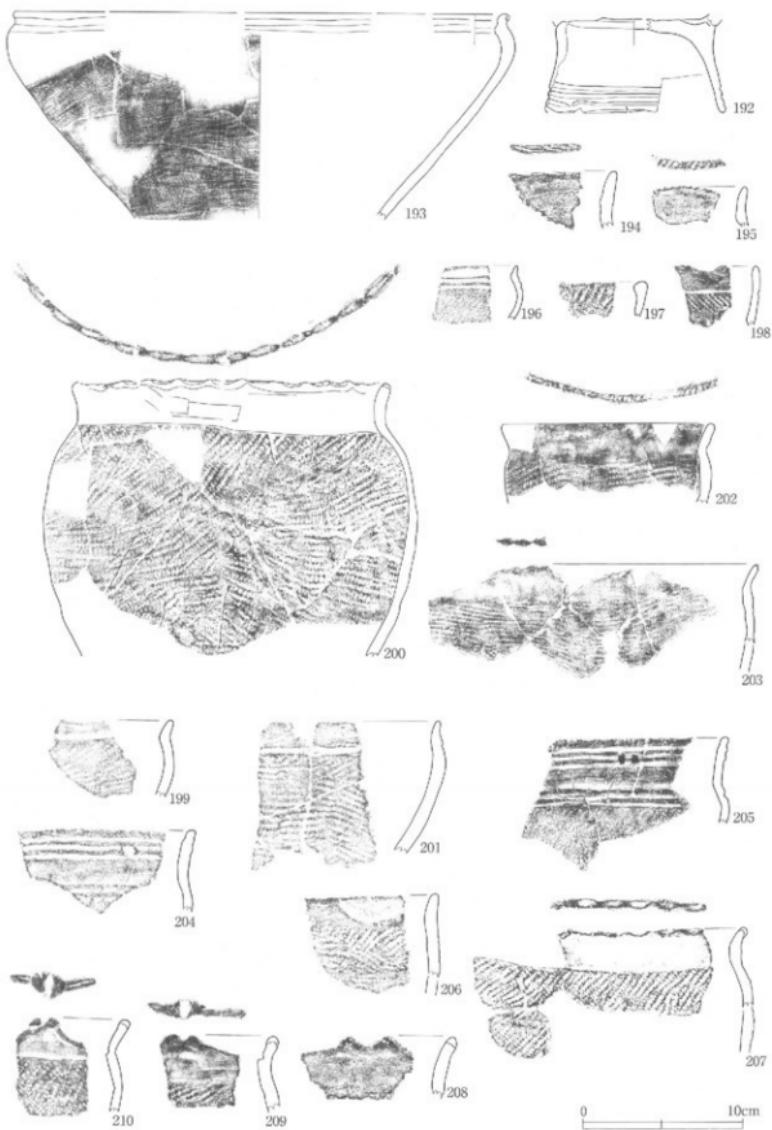
遺構外出土の270・271と3号集石土坑の検出面で出土した161を台石とした。石質は安山岩である。磨りが認められる。これら同様の砾は1号集石遺構や2号集石土坑でも出土している。また、5号集石遺構の172は、当初は磨石に分類したが、大型で扁平なことから台石とした。

エ：石製品

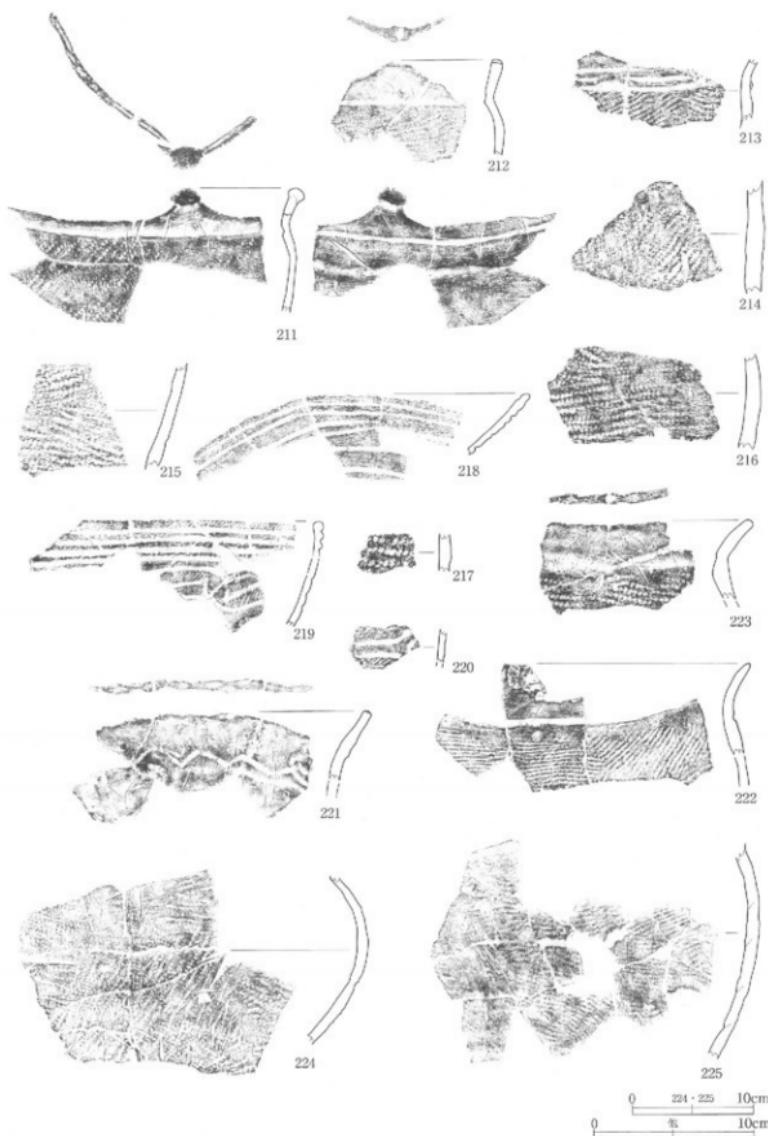
遺構外から2点(272・273)出土している。これらの出土地点は、弥生時代初頭期(A'の新しい部分)や前期の土器が出土する区域となっている。弥生時代の遺物であろうか。



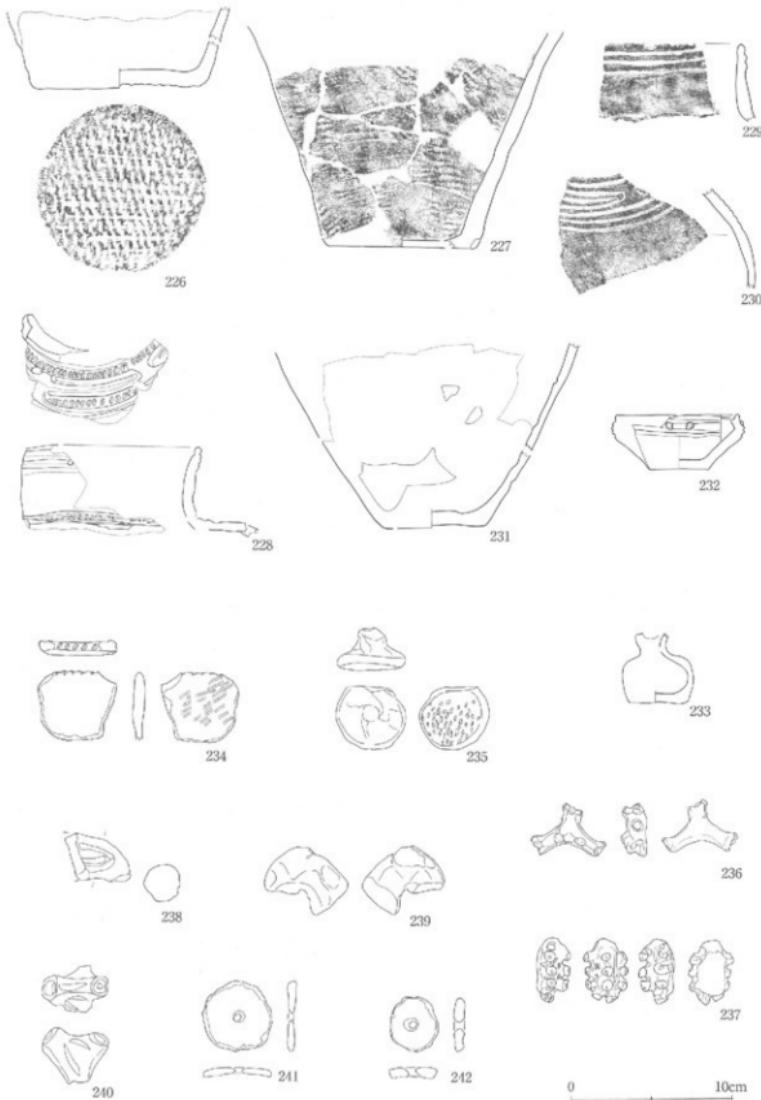
第41図 遺構外出土土器(1)



第42図 遺構外出土土器 (2)



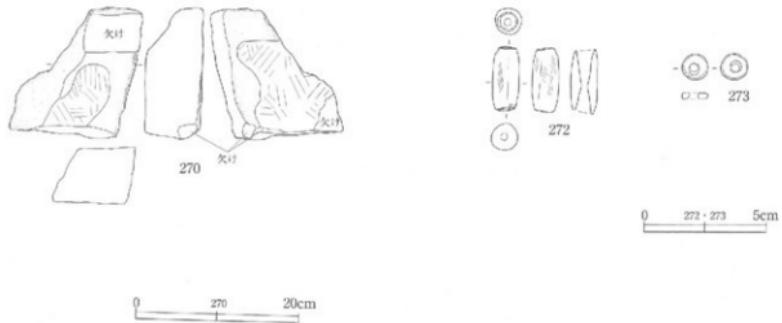
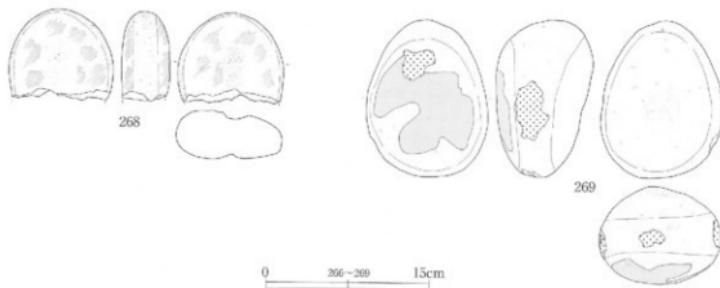
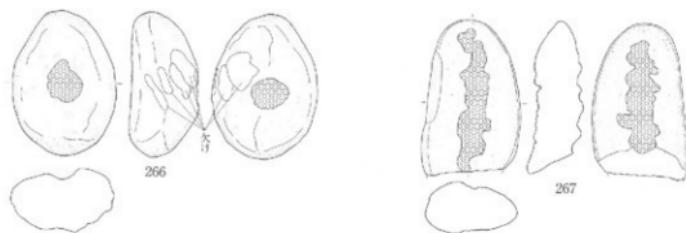
第43図 遺構外出土土器 (3)



第44図 遺構外出土土器(4)、土製品



第45図 遺構外出土石器（1）



第46図 遺構外出土石器（2）、石製品

第8表遺物観察表（遺構外出土遺物）①土器・土製品

番号	出土点	出土層位	種類	部位	胎土	地文	色	特徴	備考
176	IV D 9 f	Ⅳ層	深鉢	体部	小織	—	黄	辺縁 区画内薄文充填 倒卵 滲毛き 薄底	商中期後葉
177	II D 2 f	Ⅳ層	深鉢	体部	小織	L-R	黄	沈縫 区画内薄文充填 倒卵 滲毛き 薄底	新文中期後葉
178	III D 9 f	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	相紺金質 母	—	赤	平口縁 内沈縫 工字文？	A 2?
179	II D 9 f	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	小織	—	赤	平口縁 内沈縫 工字文？	A 2?
180	III D 10 g	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	相紺	L-R?	赤	平口縁 内沈縫 丸みを帯びて屈曲し内凹する 变形工字文 つぶされる e字型	A' 古
181	III D 8 f	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	砂	不明	赤	平口縁 内沈縫 太い丸の沈縫 安形工字文	A 古
182	II D 9 f	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	相紺	L-R	赤	平口縁 内沈縫 丸みを帯びて屈曲し内凹する 变形工字文 大柄な點縫	A 古
183	III D 8 f	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	相紺金質 母	L-R	赤	平口縁 内沈縫 やや腰元に弧曲しほぼ直線に上がる 变形工字文 大柄な點縫 下段に広い無文帶	A' 新
184	III D 10 g	Ⅳ層	浅鉢	半実形	相紺金質 母	—	赤	平口縁 内沈縫 ほぼ直線に上がる 变形工字文 やや大柄な點縫	A' 新
185	II D 8 f	Ⅳ層	浅鉢	半実形	相紺	—	赤	平口縁 内沈縫 直線的に斜めに上がる 变形工字文 大柄な点縫	A' 新
186	III D 9 g	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	相紺金質 母	?	赤	平口縁 ? や角舟を持って屈曲し直線に上がる 变形工字文	A' 新
187	N/D	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	相紺金質 母	—	黄赤	2倍一対の山形縫 口唇部沈縫 ハ字文？ 刻畫多い	A 2?
188	III D 9 f	Ⅳ層	浅鉢	口縁部	相紺金質 母	—	赤茶	山形口縫 (底部斜突) 内沈縫 口唇部沈縫 变形工字文 大柄な點縫	A' 新
189	日向道 走り層中	浅鉢	口縁部	相紺金質 母	—	黄色	山形口縫 内沈縫 口唇部沈縫 变形工字文 大柄な點縫	A' 新	
190	II D 9 f	Ⅳ層	浅鉢	体部	相紺金質 母	—	赤	大型の浅鉢 体中部まで変形工字文 大柄な點縫	丸みがあり、透溝ではないからしない。A' 新
191	II D 9 f	Ⅳ層	台付浅鉢	台部	小織	—	黑	君下位に沈縫 肩縫 (鍵跡)	A 古
192	III D 8 f	Ⅳ層	台付浅鉢	台部	相紺金質 母	—	黄色	下位に3条の平行沈縫	A' 古
193	III D 8 f	Ⅳ層	浅鉢	略実形	相紺金質 母	L-R?	赤茶	平口縫 内沈縫 口唇部下端広のヘラ状真で沈縫 口唇部折可選し ? 加里消し 下位30.程度の大型である	A' 古?
194	III D 9 f	Ⅳ層	鉢	口縁部	小織石英	—	黄	平口縫 口唇部直底直腹状の剥み 口縁部に輪積みのような難跡	
195	III D 9 f	Ⅳ層	鉢	口縁部	小織石英	—	茶	平口縫 口唇部直底直腹	
196	III D 10 f	Ⅳ層	鉢	口縁部	相紺	L-R	茶	平口縫 だがやや反打ちつ やや外反 平行沈縫	
197	III D 10 f	Ⅳ層	鉢	口縁部	小織石英	L-R?	茶	平口縫	
198	IV D 1 f	Ⅳ層	鉢	口縁部	相紺	R-L	黄	小波状口縫 体部との境に沈縫	
199	III D 9 f	Ⅳ層	鉢	口縁部	相紺金質 母	R-L	茶	小波状口縫 矩口縫 丸い口唇部	
200	III D 10 g	深鉢	口縫～体部	小織石英 金雲母	R-L	黑	小波状口縫 体部ヘラギ工具で削 矩内渦旋渦に立ち上がる		
201	III D 9 f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	相紺金質 母	R-L	赤	大柄は肩 製造	A' 新?
202	III D 9 f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	小織石英	R-L	赤	平口縫 が渡うつ 口唇部純文底 やや短く外反する	
203	III D 9 f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	小織	R-L	黒	平口縫 が渡うつ やや短く外反する	
204	III D 8 f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	相紺金質 母	—	白	平口縫 内沈縫 变形工字文 小さな點縫 抜け	A' 新?
205	III D 9 f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	小織多石	L-R	赤	平口縫 内沈縫 3条の沈縫 大柄な點縫 無文部 平行沈縫 縫	A' 新?
206	III D 9 f	Ⅳ層	深鉢	口縫～体部	小織多石 石英	L-R?	赤	平口縫 やや外反する 漏り消し ?	物生?
207	III D 9 f	Ⅳ層	深鉢	口縫～体部	小織石英	L-R	茶	小波状口縫 口唇部ケズリ 粘土紐貼り付け ? 体部との境に断	
208	III D 10 e	Ⅳ層	深鉢	口縫部	小織石英	—	黄	2個一対の山形突起 外反しない	
209	N/D 1 e	Ⅳ層	深鉢	口縫部	相紺金質 母	L-R	黄	2個一対の山形突起 やや外反する	
210	III D 10 f	Ⅳ層	深鉢	口縫部	相紺金質 母	L-R	茶	2個一対の山形突起 外反しない	
211	III D 10 f	Ⅳ層	深鉢	口縫部	小織	L-R	黒	ボタ・斜突起をもつ山形口縫 やや外反 体部との境目に沈縫	
212	III D 9 f	Ⅳ層	深鉢	口縫部	相紺金質 母	L-R	黄	山形突起	
213	III D 10 e	Ⅳ層	深鉢	体部	小織石英	—	赤茶	変形工字文 緋1つ	
214	III D 9 e	理士中	深鉢	体部	小織石英	L-R	茶	粗製土器	
215	III D 9 e	理士中	深鉢	体部	小織石英	L-R	白	粗製土器	付加状?
216	N/D 9 f	Ⅳ層	深鉢	体部	小織	L-R	白	粗製土器	
217	N/D 10 f	Ⅳ層	深鉢	体部	砂	?	黒	粗製土器	
218	III D 9 e	Ⅳ層	深鉢	口縫部	相紺金質 母	—	赤	波状口縫 内沈縫 ほぼ直線的に外傾する 平行沈縫 波状沈縫	発生中頃?
219	III D 8 f	Ⅳ層	深鉢	口縫部	小織石英	L-R	白	平口縫 沈縫 蕎消し 入り細み ?	発生中頃?
220	S D 14	理士中	深鉢	体部	小織石英	L-R	白	沈縫 蕎消し	219と同じ?
221	III D 10 f	Ⅳ層	深鉢	口縫部	相紺	—	白	小波状口縫 山形沈縫	発生(小田野II期) 中頃?
222	III D 8 f	Ⅳ層	深鉢	口縫部	小織石英	L-R	こげ茶	大き外反する 口縫部と体部境に明瞭な太い沈縫 蕎消し ?	発生?
223	N/D 2 f	Ⅳ層	深鉢	口縫部	小織多石	—	白	山形口縫 大きく外反する	壇形になるかも 発生時期?
224	III D 8 f	Ⅳ層	深鉢	体部	小織	いろいろ	赤	楕円 丸みを帯びる	

第8表遺物観察表（遺構外出土物）①土器・土製品

番号	出土地	出土層位	種類	部位	胎土	地文	色	特徴	備考
225	D	V層	深鉢	体部	小槽石英	L一貞	黒 あり	粗製土器、付加状？擦り消し 内部焼成 丁寧なミガキ 大型で厚	
226	N D	V層	深鉢	底部	小槽石英	—	青色	素朴的に斜めに立ち上がる 創代板	付加状幾つか？
227	2 f	V層	深鉢	底部	小槽石英	L-R	黒	58の底部？ 素朴的に外縁する	
228	N D	V層	壺	口縁～肩	細縫小窓	—	黄赤	平口縁 内沈線 平行並線	124と同一種体？ 229が複数？
229	1 e	V層	壺	口縁部	細縫小窓	—	黄赤	平口縁 内沈線 平行並線	発生初期？
230	N D	V層	壺	肩部	細縫小窓	—	黄赤	工字文	A・古
231	9 f	V層	壺	底部	細縫小窓	茶	やや上げ底 ミガキ ナデ 滅尻		
232	N D	V層	土製品	小型浅鉢	細縫	—	白	平口縁 内沈線 丸みを持って屈曲する 变形工字文	
233	N D	V層	土製品	小型壺	小槽・石	陶文	—	平口縁？外反する 宙孔？破損	
234	8 f	V層	土製品	円錐型	小槽石英	金雲母	青色	口部？剥離 表面部ア素面彫文	
235	2 e	V層下位	土製品	スタンプ形	小槽・石	茶	赤	身2.85cm 高さ1.70cm 脚部突起？上位を接着つまみを作る	
236	10 f	V層	土製品	アラカサ	細縫	—	黄色	幅2.15cm 高さ2.20cm 厚さ1.1cm 脚端 宙孔	
237	9 g	V層	土製品	アラカサ	細縫	—	黄色	幅1.9cm 高さ2.7cm 厚さ1.45cm 脚端 宙孔 宇虫	
238	2 e	V層下位	土製品	土偶頭	小槽・石	茶	赤	幅(2.7) cm 高さ(2.0) cm 厚さ(1.5) cm 滅尻	
239	2 f	V層下位	土製品	土偶頭？	小槽・石	茶	赤	幅(3.5) cm 高さ(2.9) cm	
240	2 f	V層下位	土製品	土偶	細縫	—	黄色	幅(2.7) cm 高さ(2.3) cm 厚さ(1.9) cm 沈線 円 刻印？	実起？
241	9 m	堆土下位	土製品	円錐型	小槽石英	金雲母	赤・赤黄色	径4.35×4.25cm 厚さ0.6cm 孔の幅0.4cm	
242	9 f	V層	土製品	円錐型	小槽石英	金雲母	赤	幅3.40×3.00cm 厚さ0.7cm 孔の幅0.5cm	

第8表遺物観察表（遺構外出土）②石器・石製品

番号	出土地點	出土層位	種類	器種	測定値			石質	番号
					長さcm	幅cm	厚さcm		
243	II D 10 f	V層	剝片	石錐	2.4	1.0	0.60	珪質頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	凸基有茎
244	II D 10 f	V層	剝片	石錐	1.6	1.1	0.55	0.5 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	凸基有茎
245	III D 7 f	V層	剝片	石錐	2.95	1.25	0.50	1.2 めのう 奥羽山脈 新生代新第三紀	凸基有茎
246	III D 8 f	V層	剝片	石錐	3.5	0.95	0.45	0.9 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	凸基有茎
247	III D 9 f	V層	剝片	石錐	4.1	1.45	0.90	3.8 めのう 奥羽山脈 新生代新第三紀	凸基有茎
248	II D 9 g	V層	剝片	石錐	(2.35)	1.5	0.35	0.9 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	凸基有茎
249	II D 9 g	V層	剝片	石錐	3.45	1.50	0.65	3.1 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
250	III D 10 g	V層	剝片	石錐	(3.05)	1.65	1.10	4.0 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
251	II D 9 e	堆土上位	剝片	石錐	3.5	0.95	0.75	1.5 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
252	II D 10 f	V層	剝片	石錐	3.25	1.00	0.75	2.2 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
253	IV D 1 f	V層	剝片	尖端矛?	3.4	1.3	0.85	2.7 赤色質頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	尖頭器？ 未製品
254	III D 8 f	V層	剝片	スレーパー	(5.60)	3.05	1.20	14.9 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
255	III D 8 g	V層	剝片	崩壊?	2.45	2.6	0.75	3.6 珪質頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
256	II D 9 f	堆土中	不定形	2.1	2.8	0.95	5.2 硅質頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀		
257	II D 2 f	V層	剝片	不定形	3.95	5.15	1.65	23.5 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	分類A 分類C
258	II D 9 e	堆土下位	剝片	不定形	5.15	5.9	1.3	27.1 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	分類C
259	II D 9 f	V層	剝片	不定形?	3.1	2.5	0.65	3.8 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	分類D
260	II D 1 g	V層	剝片	不定形	3.5	5.2	1.25	14.7 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	分類D
261	6号昭跡 堆土裏下位	礫	石錐	—	—	—	103.9 めのう 奥羽山脈 新生代新第三紀		
262	IV D 1 f	V層	礫	石錐	—	—	—	505.0 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	写真撮影
263	IV D 2 e	V層	礫	磨製石斧	16.80	3.8	2.5	251.7 ホルンフェルス 北上山地 古生代に堆積 中生代白亜紀に変成	石斧？
264	IV D 1 f	V層	礫	敲石	10.00	8.15	5.20	606.1 デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	
265	III D 10 e	V層	礫	敲石	10.10	6.10	4.70	412.6 安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
266	III D 6 e	V層	礫	敲石	11.90	8.60	5.60	317.0 矽灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
267	III D 9 f	V層	礫	敲石	12.8	7.7	4.1	533.1 デイサイト 奥羽山脈 新生代新第三紀	
268	III D 9 g	V層	礫	敲石	7.30	8.50	4.00	368.2 安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
269	IV D 3 g	V層	礫	敲石?	12.8	9.9	7.9	1247.8 安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	
270	III D 10 e	V層	礫	台石?	15.10	13.50	6.90	2020.0 安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	写真撮影
271	III D 9 g	V層	礫	台石?	—	—	—	690.8 安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	写真撮影
272	III D 9 f	V層	石製品	黄石	2.65	1.1	1.05	3.4 砂岩 北上山地 古生代	
273	III D 9 f	V層	石製品	小玉	1.1	1.1	0.3	0.5 頁岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	

3 分析鑑定（中世墓壙出土歯）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県北上市稲瀬町地蔵堂の境遺跡は、北上川沿いに形成された自然堤防上に立地する。これまでの発掘調査により、弥生時代の住居跡・土坑、平安時代の竪穴住居跡・土坑・配石遺構、中世～近世の塚跡・溝跡・墓壙などが検出されている。今回、墓壙から出土した人骨について、被葬者の情報を得ることにした。

（1）試 料

試料は、SK59墓壙（試料1）、SK60墓壙（補）、SK61墓壙（試料2）、SK62墓壙（試料3）から採取された人骨である。いずれも歯牙が中心で土壤ブロックとして取り上げられており、出土遺物などから中世の墓坑とされる。

（2）分 析 方 法

骨に付着した土壤は、竹串等を用いて除去したが、骨自体の保存状態が悪く、全体が崩壊するおそれがあったため、完全に取り除くことができず、可能な限りの観察にとどめた。露出した骨を肉眼で観察し、部位を同定する。なお、歯牙の計測は、藤田恒太郎（1949）に基づき、デジタルノギスで測定する。

（3）結果および考察

<SK59墓壙>

骨体が完全に分解して消失しており、歯牙のみが残る。左上顎中切歯、左上顎第1小白歯～第2大臼歯、左下顎犬歯、左下顎第1小白歯が解剖学位置を保って露出し、それよりも背面側に右上顎第1・2大臼歯と左下顎第1大臼歯が露出する。右側の大部分の歯牙は土中に埋まっていた。検出された歯牙については、歯式として表1に示す。

表1. SK59墓壙の歯式

	左								右							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	H	H	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎	—	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
下顎	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—

凡例) I: 切歯 C: 大臼歯 P: 小臼歯 M: 大臼歯 —: 未確認

永久歯が生えそろっているものの、第3大臼歯が未萌出である。また、切歯や犬歯がわずかに咬耗するが、小白歯や大臼歯に咬耗がほとんどみられない。これより、本人骨は、成年（16～20歳程度）から壮年（20～39歳程度）前半と考えられる。また、権田の調査例（1959）と比較すると、本人骨の歯牙計測値（表2）は、男性平均値よりも上回るものが多い。よって、本人骨は、男性の可能性がある。

<SK60墓壙>

骨体は部分的に残る程度であり、大半が分解・消失する。歯牙は、左上顎歯牙と左下顎歯牙が解剖学的位置を保って露出し、右下顎歯牙も解剖学的位置を保つことが観察される。保存状態

表2. SK59墓壙出土歯牙計測値

	左側				右側			
	歯冠厚	歯冠幅	歯冠厚	歯冠幅	歯冠厚	歯冠幅	歯冠厚	歯冠幅
I1	7.68	8.89	7.71	9.15				
I2	—	×	×	×				
C	—	—	8.63	8.12				
P1	9.89	7.44	10.09	7.59				
P2	9.86	7.25	10.10	7.41				
M1	12.39	11.80	11.49	12.45				
M2	12.49	10.76	12.22	10.44				
	—	—	—	—				
I1	5.88	5.65	5.65	5.65				
I2	—	×	×	×				
C	8.14	6.75	8.01	7.65				
P1	7.72	7.90	7.49	6.66				
P2	—	—	8.29	7.55				
M1	—	—	10.85	12.03				
M2	—	—	—	—				
M3	—	—	—	—				

凡例) ×: 測定不可 —: 未確認

が極めて悪く、左上顎犬歯の歯冠部、左上顎中切歯片、左上顎側切歯片を土壤ブロックから抽出することができたが、それ以外の歯牙は土壤から分離することができない。確認された歯牙は、歯式として表3に示す。なお、左下顎第2大臼歯および第3大臼歯は歯牙を確認できないが、その痕跡を観察することができた。本人骨は第3大臼歯が萌出していることから成人に達していたと考えられるが、詳細不明である。なお、左上顎犬歯は、歯冠幅7.02mm、歯冠厚8.30mmを計り、女性平均値（権田,1959）よりも小さく、女性的である。

表3 SK60墓壙の歯式

	左								右							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎	—	—	—	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—
下顎	—	—	—	—	—	—	—	○	○	○	○	○	—	—	—	—

凡例 I: 切歯 C: 犬歯 P: 小臼歯 M: 大臼歯 —: 未確認

<SK61墓壙>

頭蓋の破片が土壤塊として確認される。歯牙では、右下顎第2・3大臼歯、下顎小白歯が確認される。左下顎第3大臼歯には、遠心歯頸部と歯冠部に齲歎（いわゆる虫歯）がみられる。本人骨は、咬耗が著しく進み、大臼歯の象牙質が全面露出することから、熟年（40～59歳程度）後半以降とみられる。なお、左下顎第2大臼歯は、歯冠幅10.37mm、歯冠厚10.39mmを計り、女性平均値（権田,1959）よりも小さく、女性的である。

<SK62墓壙>

下顎骨と四肢骨が確認される。下顎骨は、正中部から左側のみが残存し、舌側（口腔側）が露出する。左側の上顎犬歯と第1・2小白歯、右側の中切歯と第2小白歯が確認され、左上顎中切歯・側切歯の痕跡が観察される。左上顎第1小白歯の歯冠部に齲歎がみられる。左上顎第2小白歯の咬耗が顕著にみられないことから、老齢に達していない個体と考えられるが、詳細は不明である。なお、本人骨の歯牙の大きさ（表4）は、小白歯歯冠幅が女性平均値（権田,1959）より狭く、中切歯歯冠幅と小白歯歯冠厚が男性平均値（権田,1959）と同じ程度かやや上回る。そのため、性別に関しては定かでない。

表4 SK62墓壙出土歯牙計測値

	左側		右側	
	歯冠幅	歯冠厚	歯冠幅	歯冠厚
I1	—	—	X	8.65
I2	—	—	—	—
C	X	X	—	—
P1	9.68	6.42	—	—
F2	—	—	—	—
M1	—	—	—	—
M2	—	—	—	—
M3	—	—	—	—
I1	—	—	—	—
I2	—	—	—	—
C	—	—	—	—
P1	—	—	—	—
F2	—	—	—	—
M1	—	—	—	—
M2	—	—	—	—
M3	—	—	—	—

凡例 X: 測定不可 —: 未確認

(4) まとめ

SK59～62号墓壙から出土した人骨は、いずれも保存状態が悪く、骨体が完全に分解・消失している、もしくは分解消失の途中であった。今回実施した鑑定作業の結果、4個体の人骨試料は、成年～壮年前半の男性?が1個体、成人女性?が1個体、熟年後半以降の女性?が1個体、年齢性別不明が1個体と推定した。

引用文献

- 藤田 恒太郎,1949,歯の計測基準について,人類学雑誌,61,27-32.
権田 和良,1959,歯の大きさの性差について,人類学雑誌,67,151-162.

4 平成20年度調査の成果

ここでは、平成20年度の調査の成果を、若干の考察を交えて遺構を中心に時代ごとにまとめる。遺物については、2（1）⑥と（2）⑥で説明しているので、ここでは簡単に触れている。

（1）古代・中世

平成20年度調査区で検出された遺構は、墓壙5基、土坑4基、堀跡1条、溝跡6条、柱穴状土坑45個である。墓壙は、永楽通寶や洪武通寶が出土していることから中世末期の遺構と思われる。被埋蔵者については、人骨の保存状態が悪く推測となるが、成年～壮年前半の男性？が1個体、成人女性？が1個体、熟年後半以降の女性が1個体、年齢性別不明が1個体となり、分析していない1遺体は男性と思われることから、1家族の可能性があるが、共同墓地としての機能も考えられる。当期と思われる土坑4基の内2基は、墓壙周囲にあり、関連が考えられる。風倒木状で、墓壙の周囲に植えられた樹木の倒れた跡と考えることもでき、塚状の遺構となる可能性も否定できない。

これらの遺構は中世の埋葬のあり方や、当時の宗教事情などを踏まえた検討が必要である。VI 平成20・21年度調査の総括1中世（1）墓壙で、中世墓壙の占地状況や規模・平面形、古銭の数や出土状況などから見える特色を、岩手県内で検出された中世墓と比較して考察する。

堀跡は、断面形はV字状となり、延長は曲線を描く。一部下位に柱穴列状の遺構を伴い構築の可能性もある。溝跡は、ほぼ南北に直線的に伸びるもの1条、堀跡と直交するもの2条（同一遺構の可能性もある）、方形周溝状のもの1条、円形周溝状のもの2条となる。これらは同時期にあったかどうかは不明である。これらの遺構は平成18年度に検出された遺構との関連を考える必要がある。

柱穴状土坑は堀跡や溝跡の周辺で検出されたものと、墓壙周辺で検出されたものに分かれる。堀跡周辺のものは、一部に規則性が見られるが小型である。堀跡からやや離れた柱穴状土坑群は比較的大型で、墓壙周辺で検出された柱穴状土坑1個からは古銭が出土している。これらのことから、建物跡は墓壙検出区域付近にあった可能性がある。

全体として、時期を特定することは難しく、平安時代の土師器・須恵器も少なからず出土しており、古代から中世末期まで幅広い年代が与えられる。その中で、遺構が同時期にあったとすれば中世期のほうより古い年代になると考えられる。VIの1（2）では、中世期の堀跡や柱穴状土坑について、平成18・19年度の調査結果を踏まえた考察をする。

古代・中世の遺物は、土師器の片耳・須恵器片5点と古銭37枚である。土師器はロクロで作られている。古銭は南唐銭（初鑄960年）から明銭（初鑄1408年）までの幅を持つ。

（2）縄文・弥生時代

当期の遺構としては、竪穴住居跡3棟、竪穴住居状遺構3基、土坑10基、炉跡2基、集石遺構5基、埋設土器2基、柱穴状土坑169個が検出されている。これらの遺構は、出土遺物から縄文時代晚期末葉から弥生時代初期に属すると考えられる。

竪穴住居跡は、2棟が重複して検出されている。平面形はどちらも円形と推定され、規模は5～6m程であると考えられる。壁は確認できなかったことから、竪穴ではなく、平地住居かもしれない。新しい土器の出土する住居跡は、床面中央部と想定される場所に地床炉跡を持つ。しかし古い住居跡からは石圓炉跡が検出されているが、疑問が残る。もう1棟は、古い住居跡と同時期と見るが、不明

である。これらのことについては、VI 20・21年度調査の総括 3（1）で考察する。

竪穴住居状遺構や土坑は、縄文時代晚期末葉から弥生時代初頭にかけての遺物が出土するが、時期的には不明のものがある。特に住居状遺構であるSK I 01や03については、弥生時代前中期に属する可能性もある。

石圓炉跡、朱石造遺構は縄文時代末葉から弥生時代初頭のうち、後者に当たると考えられる遺構で、検出状況や出土石器の特色から、石器製作に関わる遺構の可能性を考えている。このことについては、VI 20・21年度調査の総括 2（2）で考察する。

柱穴状土坑は上位検出のものは中世の、下層検出のものは縄文時代中期後葉期の時期が与えられそうなものを含む。建物跡状の配列は判然としなかった。仮にS I 14竪穴住居跡と同時に石器製作社があったとすれば、関連する柱穴状土坑（雨風を防ぐための作業所を構成するもの）になる可能性もあるが、擬似現象（木痕などの搅乱による）の窪みと考えられるものも幾つかあり、積極的に建て物を構成することができない。

平成18年度調査をまとめた前巻539集では、調査区外東側で検出された土器集中区を包含層1・2として報告され、包含層1（調査区南側）は「石器製造を営む～居住地の存在の可能性を指摘できる」と、包含層2（調査区北側）は、「墓域であった可能性を指摘できる」とされている。前者の裏付けは成されたが、後者に関しては、埋設土器や集石土坑は確認できたものの、墓域とは言えないと考えられる。ただし、周辺は調査されていない区域を残しており断言できない。

遺物は、土器は大半が大洞A'式に比定出来、やや新旧に分かれる様相が見えた。この特色は、平成18年度出土土器と大差はないが、少量ではあるが縄文時代中期後葉の土器片も出土し、また弥生時代前・中期の上器も出土しているという違いがある。土製品にはアクセサリーや円盤形土製品、土偶などがある。石器は、剥片の定形石器では石鎌や石錐、石鏡などが出土した。不定形石器が卓越する特色がある。礫石器では、磨製石斧、凹石、磨石、敲石が出土しており、磨製石斧の未製品の出土があることや、磨石の出土が多い特色が挙げられる。特に断面形が「算盤の珠」状の磨石が纏まって出土していることも特徴される。この磨石（分類A）を含め、台形状の磨石（分類B）は、前巻539集では報告されていない。平成18年調査の包含層1では剥片や石核は多いものの磨石類は少なく、大きな違いがある。これらの差異については、さらなる見当が必要である。

写 真 図 版
(平成20年度調査)



境造跡と北上川（平成19年度撮影）



調査区全体（遠景）

写真図版1 空中写真



調査前風景



西側完堀



調査区全体（近景）



東側6号堤跡断面



西側南北断面

写真図版2 調査前風景、調査区近景、西側完堀状況



東側（遺構密集区）基本層序



西側カクランと旧河道の落ち込み

写真図版3 基本層序



SK59墓墳平面



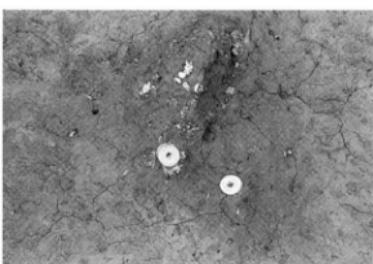
SK59墓墳断面



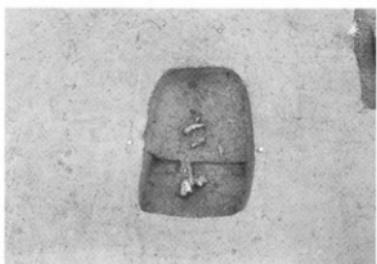
SK60墓墳平面



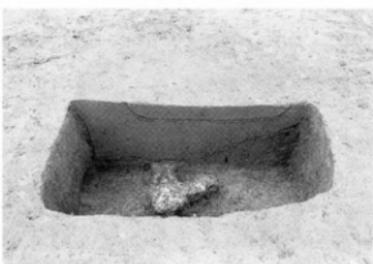
SK60墓墳断面



SK60墓古銭出土状況

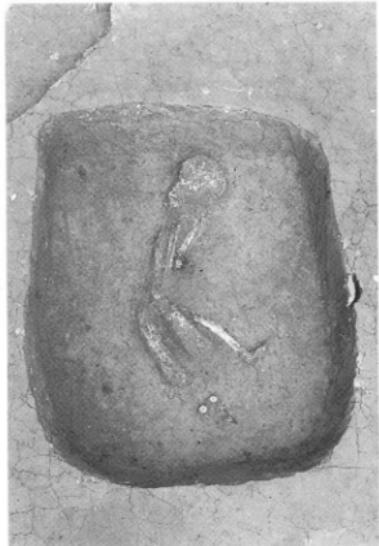


SK62墓墳平面



SK62墓墳断面

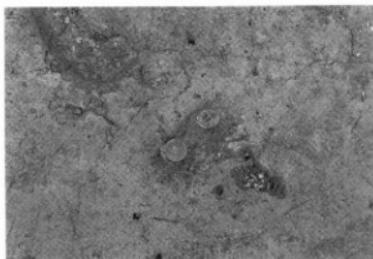
写真図版4 SK59・60・62墓墳



SK61墓墳平面



SK61墓墳断面



SK61墓墳古錢出土状況



SK63墓墳人骨出土状況



SK63墓墳平面



中世墓墳供養の様子

写真図版5 SK61・63墓墳



SK64土坑平面



断面



SK65土坑平面



断面



SK66土坑平面



断面



SK67土坑平面

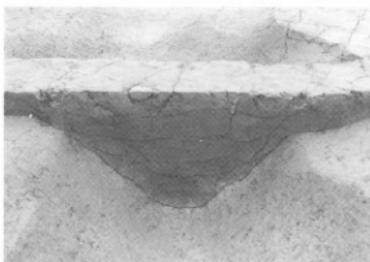


断面

写真図版6 SK64~67土坑



平面



断面（南側）



断面（北側）



北側柱穴列状遺構



完掘（VII層面、南東側）



完掘（VII層面、北側）

写真図版7 6号堀跡



SD14溝跡平面



断面（裏側）



断面（北側）



SD15溝跡平面



(参考) 平成18年度検出SD05平面



SD16溝跡平面



断面

写真図版8 SD14～16溝跡



SD17溝跡平面



断面



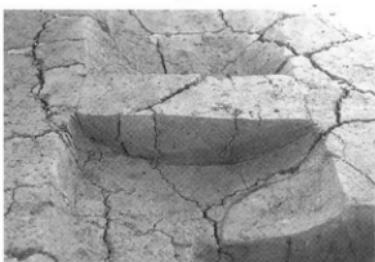
SD18溝跡平面



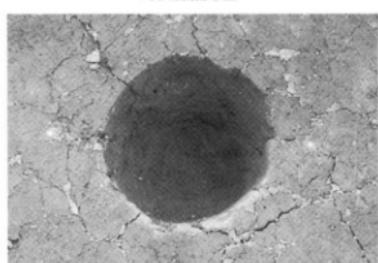
断面



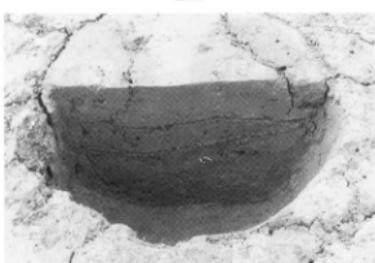
SD19溝跡平面



断面

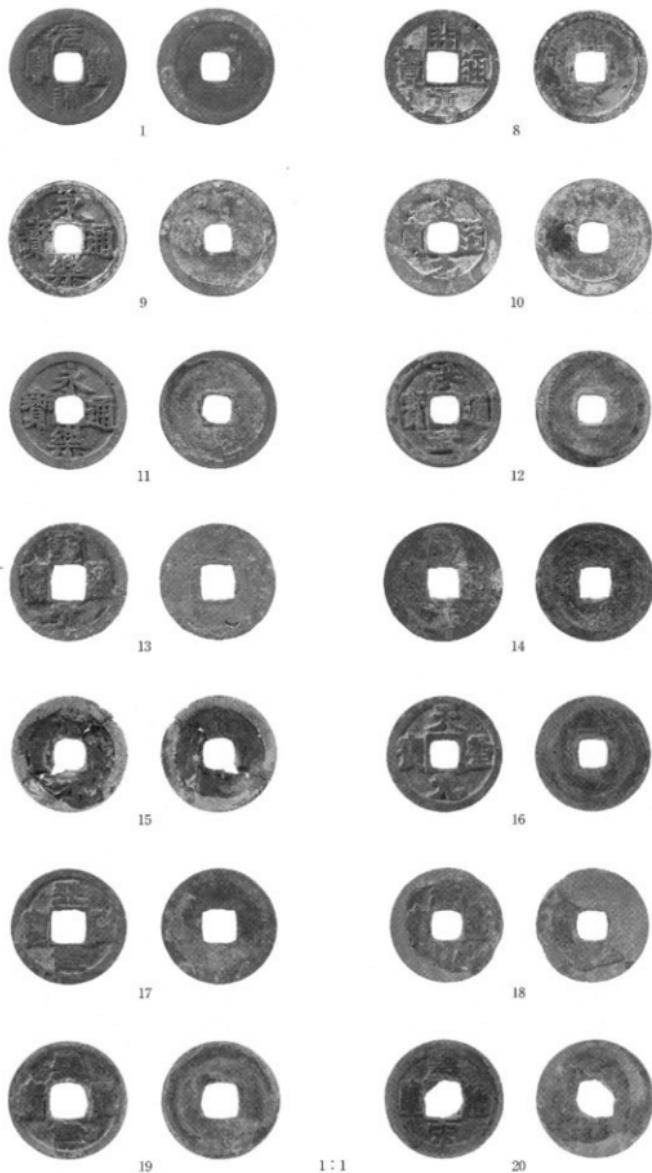


A柱穴状土坑群2 PP318完掘

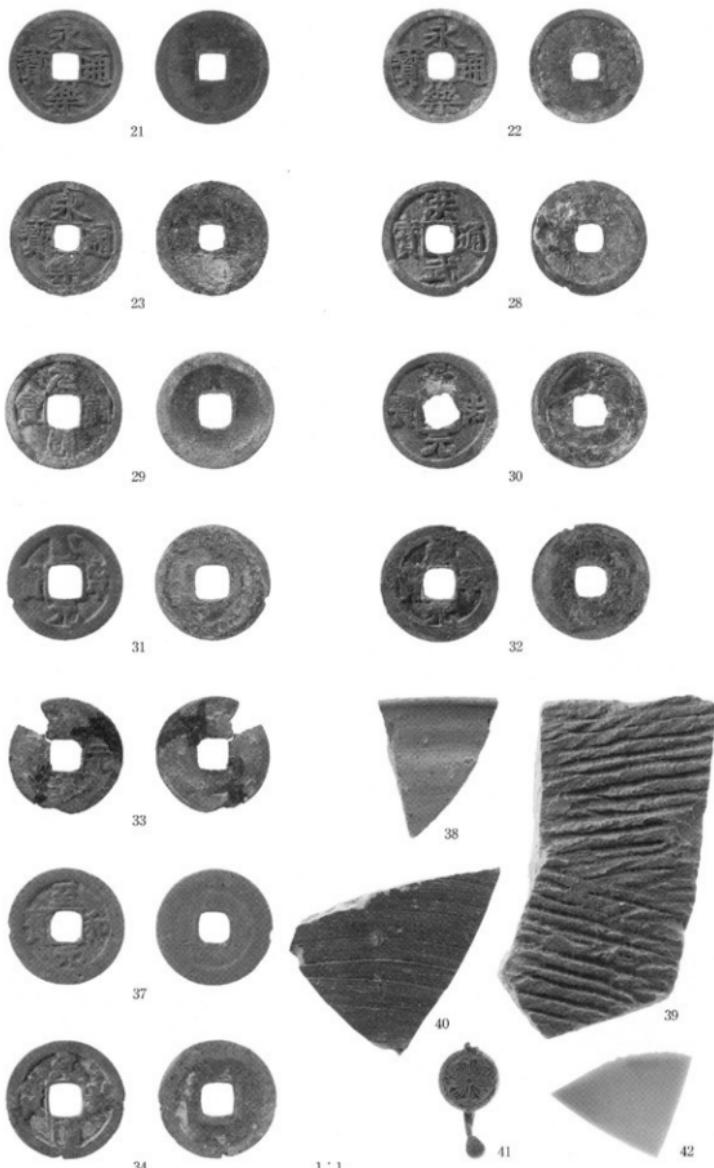


PP318断面

写真図版9 SD17～19溝跡、A柱穴状土坑群2



写真図版10 古代以降の出土遺物（1）



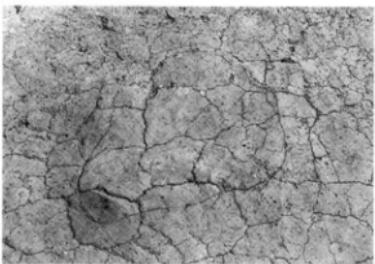
写真図版11 古代以降の出土遺物（2）



完掘



断面 (W-E)



炉跡検出



炉跡断面

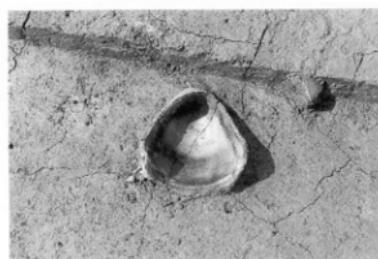
写真図版12 SI14竪穴住居跡 (1)



SI14竪穴住居跡P1-P2断面



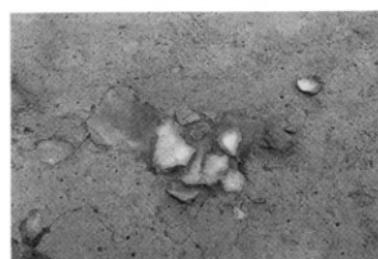
P4断面



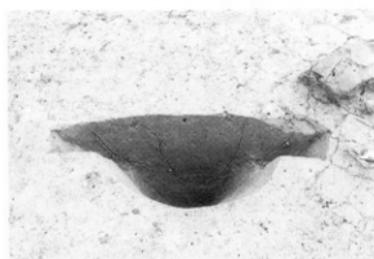
SI14竪穴住居跡遺物出土状況



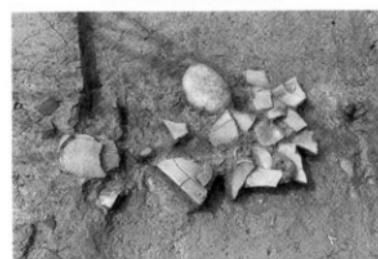
SI14竪穴住居跡遺物出土状況



SI14竪穴住居跡遺物出土状況



SI15竪穴住居跡P137断面



SI15竪穴住居跡遺物出土状況



SI15竪穴住居跡遺物出土状況

写真図版13 SI14竪穴住居跡（2）、SI15竪穴住居跡（1）



完掘



断面（E-W）



炉跡埋土断面



炉跡掘り方断面

写真図版14 SI15竪穴住居跡（2）



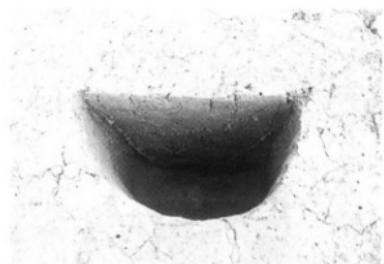
平面



断面 (W-E)



炉跡検出



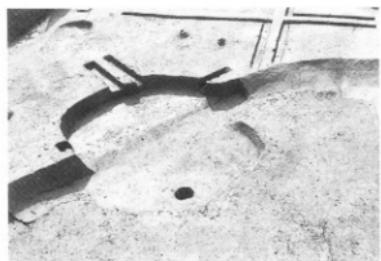
P1断面



SK101竪穴住居状遺構平面



断面



SK102竪穴住居状平面



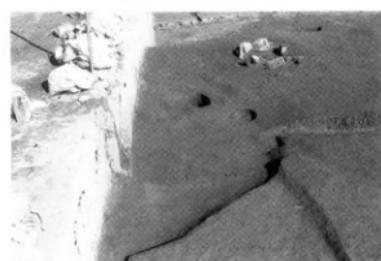
遺物出土状況



SK102竪穴住居状断面（W-E）



断面（N-S）

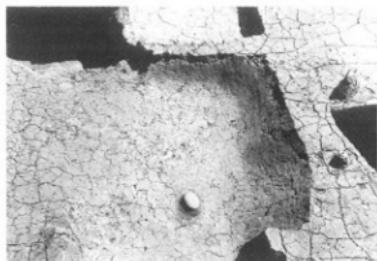


SK103竪穴住居状平面



断面

写真図版16 SK101～03竪穴住居状遺構



SK68土坑平面



断面



SK69土坑平面



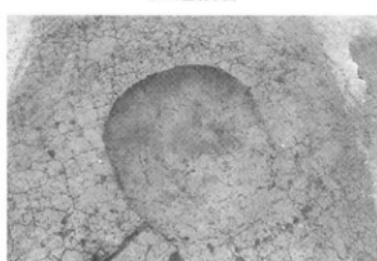
断面



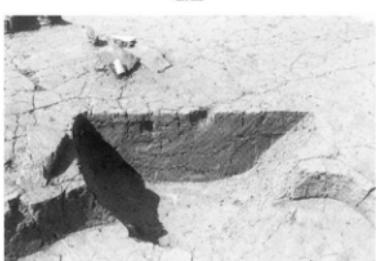
SK70土坑平面



断面



SK71土坑平面



断面

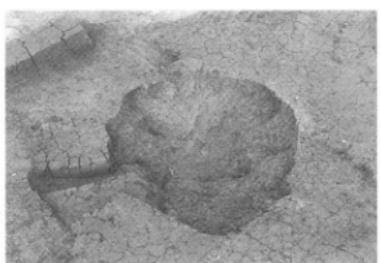
写真図版17 SK68~71土坑



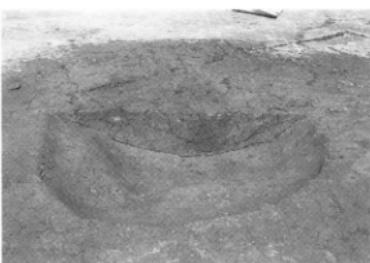
SK72土坑平面



断面



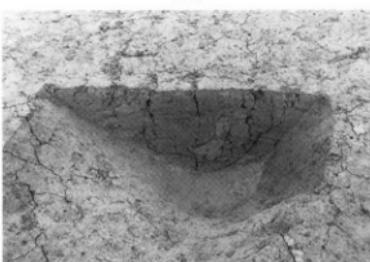
SK73土坑平面



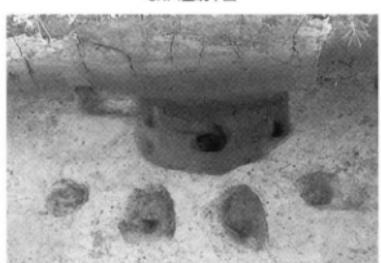
断面



SK74土坑平面



断面



SK75土坑平面

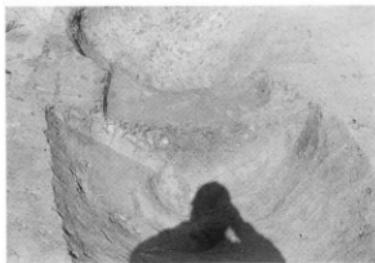


断面

写真図版18 SK72~75土坑



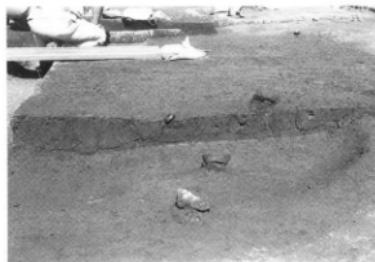
SK76土坑平面



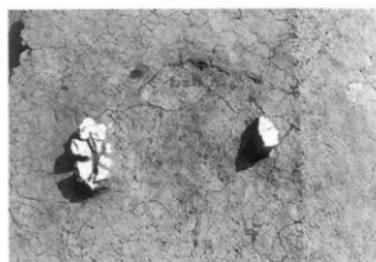
断面



SK77土坑平面



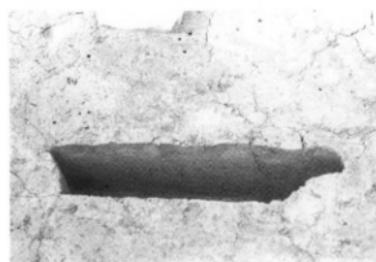
断面



SNQ01炉跡検出



完掘



燃烧部断面 (N-S)



断面 (E-W)

写真図版19 SK76~77土坑、SNQ01炉跡



SNQ02炉跡平面



埋土断面 (W-E)



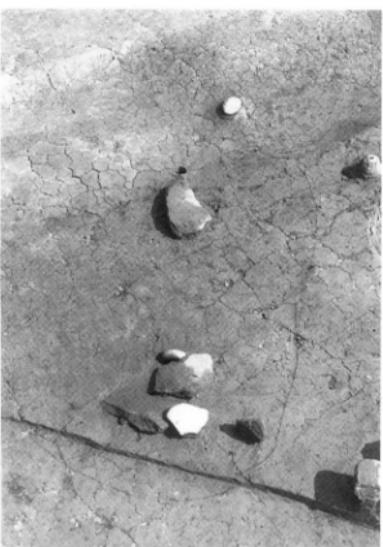
焼土断面 (W-E)



掘り方断面 (W-E)



1号集石遺構



5号集石遺構

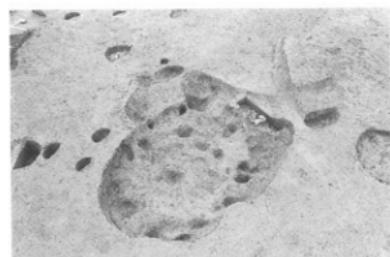
写真図版20 SNQ02炉跡、1・5号集石遺構



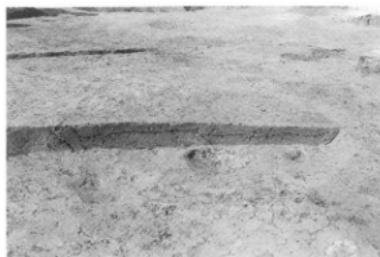
2号集石土坑検出



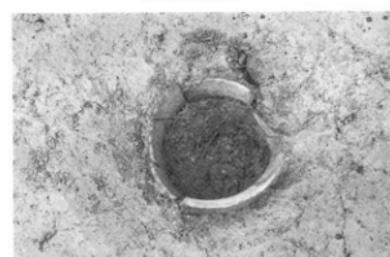
断面 (W-E)



2号集石土坑完堀



断面 (S-N)



1号埋設土器



断面



2号埋設土器



断面



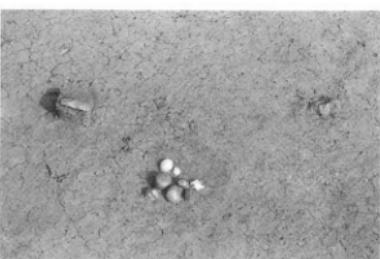
3号集石土坑検出



断面



3号集石土坑完掘



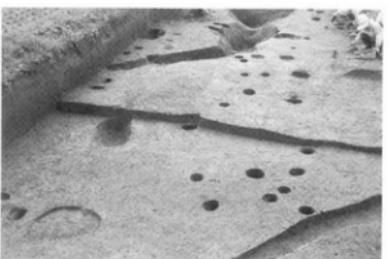
4号集石土坑検出遠景



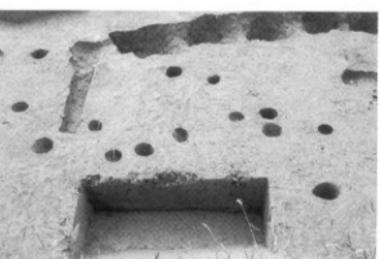
4号集石土坑近景1



4号集石土坑近景2



A柱穴状土坑群3 (IVD3(グリッド))



A柱穴状土坑群3 (IVD2(グリッド))

写真図版22 3・4号集石土坑、A柱穴状土坑群3



A柱穴状土坑群3 (IV D3eグリッド)



A柱穴状土坑群4 (III D6fグリッド)



調査終了 (東から)

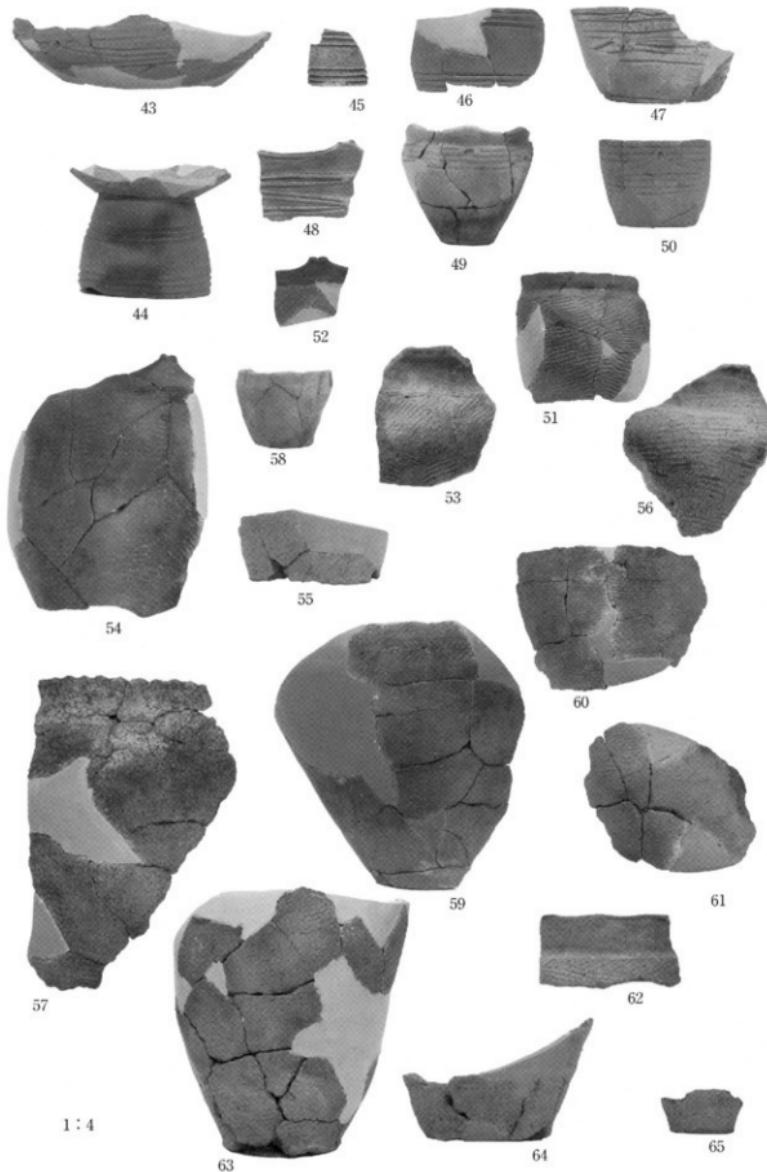


現地公開 (北上市立照岡小学校参加)

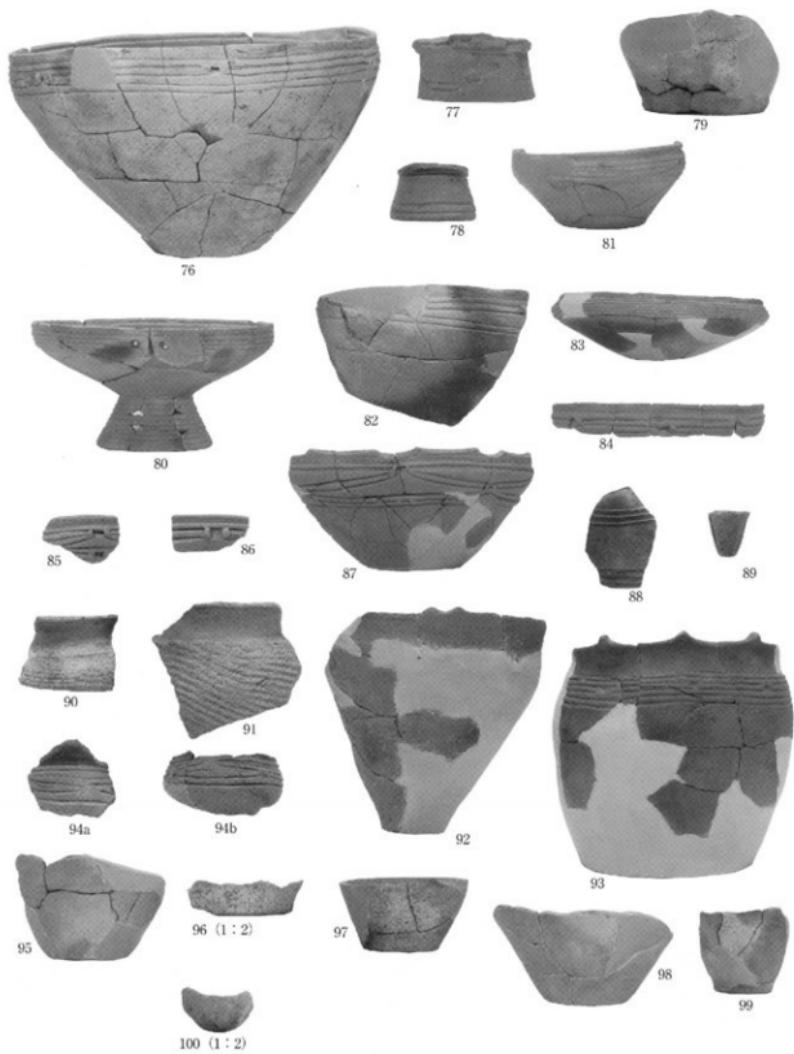


体験学習 (奥州市立大田代小学校)

写真図版23 A柱穴状土坑群3・4、その他

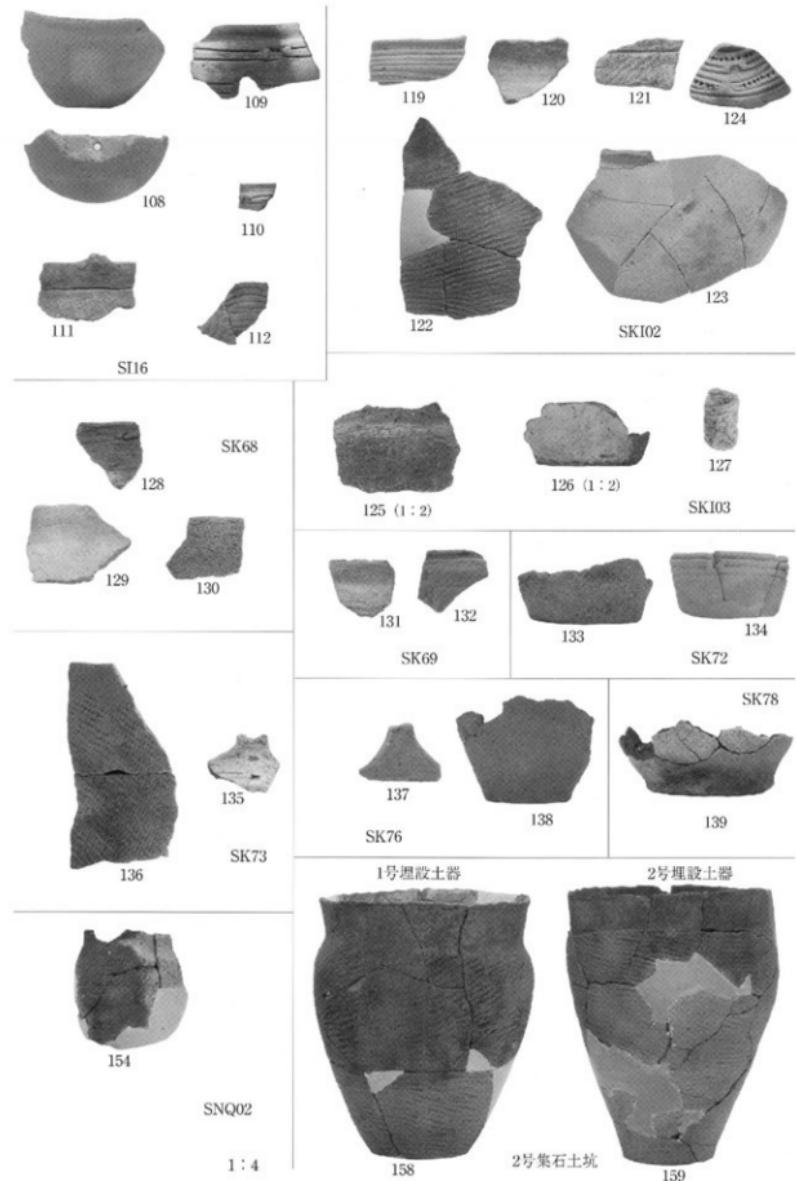


写真図版24 繩文・弥生土器 (1) SI14

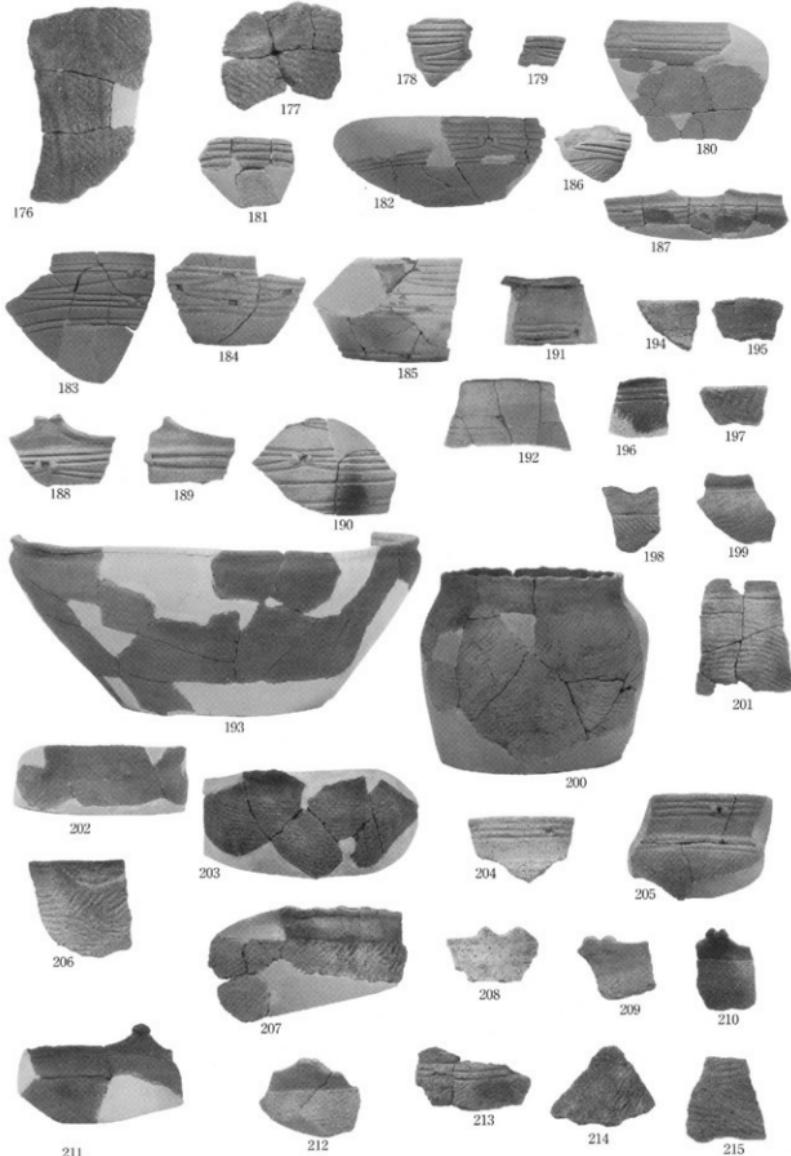


1 : 4

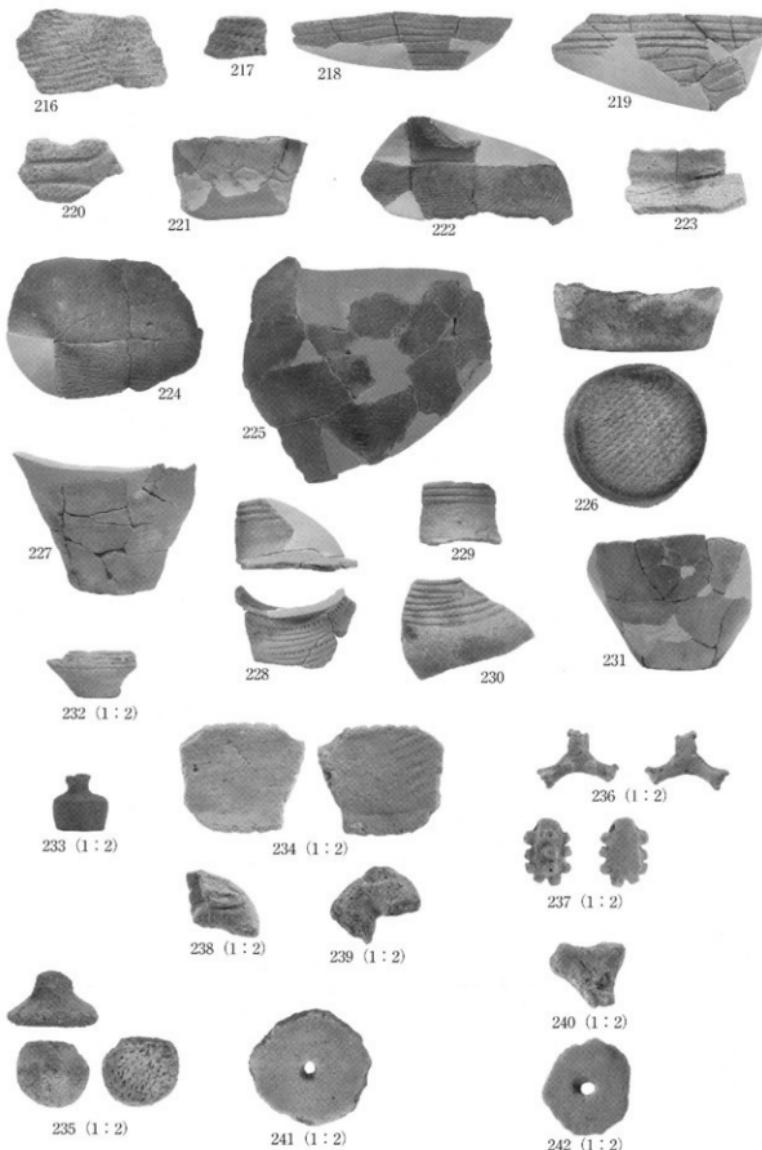
写真図版25 繩文・弥生土器（2）SI15



写真図版26 繩文・弥生土器（3）SI16その他遺構内

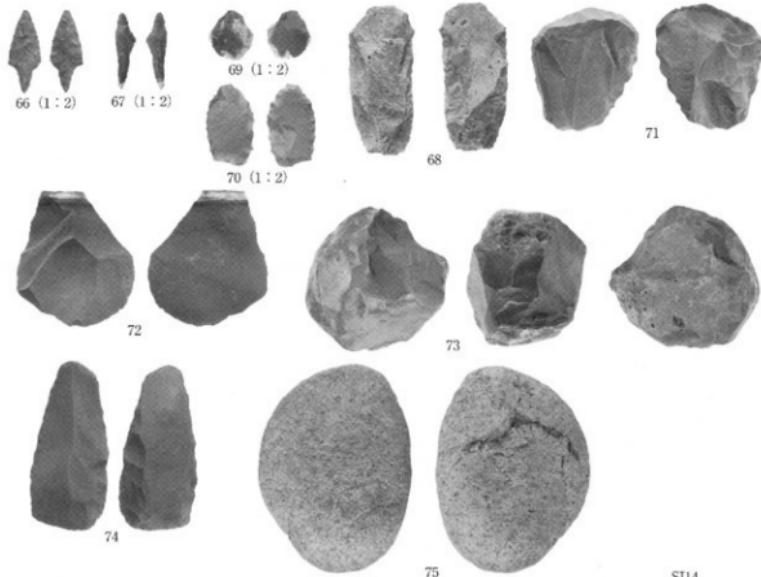


写真図版27 繩文・弥生土器（4）遺構外

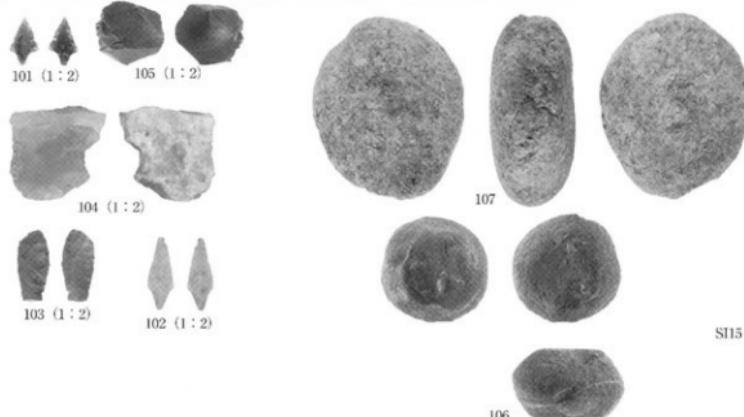


1 : 4

写真図版28 繩文・弥生土器（5）土製品



SI14

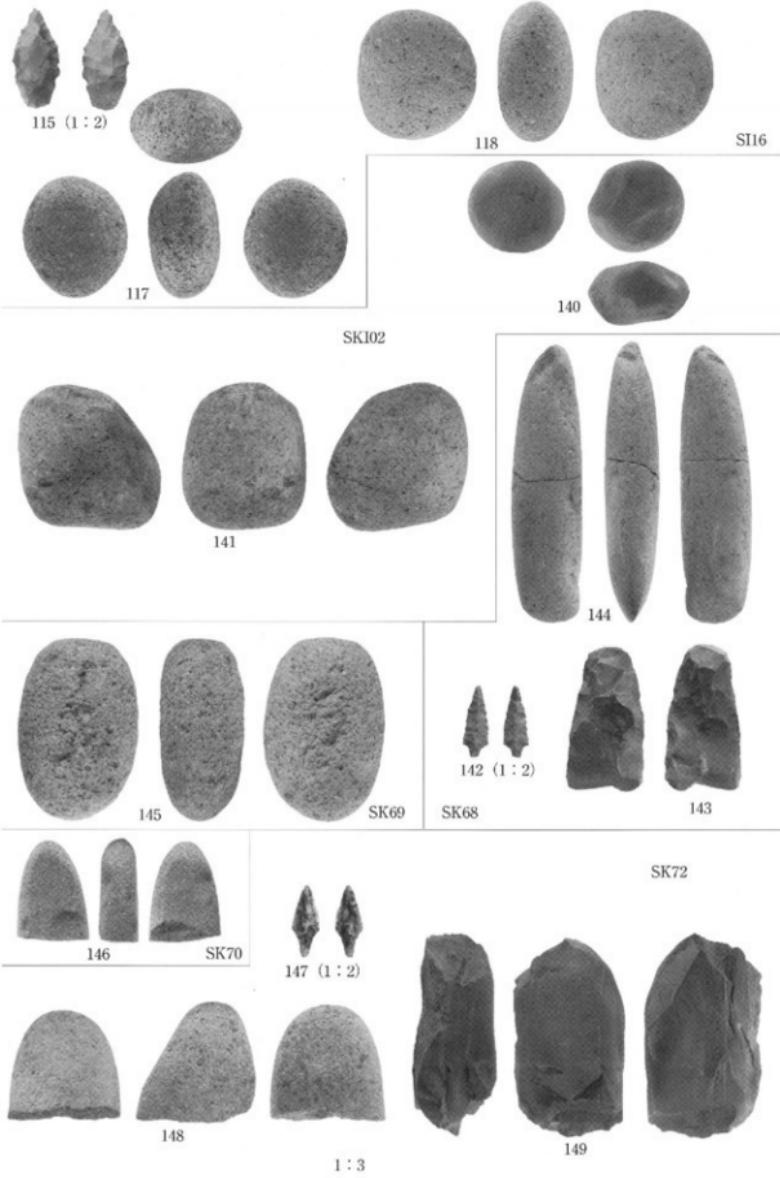


SI15

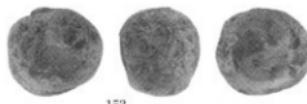
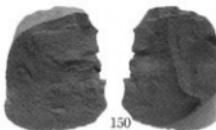


SI16

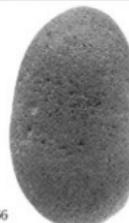
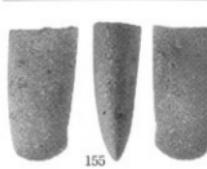
写真図版29 石器 (1) SI14~16



写真図版30 石器(2) SI16・SKI02～SK72



SK77



1号集石遺構

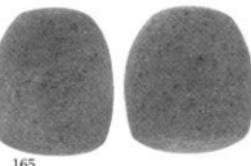


3号集石遺構



拡1:3

写真図版31 石器 (3) SK76~3号集石土坑



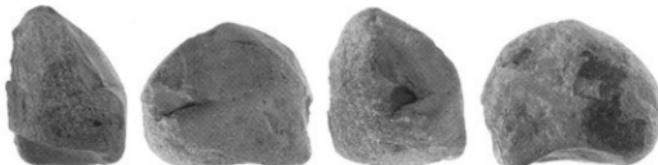
5号集石遺構



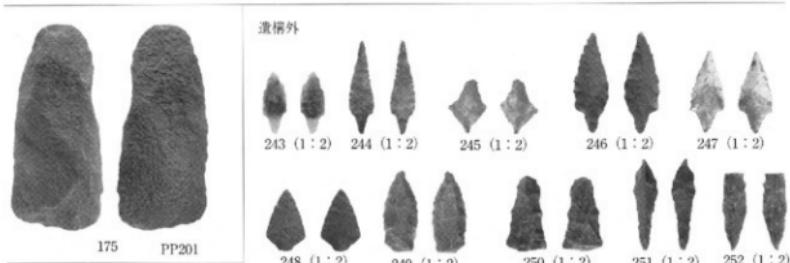
1:3

写真図版32 石器 (4) 4号集石土坑、5号集石遺構

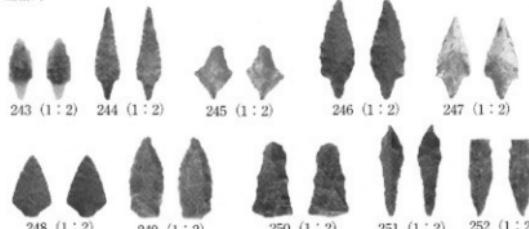
PP101



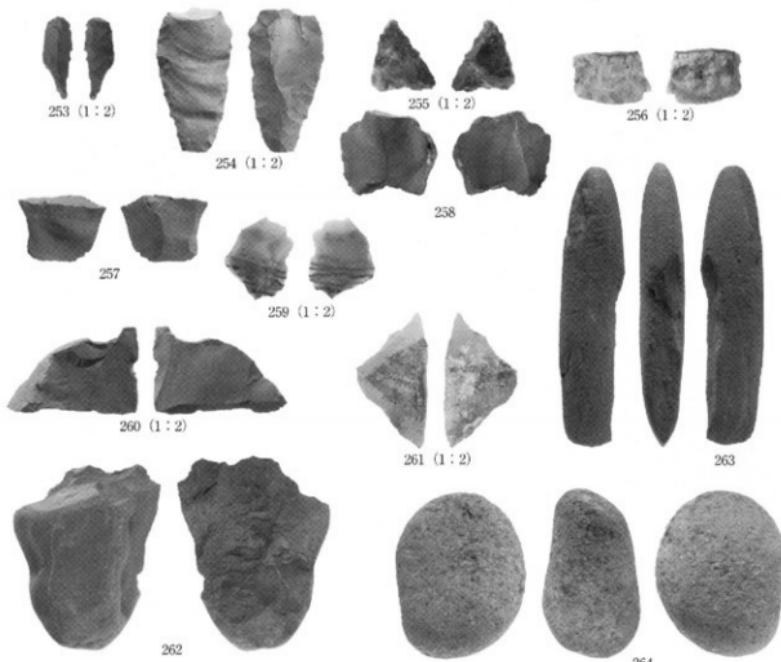
174.



遺構外



175 PP201



258

262

264

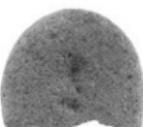
1 : 3

写真図版33 石器 (5) A柱穴状土坑群、遺構外①



265

266



267

268



269

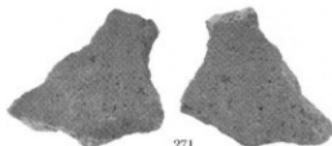


270 (1:5)



272 (1:2)

273 (1:2)



271

1:3

写真図版34 石器（6）遺構外②

V 平成21年度調査

1 調査の経過と概要

(1) 調査の経過

4年目の発掘調査は2550m²の面積を調査することになった。調査確認面積は現道部1350m²、現道拡幅部1200m²となる。調査期間は平成21年4月8日から6月15日で、作業員は20名の登録である。

まずは、調査区西側（G区）の調査から始めた。調査の結果、遺構は検出されず、遺物もないことから安全を考え埋め戻した。その後2箇所で3.50mまで重機で下げた結果、疊層が見え、文化面のないことを確認し、4月20日、現道拡幅部240m²の調査を終えた。

調査区H区は、最北部の表土剥ぎから調査をスタートし、隣接する住宅の水道工事を待って重機を入れて、住宅前のF区とともに4月20日から本格的に検出を開始した。

まずは、調査区の最北部から精査を開始し、柱穴状土坑や溝を検出精査し、下位面の確認後調査を終了し、土捨て場とした。F区やH区の中央部は、遺構が集中している区域があり、また柱穴状土坑も多く検出されたことから調査は難航した。5月11日、委託者と県教育委員会生涯学習文化課を交えた現地協議の結果、現道部の一部調査が必要と判断され、道路使用許可等の手続きが成されることとなった。その結果、6月15日までに終了することは不可能ということになり、調査は延長されることとなった。

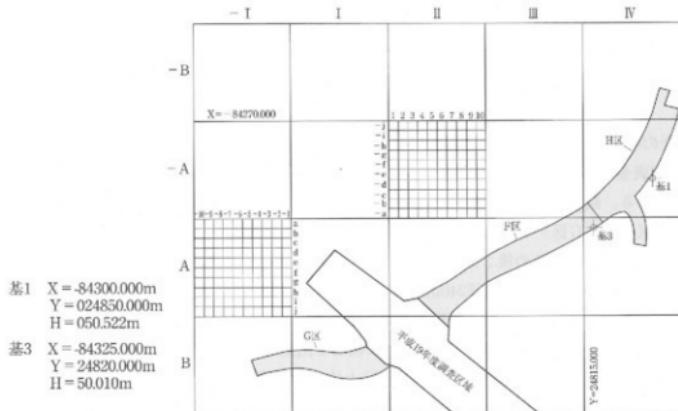
6月9日、現地公開を行い、北上市立照岡小学校5・6年生22人と引率教諭や教頭3人を含め、合計48人の参加を得た。

6月12日、道路使用が許可され、6月16日には現道の一部のアスファルトを剥がし、前年度遺構が検出された区域を含め、40m²の調査を開始し、調査面積は1240m²となった。

7月3日、終了確認が行われ、7月6日には航空写真撮影を実施し、同月10日に撤収した。なお現道部の復旧は、埋め戻しとともに7月14日に終了し、交通規制が解除されている。

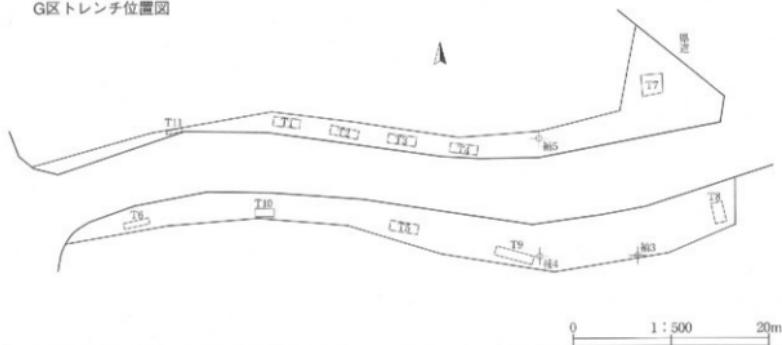
(2) 調査の概要（第47・48図）

最初に平成21年度に調査した県道バイパスの西側、G区について述べる。この区域は市道を挟んで両側の狭い区域での調査となり、最初に遺構と遺物の確認のために、現道拡幅部の北に6箇所、南に5箇所のトレチを設定し、層位の状況を確認した。北側のトレチ2（T2）では、表土から50cm下に炭化物を作った暗褐色土があるが、遺構の有無は確認できなかった。古代面と思われる黄褐色土面は、表土から1.2mほど下位に認められ、検出したが遺構は確認できず、遺物も出土しなかった。南側のトレチ5（T5）でも同様な様相であった。北側トレチ7（T7）では、古代面と思われるやや硬い黄褐色土面が認められた。上の堆積状況は、調査区F区に似ており、平成19年度調査区に近いことから遺構がある可能性があったが、木根の搅乱のみの検出となった。南側トレチ8（T8）では、地山（岩盤層）まで重機で下げたが、遺構や遺物はなかった。よって中心部の市道下も同様の様相と判断され、調査を終了している。遺物は表土から2点の磨滅した縄文土器破片（8.7g）が出土している。これらのことから、縄文時代から古代期にかけては、遺跡の西側は低湿地帯で、中世期では若干埋まるものの、中世以前は生活の場ではなかった可能性が高い。以上をもってG区の報告を終了とし、以後は触れない。

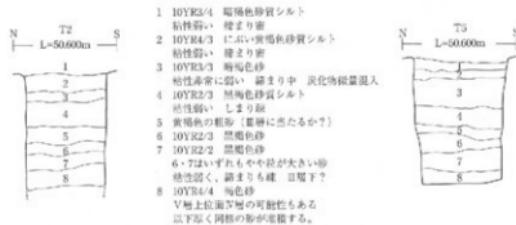


グリッド設定図2

G区トレント位置図



G区基本層序断面図



第47図 グリッド設定図2、G区トレント位置図

次に前年度に調査を終えた区域（県道バイパス東側の一部）と平成21年度に調査し検出された遺構や出土した遺物をまとめる。

竪穴住居跡は1棟検出した。H区の中央部で、VI層下面からⅦ層面での検出である。炉跡らしき焼土を中心には小さな壁の立ち上がりと大型の柱穴が検出されている。時期は、出土土器の特色から縄文時代中期後葉から末葉と考えられる。

竪穴住居状遺構は4基の検出で、そのうち3基はIV層下面での検出、1基はⅦ層上面での検出である。IV層下面から検出された3基は、床上や近隣からまとまって炭化物が検出されている共通点がある。そのうちの1基は、F区から検出されたもので、平面形は方形と推定され、床面から柱穴状土坑が検出されている。2基は重複しており、床面や埋土から鉄製品や羽口片などが、また14世紀の中国青磁器も出土している。IV層下面から検出された3基は、中世期に属する可能性がある。Ⅶ層面で検出された1基は、炭化物から縄文土器が出土している。

土坑は58基検出された。検出面は、V層上面とⅧ層下面の2つに分かれる。V層上面検出のうち、2基は壁が焼成を受けているもので、16基は平面形が方形に近いもの、2基は細長い楕円形状になるもの、21基は円形のものである。Ⅷ層上面検出のもので、2基は底面に炭化物や焼土が検出されたもの、15基は円形を基調としたものである。時期は、V層上面のものは中世期に、Ⅶ～Ⅷ層検出のものは、縄文時代中期後葉から弥生時代にかけてのものと考えている。

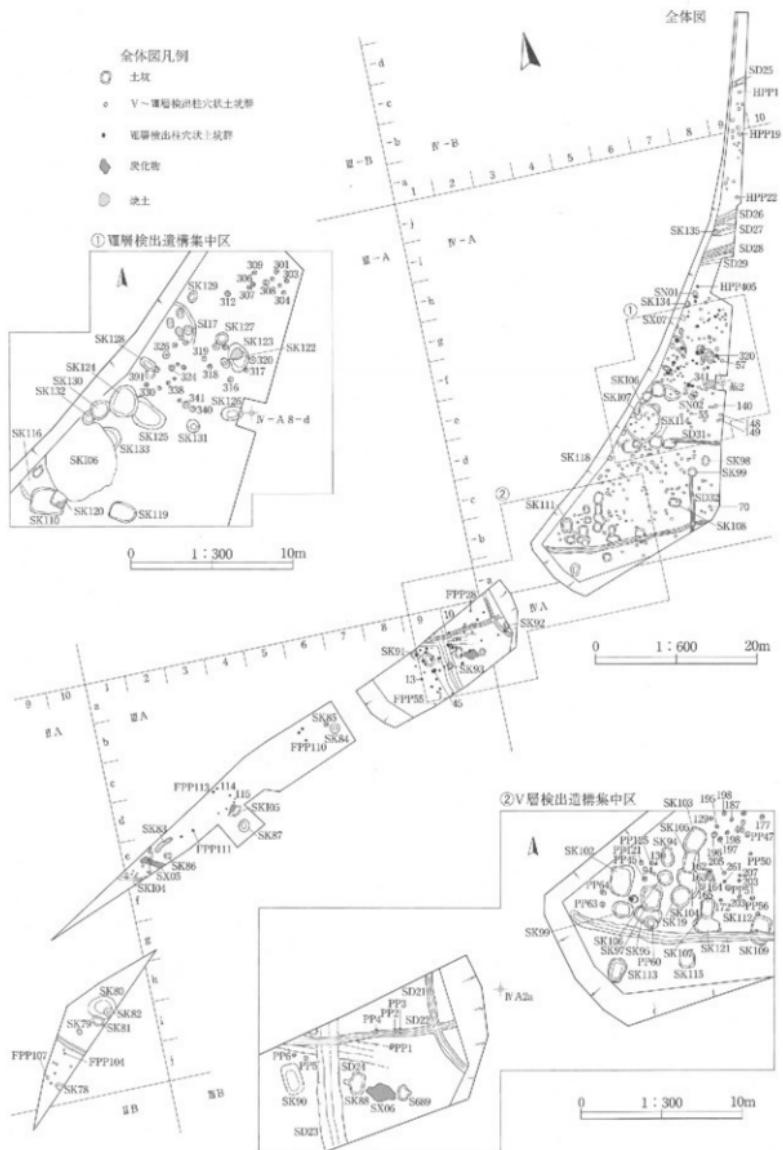
焼土は2基で、1基はV層上面での検出で、1基はVI～Ⅷ層検出である。

溝は11条検出された。すべてがV層上面のもので、時期としては中世から近世の時代観が与えられる。特徴として区画溝的な役割を担う小型で長く延長するものと、大型で排水を目的としたであろうものに分かれる。大型のものは焼成土坑2基を開むように伸びていることから関連が考えられる。

柱穴状土坑は362個検出され、検出面はV層上面（F柱穴状土坑群の一部、H柱穴状土坑群1・2）とⅧ層下面（F柱穴状土坑群のほとんど、H柱穴状土坑群2の一部、H柱穴状土坑群3）に分かれる。V層上面のものは、口径もほぼ一定しており大型で深さもある。埋土から鉄製品や陶磁器などが出土している。これらの時期は、古代から中世にかけての遺構であるが、中世期に属する可能性が高い。下面のものは小型であり、縄文時代から弥生時代にかけての遺構である。

その他では、炭化物の集中している箇所が3箇所確認された。

遺物は、縄文・弥生土器が大コンテナで5箱出土している。詳細は平成20年度に調査した分が839g、平成21年度調査分が46511gの計47350gである。古代・中世土器では土師器3点、須恵器15点、かわらけ1点が出土している。縄文土器は、大半が縄文時代中期後葉から末葉にかけての土器で、他には少量であるが後期前葉、晩期中葉のもの、弥生土器がある。陶磁器は8点の出土である。中国産の磁器や渥美産の陶器などがある。石器（不明礫石器を含む）は中コンテナ3箱で、黒曜石の石鎚や頁岩性のスクレーパーなどがあるが、磨石状の不明な礫が多い。その他では鉄製品が32点（473.4g）出土している。種類としては刀子状、棒状、釘状、板状、玉状などがある。鉄滓類は1535.1gの出土である。また羽口と思われる破片が15点（747.6g）、不明粘土塊が大小含めて8点（104.2g）、古銭1点が出土した。



第48図 滞横配置図（平成21年度調査区）

2 検出遺構と出土遺物

平成20年度調査では、時期ごとに分けて報告したが、ここでは遺構ごとに区分する。各項目を検出順に説明しており、時期については、V 4でまとめている。

(1) 壺穴住居跡と壺穴住居状遺構

①壺穴住居跡

S I 17壺穴住居跡 (第49・76図、写真図版37・65)

〔位置・検出状況〕 IV-A 6・7-e・fグリッドに跨って位置する。当初、V層下から纏まって土器が出土した範囲を、住居跡の可能性を持って精査したが、叶わずベルトを外したところ、北側がわずかながら壁状に立ちあがっていることを確認し、焼土や柱穴状土坑が認められることから、住居跡とした。遺構の南側は不明のままとなっており、推定線も入れていない。また、写真図版37の平面写真は、遺構北側の完掘状況を撮影している。

〔重複・隣接関係〕 同一面での重複は把握していない。しかし、南側に位置するSK128土坑やSK123・124土坑などは重複もしくは隣接する可能性がある。北側でSK129土坑と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、やや赤みのある黒褐色土が主体となる。炭化物と伴に土器片が出土する。自然堆積である。隣接するSK123土坑などにみられる、水性堆積性の鉄歛分は確認できない。

〔平面形・大きさ〕 南側が欠損するために、平面形は定かではないが、楕円形基調であろうと予測する。大きさも判別できない。

〔断面形・深さ〕 北側壁は、浅いが緩やかに立ちあがっている様子が見える。検出された深さは、北壁で13cmを測る。

〔炉跡〕 北側床面で、2基の炉跡を検出した。最初に検出した1号炉跡は、赤褐色土の縁まりはあるが、深さが非常に薄く断面図にできなかった。床面をやや下げたところで検出した2号炉跡は縁まりがあり、土器片を含む。平面形は楕円形状で、規模は80×50cmを測る。焼上の深さは、最大で6cmであるが、10cmほど掘り込みが認められる。形態は地床炉で、やや床面より下がると想定する。

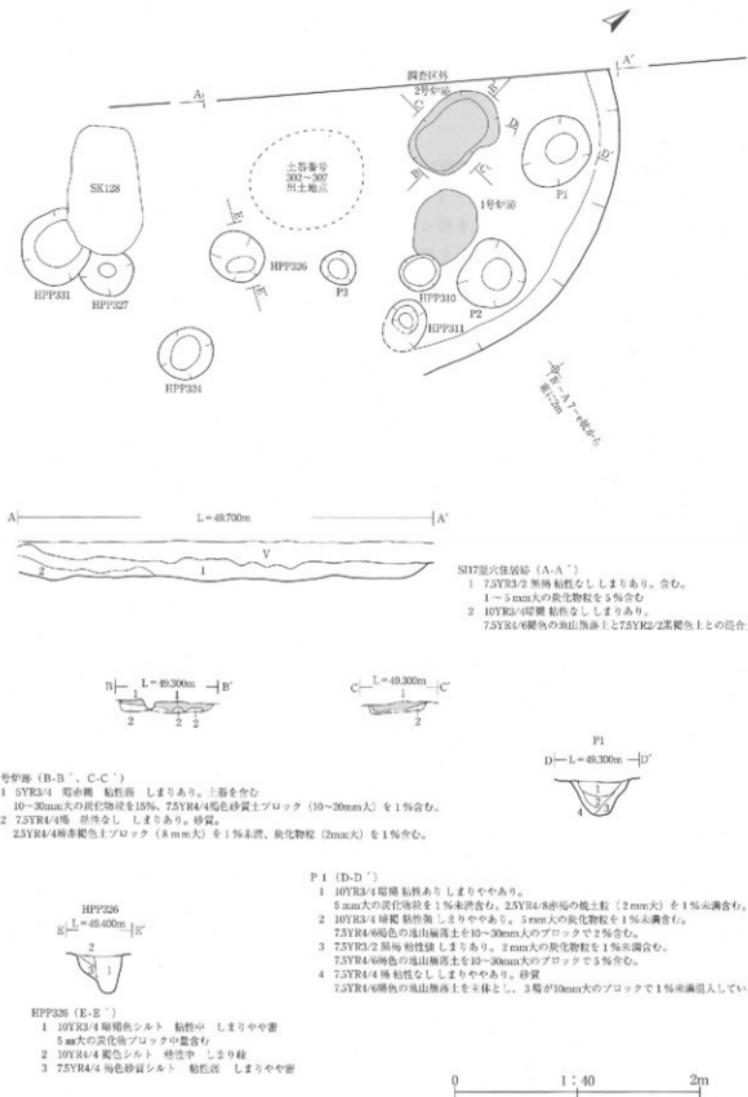
〔柱穴〕 北側床面から3基の柱穴状土坑を検出した。P1・2は大型で、開口部径は50~60cmを測る。深さはP1で最大37.3cm、P2で最大18.8cmを測る。これらのことからP1は住居跡の主柱穴の可能性がある。P3は開口部径25cm、深さ10cmとなっている。

〔出土遺物〕 土器は遺構の登録が遅かったために294g程の出土量となった。初期段階で住居跡の可能性を想定して、グリッド(IV-A 6-e)で取り上げた土器は3876.4gある。その土器が集中して出土した位置は図に示しており、遺構内として掲載した。301は唯一住居跡として登録したために掲載した深鉢の破片である。302~308はすべて、グリッドで取り上げた土器で、出土位置は図面に点線で示してある。

302から304は同一個体と考えられる大型の深鉢の破片である。やや内湾し、体上部で膨らむ器形と考えられる。SもしくはJ字状のモチーフが描かれる。305は地文に複節斜縞文が施される。306は内が丁寧に磨かれ、307は縦位の縦条体H形縞文、308は隆体を施す。

〔その他〕 南側で検出された柱穴状土坑群の内、住居跡の床面に広がりそうな6個を図面に載せている。このうちPP310・311・326が住居跡に関わるもの可能性がある。土器が集中して出土した範囲も考慮に入れると、平面形は楕円形で、北側に地床炉を持つ住居跡となるが、推定の域を出ない。

〔時期〕 時期は、出土土器から縞文時代中期後葉から末葉と考えられる。



第49図 SI17 壓穴住居跡

②堅穴住居状遺構

大型の住居状のプランを持つことから堅穴住居状（SK1）としているが、個々に様々な性格を持っている。本来であれば冠名も変更するべきではあるが一括する。また、時期についても縄文時代から中世に亘っており様々である。よって特色と時期については、【遺構の性格・時期】と項目をつけて、それぞれで述べている。

SK104堅穴住居状遺構（第50図、写真図版38）

〔位置・検出状況〕 調査区F区北側で平成20年度に検出した遺構である。II A10e・III A1eグリッドに跨って位置する。検出はⅢ層（褐色砂層）を除去した下位面で、褐色砂層が残存するプランが現れた。窪みと考えたが、下位に周囲とは違う暗褐色土の入り込みを検出し、精査の結果、壁のある堅穴住居状遺構と登録したものである。よって検出面は、Ⅲ層下のV層上面となる。

〔重複・隣接関係〕 埋土の上位（当遺構の東壁付近）からSX05炭化物集中が検出されている。遺構の半分が北側の調査区外に広がる。南東壁の一部が、南側確認調査区（市道下）に広がる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、上位にⅢ層由来の層があり、主体は黄褐色粘土や炭化物を混入させる暗褐色土である。下位にグライ化粘土があり水性堆積の可能性がある。遺構の北東側に黄褐色土があるが、これらはSX05炭化物集中に関連する可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は、遺構のほとんどが調査区外に延びるために定かではないが、方形を呈すると予測される。遺構の南東部は、やや張り出す可能性もある。主軸方位は北東一南西に傾く。大きさは判別できない。

〔断面形・深さ〕 壁は、南西壁がやや立ち上がるのが確認された他は、小さな壁でしかない。特に東壁は不鮮明になっている。

〔柱穴状土坑〕 遺構を住居状と登録した理由は、底面から柱穴状土坑が検出されたことが要因の1つとしてあげられる。全部で12個検出した。口径や深さは表に表しているが、これを見ると實際に位置するP2・P7・P12が深い。口径の大きなP1やP10は深さがない特色がある。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格・時期〕 遺構は、半分が調査区外に広がり定かではないが、堅穴建物跡状である。時期は検出面や埋土から中世と考えられる。

SK105堅穴住居状遺構（第51・76図、写真図版39・65）

〔位置・検出状況〕 調査区F区北側で平成20年度に検出した遺構で、平成21年に遺構の南側を補足調査している。III A3・4 dグリッドに跨って位置する。検出面はⅢ層下からⅣ層上面である。周辺は、土器が出土したが、プランが立たなく下げ過ぎている。南側で、土器と共に炭化物や、壁溝などを検出したことから住居状とした。

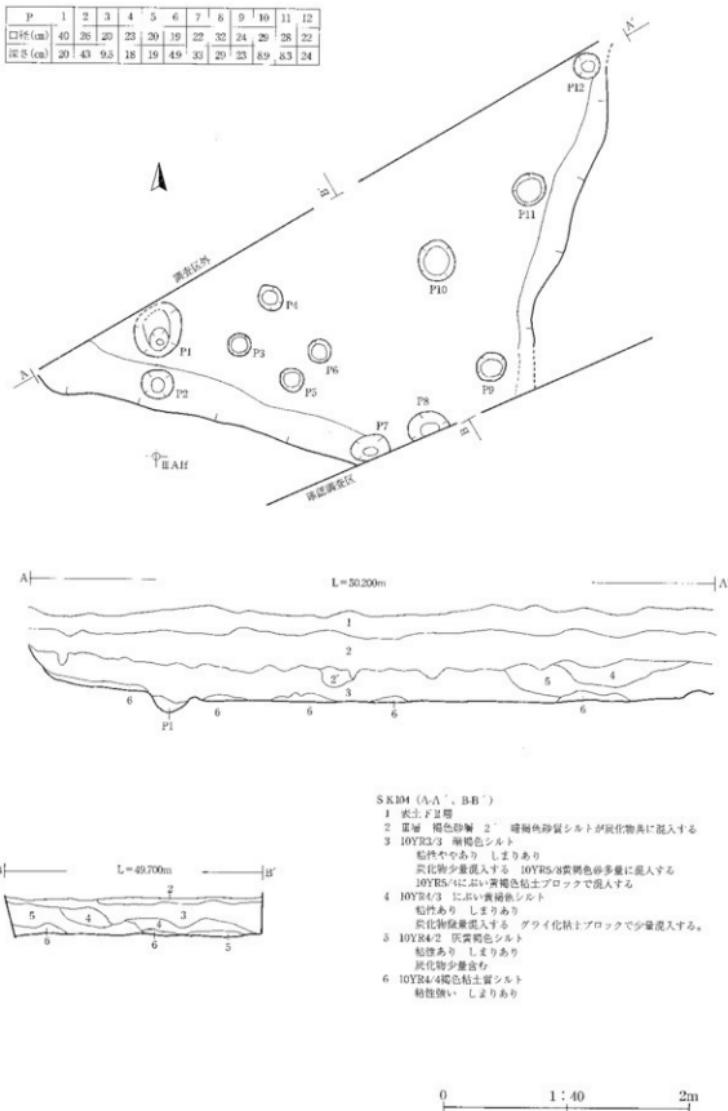
〔重複・隣接関係〕 重複はない。同一面で近隣に遺構はない。

〔埋土・堆積状況〕 埋土断面図に見える7はⅣ層、5は炭化物を含む暗褐色土で床面上としたが、掘り過ぎかもしれない。埋土の主体は1・2の黄褐色の粘土を含む暗褐色土で、土器片を含む。

〔平面形・大きさ〕 平面形は指円形を呈すると予測される。大きさは不明である。

〔断面形・深さ〕 東側と南側に、浅い壁状の立ち上がりを認めたが、深さは4cm足らずである。

〔炭化物〕 遺構の南東側で炭化物の集中した範囲を検出した。不整な指円形状に広がる。規模は、110×60cmを測る。上位に若干であるが、赤褐色の焼土を検出し、炭化物の深さは10cmを測る。円形



第50図 SKI04堅穴住居状遺構

の掘り方も確認され、大きさは75×65cmを測る。

〔床面施設〕 炭化物の周囲には、幅6～10cm程の溝が巡っている。壁溝の可能性がある。遺構南側からは8個の柱穴状土坑を検出した。大きさや深さは表に示した。また、北側では3個の柱穴状土坑を検出しており、遺構に関連する可能性もある。

〔出土遺物〕 出土土器量は59.2gである。掲載は2点(309・310)で同一個体とみられる。縦位の沈線で楕円形の区画を施す。隆線上が磨かれる。小柄な深鉢の可能性が高い。

〔遺構の性格・時期〕 柱穴状土坑の位置や、壁・溝の形状から、平面形が楕円形を呈す住居状遺構の可能性があるが判然としない。時期は出土遺物から、縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

S K I 06堅穴住居状遺構(第52・53・76・86図、写真図版40・41・65・71・72)

〔位置・検出状況〕 IV-A 5・6-c・dグリッドに跨って位置し、北西側は調査区外に広がっている。V層下面での検出である。検出段階では、北壁～東壁が南西側に30～140cmほど小さいプランとして捉えて、セクションの写真撮影・実測を行ったが、炭化物の範囲が北側に広がることや北東側の壁の立ち上がりが不明瞭であったことから、サブトレントを設定し、確認を行った。すると、P 3周辺で明瞭な壁の立ち上がりが確認でき、図のような形状の遺構となった。

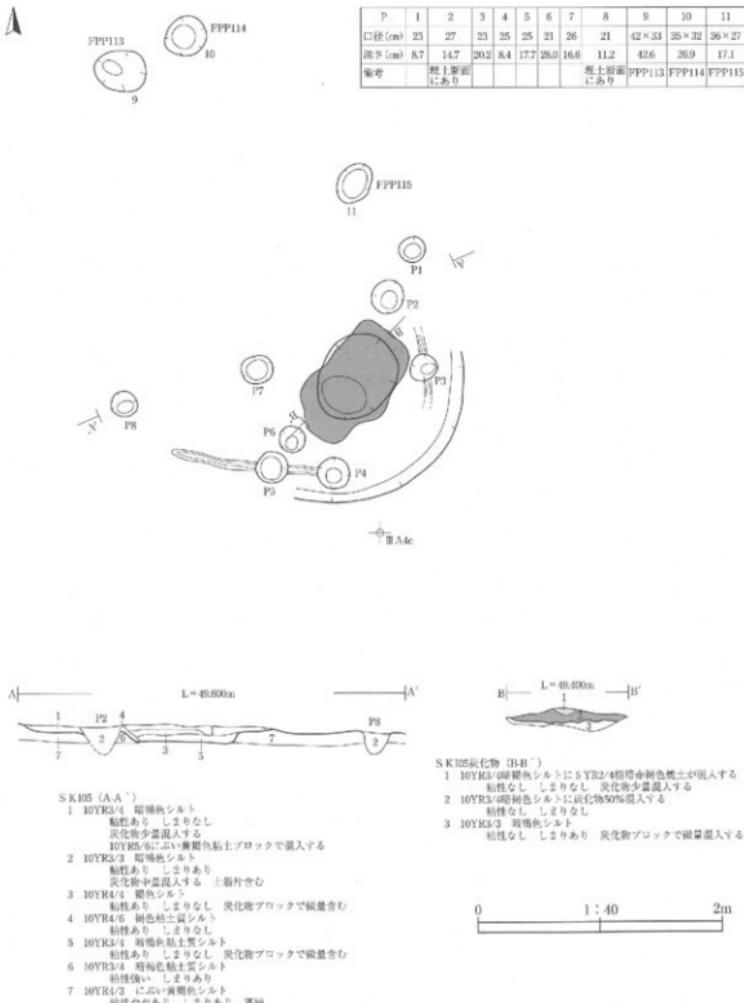
〔重複・隣接関係〕 S K I 07堅穴住居状遺構・S K 110・114土坑・P P 155・157と重複し、S K I 07堅穴住居状遺構・P P 155・157より古く、S K 114土坑より新しい。S K 110土坑との関係は重複する部分が一部であるため、新旧関係を把握することができなかった。周囲には同一検出面の柱穴状土坑が多数確認されている。

〔埋土・堆積状況〕 色調や混入物等により10層に分層され、1層は根摺乱状の堆積層、9・10層は周溝の堆積層である。全体的に炭化物や焼土粒を含み、下部は暗褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルト層、中間部～上部は暗褐色シルト主体の堆積層・黒褐色シルト主体の堆積層・暗褐色シルト主体の堆積層の互層になっている。中間部～上部にかけての黒褐色シルト主体の堆積層には多量の炭化物が混入する。全体的に三角形状もしくはレンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積の可能性が高いと考えられるが、3層のように、炭化物が多量に混入する堆積層もあり、部分的に人為的な堆積層も介在している可能性がある。

〔平面形・大きさ〕 平面形は歪な隅丸方形を呈す。調査区内で確認できた大きさは長軸458.5cm、短軸443.5cmを測る。P 5とP 10を結んだラインで柱穴が対称的な配置となるため、そのラインを中心線と判断した。その線を主軸方向とすると、N-24°-Wで西北西を向く。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は調査区内では全周に確認でき、底面から緩やかに立ち上がる。北東壁は上半で開き気味になる。深さは最大で57cmを測る。

〔その他〕 本遺構に伴うものとして、土坑を1基、柱穴状土坑を16個、周溝を検出した。土坑は長軸80cm、短軸64.5cmの洋梨形で、P 5とP 10を結んだラインのP 10に近接した位置にある。明黄褐色シルト・炭化物・酸化鉄粒を含む黒褐色シルトの単層である。ほぼ全面で柱穴状土坑を検出し、P 5とP 10を軸にP 1～P 9がシンメトリーな配置を呈す。軸より北東側のものが大きく、開口部で30～34cm、深さ17～47cmである。南西側は、開口部の大きさで18～23cm、深さ11～16cmである。その他の柱穴状土坑の大きさは17～24cm、深さ6～32cmである。埋土はP 3以外が単層で、炭化物や焼土粒、褐色シルト・黄褐色シルト・灰黄褐色シルトを含むものが多い。P 1・5・6・9・11・12・16が暗褐色シルト主体、P 2・10が黒褐色～暗褐色シルト主体、P 4・7・8・13～15が黒褐色シルト主体である。P 3は上部が暗褐色シルト主体、下部が褐色シルト主体である。周溝は断続的に検



第51図 SKI05堅穴住居状遺構

出され、北側約半分を巡る。埋土は暗褐色シルトを主体とするが、西側がやや明るい。

〔出土遺物〕 繩文時代から中世までの幅広い時代の遺物が見られ、縄文土器は周溝・床面直上から堆積土上位まで様々な場所から計1849.3g、古代土器は床面直上から堆積土の中間部で計3点、かわらけは堆積土の中間部から1点、磁器は埋土上位から1点、不明粘土塊を含む羽口片は埋土下位から計141.1g、鉄製品は埋土から計3点(39.4g)、鉄滓類は埋土から45.7gが出土した。このうち、縄文土器2点、須恵器2点、かわらけ1点、青磁1点、羽口1点、鉄製品2点、鉄滓を掲載した。土器311・312はSK124・125土坑出土に類似する土器で、沈線で区画され、磨り消しが施される。313~315は古代の土器である。316は小破片のため写真掲載となつたが、中国産の青磁器と思われる13~14世紀代の年代が与えられる。M15.6g出土した羽口片の内、状態のよい415を写真掲載した。鉄製品417は板状で憩道具と考えられる。鉄滓類440は溶着滓と思われる。

〔年代測定〕 埋土下位で炭化物が出土したため、年代測定を行ったところ、AMS測定値で 670 ± 30 yrBPという結果となった。詳細は本章3節の分析鑑定を参照して頂きたい。

〔遺構の性格〕 P5とP10を軸としたシンメトリーな柱穴配置、周溝の存在等から上層構造を持つ道構であるのは確かであるが、カマドや炉が伴わず、住居とするには決定的な根拠が見られない。何らかの作業場の可能性が想定される。

〔時期〕 検出面やAMS測定結果から判断すると、13世紀後半~14世紀の遺構の可能性が高い。

SK107堅穴住居状遺構 (第53図、写真図版41・71・72)

〔位置・検出状況〕 IV-A5-dグリッドに位置し、北西側の大部分が調査区外に広がっている。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK106堅穴住居状遺構・PP155と重複し、本遺構が前者より新しい。後者とは一部のみの重複であるため、新旧関係を把握することができなかつた。

〔埋土・堆積状況〕 焼土の周辺以外は褐色シルト・炭化物・焼土粒を含む黒褐色~暗褐色シルトの單層である。残存状態が悪く、人為か自然かの判断はできなかつた。

〔平面形・大きさ〕 大部分が調査区外に広がっているため、詳細な平面形や大きさは不明であるが、残存する部分から判断すると、平面形は円形もしくは椭円形を呈するものと考えられる。

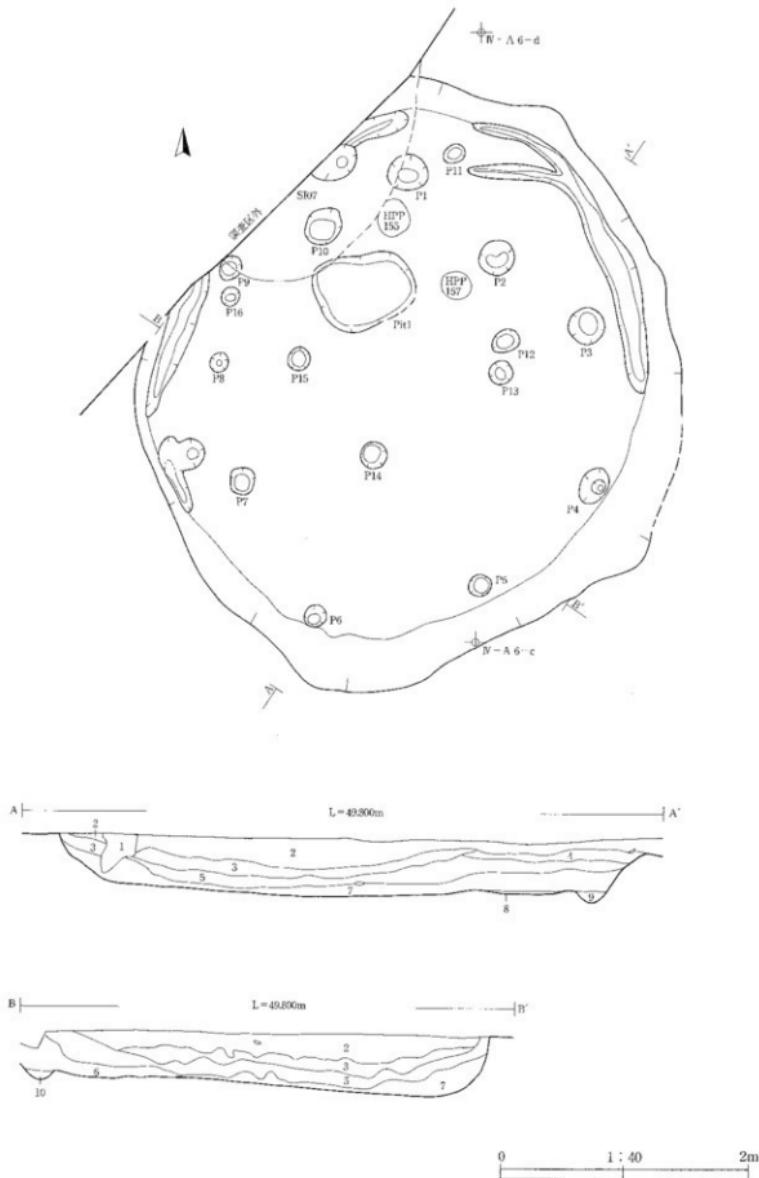
〔断面形・深さ〕 南壁の一部しか確認できないため、詳細な形状は不明である。確認できた部分での最大の深さは26cmを測る。

〔その他〕 底面で長軸46.5cm、短軸45cmの不整形に広がる焼土を検出した。暗赤褐色を呈する焼土層が最大で4cmの厚みを持つ。この焼土周辺のみに、炭化物・炭化物と暗褐色シルトの混合土が広がっている。地床炉の可能性もあるが、本遺構の全体像が把握できないため、焼土として扱った。

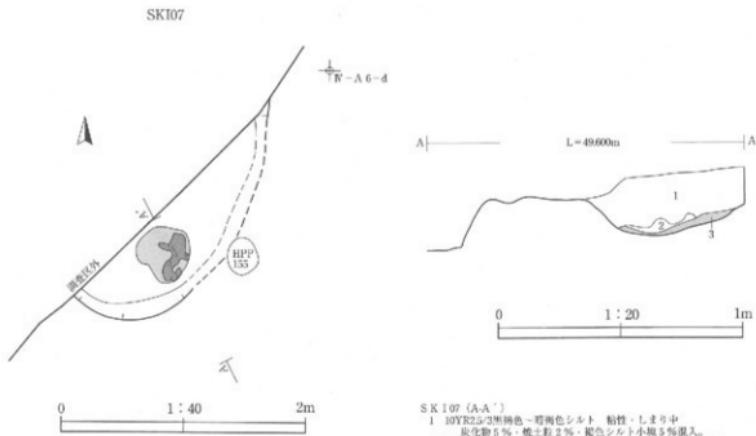
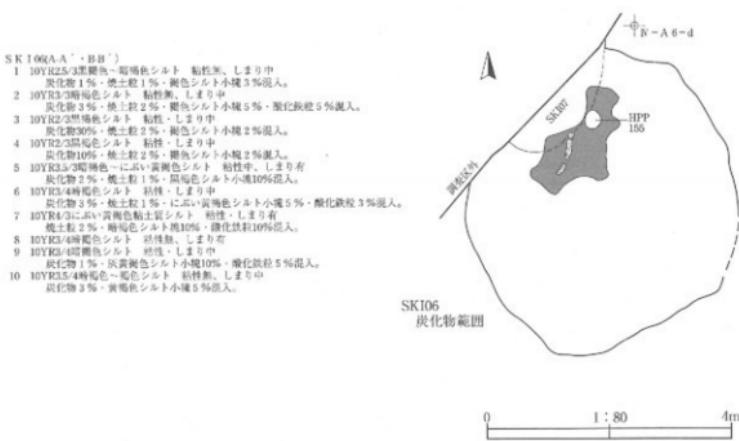
〔出土遺物〕 埋土から縄文土器片60g、羽口片59.3g、鉄滓1.9gが出土した。このうち、羽口1点(418)を写真掲載した。

〔遺構の性格〕 堆積土からであるが、羽口片や鉄滓が出土していることや、本遺構周辺の造構外からも羽口片や鉄滓が出土していることを考慮すると、鍛冶に関係する遺構の可能性が想定される。

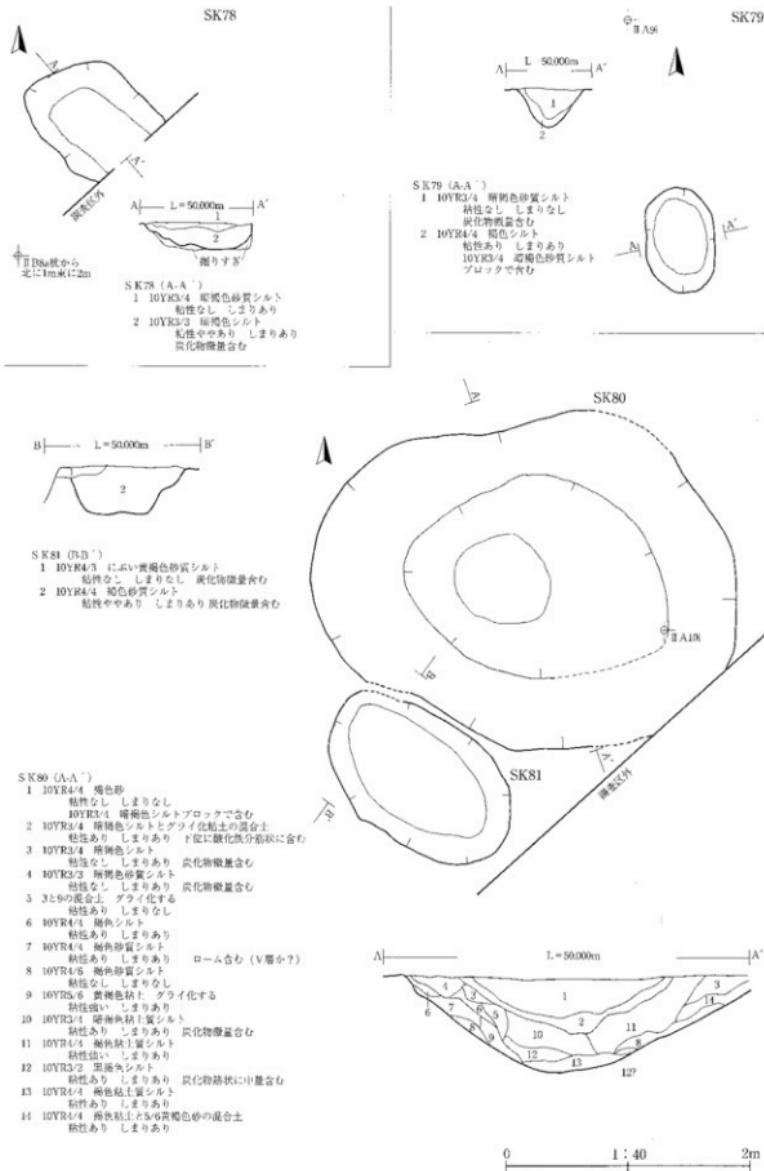
〔時期〕 検出面から中世~近世の遺構の可能性が高いが、時代を特定できる遺物がないため、詳細な年代を提示できない。



第52図 SKI06堅穴住居状遺構 (1)



第53図 SK106豎穴住居状造構(2)、SK107豎穴住居状造構



第54図 SK78~81土坑

(2) 土 坑

ここで扱う土坑は、いわゆる掘り込みの見られる坑を一括して扱っており、その種別は本文の中で記載している。その中で、平成20年度の入骨が出土している土坑は、墓壙と明記しているが、平成21年度検出の墓壙は可能性として止めていることから、土坑のままとなっている。また、上述した通り、平成20年度で検出した土坑（F区検出土坑、S K78～87土坑）を先に説明している。平成21年度分ではF区で検出したものを先に取り上げた。

S K78土坑（第54図、写真図版42）

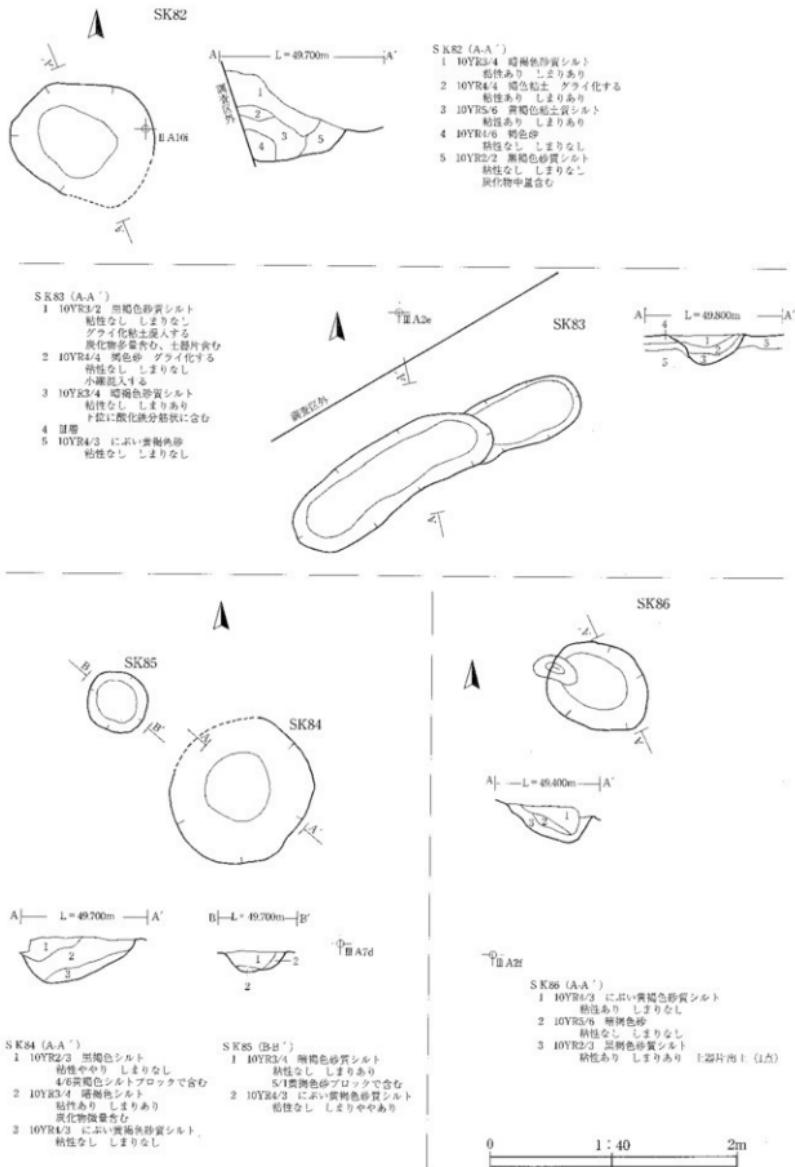
- 〔位置・検出状況〕 調査区F区南側Ⅱ A 8 j グリッドに位置する。V層上面での検出である。
- 〔重複・隣接関係〕 重複はない。南東側が調査区外に広がる。
- 〔埋土・堆積状況〕 暗褐色シルトを主体とする自然堆積である。
- 〔平面形・大きさ〕 平面形は、隅丸の長方形を呈すと推測され、大きさは短軸で、開口部径84cmを測る。
- 〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、壁はなだらかに立ち上がる。深さは、西壁で17cmを測る。
- 〔出土遺物〕 ない。
- 〔時期〕 検出面から古代から近世にかけての遺構と捉えられる。

S K79土坑（第54図、写真図版42）

- 〔位置・検出状況〕 調査区F区南側Ⅱ A 9 i グリッドに位置する。V層上面での検出である。
- 〔重複・隣接関係〕 重複ではなく、南西に2m離れて S D20溝跡が南北に横切る。
- 〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色土、下位に混合土が埋まる人為的堆積の可能性がある。
- 〔平面形・大きさ〕 平面形は梢円形状で、大きさは開口部径で、86×57cmを測る。
- 〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大で36.1cmを測る。
- 〔出土遺物〕 ない。
- 〔時期〕 検出面から古代から近世にかけての遺構と捉えられる。

S K80土坑（第54図、写真図版42・65）

- 〔位置・検出状況〕 調査区F区南側Ⅱ A 9・10 h・i グリッドに跨って位置する。やや厚く堆積するⅢ層（砂層）を除いたIV層下面での検出である。
- 〔重複・隣接関係〕 南西側で S K81土坑と隣接する。S K82土坑は底面で検出されている。
- 〔埋土・堆積状況〕 最上位に褐色の砂、中位にグライ化された粘土、下位に炭化物を含む暗褐色土が埋まる。自然堆積であると推測される。
- 〔平面形・大きさ〕 平面形は梢円形状で、大きさは開口部径で345×276cmを測る。
- 〔断面形・深さ〕 断面形は大型の皿形状で、壁はなだらかに立ち上がる。中央部がやや平坦で、深さは最大で72cmを測る。
- 〔出土遺物〕 埋土上位から317（写真掲載）ほか、28gの磨滅された繩文？土器片が出土しているが、流れ込みと考えられる。
- 〔時期〕 検出面から、古代から中世の遺構の可能性があり、後述する S K81土坑との関連も考えられる。



第55図 SK82～86土坑

S K 81土坑（第54図、写真図版42）

〔位置・検出状況〕 II A 9 i グリッドに位置する。検出状況は S K 80土坑同様である。

〔重複・隣接関係〕 S K 80土坑と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、S K 80土坑の埋土上位と類似する砂質褐色シルトの単層で、人為的堆積状である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、大きさは開口部径で174×105cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、壁がやや角度を持ち、底面が平坦となる。深さは北東側壁で38.7cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 古代から中世の遺構と考えられる。

S K 82土坑（第55図、写真図版43）

〔位置・検出状況〕 II A 9 i・j グリッドに跨って位置する。S K 80の底面で検出した。S K 80土坑に関わるもの可能性もあるが、別造構として報告する。西側が調査区外にある。

〔埋土・堆積状況〕 グライ化した褐色砂や粘土に覆われ、下位に比較的炭化物が多く検出された。

〔平面形・大きさ〕 平面形は略円形で、大きさは開口部径で100cm前後と推測される。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状である。深さは、S K 80土坑の底面から10cm程度である。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 時期は不明である。

S K 83土坑（第55図、写真図版43）

〔位置・検出状況〕 調査区F区北側Ⅲ A 1・2 c グリッドに跨って位置する。検出面はⅢ層上面である。

〔重複・隣接関係〕 南東側に1m離れて S X 05炭化物が、南側には S K 86土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に炭化物を含む黒褐色土、下位にグライ化されたシルトが覆う。

〔平面形・大きさ〕 平面形は東西に長く延びる楕円形状で、2つの土坑が重複している様相が見える。大きさは、開口部径で250×54cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、壁は角度をもって立ち上がる。深さは北壁が、最大で15.2cmを測る。東側は浅く8cm程度である。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出面から中世から近世の遺構と捉えられるが判然としない。

S K 84土坑（第55図、写真図版43）

〔位置・検出状況〕 調査区F区北側Ⅲ A 6 c グリッドに位置する。検出面は最終面Ⅶ層下面である。

〔重複・隣接関係〕 北西側で S K 85土坑と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 黒～暗褐色シルトを主体とした自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、大きさは開口部径で120×110cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、壁はなだらかに立ち上がる。深さは最大で37.4cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出面から純文時代～弥生時代の遺構と捉えられるが判然としない。

S K85土坑（第55図、写真図版43）

〔位置・検出状況〕 III A 6 c グリッドに位置する。検出面は最終面Ⅲ層下面である。

〔埋土・堆積状況〕 S K84土坑同様の自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形で、大きさは開口部径で48cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大で16cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出面から縄文時代～弥生時代の遺構と捉えられるが判然としない。

S K86土坑（第55図、写真図版44）

〔位置・検出状況〕 III A 2 e グリッドに位置する。検出面はV層上面である。

〔重複・隣接関係〕 北側に1m離れて、S K83土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 S K83土坑同様の、グライ化されたシルトを主体とする。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、大きさは開口部径で75×68cmを測る。西側が円形の柱穴状にくぼみ、北東側に傾く。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大で28cmを測る。西側柱穴状のくぼみの深さは最大で60cmと深い。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 S K83土坑同様の、中世から近世の遺構と捉えられ、柱穴の可能性もあるが、時期とともに判然としない。

S K87土坑（第56図、写真図版44）

〔位置・検出状況〕 III A 4 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。平成20年度に精査したF区西側の住居状遺構（S K I 05）確認のために、現道（市道）下を調査したところで検出した。

〔重複・隣接関係〕 北側に1m離れてS K I 05堅穴住居状遺構と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 上位に黒褐色、中央部に暗褐色土が埋まる自然堆積である。下位はやや掘りすぎている感があり、最下位の褐色土はⅢ層に当たる可能性がある。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形で、大きさは開口部径で158×129cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、（掘りすぎではないと仮定して）底面の平坦な逆台形状で、深さは西端で45cmを測る。

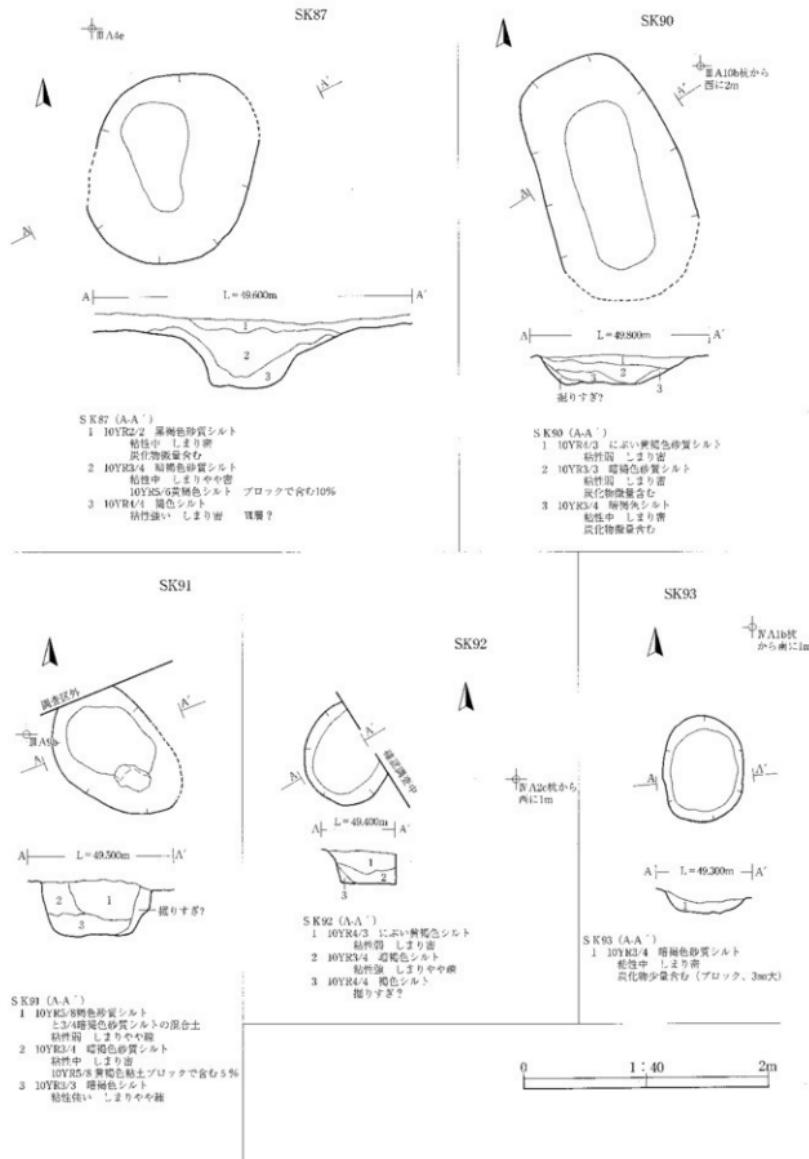
〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出面や埋土状況から縄文時代の可能性が高いが、出土遺物もなく判然としない。

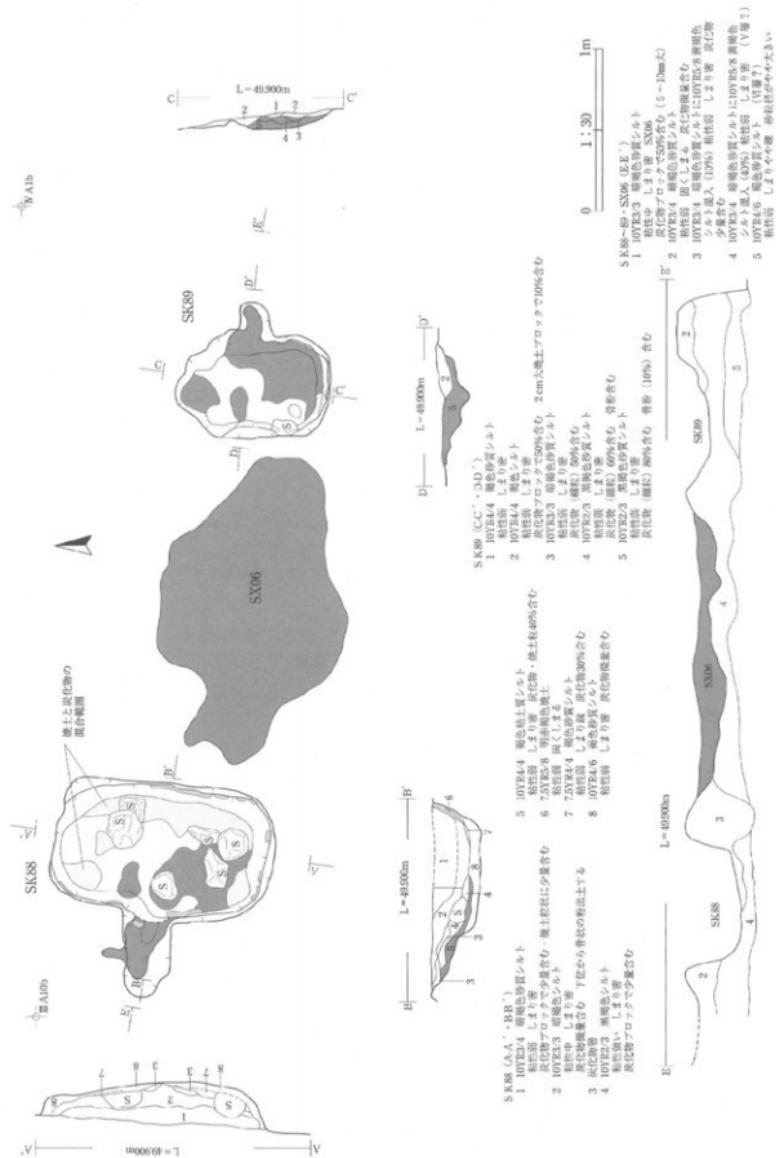
S K88土坑（第57図、写真図版44）

〔位置・検出状況〕 III A 10 b グリッドに位置する。検出面はⅢ層（褐色砂）の上面である。Ⅱ層下位面まで手掘りで表土剥ぎを行い、炭化物の集中する範囲を2箇所確認し、慎重にクリーニングした結果、張り出しを持つ方形の遺構であることが判明した。精査の最終段階で、東側に炭化物を顕著に堆積させる範囲（S X06炭化物）が現れた。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。隣接関係では、東側に2.90m離れてS K89土坑がある。両者の間にはS X06炭化物が広がる。西側にはS D23溝跡が南北に、北側にはS D24溝跡が東西に延びている。またS D23溝跡を跨いで3.20m離れた位置に、ほぼ同様の大きさを持つS K90土坑がある。



第56図 SK87・90~93土坑



第57図 SK88・89土坑、SX06炭化物

〔埋上・堆積状況〕 埋土上位は、砂質の暗褐色土が埋まる。炭化物などの混入物が少ないが、人為的堆積の可能性が高い。埋土下位は炭化物を多く含む黒褐色土となっている。

〔開口部の平面形・大きさ〕 平面形は、西側に溝状の張り出しを持つ隅丸の長方形を呈す。主軸方位はN-10°-Eで若干北北東に傾く。大きさは開口部径で、長軸が135cm、短軸が北側で77cm、南側で88cmを測る。西側壁のはば中央にある溝状の張り出しの延長は45cm、幅は概ね20~30cmを測り、先端に向かって窄まっている。

〔壁の形状〕 壁の中位から上位が焼成を受け、焼土が観察できる。幅は厚い箇所で5cm、薄いところでも2cmを測る。特に南西壁から東壁について顕著であり、逆に北東壁側は希薄であり、崩落した焼土もあった可能性がある。壁は焼成を受ける箇所は固く締まっており、ほぼ直角に立ち上がっているが、北側や北東壁周辺は締まりも悪く、やや角度が緩やかになる。

〔底面の平面形・大きさ〕 底面は、開口部に比べて隅が丸くなり、楕円形状を呈す。大きさは、長軸117cm、短軸は北側で57cm、南側で68cmを図る。

〔底面の形状〕 底面中位から、大型の礫が6個検出された。直径18cm前後の丸礫から、直径20~30cmを測る角礫がある。これらは川原石と思われ、特に人為的な工作は見受けられず、焼成も受けていない。しかし、自然堆積とは考えにくく、焼成後に置かれたか埋められた可能性がある。その礫のドからは、焼上と炭化物が混じった範囲と、炭化物が顕著な範囲に分かれて検出されている。炭化物が顕著な箇所は、溝状の張り出しがある西側底面周辺、焼土と炭化物が混入する範囲は、反対側の東側底面周辺に広がる。張り出し部分は、炭化物が北側に、ややはみ出して検出されている。溝状の張り出しへは、やや北側に向かって屈曲するかもしれないが、判別できなかった。

〔断面形・深さ〕 断面形は、西-東断面は張り出し部がなだらかに落ち込み、土坑部分では角度をもって落ち込む。底面は平坦で、東側壁ではほぼ垂直に立ち上がる。北-南断面は、底面がやや波打つており、壁も北側で緩やかになる。深さは、南壁で15.2cm、北壁で11.0cm、東壁で16.8cmを測り、西側壁は張り出し部があり10cm前後と低くなっている。

〔その他〕 断面図最下位に褐色土がある。若干炭化物を含む特色があるが、掘りすぎの可能性もある。S X06炭化物断面(E-E')では、遺構はV層を切っている。掘り過ぎとすれば埋土最下位はV層となる。

〔出土遺物〕 埋土洗浄の結果、炭化物(1.92g)や焼土粒のほかに、微細なガラスの破片(0.16g)、炭化種子、昆虫(うじ?)などが採集された。骨は埋土においては発見できず、調査時においても、非常に微細で採集できなかった。

〔遺構の性格〕 壁面が焼成を受けていることから焼成土坑として捉えられる。平面形や埋土から微細ながら骨が出土したことから、火葬跡の可能性が高い。張り出し部は空気を入れる機能(焚口)と考えられる。

〔時期〕 陶器、古銭などの出土遺物はないが、検出面や後述するSK89土坑との関係から、中世(鎌倉時代)の遺構と考えられる。後述するSK95土坑などの方形土坑よりも、新しい遺構の可能性が高いが、判然としない。

SK89土坑(第57図、写真図版44・72)

〔位置・検出状況〕 位置や検出状況はSK88土坑と同じである。

〔重複・隣接関係〕 SK88土坑の東側に位置し、間にS X06炭化物がある。北側にはSD24溝跡が東西に走るが、その延長は試掘トレンチに切られており、遺構の東側の様相は判別できなかった。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は砂質の褐色土で、S K88土坑に比べて炭化物が多い。

〔開口部の平面形・大きさ〕 開口部平面形（検出時プラン）は、南壁は方形を示すが、北壁は不整である。本来はS K88土坑同様の形状で、隅丸の長方形を呈すが、上位を削平された可能性もある。東側に溝状の張り出しを持つのは、S K88土坑と真逆となる。主軸方位は、ほぼ北-0°-南で、大きさは長軸が96cm、短軸が北側で62cm、南側で64cmとなる。張り出しの延長は22cm、幅は18cmとなる。

〔壁の形状〕 壁には南側壁の一部に焼土が検出されたが、S K88土坑ほど幅ではなく、壁上位のみ焼けている。壁の角度も緩やかで、綺麗よりも悪い。

〔底面の平面形・大きさ〕 平面形は、不整な椭円形状を示す。南側は開口部同様に方形基調となる。大きさは82×42cmを測る。

〔底面の形状〕 張り出しと反対側に、焼土と炭化物の混入箇所が小さく広がるが、全体的に炭化物の広がりが大きい。特に東側張り出し区域において顯著で、張り出し先端部が若干北側に屈曲するは、S K88土坑と類似する。

〔断面形・深さ〕 断面形は、南-北、西-東断面ともに、略皿形状で、深さも南壁で最大4.9cm、南壁に至っては1cm足らずで、非常に浅い。底面の中央部が2cmほど凹んでいる。

〔出土遺物〕 調査時において、底面の東壁周辺から2.3gの骨（427）が出土した。また埋土洗浄の結果、5.27gの人骨や炭化物19.4g、炭化種子、焼上粒や粘土塊を採集した。炭化物は年代測定を行っている。

〔年代測定〕 埋土下位出土炭化物のAMS測定値は、 700 ± 30 yr BPという結果となった。

〔遺構の性格〕 S K88土坑同様の焼成土坑で、火葬跡の可能性が高い。S K88土坑と相違点は張り出し部分が逆方向にあることや、小型であること、焼成が悪いことなどである。

〔時期〕 時期は、S K88土坑と同時期で、中世（鎌倉時代）の遺構と考えられる。

S K90土坑（第56図、写真図版45）

〔位置・検出状況〕 III A 9 b グリッドに位置する。検出面はV層上面である。S K88・89土坑と等間隔で、平行するようなプランが見えていたが、明確ではなくV層面まで下げた状況で登録した。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。S D23溝跡とS D24溝跡の交点の西側に位置する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、炭化物を微量に含む暗褐色土を主体とする自然堆積である。最上位にある黄褐色の砂はJ層に相当する可能性があり、S D23溝跡の埋土上位にも似る。

〔平面形・大きさ〕 遺構の南側が欠損するが、平面形は、隅丸の長方形を呈すと予測される。規模は開口部径で、長軸が推定200cm前後、短軸が115cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、底面が平坦な逆台形状で、深さは、西壁で24cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片1点（1.8g）が出土した。流れ込みと考えられる。

〔時期〕 検出面や埋土状況から、古代以降の遺構と考えられ、焼成土坑であるS K88・89土坑と何らかの関連があるのかもしれないが、判然としない。

S K91土坑（第56図、写真図版45）

〔位置・検出状況〕 III A 9 a・b グリッドに跨って位置する。検出面はV層を下げたVI～VII層面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。遺構の北隅が調査区外に広がる。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土と褐色土の混合土が主体となる人為的堆積の可能性が高い。埋土上位に30×20cmほどの礫が検出されている。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、大きさは開口部径で、長軸が推定130cm、短軸が82cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、底面が平坦な逆台形状で、深さは、西壁で44cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 古代以前の遺構で、検出面や近隣の土器出土状況から縄文時代晚期から弥生時代の遺構の可能性があるが、判然としない。

S K92土坑（第56図、写真図版46）

〔位置・検出状況〕 IV A 2 b・c グリッドに跨って位置する。検出面はⅦ層上面である。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。東側半分が未調査区（現道下）に広がる。

〔埋土・堆積状況〕 黄褐色や暗褐色土を主体とする自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状を呈すと予測され、大きさは、開口部径で短軸75cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、深さは最大で27cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 S K91土坑同様に、縄文時代晚期から弥生時代の遺構の可能性があるが、判然としない。

S K93土坑（第56図、写真図版46）

〔位置・検出状況〕 III A 10 c グリッドに位置する。検出面は S D23溝跡底面のⅦ層下面である。

〔重複・隣接関係〕 S D23溝跡に切られている可能性がある。近隣にF柱穴状土坑群が点在する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、下位のみの検出となつたが、暗褐色土（Ⅶ層相当）を確認した。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、大きさは、開口部径で86×65cmである。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、やや底面は平坦となる。深さは、最大で14cm足らずである。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出面や近隣の土器出土状況から、縄文時代晚期から弥生時代の遺構の可能性がある。

S K94土坑（第58・76図、写真図版46・65）

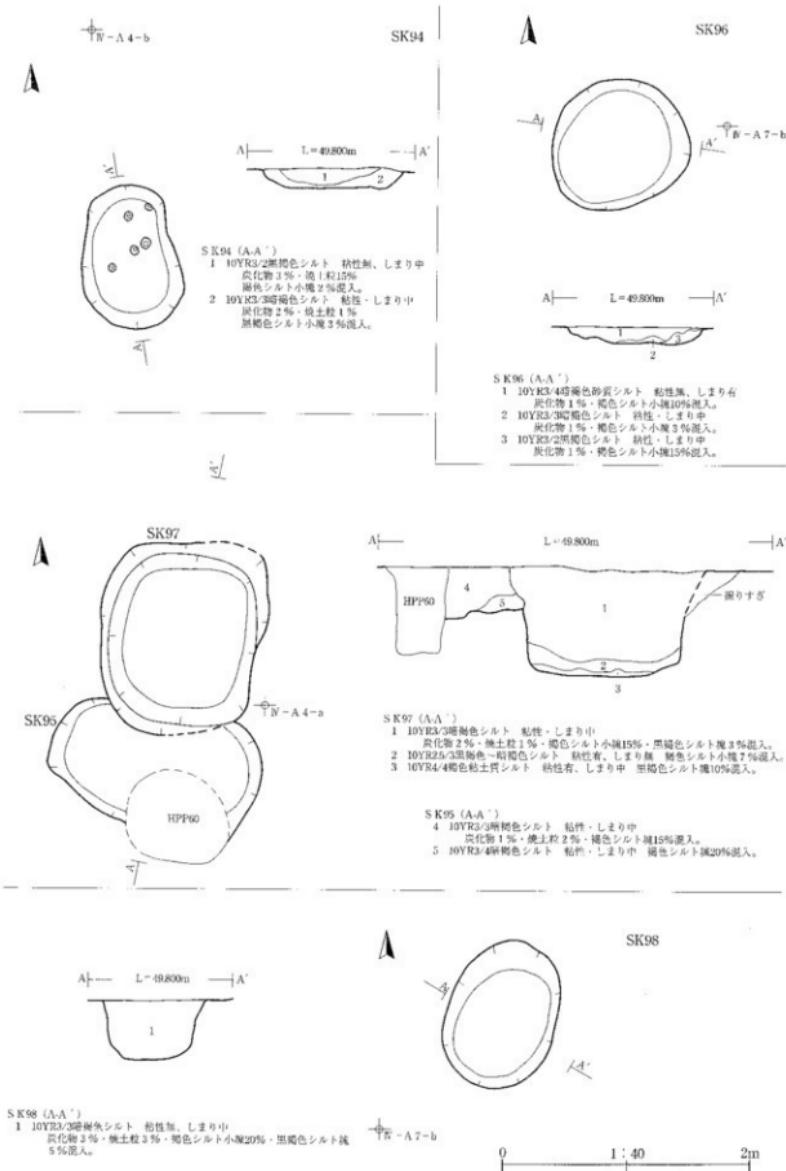
〔位置・検出状況〕 IV - A 3 - b ~ 4 - b グリッドに跨って位置する。V層上面をやや下げた面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 同一検出面で重複する遺構はないが、下位の面で検出した柱穴（P P 268）と重複する。周辺には墓壙と考えられる同時期の土坑（S K103~106土坑）が近接する。

〔埋土・堆積状況〕 量は少ないが、全体的に炭化物の混入が見られ、色調・混入物等により2層に分層できる。上部は焼土粒が多く混入する黒褐色シルト、下部は暗褐色シルトを主体とする堆積土である。下部の堆積土は人為か自然か判断できないが、上部は夾雜物が多く、人為的可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は中央部がやくびれ、北半部がやや小さい洋梨形を呈す。主軸方向は N - 6° - W で若干西に傾く。大きさは開口部で、長軸119cm、短軸83cmを測る。底部の平面形は楕円形状を呈す。

〔断面形・深さ〕 断面形は浅い逆台形で、壁は底面からなだらかに立ち上がる。深さは最大で19cmを測る。



第58図 SK94～98土坑

〔その他〕 底面には直径6～8cm、深さ3～7cmの小ピットを5個検出した。北半側に集中している。埋土は下部と同じ暗褐色土である。機能は不明である。

〔出土遺物〕 埋土上位から中国産の白磁（318）の破片が出土した。梅瓶といわれるもので、時期は鎌倉時代（13～14世紀）になる。

〔造構の性格〕 調査H区南西側の墓壙と考えられる土坑が密集しているエリアにあるが、平面形・埋土・深さに違いが見られ、また、副穴が伴うという違いも見られる。周辺の土坑とは異なった性格の造構の可能性が高いが、詳細は不明である。

〔時期〕 本造構に明確に伴う遺物が出土していないが、堆積土中から出土した遺物の年代観から判断すると、少なくとも14世紀には埋没していた可能性が高い。

S K95土坑（第58・82・86図、写真図版46・70・71）

〔位置・検出状況〕 IV-A 3-a グリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K97土坑、P P 60と重複し、本造構が古い。墓壙と考えられる同時期の土坑S K99・101・102・106と近接する。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色シルトブロックが混入する暗褐色シルトを主体とし、炭化物や焼土粒の有無により2層に分層できる。人為的な堆積状況を呈し、あまり時間差なく埋没した可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は北西隅が直む隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-69°-Wで西北西を向く。大きさは開口部で、長軸171cm、短軸（推定）110cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形状を呈し、長軸148cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って立ち上がる。深さは最大で43cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から繩文・弥生土器片34.6g、検出面直下から石器1点、埋土上位から鉄製品2点（76.9g）が出土した。このうち、石器1点と鉄製品2点を掲載した。396は円形の敲石で、鉄製品の419は釘状である。420は鍔が付着しているが、方形の御状となる可能性が高い。

〔造構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K101土坑やS K104土坑と、同一検出面であることや造構の性格から判断すると、中世（13～14世紀）の造構の可能性が高い。また、重複関係や土坑の主軸方向を考慮すると、調査H区の墓壙と考えられる土坑の中では、古い時期の造構と考えられる。

S K96土坑（第58図、写真図版47・72）

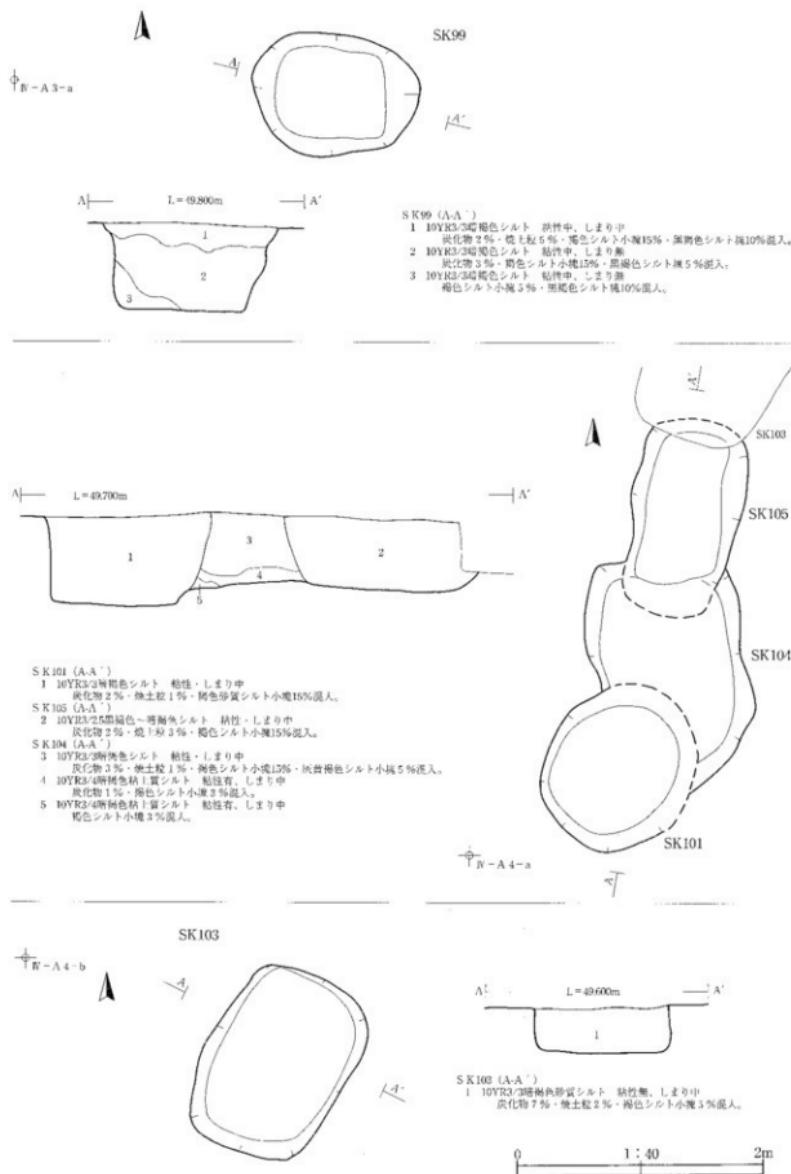
〔位置・検出状況〕 IV-A 6-b c グリッドに跨って位置する。V層上面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S D30溝跡、P P 194・237と重複し、本造構が新しい。

〔埋土・堆積状況〕 3層に分層でき、上部から暗褐色砂質シルト、暗褐色シルト、黒褐色シルトの順で確認できる。多寡の違いはあるものの、炭化物や褐色シルト小ブロックの混入がみられる。全体的に層厚がなく、堆積状況が人為か自然かの判断ができない。調査H区西側に密集して見られる土坑の埋土とは、大きなブロック状の褐色シルトの混入が見られない、砂質である等の違いが見られる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は歪な円形を呈す。主軸方向はN-35°-Eで、北東を向く。大きさは開口部で、長軸115cm、短軸110cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿状を呈し、壁は底面からなだらかに立ち上がる。深さは最大で14cmを測る。



第59図 SK99・101・103～105土坑

〔出土遺物〕 埋土から鉄滓類（441）61.6gが出土した。楕形鍛冶滓と呼ばれているものである。

〔遺構の性格〕 本遺構は、土坑があまり確認されなかった調査H区の南東側にあり、周囲には柱穴状土坑が不規則に囲んでいる。また、周辺の同一検出面の遺構外では羽口や鉄滓が出土しており、鉄作りに関係する遺構の可能性が考えられる。

〔時期〕 検出面から中世～近世の遺構の可能性が高いが、年代を特定できる遺物が出土していないため、詳細な年代を提示することはできない。

S K97土坑（第58図、写真図版47・72）

〔位置・検出状況〕 IV-A 3-a b グリッドに跨って位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K95土坑と重複し、本遺構が新しい。本遺構の周辺には墓壙と考えられる土坑が密集しており、S K102・105・107土坑とは主軸方向が同方向を向いている。

〔埋土・堆積状況〕 上部から暗褐色シルト、黒褐色～暗褐色シルト、褐色粘土質シルトの3層に分層できる。底面付近を除き、褐色シルトブロックが混入する暗褐色シルトで埋没しており、人為堆積である可能性が非常に高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は南東隅が歪む隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-6.5°-Eで若干西に傾く。大きさは開口部で、長軸163cm、短軸137cmを測る。底面の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸114cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持ちながら立ち上がる。深さは最大で91cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から繩文・弥生土器片40.8gが出土したが、流れ込みの可能性が高い。また、鉄滓類（442）102.4gが出土した。441同様の楕形鍛冶滓である。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。また、重複関係や土坑の主軸方向を考慮すると、調査H区の墓壙と考えられる土坑の中では、新しい時期の遺構と考えられる。

S K98土坑（第58図、写真図版47）

〔位置・検出状況〕 IV-A 7-c グリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 同一検出面で重複する遺構はないが、周辺には同一時期と考えられる柱穴等が検出されている。調査H区の墓壙と考えられる土坑の中では、東側に単独で存在する。

〔埋土・堆積状況〕 褐色シルトブロックが多量に混入する暗褐色シルトの単層で、人為堆積の可能性が非常に高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は梢円形を呈す。主軸方向はN-40°-Eで北東を向く。大きさは開口部で、長軸119cm、短軸98cmを測る。底部の平面形は梢円形を呈し、長軸93cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持ちながら直線的に立ち上がる。深さは最大で52cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から繩文・弥生土器片29.6gが出土したが、流れ込みと考えられる。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。

S K 99土坑（第59図、写真図版47）

〔位置・検出状況〕 IV-A 3-a b グリッドに跨って位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 同一検出面で重複する遺構はないが、墓壙と考えられる同時期の土坑 S K 95・97・102が近接している。

〔理土・堆積状況〕 暗褐色シルトを主体とし、しまりや混入物の種類・量により3層に分層できる。各層とも主体となる堆積土が類似しており、短時間に埋没したものと考えられる。火雜物が多く、人為堆積の可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は歪な隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-89°-Wではなく東西方向を向く。大きさは開口部で、長軸137cm、短軸104cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸90cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持ちながら直線的に立ち上がる。深さは最大で76cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K 101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13~14世紀）の遺構の可能性が高い。

S K 101土坑（第59・86図、写真図版48・71）

〔位置・検出状況〕 IV-A 4-b グリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K 104土坑と重複し、本遺構が新しい。周囲には墓壙と考えられる同時期の土坑 S K 95・97・106・107・117が近接している。

〔理土・堆積状況〕 褐色砂質シルトブロックが多量に混入する暗褐色シルトの崖層で、人為堆積の可能性が非常に高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は梢円形を呈す。主軸方向はN-42°-Eではなく北東を向く。検出状況で、S K 104土坑との新旧関係を把握できず、一緒に堆積状況を確認したために、北東側上半の壁は推定となっている。大きさは開口部で、長軸（推定）137cm、短軸125cmを測る。底部の平面形は梢円形状を呈し、長軸110cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持ちながら直線的に立ち上がる。深さは最大で77cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文上器片51g、須恵器2点（2.5g）、鉄製品2点（37.9g）、占銭1点が出土したが、大半が埋土及び埋土上位からの出土である。このうち、埋土から出土した釘状鉄製品1点（421）と埋土中位から出土した熙寧元寶（422）を掲載した。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況、1点と少ないながらも錢貨が出土したことから墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 出土遺物が前述のとおり少なく、しかも明確に伴う遺物がない。そのため、断定はできないが、熙寧元寶（初鋸年1068年）が出土していることや検出面から、中世（13~14世紀）の可能性が高いと思われる。

S K 102土坑（第60図、写真図版48・65）

〔位置・検出状況〕 IV-A 3-b グリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK111土坑と重複し、本遺構が新しい。周囲には墓壙と考えられる同時期の土坑（SK97・SK99）が近接している。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色シルトを主体とし、3層に分層できる。堆積土の大部分は褐色シルトブロックが多量に混入する暗褐色シルトで占められ、人為堆積の可能性が非常に高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は北東隅が張り出す隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-5°-Eで若干東に傾く。大きさは開口部で、長軸194cm、短軸148cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形状を呈し、長軸169cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って直線的に立ち上がる。深さは最大で58cmを測る。

〔その他〕 検出面で固く締まったブロック焼土が確認され、その面より5~6cm下位の本遺構の中央部で、103.5×4cmの範囲に不整形に散在する多量の炭化物と焼土層が確認された。本遺構がほとんど埋没した、浅く窪んだ状況で、何らかの行為がなされたのは推察できるが、詳細は不明である。

〔出土遺物〕 埋土から縄文土器片3.6g、粘土塊（320 写真掲載）1点が出土した。いわゆる羽口製作に関連するものであろう。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 SK101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13~14世紀）の遺構の可能性が高い。また、重複関係や土坑の主軸方向を考慮すると、調査H区の墓壙と考えられる土坑の中では新しい時期の遺構と考えられる。

SK103土坑（第59図、写真図版48）

〔位置・検出状況〕 IV-A4-bグリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK105土坑と重複し、本遺構が新しい。南側には墓壙と考えられる同時期の土坑が密集している。

〔埋土・堆積状況〕 褐色シルトブロックを含む暗褐色砂質シルトの単層で、人為堆積と考えられる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-28°-Eで北北東を向く。大きさは開口部で、長軸159cm、短軸118cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形状を呈し、長軸140cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から直立に近い角度を持って立ち上がる。深さは最大で45cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

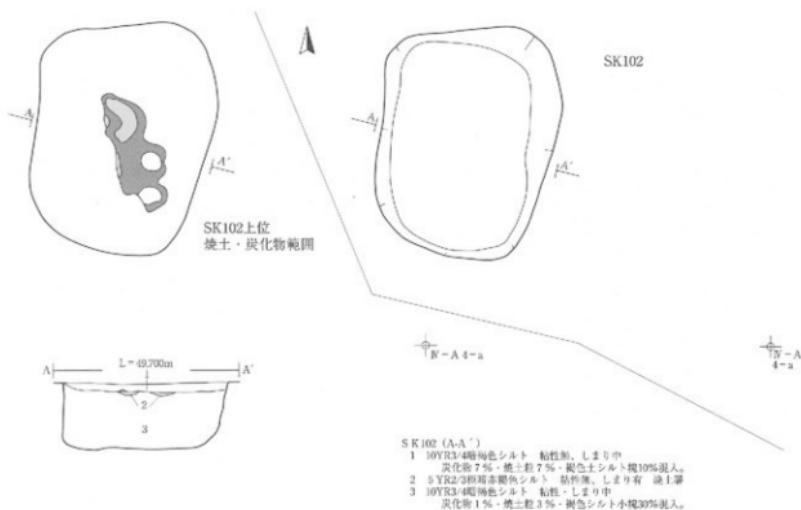
〔時期〕 SK101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13~14世紀）の遺構の可能性が高い。また、SK105土坑との重複関係から、調査H区の墓壙と考えられる土坑の中でも最も新しい時期の遺構の可能性が高い。

SK104土坑（第59・82図、写真図版49・70）

〔位置・検出状況〕 IV-A4-bグリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK101・105土坑と重複し、本遺構が古い。また、PP165とも重複するが、一部であるため、新旧が判断できない。周囲には類似する同時期の土坑が密集している。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色シルトを主体とし、混入物により3層に分層できる。堆積土の大部分は褐色シルトブロックが多量に混入する暗褐色シルトで占められ、人為堆積の可能性が非常に高い。



SK106 (A-A')

- 1 10YR2/3暗褐色～暗褐色シルト 粘性・しまり中
炭化物 5%・燒土粒 1%・褐色シルト小塊15%混入。

SK107 (A-A')

- 1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性・しまり中
炭化物 3%・燒土粒 1%・褐色シルト小塊10%・黒褐色シルト小塊 7%混入。

0 1 : 40 2m

第60図 SK102・106・107土坑

〔平面形・大きさ〕 平面形は歪な隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-6°-Wで若干西に向く。本遺構は南西の大半をSK101土坑に壊されているため、正確な大きさは不明であるが、開口部で残存する長軸は197cm、短軸は133cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形状を呈する可能性が高く、長軸は160cm前後になると考えられる。

〔断面形・深さ〕 長軸方向の両端をSK101・105土坑に壊されているため、断面形状は不明であるが、本調査区の類似する土坑と比較すると、逆台形を呈する可能性が高い。残存する深さは最大で66cmを測る。

〔出土遺物〕 墓土から石器2点が出土し、2点とも掲載した。337は敲石としたが、打製石斧の可能性もあり、遺構に関連するものとは思えない。検出グリッドは比較的、縄文時代晩期から弥生時代の土器が出土することから、当期に属する石器で流れ込みであろう。338は比熱を受けている疎で、墓壙に関わる可能性もある。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔年代測定〕 墓土下位で炭化材が出土したため、年代測定を行ったところ、AMS測定値で740±30yrBPという結果となった。詳細は本章3節の分析鑑定を参照して頂きたい。

〔時期〕 SK101土坑との重複関係やAMS測定結果から判断すると、13世紀代の遺構の可能性が高い。

SK105土坑（第59図、写真図版49・72）

〔位置・検出状況〕 IV-A4-bグリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK103・104土坑と重複し、本遺構がSK103土坑より古く、SK104土坑より新しい。周囲には墓壙と考えられる同時期の土坑が密集している。

〔埋土・堆積状況〕 褐色シルトブロックを多量に含む黒褐色～暗褐色シルトの単層で、人為堆積と考えられる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は歪な長方形を呈す。主軸方向はN-10°-Eで若干東に傾く。検出状況で、SK104土坑との新旧関係を把握できず、一緒に堆積状況を確認したため、南側の壁は推定となっている。大きさは開口部で、長軸（推定）163.5cm、短軸94cmを測る。底部の平面形は歪な長方形状を呈し、長軸138cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って直線的に立ち上がる。深さは最大で62cmを測る。

〔出土遺物〕 墓土から縄文・弥生土器片40.7g、楕円鏡治溝（443）124.7gが出土した。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

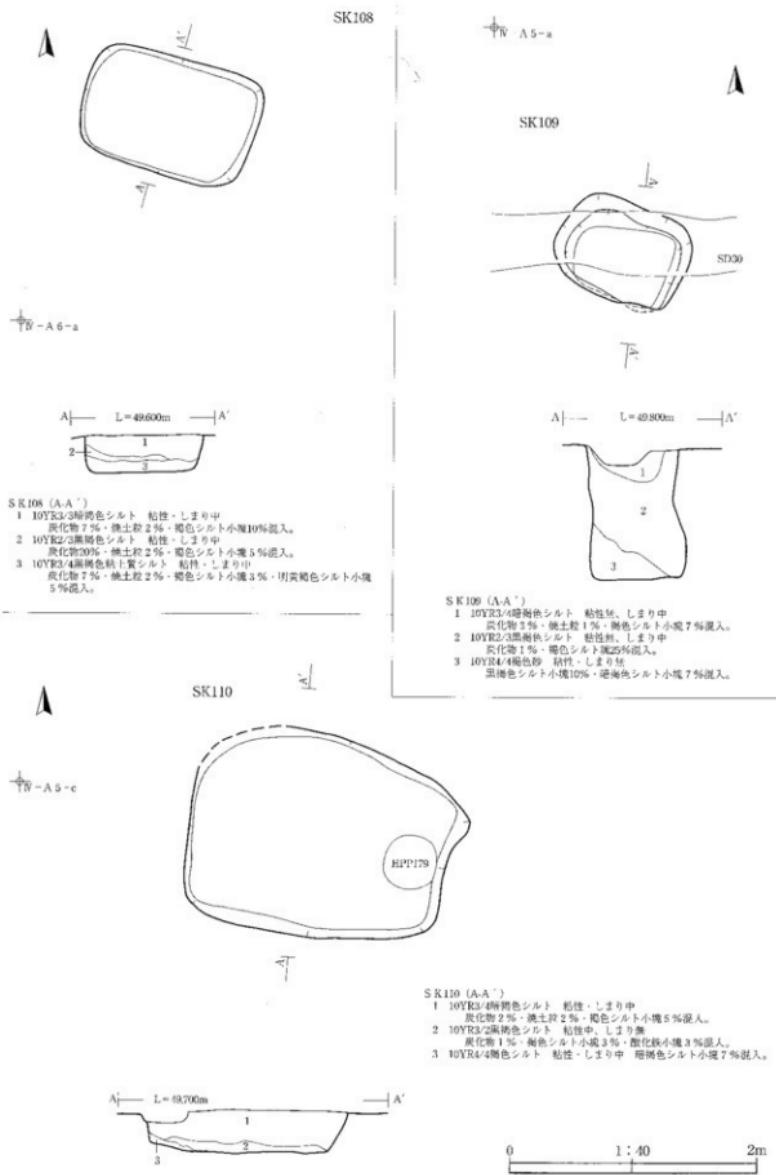
〔時期〕 SK101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世の遺構の可能性が高く、SK104土坑との重複関係から13世紀後半～14世紀の遺構の可能性が高い。

SK106土坑（第60図、写真図版49）

〔位置・検出状況〕 IV-A3-b～4-bグリッドに跨って位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 同一面で重複する遺構はない。周囲には墓壙と考えられる同時期の土坑（SK97・102～105）が近接している。

〔埋土・堆積状況〕 褐色シルトブロックを多量に含む黒褐色～暗褐色シルトの単層で、人為堆積と考えられる。



第61図 SK108~110土壌

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形を呈す。主軸方向はN-87°-Eでほぼ東西方向を向く。大きさは開口部で、長軸94.5cm、短軸93.5cmを測る。底部の平面形は橢円形状を呈し、長軸70cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って直線的に立ち上がる。深さは最大で42cmを測る。

〔出土遺物〕 墓上から縄文土器片7.5gが出土したが、流れ込みと考え不掲載とした。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K 101・104土坑と同一検出面であることから判断すると、中世（13~14世紀）の遺構の可能性が高い。

S K 107土坑（第60図、写真図版49）

〔位置・検出状況〕 IV-A 4-a bグリッドに跨って位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K 117・121土坑・P P 172・255と重複し、本遺構が最も新しい。西側には墓壙と考えられる同時期のS K 101・104土坑が近接している。

〔埋土・堆積状況〕 褐色シルトブロック・黒褐色シルトブロックが混入する暗褐色シルトの単層で、人為堆積の可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は南東隅が歪な長方形を呈す。主軸方向はN-3.5°-Eでほぼ南北方向を向く。大きさは開口部で、長軸138cm、短軸89cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸98cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って立ち上がる。特に、西壁は直立気味に立ち上がる。深さは最大で45cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K 101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13~14世紀）の遺構の可能性が高い。また、重複関係や土坑の主軸方向を考慮すると、調査II区の墓壙と考えられる土坑の中では新しい時期の遺構と考えられる。

S K 108土坑（第61図、写真図版50・65）

〔位置・検出状況〕 IV-A 6-bグリッドに位置する。V層下面での検出である。

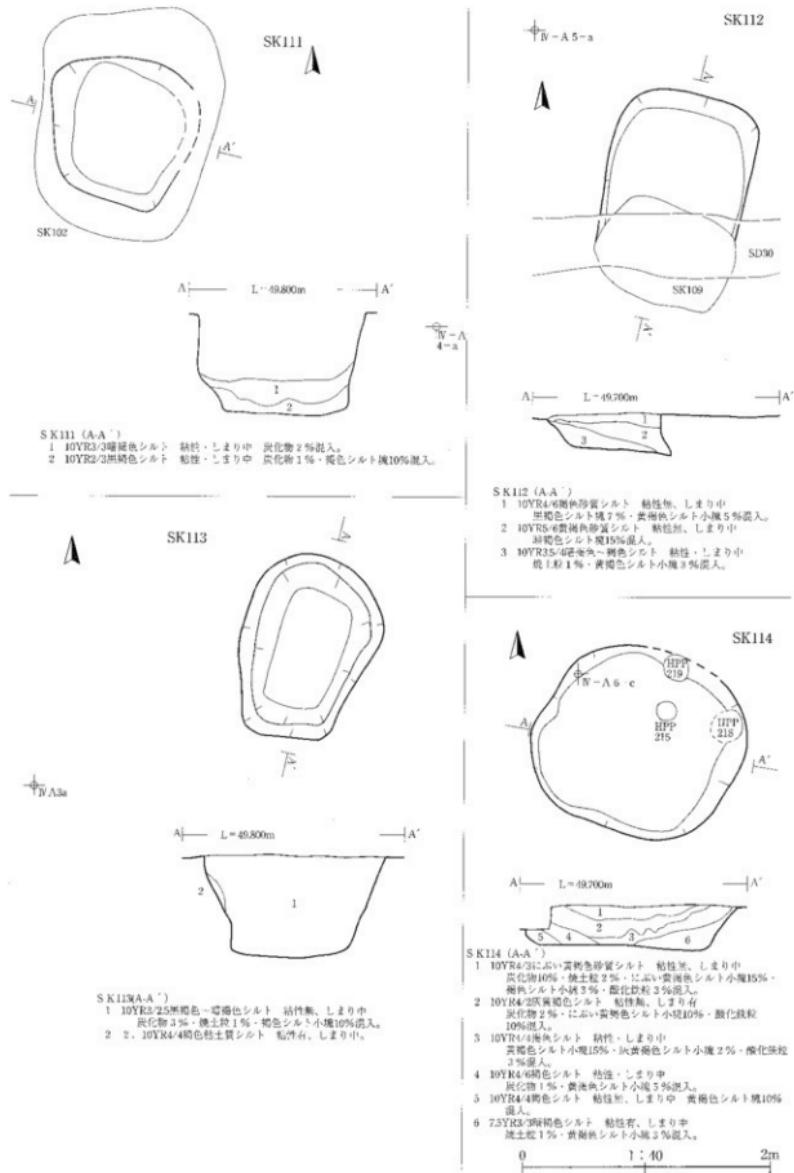
〔重複・隣接関係〕 同一検出面で重複する遺構はないが、周辺には同一時期と考えられる柱穴等が検出されている。調査II区の墓壙と考えられる上坑の中では、東側に単独で存在する。

〔埋土・堆積状況〕 全体的に炭化物や焼土粒の混入が見られ、色調・混入物により3層に分層できる。上部から褐色シルトブロックを含む暗褐色シルト・炭化物粒を多量・褐色シルトブロックを含む黒褐色シルト・褐色シルトブロック・明黄褐色シルトブロックを含む黒褐色シルトの順で確認できる。混入物が多く、人為堆積の可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-71°-Wで西北西を向く。大きさは開口部で、長軸142.5cm、短軸99cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸133cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って直線的に立ち上がる。深さは最大で32cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から縄文土器片（68g）、羽口片1点（7.4g）、鐵治津（444）10.6gが出土した。そのうち縄文土器1点（321）を写真掲載した。磨滅した縄文土器片で詳細は不明である。



第62図 SK111～114土坑

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K 101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。

S K 109土坑（第61・86図、写真図版50・71）

〔位置・検出状況〕 IV-A 5-a グリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K 112土坑と重複し、本遺構が新しい。また、検出面を異にする S D 30溝跡に切られている。西側には墓壙と考えられる同時期の土坑が密集して確認される。

〔埋土・堆積状況〕 色調・混入物により3層に分層できる。他の墓壙と考えられる土坑とは異なり、褐色シルトブロックを多量に含む黒褐色シルト主体で埋没しており、人為堆積の可能性が高いが、底面の壁際には三角形状に堆積している褐色砂は自然堆積の可能性がある。開口部中央付近には褐色シルトブロックを含む暗褐色シルト層が堆積している。

〔平面形・大きさ〕 平面形は隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-69°-Wで西北西を向く。大きさは開口部で、長軸110.5cm、短軸82cmを測る。底部の平面形は歪な隅丸長方形状を呈し、長軸78cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は非常に深いビーカー形を呈す。壁は底面から概ね直立気味に立ち上がるが、南壁の大部分はオーバーハングしている。深さは最大で123cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から繩文土器片0.9g、鉄製品1点（25.1g）が出土した。このうち、鉄製品1点を掲載した。423は釘状鉄製品で、出土中では最も大きい。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えているが、他の墓壙と考えられる土坑とは、開口部の大きさに対する深さが深すぎることや、埋土の色調の違いが見られ、異なる性格を持つ可能性も否定できない。

〔時期〕 S K 101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。

S K 110土坑（第61・76・82図、写真図版50・65・70）

〔位置・検出状況〕 IV-A 5-c d グリッドに跨って位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K I 06竪穴住居状遺構・S K 116土坑・S K 120土坑・P P 179と重複し、本遺構がS K 116・120土坑より新しく、P P 179より古い。S K I 06竪穴住居状遺構とは重複部分が一部であるため、新旧関係を把握することができなかつた。

〔埋土・堆積状況〕 色調・混入物等により3層に分層できる。底面の壁際には壁の崩落土と考えられる褐色シルト層が三角形状に堆積しており、自然堆積の可能性が高い。下部には褐色シルトブロックが混入する黒褐色シルト、中間～上部には褐色シルトブロックが混入する暗褐色シルトが堆積している。中間～上部は混入物があり、人為堆積の可能性が想定される。

〔平面形・大きさ〕 平面形は北東隅が歪む長方形を呈す。主軸方向はN-78°-Wで西北西を向く。大きさは開口部で、長軸226cm、短軸169cmを測る。本調査区では大形の土坑である。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って直線的に立ち上がる。深さは最大で34cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から繩文・弥生土器片346.7g、石器1点、羽口片の可能性が高い土製品1点、鉄製品1点（10.9g）、鐵滓6.9gが出土した。本遺構は縄文時代のS K 116・120土坑の上に構築され

ており、出土した土器の大半はこれらの遺構に伴うものと思われる。そのうち縄文土器1点、石器、鉄滓を掲載した。土器322はS I 17堅穴住居跡やSK 124土坑などから出土する土器に類似する深鉢の体部片である。石器399は黒曜石の石鎚で、形態は凹基無茎となる。鉄滓類445は、溶着滓である。

〔時期〕 SK 101・104土坑と同一検出面であることから判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。

SK 111土坑（第62図、写真図版50）

〔位置・検出状況〕 IV-A 3-bグリッドに位置する。SK 102土坑の底面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK 102上坑と重複し、本遺構が古い。

〔埋土・堆積状況〕 炭化物を含む暗褐色シルト主体の上部と褐色シルトブロック・炭化物を含む黒褐色シルト主体の下部の2層に分層できる。調査H区南西の墓壙と考えられる他の土坑とは、褐色ブロックの混入量が少ないという違いがある。SK 102土坑によって堆積土の大半を失っているため、人為か自然かの判断ができない。

〔平面形・大きさ〕 平面形は歪な台形を呈す。主軸方向はN-20.5°-Eで北北東に向く。確認できた大きさは開口部で、長軸125.5cm、短軸121cmを測る。底部の平面形は台形状を呈し、長軸96cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って立ち上がる。確認できた深さは最大で43cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格〕 堆積上や形状から墓壙の可能性があると考えている。

〔時期〕 遺構の性格から中世（13～14世紀）の遺構と捉えている。また、SK 102との重複関係を考慮すると、調査H区の墓壙と考えられる土坑の中でも古い時期の遺構の可能性が高い。

SK 112土坑（第62・86図、写真図版51・71）

〔位置・検出状況〕 IV-A 5-aグリッドに位置する。SK 109土坑の北壁に、暗褐色シルト混じりの汚れた黄褐色シルト層の堆積が確認できたため、サブトレンドを設定し、精査を行った。すると、平坦な面と礫が確認できたため、上坑とした。検出面はV層下面に相当する。

〔重複・隣接関係〕 SK 109土坑と重複し、本遺構が古い。

〔埋土・堆積状況〕 色調や混入物等により3層に分層できる。下部から黄褐色シルトを含む暗褐色～褐色シルト層、暗褐色シルトブロックを多量に含む黄褐色砂質シルト層、黄褐色シルト・黒褐色シルトを含む褐色砂質シルト層の順に確認できる。北側から埋没した堆積状況を呈し、人為堆積の可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 確認できた部分から判断すると、平面形は隅丸長方形を呈す可能性が高い。主軸方向はN-11°-Eで少し東に傾く。残存する大きさは開口部で、長軸134.5cm、短軸117cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形を呈す。

〔断面形・深さ〕 SK 109土坑に切られているため、長軸方向の断面形は不明であるが、短軸方向の断面形から推測すると、逆台形を呈すものと考えられる。壁は底面から角度を持って立ち上がり、上端部がやや開く。深さは最大で34cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から鉄製品1点（3.6g）が出土し、掲載した。鉄製品424は板状としたが、小型で弯曲しており、417に似た製品の破損品かも知れない。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 SK 101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。

SK 113土坑（第62図、写真図版51）

〔位置・検出状況〕 IV-A 3-a グリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 同一検出面で重複する遺構はなく、隣接する遺構も見られない。北東側には墓壙と考えられる同時期の土坑が密集している。

〔埋土・堆積状況〕 北壁際に褐色粘土質シルト層がブロック状に見られるが、大部分は褐色シルトを含む黒褐色～暗褐色シルト層である。ほぼ一括埋没であり、人為堆積の可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は北東側が大きい洋梨形を呈す。主軸方向はN-16.5°-Eで北北東を向く。大きさは開口部で、長軸155cm、短軸113cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形状を呈し、長軸98cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形を呈す。壁は底面から角度を持って直線的に立ち上がるが、北壁下部は直立気味に立ち上がる。深さは最大で83cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 SK 101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。

SK 114土坑（第62・76図、写真図版51・65）

〔位置・検出状況〕 IV-A 5-c～6-c d グリッドに跨って位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK I 06竪穴住居状遺構・PP 215・218・219と重複し、本遺構が最も古い。

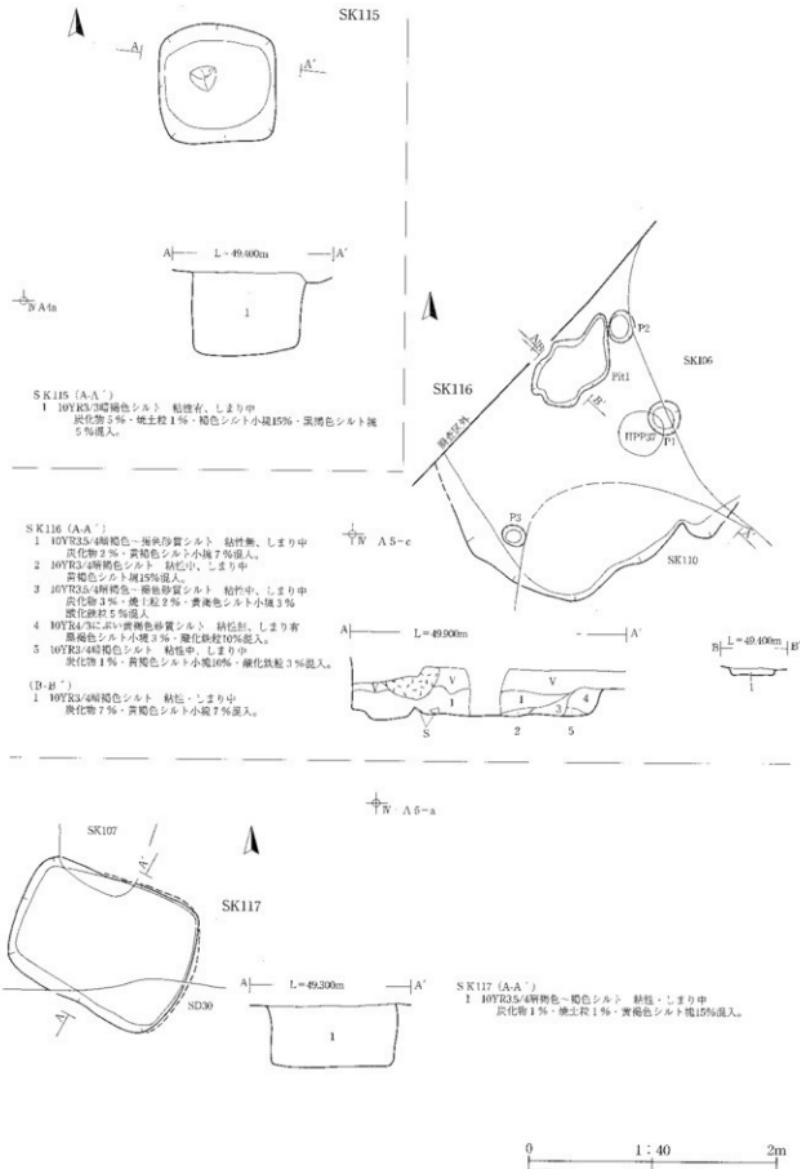
〔埋土・堆積状況〕 色調や混入物等により6層に分層できる。上部～中間部はぶい黄褐色～灰黃褐色シルト、下部は褐色や暗褐色シルトを主体とする。全体的に混入物が見られるが、三角形もしくはレンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積の可能性が高いと考えられる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は歪な隅丸方形を呈す。主軸方向はN-66°-Wで西北西を向く。大きさは開口部で、長軸167cm、短軸155cmを測る。底部の平面形は歪な隅丸方形を呈す。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から角度を持って外反気味に立ち上がる。深さは最大で41cmを測る。

〔出土遺物〕 墓上から縄文・弥生土器片28.1gが出土した。周辺には縄文時代の遺構や遺物が比較的まとまって見つかっており、埋没過程で流入したものと思われる。そのうち1点を掲載した。土器323は、SK 110土坑出土同様の粗製土器である。

〔時期〕 SK 101・104土坑と同一検出面であることから判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。



第63図 SK115~117土坑

S K 115土坑（第63図、写真図版51）

〔位置・検出状況〕 IV-A 4-a グリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 同一検出面で重複する遺構はない。S D30溝跡を挟んで北側には墓塚と考えられる同時期の土坑が密集している。

〔埋土・堆積状況〕 多量の褐色シルトブロックや黒褐色シルトブロックが混入する暗褐色シルトの単層で、人為堆積の可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は隅丸方形を呈す。主軸方向はN-2°-Wで、ほぼ南北方向を向く。大きさは開口部で、長軸99.5cm、短軸96.5cmを測る。底部の平面形は稍円形状を呈し、長軸86cmを測る。底面形の長軸を主軸にした場合はN-88°-Eである。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は直立気味に立ち上がる。深さは最大で71cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から縄文・弥生土器片14.8gが出土したが、不掲載とした。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓塚の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K 101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13~14世紀）の遺構の可能性が高い。

S K 116土坑（第63・76・77図、写真図版52・66）

〔位置・検出状況〕 IV-A 5-c d グリッドに跨って位置する。VI層面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K I 06豎穴住居状遺構・S K 110・120土坑・P P 37と重複し、本遺構がS K I 06豎穴住居状遺構・S K 110土坑・P P 37より古く、S K 120土坑より新しい。北西側は調査区外に広がっている。

〔埋土・堆積状況〕 黄褐色シルトブロックを含む暗褐色シルトを主体とし、色調や混入物等により5層に分層できる。壁際の堆積層は混入物の差で分かれるが、大部分は主体となる堆積土で埋没している。周囲の新しい遺構によって大部分を壊され、全体的な埋没状況が把握できなかったため、人為か自然かの判断はできない。

〔平面形・大きさ〕 一部しか残存していないため、平面形・主軸方向は不明である。確認できた大きさは開口部で、長軸247cm、短軸240.5cmを測る。

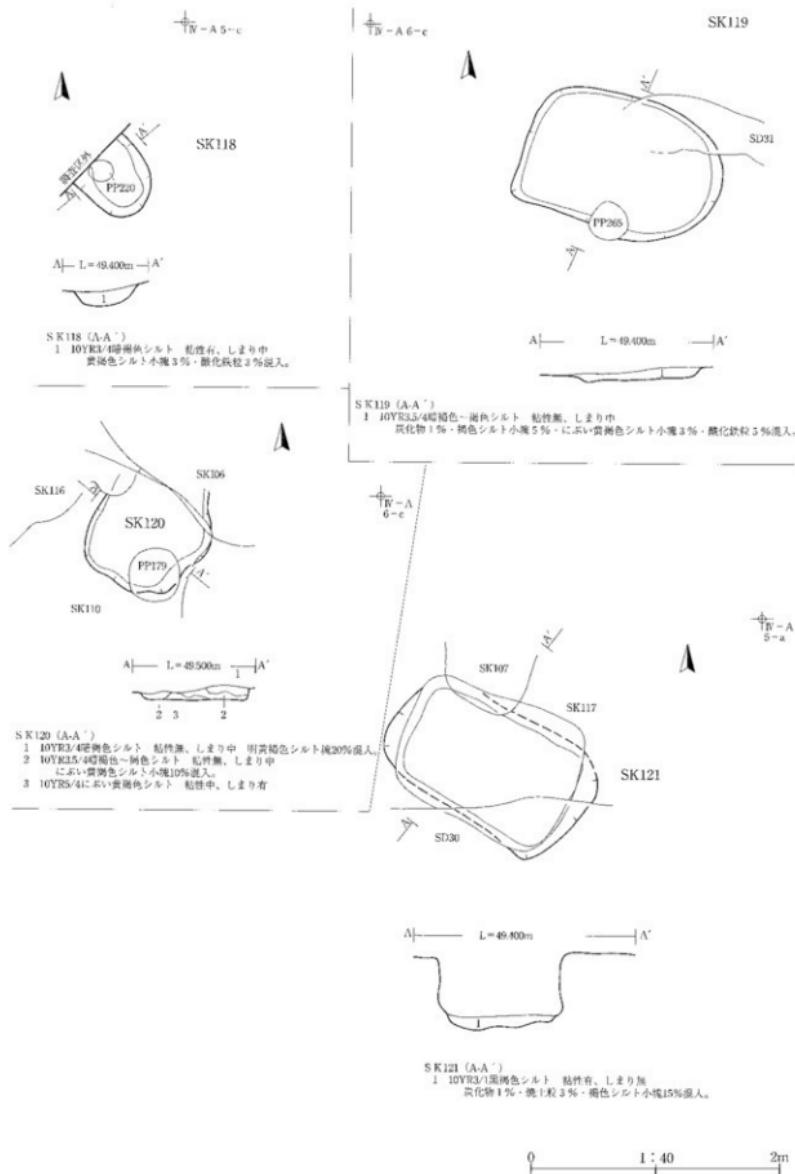
〔断面形・深さ〕 断面形は浅い台形形で、壁は底面から角度を持って立ち上がる。深さは最大で33cmを測る。

〔その他〕 本遺構に伴うものとして、土坑を1基、柱穴状土坑を3個検出した。土坑の平面形は不整形で、長軸85cm、短軸53cmを測る。埋土は炭化物を多量に含む暗褐色シルトの単層である。炉の可能性も考えられるが、焼上層は確認されなかった。柱穴状土坑は3個とも暗褐色シルト主体の単層で、P 1にはにぶい黄褐色シルト、P 2にはにぶい黄褐色シルトと少量の炭化物、P 3には灰黄褐色シルトと少量の炭化物・水酸化鉄が混入する。大きさは開口部で、P 1が長軸29cm、短軸26.5cm、P 2が長軸27cm、短軸22cm、P 3が長軸21cm、短軸18cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土中から弥生土器の可能性が高い土器片、底面直上や壁際からは縄文土器片、合計1556.5gが出土した。このうち6点の（324~329）土器を掲載した。

〔遺構の性格〕 一部しか残存せず、全体像が不明であるため、土坑として登録したが、炭化物が多量に混入するPitや柱穴が確認され、住居跡の可能性が考えられる。

〔時期〕 検出面や出土遺物から判断すると、縄文時代中期末葉の遺構の可能性が高い。



第64図 SK118～121土坑

S K 117土坑（第63図、写真図版52）

〔位置・検出状況〕 IV-A 4-a グリッドに位置する。V層下面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K 107・121土坑・P P 254・255と重複し、本遺構がS K 107土坑より古く、S K 121土坑・P P 254・255より新しい。また、検出面を異にする S D 30溝跡に切られている。

〔埋土・堆積状況〕 黄褐色シルトブロックを多量に含む暗褐色～褐色シルトの単層で、人為堆積の可能性が高い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は東辺が長い隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-68.5°-Wで西北西を向く。大きさは開口部で、長軸153cm、短軸117cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸140cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。深さは、最大で54cmを測る。

〔出土遺物〕 墓土から縄文・弥生土器片（8.2g）、鉄製品1点（7.2g）が出土し、弥生土器と考えられる土器1点（330）を掲載した。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 S K 101・104土坑と同一検出面であることや遺構の性格から判断すると、中世（13～14世紀）の遺構の可能性が高い。また、重複関係や土坑の主軸方向から判断すると、調査H区の墓壙と考えられる土坑の中では古い時期の遺構と考えられる。

S K 118土坑（第64図、写真図版52）

〔位置・検出状況〕 IV-A 4-c グリッドに位置する。IV層上面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 同一検出面で重複する遺構はないが、V層面で検出した P P 220と重複する。西側の大半は調査区外に広がっている。

〔埋土・堆積状況〕 黄褐色シルトを含む暗褐色シルトの単層である。層厚がなく、人為か自然かの判断はできなかった。

〔平面形・大きさ〕 確認された部分から判断すると、平面形は楕円形を呈すものと考えられる。主軸方向はN-26°-Wで北北西を向く。確認された開口部の大きさは、長軸64cm、短軸60.5cmを測る。底部の平面形は楕円形状を呈す。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿状を呈し、壁は底面からなだらかに立ち上がる。深さは、最大で21cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

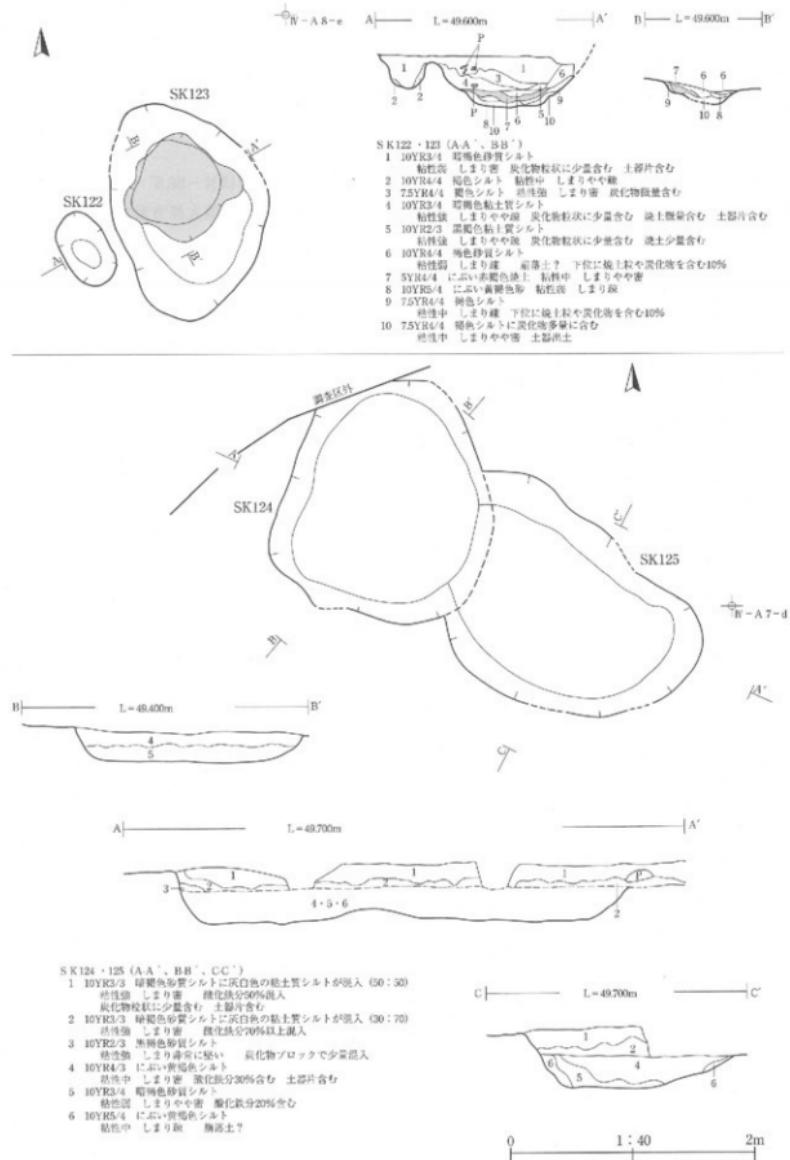
〔時期〕 検出面から判断すると、縄文～弥生時代の遺構の可能性が高い。

S K 119土坑（第64図、写真図版53）

〔位置・検出状況〕 IV-A 6-c グリッドに位置する。IV層上面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 P P 265と重複し、本遺構が古い。また、検出面を異にする S D 31溝跡に切られているが、本遺構内で溝跡の延長が不明瞭となっているため、本来は S D 31溝跡の埋土中に包含する遺物を、本遺構として取り上げている可能性がある。

〔埋土・堆積状況〕 褐色シルトやにぶい黄褐色シルトを含む暗褐色～褐色シルトの単層である。層厚がないため、人為か自然かの判断はできない。



第65図 SK122～125土坑

〔平面形・大きさ〕 平面形は、東側の丸みが強い隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-73°-Wで西北西を向く。大きさは開口部で、長軸164.5cm、短軸116cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は浅い逆台形で、壁は底面から45度程度の角度を持って立ち上がる。深さは最大で11cmを測る。

〔出土遺物〕 墓土から繩文・弥生土器片(27.6g)が出土し、1点(331)を掲載した。この他に羽口片と考えられる遺物(7.5g)が出土した。

〔時期〕 検出面から判断すると、縄文～弥生時代の遺構の可能性が高い。

S K 120土坑（第64図、写真図版53）

〔位置・検出状況〕 IV-A 5-c d グリッドに跨って位置する。Ⅶ層上面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 同一検出面で重複する遺構はないが、検出面を異にする S K I 06 竪穴住居状遺構・S K 110・116土坑・P P 179に切られている。

〔埋土・堆積状況〕 色調や混入物等により3層に分層できる。底面付近にはにぶい黄褐色シルト層がみられ、にぶい黄褐色シルトや明黄褐色シルトを含む暗褐色～褐色シルト層を主体とする。層厚がなく、人為か自然かの判断ができない。

〔平面形・大きさ〕 周囲の遺構に切られているため、平面形や主軸方向は不明である。確認できた開口部の大きさは、長軸105.5cm、短軸95cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は浅い逆台形で、壁は底面から角度を持って立ち上がる。深さは最大で13cmを測る。

〔出土遺物〕 墓土から縄文・弥生土器片37.1gが出土し、1点(332)を掲載した。

〔時期〕 検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

S K 121土坑（第64図、写真図版53）

〔位置・検出状況〕 IV-A 4-a グリッドに位置する。S K 117の底面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K 107・117土坑と重複し、本遺構が最も古い。また、検出面を異にする S D 30溝跡に切られている。

〔埋土・堆積状況〕 褐色シルトブロックを多量に含む黒褐色シルトの単層である。層厚はないが、墓壙と考えられる土坑と類似しており、人為堆積の可能性が高いと判断した。

〔平面形・大きさ〕 大半をS K 117土坑に切られ、消失しているが、残存する部分から判断すると、平面形は歪な隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-61°-Wで西北西を向く。確認できた開口部の大きさは、長軸176cm、短軸105.5cmを測る。底部の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸140cmを測る。

〔断面形・深さ〕 底面付近しか残存しないため、正確な断面形状は不明であるが、類似する土坑の形状を考慮すると、逆台形を呈する可能性が高い。深さは最大59cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格〕 平面形や堆積状況から墓壙の可能性が高いと捉えている。

〔時期〕 遺構の性格から中世(13～14世紀)の遺構と捉えている。また、S K 117土坑との重複関係から、調査H区の墓壙と考えられる土坑の中でも、最も古い時期の遺構の可能性が高い。

S K 122土坑（第65図、写真図版53）

〔位置・検出状況〕 IV-A 8-e グリッドに位置する。検出面はV層下面である。VI層～VII層に当

当たる面での検出で、若干Ⅶ層を下げ切っていない感がある。柱穴状土坑とも考えたが、平面形が不整なことから土坑とした。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。押土を同じくして、SK123土坑と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、暗褐色土の単層で、下位面に地山崩落上と思える褐色土が覆う。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形状で、大きさは、開口部径で62×38cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形はビーカー形状で、壁はやや角度をもって立ち上がる。深さは、西壁が最大で28cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片55.5gが出土したが、不明の粗製土器で不掲載とした。

〔時期〕 出土遺物からは、はっきりした時期観は得られないが、近隣の出土遺物から縄文時代中期後葉から弥生時代と考えられ、隣接するSK123土坑と同時期の可能性が高い。

SK123土坑（第65・77図、写真図版54・66）

〔位置・検出状況〕 IV-A8-eグリッドに位置する。検出面はSK122土坑同様である。精査の結果、底面に焼土が検出された。平面図作成後に住居跡の可能性を探るため、壁を切ってトレンチを設定し、精査を行っている。よって平面写真は、一部礫が無くなった状況となっている。

〔重複・隣接関係〕 一部中世の柱穴状土坑と重複する。隣接関係では西側にSK122土坑があり、北側にSK127土坑がある。また周囲には同一面検出の柱穴状土坑群が点在する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土上位にはSK122土坑同様の暗褐色土が埋まる。この埋土には比較的多くの土器片が出土している。埋土下位層（焼土上）には、炭化物を伴った粘土質の黒褐色土が埋まっている。これらは人為的堆積の可能性がある。

〔平面形・大きさ〕 平面形は不整な楕円形状で、大きさは開口部径で、174×125cmを測る。底面は120×90cmとなっている。

〔断面形・深さ〕 断面形は底面が平坦になる逆台形状で、深さは、西壁で20cmを測る。

〔底面状況〕 底面から焼土が検出された。平面形は不整な円形で、大きさは95×75cmを測る。土坑の略中位まで焼土が広がっている様子が見えた。焼上の厚さは、概ね5cmを測り、縮まりは比較的良い。焼上下には比較的多くの炭化物が検出された。掘り方は深さ約10cmに及ぶ。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片1327.5gが出土した。大半が埋土上層（焼土2）からの出土であるが、粗製土器が多い。掲載は焼上下から出土した内の2点である。333は鉢形土器の口縁部で、胎土に雲母や石英が多く含まれ、他の中期末葉土器にはない特色を持つ。334は小型であるが333と同時期と考えられる破片である。

〔遺構の性格〕 焼土を住居跡の炉跡と想定して周囲を下げてみたが、褐色層（埋土）が広がるのみで、土器や他の施設（柱穴や壁溝など）は検出できなかった。よって、焼土は土坑に伴うものと判断される。焼土下から炭化物が検出されたことを考慮すると、土坑は焼土を破棄する目的を持ったものかもしれない。

〔時期〕 上層で出土している土器は、破片資料で不明であるが、流れ込みの可能性が高い。焼土下で出土した土器は、SK124土坑などで出土しているものより、若干新しい様相が見える。グリッド周辺でも同様の土器が出土していることを考慮に入れて、遺構の時期を縄文時代中期後葉から弥生時代と長い幅で捉える必要を感じるが、判然としない。

SK124土坑（第65・77・78図、写真図版54・66・67）

〔位置・検出状況〕 IV-A 6-d グリッドに位置する。検出面はV層下である。検出状況と図との関わりを後述するSK125土坑と合わせてここで示す。最初は住居跡と考え、ベルトを大きな範囲で設定した。その断面図がA-A'である。住居跡とはならなかつたが、この断面観察で、SK124土坑の西側壁の立ち上がりを確認した。しかし北側や東側は明確にできず、ベルトをはずして全体を下げた。そこで改めてプランとなったのがSK124・125土坑である。よって平面図は、一部上位壁を下がった状況での図であるが、大きさの計測値は、その実測図を元にしている。実際はもっと大型であった可能性が高い。土器は断面図に見える埋土より最も多く出土している。

〔重複・隣接関係〕 東側でSK125土坑と重複する。SK124土坑が新しいと判断したが明確な差ではない。北西で調査区外に広がる。また西側にはSK130土坑、南側にはSK131・133土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 上層は暗褐色土に粘土や鉄鉱分が混入する層で人為的堆積の可能性が高く、グラウジ化される。下層も同じように混入分が多いが、水性堆積の様相が見える。

〔平面形・大きさ〕 平面形は不整な橢円形状で、大きさは開口部径で、195×172cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、底面が平坦となる皿形状で、壁は角度をもって立ち上がる。深さは、上位検出面から確認された西壁で、48cmを測る。下位検出面で確認された北南壁は20~25cm程の深さとなる。

〔出土遺物〕 繩文土器片4707.1gと鉄製品1点(4.7g)が出土した。鉄製品425は流れ込みと判断される。上器は比較的大型の完形品が多い。335は沈線区画内磨消しでC字もしくはS字状のモチーフとなるか。同様の土器はSI17堅穴住居跡でも出土している。略完形の336は、底部との接点が見つからなかつたが344が同一個体の可能性が高く、大型の土器でやや内湾し体中央部が最大径となる。同様の器形に337がありやや小型である。343が底部となりそうで、器高は21.5cm前後と予測される。342は、SK128出土349と同様の器形となるものであろう。すべて同時期とみられる。

〔時期〕 出土土器からSI17堅穴住居跡と同時期の、縩文時代中期後葉から末葉と捉えられる。

SK125土坑(第65・77図、写真図版54・67)

〔位置・検出状況〕 IV-A 7-d・eグリッドに跨って位置する。検出状況などはSK124土坑と同様である。

〔重複・隣接関係〕 SK124と重複する。周囲には柱穴状土坑が点在する。また、SN02焼土は南東側壁から1.50m離れてある。

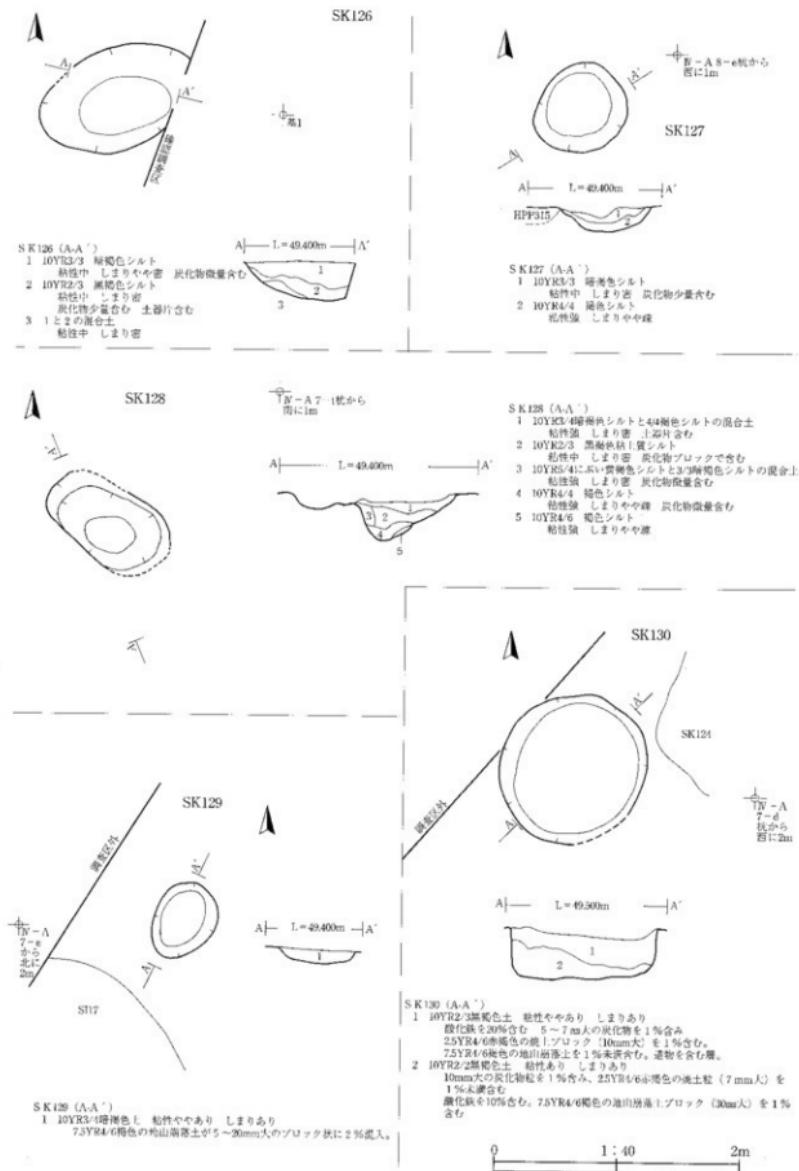
〔埋土・堆積状況〕 SK124土坑と同様である。ただし、下位面は水性堆積状ではなく、最下位層にしまりのない黄褐色土が見え、壁が崩落している可能性がある。

〔平面形・大きさ〕 平面形は不整な橢円形状で、大きさは、長軸が推定250cm、短軸が最大で158cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、SK124土坑同様に皿形状で、壁は角度をもって立ち上がる。しかし北側壁はながらに落ち込む。深さは、上位検出面から確認された南壁比高で48cmと深く、SK124土坑の西壁と同数値となる。

〔出土遺物〕 縩文土器片5311gが出土した。SK124土坑に比べて、破片資料が多いが、略完形品と底部、破片1点を掲載した。346は、4単位となる山形口縁の深鉢で、SK124土坑出土土器同様に、体中央部で膨らむ器形となる。347はやや磨滅している。

〔時期〕 出土土器から縩文時代中期後葉から末葉の遺構と捉えられる。



第66図 SK126~130土坑

S K 126土坑（第66図、写真図版55）

〔位置・検出状況〕 IV-A 7-d・eグリッドに跨って位置する。VI層～VII層に当たる面での検出で、若干VI層を下げ切っていない感がある。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。東側が未調査区（現道下）に広がる。

〔埋土・堆積状況〕 炭化物を少量含む黒褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は橢円形状で、大きさは開口部径で、長軸が推定130cm、短軸が83cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは最大で31cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片1635.4gが出土した。破片資料のみで明確にできなかつたが、SK 125土坑同様の上器に、若干新しい土器（弥生土器？）が混在している様相が見えた。

〔時期〕 出土遺物からは、はっきりした時期観は得られないが、近隣の出土遺物から縄文時代中期後末葉か弥生時代と考えられ、検出面や埋土の状況から弥生時代の可能性が考えられる。

S K 127土坑（第66図、写真図版55）

〔位置・検出状況〕 IV-A 7-eグリッドに位置する。検出面はSK 122・123土坑検出時より、若干下がったV層下と思われる面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。南側でSK 123土坑と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色や褐色土の自然堆積と思われる。上層の暗褐色土はSK 123土坑上層に似る。

〔平面形・大きさ〕 平面形は略円形で、大きさは75×70cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大で20cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片343.4gが出土した。出土状況はSK 126土坑に似る。

〔時期〕 SK 126土坑同様の理由で、弥生時代の可能性が考えられるが判然としない。

S K 128土坑（第66・78図、写真図版55・67）

〔位置・検出状況〕 IV-A 6-eグリッドに位置する。検出面はSK 122・123土坑検出時より、若干下がったV層下と思われる面での検出である。上器がまとまって出土し、住居跡の可能性を考えて精査した区域で、最終的に住居跡の範囲内に収まる可能性を示す。

〔重複・隣接関係〕 H柱穴状土坑群P P 331と重複する。S I 17竖穴住居跡の炉跡と思われる焼土が北東側に、大型土坑のSK 124土坑は遺構の南西側にある。周囲には柱穴状土坑群3に属する柱穴が点在し、上位には柱穴状土坑群2に属するP P 78などがある。

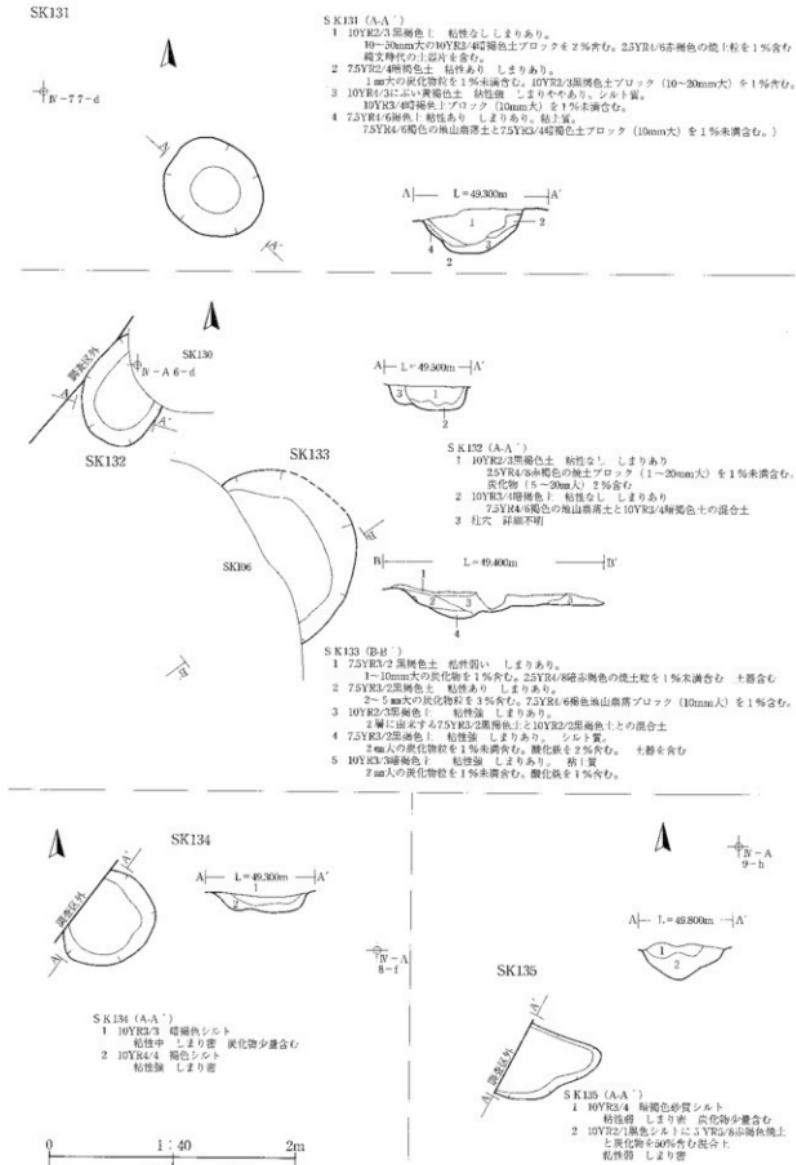
〔埋土・堆積状況〕 埋土は黒褐色土が主体であるが、埋土上位や壁際に混合土が埋まる。炭化物や土器片を多く含む。全体的に粘性が強く、人為的な堆積の可能性がある。

〔平面形・大きさ〕 遺構の北側や南東側を掘り過ぎているが、平面形は橢円形状になると予測される。大きさは、開口部径で長軸推計105cm、短軸が56cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、南西壁が角度を持って立ち上がり、北東壁は緩やかに長く上がる。深さは南東壁比高で、30cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片285.6gが出土した。その内2点を掲載した。349は大柄な深鉢の口縁部で、隆線によるJ字文が施される。SK 125上坑出土土器より、若干古めの土器である。

〔時期〕 出土遺物から縄文時代中期後葉～末葉の遺構と考えられる。



第67図 SK131～135土坑

S K 129土坑（第66図、写真図版55）

〔位置・検出状況〕 IV-A 7-f グリッドに位置する。検出面はⅧ層上面である。S I 17 竪穴住居跡の精査中に検出された。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。南西側で S I 17 竪穴住居跡と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土の單層で、自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形を呈し、大きさは開口部径で、56×50cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大で14cmと浅い。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出面から縄文時代中期後葉から末葉の遺構と考えられる。

S K 130土坑（第66・79図、写真図版56・67）

〔位置・検出状況〕 IV-A 6-d-e グリッドに跨って位置する。検出面はV層下面である。

〔重複・隣接関係〕 南東側で S K 132 土坑を切る。東側で S K 124 土坑と、南側で S K 133 土坑と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は酸化鉄や炭化物を多く含む黒褐色土を主体として2層に分かれ、土器は上位から出土している。人為的堆積の可能性がある。

〔平面形・大きさ〕 平面形はほぼ真円形で、大きさは開口部径で、直径120cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、壁がほぼ直角に立ち上がり、底面が平坦になるビーカー状で、深さは南北壁比高で、42cmを測る。

〔出土遺物〕 縄文・弥生土器片65.3gが出土した。

〔遺構の性格〕 出土遺物は縄文・弥生土器だが、検出はV層下面であるが、S K I 06 竪穴住居跡状遺構検出とは同一面である。埋土は墓壙の可能性のある S K 101 土坑などに似ている。出土遺物（351）は搅乱による流れ込みの疑いがある。

〔時期〕 S K 101 土坑などと同時期の中世で、墓壙もしくは S K I 06 竪穴住居跡状遺構に関連する遺構の可能性がある。

S K 131土坑（第67図、写真図版56）

〔位置・検出状況〕 IV-A 7-d グリッドに位置する。検出面はⅧ層上面である。

〔重複・隣接関係〕 東側に2m離れて S K 126 土坑がある。南西側で S N02 焼土と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土の主体は黒褐色土で、下位に黄褐色土が認められる。自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は楕円形で、大きさは開口部径で、83×76cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状であるが、壁はやや角度を持って立ち上がる。底面は若干であるが平坦となる。深さは南北壁比高で、33cmを測る。

〔出土遺物〕 縄文・弥生土器片18.6gが出土した。

〔時期〕 墓土や出土遺物から、縄文時代中期後葉から弥生時代にかけての遺構と考えられ、近隣の関係から弥生時代の可能性が高い。

S K 132土坑（第67図、写真図版56）

〔位置・検出状況〕 IV-A 5-6-d-e グリッドに跨って位置する。検出面はⅧ層上面である。

〔重複・隣接関係〕 北東側を S K 130 土坑に切られる。南東側で S K 133 土坑と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土の主体は黒褐色土で、SK130土坑に似ているが、焼土や炭化物が多い特徴がある。断面図に見える3は、別遺構（柱穴状土坑）に当たる可能性がある。

〔平面形・大きさ〕 平面形は、楕円形状を呈すと予測され、大きさは短軸で、開口部径67cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、壁は角度を持ち、底面は平坦となる。深さは東側壁で17cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片22.4g、石器1点が出土した。石器（400写真掲載）は、微細な剥離が認められ、IV平成20年度調査 2 (2) 繩文・弥生時代の検出遺構と出土遺物 ⑦ [石器と石製品] お；分類した不定形石器Bに相当する。

〔時期〕 繩文時代中期後葉から弥生時代の遺構と考えられる。

SK133土坑（第66図、写真図版56・64）

〔位置・検出状況〕 IV-A 6-d グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。

〔重複・隣接関係〕 SK106堅穴住居状遺構の西側壁に遺構の半分を切られる。北側にSK130・132土坑、東側にSK124・125土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土断面上位に見える窪みは、SK106堅穴住居状遺構の壁溝断面である。遺構はその溝の下にある。埋土1は、SK106堅穴住居状遺構の床面で炭化物が多い。遺構の埋土主体は黒褐色土である。下位に酸化鉄を含む特色はSK124土坑などに似る。

〔平面形・大きさ〕 平面形は略円形もしくは楕円形を呈すると予測され、大きさは北西壁-南東壁の開口部径で142cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、底面はやや平坦になる。深さは北東壁で23cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片1122.9gが出土した。写真図版64にある土器は、SK124土坑と同時期に属する上器である。

〔時期〕 川土遺物から縄文時代中期後葉から末葉の遺構と考えられる。

SK134土坑（第66・83図、写真図版57・70）

〔位置・検出状況〕 IV-A 7-f・g グリッドに位置する。検出面はV層下面（Ⅲ層上面？）である。調査の最終段階で、幅1mの調査区で検出したために、層位が定かではなかったが、後のダメ押して、下にⅢ層を確認したことから、検出面をV層下とした。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。遺構の西半分が調査区外にある。周囲に柱穴状土坑群3に属するP P401~405が点在する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は上位に暗褐色土、下位に褐色土が埋まる自然堆積である。

〔平面形・大きさ〕 平面形は略楕円形を呈すと予測され、大きさは北西壁-南東壁の開口部径で78cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは南壁で18cmを測る。

〔出土遺物〕 石器1点（401）が出土した。円柱状の磨石である。同様の石器は、平成20年度調査でも出土（4号塗石土坑出土石器）している。

〔時期〕 検出面や埋土から、弥生時代の遺構と予測されるが判然としない。

SK135土坑（第66図、写真図版57）

〔位置・検出状況〕 IV-A 8-h グリッドに位置する。SD26~29溝跡のプラン上で検出した。S

N01焼土に類似した遺構であるが、焼土が希薄であり、平面形も不明なことから土坑とした。

〔重複・隣接関係〕 S D28・29溝跡の上位にある。両遺構に挟まれた状況にあったが、溝に関連する遺構にはならなかった。遺構の西側は調査区外に広がり、溝状になる可能性もある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土には、赤褐色の廃棄？焼土と炭化物が多く混入する。これらの特色は、後述する S N01焼土遺構に似る。

〔平面形・大きさ〕 平面形は、不整な楕円形状を呈すと予測されるが、不明である。大きさ（幅）は北西壁-南東壁の開口部径で65cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、上位壁は短いが垂直に立ち上がり、中央部が窪む。深さは最大で25cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出面から中世から近世の遺構と考えられる。

(3) 焼 土

焼土は5基の検出であるが、2基はS 117竪穴住居跡に、1基はSK 123土坑にそれぞれ関連するものとした。よって、ここでは2基を取り上げる。

S N01焼土（第68図、写真同版58）

〔位置・検出状況〕 IV-A 7-g グリッドに位置する。検出面はV層上面である。

〔重複・隣接関係〕 北東に約5m離れて、同様の遺構の可能性のあるSK 135土坑がある。また、南東に約3m離れて、炭化物集中区（SX 07）が同一面で検出されている。

〔規模〕 焼土の範囲は不整な楕円形に広がる。規模は94×56cmを測る。

〔燃焼部〕 上位にかたく締まった焼土があるが、中心部には焼土粒に暗褐色土や炭化物が混入する。深さは最大で12cmを測る。

〔掘り方〕 ほぼ焼土範囲と同規模の掘りこみがある。断面の3は掘り過ぎかもしれない。また、SK 135土坑同様の焼土を廃棄した様相にも見える。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格・時期〕 埋土上位が焼成を受けていると判断して、焼土遺構としたがSK 135土坑同様の遺構である可能性がある。時期はSX 07炭化物と同時期の中世から近世の遺構と考えられる。

S N02焼土（第68図、写真同版58）

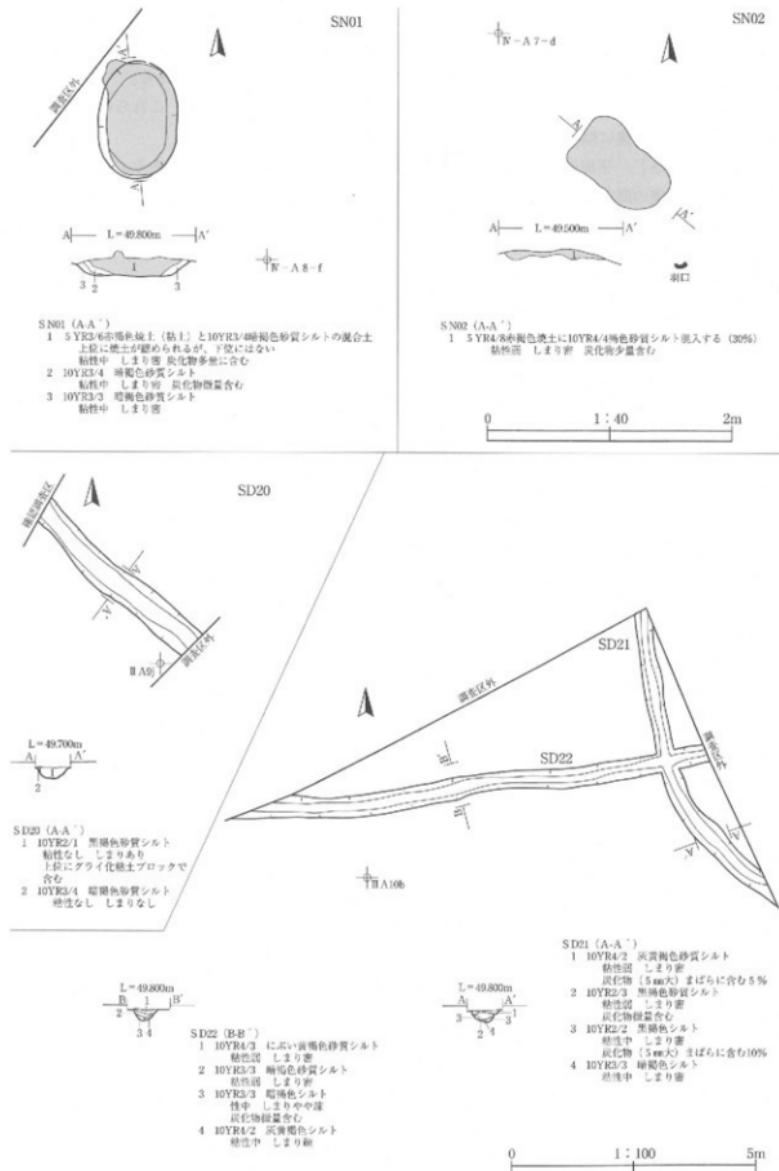
〔位置・検出状況〕 IV-A 7-d グリッドに位置する。検出面はV層下面で、SK 124土坑などが検出された面（V層上）よりやや高いが、明確な面は判断できなかった。

〔重複・隣接関係〕 SK 131土坑と北側で隣接する。南東側に50cm離れた位置から432の羽口が出土している。羽口片はV層面出土で、出土標高は約49.50mとなり、焼土検出面より20cm高い数値となっている。

〔規模〕 焼土の範囲は、不整な隅丸の方形状に広がる。規模は82×44cmを測る。

〔燃焼部〕 赤褐色焼土に褐色の砂質のシルトが混入するが締まりは良い。深さは最大で8cmを測る。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器1点(1.5g)が出土したが、掘り過ぎで得られた破片の可能性が高く掲載していない。検出グリッドからはV層上面で、432の羽口(385.3g)の他に鉄製品1点(18.0g)、鉄滓60g、粘土塊6点(82.5g)が出土し、繩文・弥生土器は120.5gが出土している。



第68図 SN01・02焼土、SD20～22溝跡

〔造構の性格・時期〕 検出面は縄文時代より上になるが明確ではない。ここでは弥生時代から古代・中世にかけての造構とするが判然としない。検出グリッドからは鉄滓などが出土しており、古代以降であれば製鉄関連の可能性もある。

(4) 溝 跡

平成20年度に1条、平成21年度に12条の溝を検出している。平成21年度分は、F区で検出されたもの最先に紹介している。

S D20溝跡（第68・79図、写真図版58・68）

〔位置・検出状況〕 調査区F区南側のII A 8・9 i グリッドに跨って位置する。検出面はV層上面であるが、比較的の上面（II層下）でプランが見えた。

〔重複・隣接関係〕 南東側が調査区外に延びる。

〔埋土・堆積状況〕 しまりのない黒褐色土を主体とする自然堆積である。

〔延長・幅〕 北西から南東側に、やや蛇行しながら延びる。確認された延長は4.05mである。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、底面が平坦になる。深さは西側壁で22cmを測る。

〔出土遺物〕 磨滅した縄文土器の破片が1点（352）出土した。

〔時期〕 検出面から古代以降の時期が考えられるが、埋土の状況などから近代に近い新しい造構の可能性が高い。

S D21溝跡（第68図、写真図版58）

〔位置・検出状況〕 IV A 1 a・b グリッドに跨って位置する。検出面はIV層上面で、S K88・89上坑を検出した同一面である。

〔重複・隣接関係〕 中央部で S D22溝跡と直角に交わる形で重複する。新旧ははっきりしなかったが、大きな時期差はないと考えられる。北側は調査区外に、南東側は未調査区（市道下）に延びる。

〔埋土・堆積状況〕 上層に灰褐色の砂質土が載る。主体は炭化物の混入する黒褐色土で自然堆積である。

〔延長・幅〕 やや弧を描きながら北から南東方向に延びる。検出された延長は5.70mである。幅は、北側で34cm、S D22溝跡と交差する中央部で40cm、南側で52cm前後を測る。これは検出面の高さの影響によるものと判断する。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状であるが、底面はやや平坦になる。壁はやや段を持って立ち上がる。深さは、それぞれ東壁で計測すると、北側で11.4cm、南側で19.9cmとなる。検出面の高さが影響しているが、底面の標高は、北側で平均49.54m、南側で平均49.53mとほぼ同じ数値となっている。

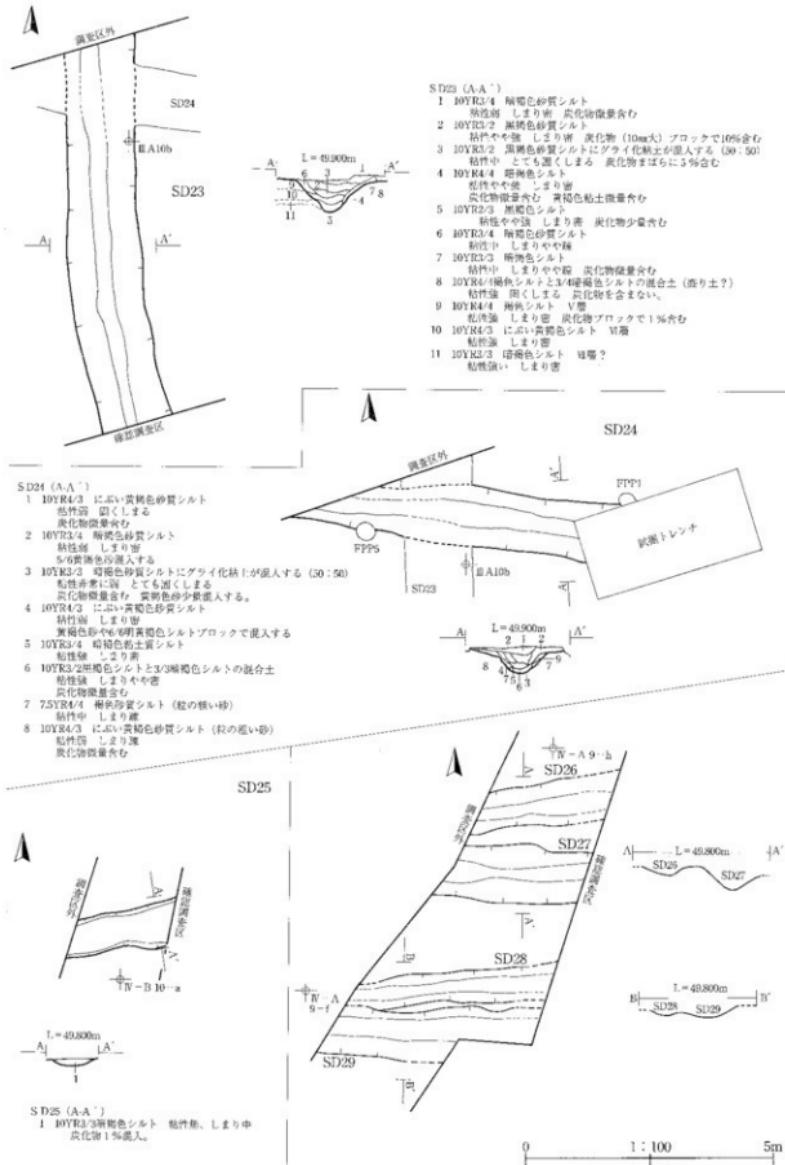
〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 中世から近世にかけての造構と考えられる。

S D22溝跡（第68図、写真図版59）

〔位置・検出状況〕 III A 9・10aからIV A 1 a グリッドに跨って位置する。検出面は S D21溝跡と同じIV層上面である。

〔重複・隣接関係〕 東側で S D21溝跡と直交する形で重複する。西側が調査区外に延びる。東側は未調査区（市道下）に延びる。IV A 3・4 a グリッドで検出した S D30溝跡とは接続しない可能性がある。



第69図 SD23～29溝跡

高い。南側にSK88・89土坑があるが、時期の前後関係は把握できない。西側には、底部（V層面）で検出したSD23・24溝跡がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に載る黄褐色土は、SK90土坑の埋土上位に似る。主体が暗褐色土で、色調がやや明るくなるところが直行するSD21溝跡との相違点である。自然堆積である。

〔延長・幅〕 少分のうねりがあるが、ほぼ直線的に西から東方向に延びる。確認された延長は、9.15mを測る。幅は西側で42~45cm、東側で35~40cmを測る。この差は、遺構の確認のために東側を若干下げた影響と考えられる。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、SD21溝跡のように底面が平坦にならない。深さは本来の検出面と考えられる西側北壁で、11.0~13.5cmを測る。底面の標高は、西側で概ね49.60m前後となっている。

〔出土遺物〕 縄文・弥生土器片11.4gが出土したが、流れ込みと判断して不掲載とした。

〔時期〕 中世から近世にかけての遺構と考えられる。

SD23溝跡（第60・79図、写真図版59・68）

〔位置・検出状況〕 III A 9・10a-dグリッドに跨って位置する。検出面はIII層下面である。SK88土坑の精査中に西側にプランを検出し、SD22溝跡精査中に底面でプランの延長を捉え、南北に延びる溝跡と登録した。その後、南側の市道下のアスファルトを剥がして、南側の延長を確認している。

〔重複・隣接関係〕 北側で直交する形で、SD24溝跡と重複するが新旧は明確にできなかった。調査区外の北側にはほぼ直線的に延びるが、南側では市道下にやや弧を描いて、南西方面に延びると予測する。SD24溝跡との交点付近の東側に、焼成土坑であるSK88土坑がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は、上位に黒褐色土がある。水性の堆積物のグライ化粘土を多量に含み、非常に硬く締まる。下位には暗褐色土が埋まるが、やや縮まりがなくなる。全体的に炭化物が含まれている。埋土断面にある8はSK88土坑の検出面になる。

〔延長・幅〕 ほぼ南北に延び、確認された延長は、7.80mである。幅は、開口部径で、北側が1.38m、南側が1.40mで、ほぼ一定している。

〔断面形・深さ〕 断面形は、東西壁ともになだらかに立ち上がる。下位でやや壁が急になるが、埋土5は掘り過ぎの可能性もあると考えておらず、堀状に断面がV字になる様相は見られない。深さは、西側壁が42.2~51.0cm、東壁が46.5~54.0cmを測る。底面の幅は30~40cm前後で推移する。底面の標高は、SD24溝跡交点付近で49.22m、中央部で49.20m、南端で49.20mとなり、概ね安定している。

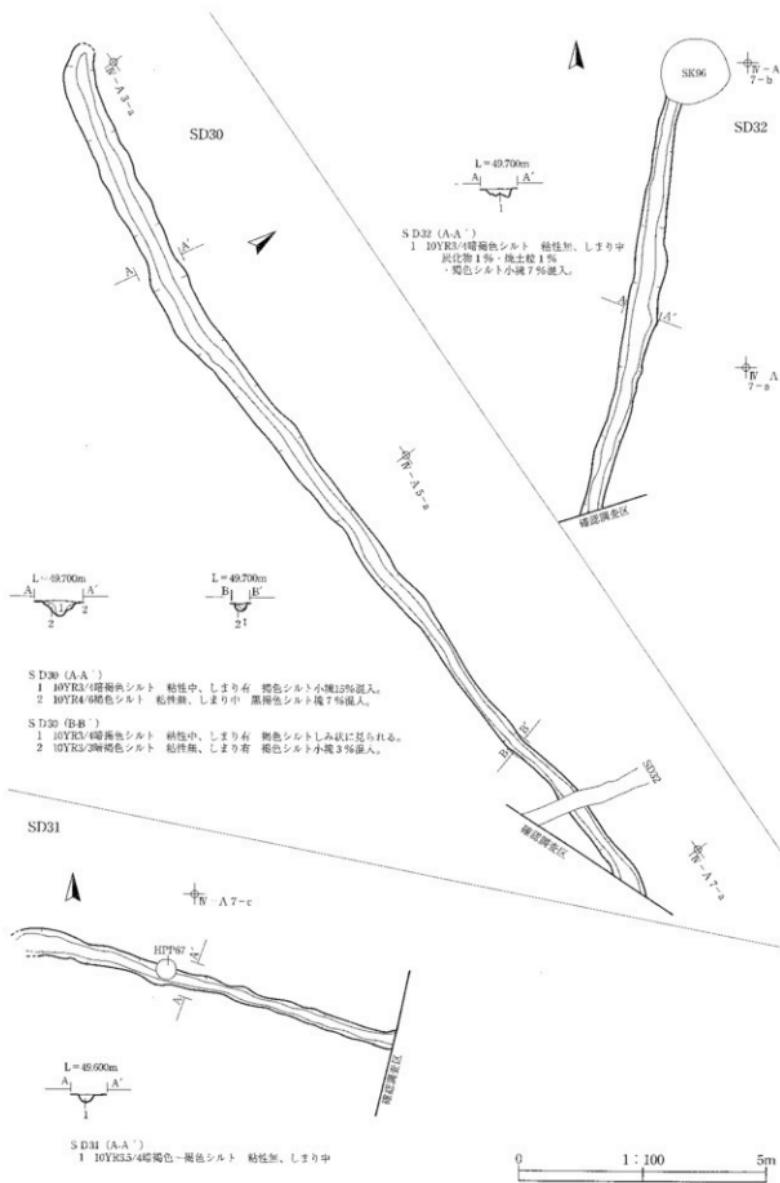
〔出土遺物〕 縄文・弥生土器片65.9gの他に、須恵器壺の頸部片（353）1点が出土した。

〔時期〕 SD22溝跡より古い中世から近世の遺構で、SK88・89土坑と同時期の遺構と考えられる。

SD24溝跡（第69図、写真図版59）

〔位置・検出状況〕 III A 9・10aグリッドに跨って位置する。検出は、県教育委員会の試掘トレンドを再現した際、北側断面を観察した結果、登録したものである。SD22溝跡の精査中にその延長を捉え、東西に延びる溝跡とした。試掘トレンドの南側断面でも、検出を試みたが確認できなかった。よって東側の延長は不明である。

〔重複・隣接関係〕 西側でSD23溝跡と重複する。北壁際には、F柱穴状土坑群に属するPP1が、南壁際にはPP5が検出されている。南側でSK88土坑と隣接する。西側は調査区外に、ほぼ直線的に延びると予測される。



第70図 SD30～32溝跡

〔埋土・堆積状況〕 プランの決め手となったのは、埋土の上位や下位に見られる褐色や黄褐色の砂質土である。これらの上は S D23溝跡には見られない。主体は水性堆積とみられる粘土の混入した暗褐色土である。全体的に炭化物は少ないが、黄褐色砂が混入する特色がある。

〔延長・幅〕 ほぼ東西に直線的に延びる。確認された延長は 6 m ほどである。幅は中央部で 1.16m、東端で 1.24m を測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、S D23溝跡と比較すると北南壁が緩やかに立ち上がる。底面がやや平坦になり、いわゆる逆台形状である。深さは、北壁で 36cm、南壁が 37.6cm を測る。底面の幅は 34~45 cm で推移する。底面の標高は東側で 49.24m、西側で 49.30m となる。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 S D23溝跡と同時期の、中世から近世にかけての遺構と考えられる。

S D25溝跡（第69図、写真図版59）

〔位置・検出状況〕 IV-B 9-b~10-b グリッドに跨って位置し、南北に細長い調査区を横断している。V層上面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 P P 24・25 と重複し、本遺構が新しい。本遺構を境に南側には柱穴状土坑が集中している。

〔埋土・堆積状況〕 若干の炭化物を含む暗褐色シルトの単層である。層厚がないため、人為か自然かの判断ができない。

〔延長・幅〕 調査区内で確認できた延長は約 1.8m で、幅は最大で 73cm を測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は浅い皿状を呈し、深さは最大で 12cm を測る。

〔出土遺物〕 埋土から流れ込みと考えられる繩文・弥生土器片（2.1g）が出土した。

〔時期〕 検出面から中世～近世の遺構の可能性が高いが、年代を特定できる遺物が出土していないため、詳細な年代を提示することはできない。

S D26~29溝跡（第69図、写真図版60）

〔位置・検出状況〕 IV-A 9・10-f・g グリッドに跨って位置する。検出面は V 層上面である。検出は調査区 H 区の北側に当たり、幅約 2 m の狭い範囲となる。特に当グリッド周辺は、県道と西側の畠への進入路に当たり、検出面も深いことから県道の法面を掘削できない区域であった。よって S D29 の東側が未調査となっている。4 条の溝は、一連の遺構として捉えた。

〔重複・隣接関係〕 S D28溝跡の西側で S K135土坑と重複する。S D26溝跡の北側には H 柱穴状土坑群 1 が広がり、その北隅には S D25溝跡がある。4 条とも西は調査区外に、東は確認調査区（県道下）に延びる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は砂質暗褐色土の単層で、自然堆積である。

〔延長・幅〕 4 条平行に、ほぼ東一西に延びる。長さは調査区幅に収まる。幅は、それぞれの中央部開口部径で、S D26溝跡が 80cm、S D27溝跡が 120cm、S D28溝跡が 55cm、S D29溝跡が 112cm となるが、統一されていない。

〔断面形・深さ〕 断面形は、すべてが皿形状で、壁はなだらかに立ち上がる。深さは、S D26溝跡が南壁で 13cm、S D27溝跡が北壁で 41cm、S D28溝跡が南壁で 5 cm、S D29溝跡が南壁で 26cm となり、S D27・29溝跡が深くなっている。

〔出土遺物〕 ない。

〔遺構の性格・時期〕 S D26・27溝跡とS D28・29溝跡との間に2mほどの空白部があり、2条ずつ区別できるかもしれない。そうすれば北側が小規模で、南側がやや大きな溝が平行している遺構となる。その性格は判別できないが、時期は、検出面から古代以降と捉えられる。H柱穴状土坑群1と、その北隅あるS D25溝跡に関わる遺構の可能性もあり、また焼土や炭化物を埋土とするSK135土坑との関連も考えられる。

S D30溝跡（第70・79・86図、写真図版60・68・71）

〔位置・検出状況〕 IV-A 2-a～7-aグリッドに跨って位置し、調査H区の南側を東西方向に横走している。東側は調査区外に延びている。V層上面をやや下げた面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S D32溝跡と重複し、本遺構が新しい。また、検出面を異なる土坑（SK109・117）や柱穴状土坑（P P222・228）を切っている。

〔埋土・堆積状況〕 東西で異なる堆積状況を呈している。褐色シルトを含む暗褐色シルトを主体とすることは変わらないが、比較的の残存状態の良好な西側は墓壙と考えられる土坑の堆積土と類似しており、人為堆積の可能性が高い。一方、残存状態のあまり良くない東側は層厚がないため、断定はできないものの、混入物が少なく、自然堆積の可能性が高いと考えられる。

〔延長・幅〕 調査区内で確認できた延長は約21mで、幅は最大で77cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、西側では底面が丸みを帯びるV字状、東側ではU字状を呈す。深さは西側で21cm、中央部の深いところで30cm、東側で28～30cmを測る。

〔出土遺物〕 埋土から繩文・弥生上器片（44.7g）、須恵器片1点、鉄製品3点（44.3g）が出土した。このうち須恵器片1点（354）、鉄製品1点（426）を得載した。

〔時期〕 検出面やSK117土坑との重複関係から中世以降の遺構であることは確実であるが、本遺構に確実に伴う遺物がないため、詳細な年代を提示することはできない。

S D31溝跡（第70図、写真図版60）

〔位置・検出状況〕 IV-A 6-c～7-cグリッドに跨って位置し、調査区を西北西から東南東方向に横走している。東側は調査区外に延びており、西側はIV-A 6-cグリッド内で不明瞭となっている。V層上面をやや下げた面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 P P67と重複し、本遺構が古い。

〔埋土・堆積状況〕 混入物の無い暗褐色～褐色シルトの単層である。層厚がないため、人為か自然かの判断ができない。

〔延長・幅〕 調査区内で確認できた延長は約6.3mで、幅は最大で47cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形はU字状を呈し、深さは東側で13.6cm、西側で14cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出面から中世～近世の遺構の可能性が高いが、年代を特定できる遺物が出土していないため、詳細な年代を提示することはできない。

S D32溝跡（第70図、写真図版60）

〔位置・検出状況〕 IV-A 6-a bグリッドに跨って位置し、調査区を南北に継続している。南側は調査区外に延びている。V層上面をやや下げた面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK96土坑と重複し、本遺構が古い。また、検出面を界にする柱穴状土坑（P

P 208・224・234) を切っている。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色シルト・炭化物・焼土粒を含む暗褐色シルトの単層である。層厚がないため、人為か自然かの判断ができない。

〔延長・幅〕 調査区内で確認できた延長は約7mで、幅は最大で50cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は浅い皿状もしくは逆台形状を呈し、深さは北側で最大14cm、南側で11cmを測る。部分的に底面に凹凸が見られる。

〔出土遺物〕 埋土から縄文・弥生土器片0.3gが出土したが、周囲からの流れ込みと考えられる。この他に、埋土から鉄製品1点(5.0g)、鐵滓15.6gが出土した。

〔時期〕 検出面やS D30溝跡・S K96土坑との重複関係から、中世～近世の遺構であることは確実であるが、本遺構に伴う遺物がないため、詳細な年代を提示することはできない。

(5) 柱穴状土坑群

検出区域に分け、時期ごとや検出面ごとに区分していることは、「Ⅲ調査の方法」で示している。F柱穴状土坑群では、平成20年度に検出されたものに100番台をついている。H柱穴状土坑群は3区分されているが、詳細は「位置・検出状況」で示している。また、番号はすべて検出順である。

F柱穴状土坑群（第71図、写真図版61）

〔位置・検出状況〕 平成20年度と平成21年度に検出した調査区F区の柱穴状土坑を集めた。位置・検出面は表に示している。V層面検出が13個で、Ⅷ～Ⅹ層面が44個となる。

〔重複・並列関係〕 重複は表のとおりである。V層面で検出されたP P 1・5・6は、S D24溝跡の壁際で検出されたものであり、溝に関わる可能性が高い。同じくV層面で検出されたP P 101～103や105～107は、F区のS D20溝跡の近隣での検出で、等間隔に並んでいる様子がうかがえる。下位面検出のものは、Ⅲ A 9 bグリッド付近に多く、P P 18・19・20・34と43・46・47が掘立て柱状に並んでいるかの様である。

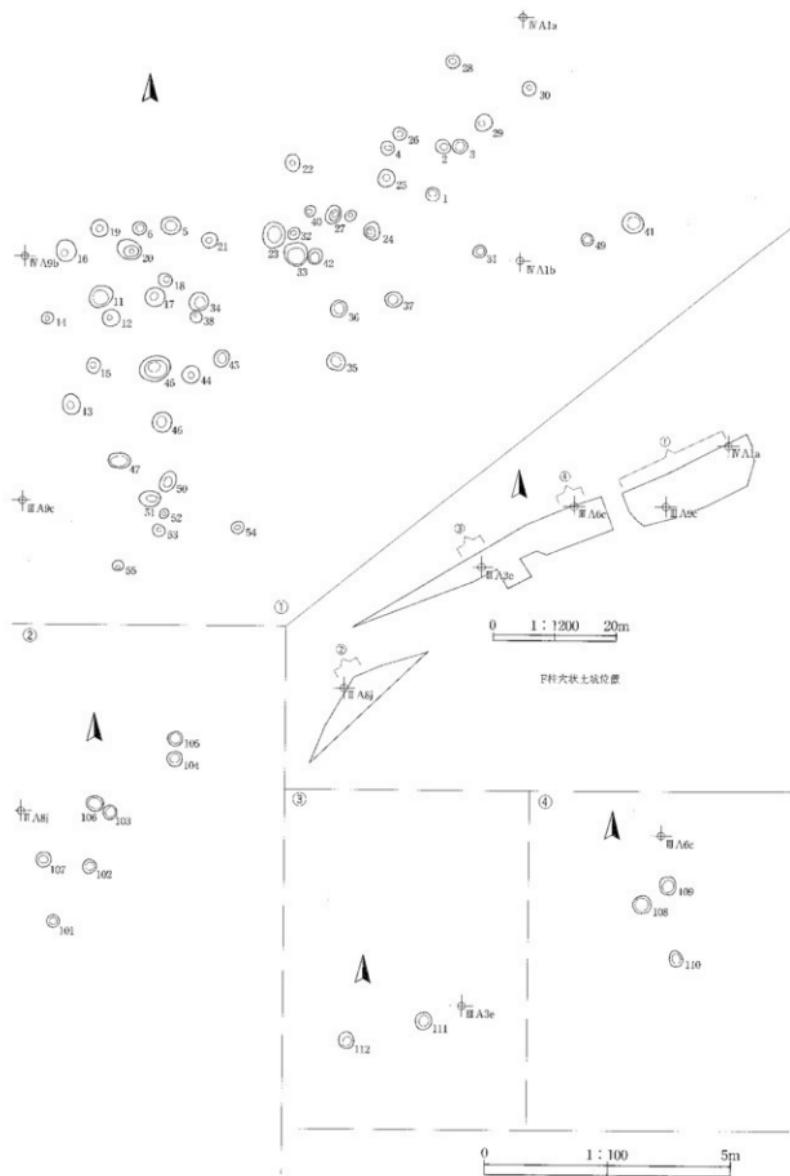
〔埋土・堆積状況〕 埋土は表に示した通りであるが、P P 101～105は混合土が埋土となる。全体的に上位検出のものは、砂質で褐色土もしくは暗褐色土が主体となる特色がある。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形もしくは楕円形状で、大きさは表のとおりである。P P 101～107は、開口部径が30cm前後で同一性が認められる。下位面検出のものは、大きさは様々であるが、開口部径40cmを超えるものは、Ⅲ A 9 bグリッド周辺に多い。また、P P 52～55は小型であるが、土器が出土した周辺を開むようであったために登録している。

〔断面形・深さ〕 断面形は、概ね壁が角度を持って立ちあがるが、一部なだらかな皿状になっているもの(P P 15・21・23・32・44)も登録している。木根によるものかもしれない。深さは表に示した通りで、すべて最大径で計測している。

〔出土遺物〕 P P 16から15.3gの縄文土器片が出土している。また、Ⅲ A 8 bグリッドでは、縄文時代後期前葉と思われる破片を含めた、比較的多くの土器(982.4g)が出土している。

〔時期〕 Ⅱ A 8 jグリッドで検出されたP P 101～107の7個は、中世から近世の可能性が高い。また、S D24溝跡の壁際で検出されたP P 1～6も同時期と考えられる。その他については土器の出土状況などから、縄文時代から弥生時代にかけての時期観が与えられるが、判別し難い。



第71図 F柱穴状土坑群

H柱穴状土坑群1（第72・79・86図、写真図版61・63・68・72）

〔位置・検出状況〕 調査H区で検出された柱穴状土坑のうち、S D26～29溝跡より北側に位置するものをまとめた。S D25溝跡が北側に、S D26～29溝跡が南側にあり、東西に横走している。柱穴状土坑群はこれらの溝跡に挟まれた範囲内に確認される。それぞれの位置は表で示しており、検出面はすべてV層上面である。検出数は22個である。

〔重複・隣接関係〕 P P 24・25がS D25溝跡の底面で検出され、溝跡よりは古いものが存在することは確実である。この他に新旧関係を把握することができなかつたが、P P 10とP P 23、P P 13とP P 19が重複している。図には調査範囲を入れてはいないが、東西方向約1mの狭い範囲の検出であるため、建物として捉えることができなかつた。しかしP P 1・24、P P 8・19には柱痕跡が確認でき、同一方向で並列している。東西に広がり建物を構成する可能性がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は表に示したとおりである。全体的に暗褐色シルトを主体とするが、P P 21は黒褐色シルト主体である。断面観察で柱当たりを確認できたP P 2・10・17・19のうち、P P 10以外では褐色シルトを掘り方埋土としている。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形もしくは梢円形を主体とし、大きさは表に示したとおりである。20～60cm前後と幅があるが、40cm前後と30cm前後のものが多い。

〔断面形・深さ〕 大半は底面から角度を持って立ち上がるが、一部緩やかに立ち上がるものも見られる。深さはすべて最大深度で表に示している。

〔出土遺物〕 P P 2から須恵器1点、P P 8から縄文土器片(1.1g)、P P 8とP P 14から3点(10.0g)の鉄製品が出土している。また、同一面の遺構出土遺物には、須恵器坏の破片3点(9.3g)、鉄製品3点(51.8g)の他、II層から時期不明の瓦片2点(437.4g)が出土している。このうち、P P 2から出土した須恵器(355)、P P 14から出土した不明遺物1点(427)を掲載した。

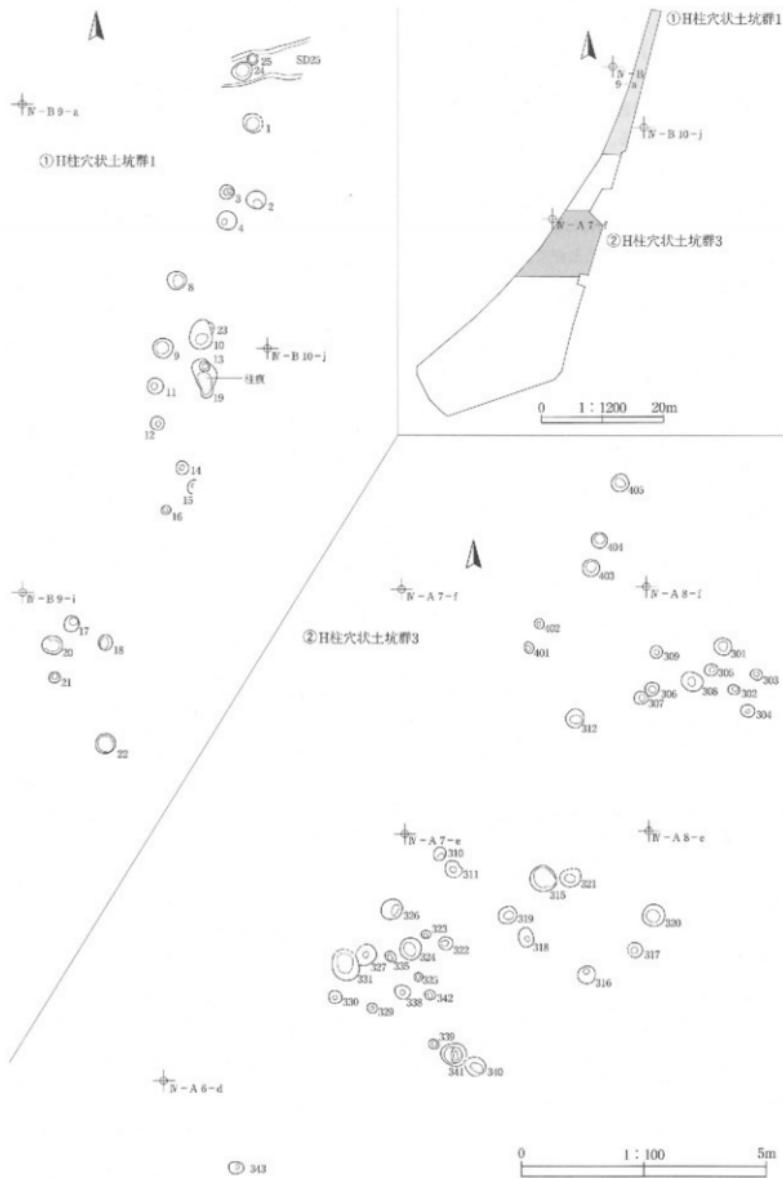
〔時期〕 検出面や出土遺物から古代から中世にかけての遺構と考えられる。

H柱穴状土坑群2（第74・75・79・86図、写真図版62・63・68・72）

〔位置・検出状況〕 調査H区で検出された柱穴状土坑のうち、前述のもの及び縄文時代・弥生時代の遺物が集中する周辺のⅦ～Ⅸ層面で検出したもの以外を一括した。柱穴状土坑の番号としてはP P 300までに相当する。位置・検出面は表のとおりである。調査区全体に見られるが、墓壙と考えられる土坑が密集する南西側は分布が薄く、S D30溝跡より南側では数個が散見されるにとどまる。総数は234個で、中心は中世～近世の遺構検出面であるV層面で検出したものである。

〔重複・隣接関係〕 重複は表に示した。野外調査中では建物と確認することができなかつたが、全体の配置を考慮すると、建物を構成する可能性を残すものは、IV-A 6-eグリッド周辺のP P 34・76・81・82・131とP P 77～79の一群、IV-A 8-fグリッド周辺のP P 87・88・90・58・70とP P 109・P P 112・99・71の一群、IV-A 7-eグリッド周辺のやや大きめの柱穴状土坑であるP P 31・84・111・86とP P 116・120・83の一群がある。また、IV-A 5-cグリッド周辺のP P 42・214・40・184・43・183・44・49・192・175の一群、IV-A 6-cグリッド周辺のP P 72～75・67の一群は弧状もしくは環状を呈し、関連性のある柱穴状土坑である可能性がある。

〔埋土・堆積状況〕 個々の埋土は表に示したとおりである。Ⅶ～Ⅸ層面で検出したものは暗褐色～褐色シルトを主体とするものが多く、黒褐色シルト主体のものはP P 250等わずかである。一方、V層面検出のものは暗褐色シルトを主体するものが若干多いものの、黒褐色シルトを主体とするものも半数近くある。暗褐色シルト主体のものはどの面でも見られ、上位面程黒褐色シルト主体のものの割



第72図 H柱穴状土坑群1・3

割合が高くなる傾向が見られる。

〔平面形・大きさ〕 平面形は円形もしくは梢円形を主体とし、大きさは表に示したとおりである。VI～VII層面検出のものは、20～60cm前後までの幅があり、20～30cm前後に集中する。V層面検出のものは、15～90cm前後までの幅があり、30cm前後に集中する。

〔断面形・深さ〕 大半は底面から角度を持って立ち上がるが、一部緩やかに立ち上がるものも見られる。深さはすべて最大深度で表に示している。

〔出土遺物〕 詳細は表に示しているが、まとめると縄文・弥生土器片481.1g、粘土塊を含めた羽口片86.9g、鉄製品3点(84.1g)、鉄滓27.5gが出土している。このうち、P P 39から出土した羽口1点、P P 60・69・237から出土した鉄製品各1点、P P 102から出土したかわらけ？(356) 1点、P P 114から出土した弥生土器？(357) 1点、P P 120から出土した土師器？(358) 1点、P P 226から出土した縄文土器1点(359)、P P 150から出土した溶着滓(446)を掲載した。

〔年代測定〕 P P 147の埋土中位で炭化材が出土したため、年代測定を行ったところ、AMS測定値で 670 ± 30 yr B Pという結果となった。詳細は本章3節の分析鑑定を参照して頂きたい。

〔時期〕 検出面や出土遺物からV層面検出のものは中世～近世の遺構、VI～VII層面検出のものは縄文時代～古代の遺構と考えられる。

H柱穴状土坑群3（第72・79図、写真図版63・68）

〔位置・検出状況〕 H区で、V層下面～VII層面で検出されたものを集めた。位置は表のとおりである。P P 401～405は、調査の最終段階でV層下面(VI層上面?)で検出されたもので、H柱穴状土坑群2に関連する可能性がある。欠番が多く生じているが、H柱穴状土坑群2に関わるもの（掘り残しなどが原因）や、非常に浅く、柱穴とは認めがたいものを削除したためである。個数は40である。

〔重複・並列関係〕 重複は表に示した。北側にあるP P 403～405は、直線的に並んでいる様子がうかがえる。その他はIV-A 8-fグリッドやIV-A 7-eグリッドに集中している。特に後者のものは、S I 17堅穴住居跡周辺に広がり、P P 324・326・327・331は住居に伴うものの可能性が考えられる。また、P P 315～321はS K 123上坑を囲むように位置しており、関連性が考えられる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は大きく3つにわかれる。1つは褐～黄褐色のもの(10YR 4/3や4/4)、2つ目は暗褐色のシルト、そして黒褐色のものである。褐～黄褐色土のものはIV-A 8-fやIV-A 7-eグリッドに、ややまとまりがある。全体的に暗褐色のものが多い。

〔平面形・大きさ〕 平面形は、ほぼすべてが真円形で、大きさは表のとおりである。

〔断面形・深さ〕 壁は角度を持って立ち上がるが、一部緩やかなものも登録している。深さはすべて最大径で表に示している。

〔出土遺物〕 詳細は表に付しているが、まとめると縄文・弥生土器片281.9gが出土している。鉄製品などは出土していない。遺構が集中しているIV-A 8-f・gグリッドからは、V層下出土の遺構外で登録した土器122・123を含めた1537.9g、IV-A 7-eグリッドからは同じくV層下で、1614.9gと比較的多くの土器が出土している。

〔時期〕 検出面や出土遺物から、縄文時代中期後葉から弥生時代にかけての遺構と考えられ、あえて分別すれば、埋土が黒～暗褐色土のものが縄文時代、褐～黄褐色土のものは、弥生時代に相当するかもしれない。また一部上位面(H柱穴状土坑2)の遺構である可能性を含む。

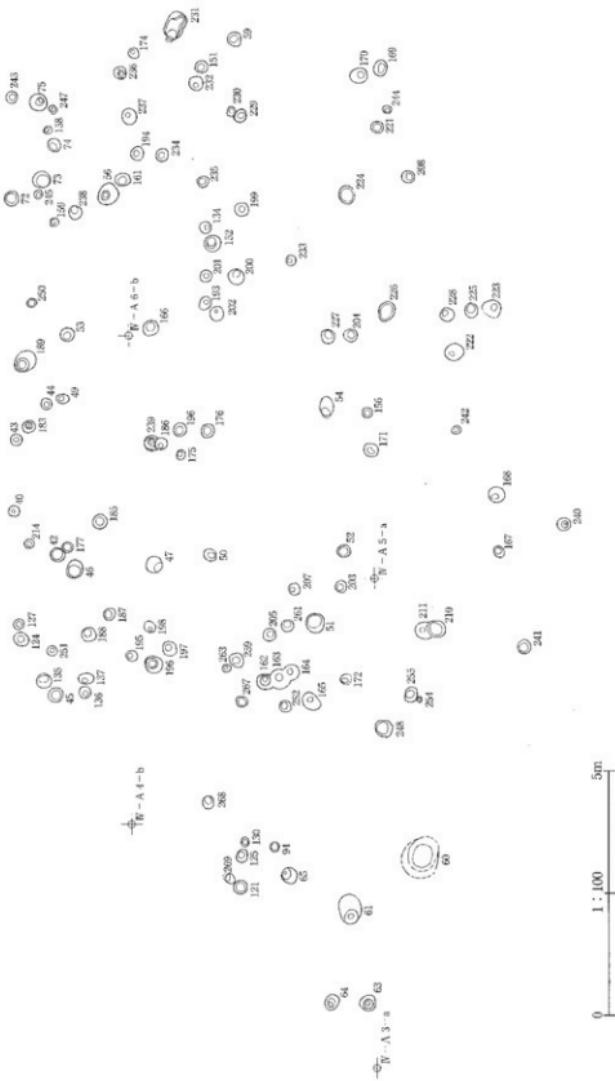


第73図 H柱穴状土坑群2 (1)

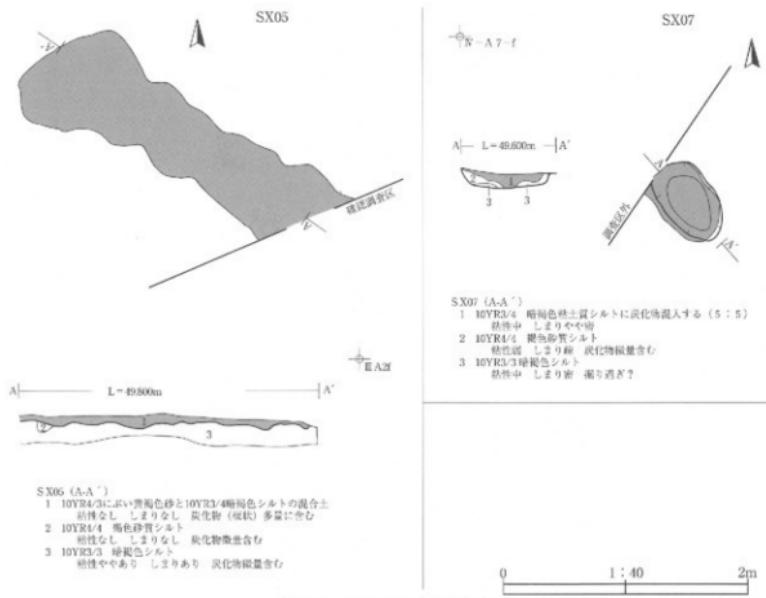
C

5

1



第74図 H柱穴状土坑群2 (2)



(6) その他の

S X05炭化物集中（第75図、写真図版63）

【位置・検出状況】 III A 1 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層下面で、後述する S X06炭化物集中や焼成土坑である S K88・89土坑の検出された面と同じである。

【重複・隣接関係】 南東側が現道の下に延びるが、確認できなかった。下位には S K I 05堅穴住居状遺構が広がる。

【平面形・範囲】 平面形は北西から南東に、幅のひろい帯状に広がる。確認された長さは 2.50m で幅は 60~90cm である。

【厚さ・その他】 炭化物の厚さは 5~10cm と幅がある。板状の木材が炭化した様相が見える。

【出土遺物】 ない。

【遺構の性格・時期】 特色は、帯状に延びることや下位から住居状遺構が検出されたことなど、S K I 06・07堅穴住居状遺構の炭化材検出状況に似る。よって S K I 04堅穴住居状遺構に関わる可能性もある。時期は中世から近世と捉えられる。

S X06炭化物集中（第57図、写真図版63）

【位置・検出状況】 III A 10 b グリッドに位置する。S K88・89土坑の精査中に検出した。両遺構の検出面より若干下げた状況であったが、関わりのある可能性を考え、図面は S K88・89土坑（第57図）に合わせて示している。両遺構の周辺は、炭化物が散在しているが、図では特に集中している範囲を

示している。

〔重複・隣接関係〕 上記の通り、SK88・89土坑に挟まれている。

〔平面形・範囲〕 平面形は不整に広がる。東一西の長さが最大1.90m、南一北の長さが1.14mとなる。

〔厚さ・その他〕 厚さは、中央部でやや厚く20cmを測る。この計測値は、炭化物に暗褐色土が混入した層の厚さである。

〔出土遺物〕 埋土からは、骨片などの遺物は出土していない。

〔遺構の性格・時期〕 検出状況などから、2つの土坑に関連する遺構と考えられる。SK88・89土坑が火葬跡とすれば、火を焚いた痕跡ともいえる。時期は中世から近世の遺構と考えられる。

S X07炭化物集中（第75図、写真図版64）

〔位置・検出状況〕 IV-A7-fグリッドに位置する。検出面はV層上面である。

〔重複・隣接関係〕 同一面では、北東側に3m離れて、SN01焼土がある。

〔平面形・範囲〕 平面形は楕円形状に広がる。範囲は70×45cmを測る。

〔厚さ・その他〕 暗褐色土を混入させた炭化物の厚さは、中央部で12cmを測る。上坑状に掘り込まれ、その開口部径は、73×42cmを測る。断面形は皿形状で、深さは12cmとなる。

〔出土遺物〕 繩文・弥生土器片17.9gが出土したが、流れ込みか掘り過ぎによる遺物と考えられる。

〔遺構の性格・時期〕 SK135土坑やSN01焼土と同様の遺構の可能性がある。時期は、上記2基と同時期の、中世から近世にかけての遺構と考えられる。

(7) 遺構外出土遺物（第80～87図、写真図版68～72）

遺構外の出土遺物は、種類ごとに取り上げる。土器や陶磁器については時期などで、若干の分類を行っており、表中にも明記している。また特色のある遺物については、遺構内のものにも触れている。

①土器・陶磁器

縄文・弥生土器は古い順（A～C）古代土器はD、陶磁器・その他はEとして分類した。

A 縄文時代中期中葉から後期にかけての土器

361から371は、中期末葉から後期前葉に当たる土器と考えられる。361は口縁部と平行する沈線内を磨り消す。362は同形だが沈線ではなく、361に比較する磨り消し部分が狭い。363は、361に似るが体中央部で膨らむ器形になりそうである。364も同類の口縁部の破片であるが、361と比較して沈線が太く、しっかりしている。365は沈線のない粗製土器である。これらの土器は、SK124・125土坑から多く出土しており、同時期と考えられる。366から370は口縁部装飾体や体部片で、366は円形の刺突窓、367は橋状突起となる。368は隆体に刻みを施す。369は体部片で磨り消しによるJ字文？を描く。以上361から369は縄文時代中期末葉の大木10式土器に比定できる。その内、367の口縁部の文様体のような例は10b式に見られるようである。

遺構内では、SK105堅穴住居状遺構出土の309・310が、大木8b新式もしくは9a式土器に比定できるものであるが、その他、SI17やSK124・125などで出土した土器のほとんどが、大木10b式に相当する土器の可能性が高い。

370・371は上記の縄文時代末葉より、やや新しい土器となる。370は横位や斜位の細い沈線で三角状のモチーフを描く外反する器形となる。371は円形刺突窓を支点と磨り消し文を描く。これらの土器は、縄文時代後期前葉の土器の可能性が高い。遺構内では、H柱穴状土坑群2のP226から出土し

た359も後期前葉に位置付けることができる。後期中葉から後葉にかけての土器は、出土していない。

B 繩文時代晚期から弥生時代にかけての土器

372は、やや内湾する台付き鉢の完形品で、羊齒状文が施される。大洞C 1式に比定される土器である。373～376は、平成20年度調査区で出土の中心となった大洞A'式の浅鉢の口縁部片である。そのうち376は、体部片だが無文体が幅広くなることが予測され、弥生時代前期に相当する可能性がある。378は口縁部が大きく聞く壺形土器で、379は、複合口縁の破片と考えた。両者は弥生時代後期に位置付けることが出来る。ただし、379は繩文時代後期前葉の可能性を含む。380～384は壺形土器である。380は大洞A'式に比定できる小型壺で、類似品は平成20年度調査区で出土している。381と382は同一個体の可能性が高い小型壺で、頭部に沈線で区画された無文体を持ち、口縁部がやや開きそうである。前巻第539集で報告された出土土器D群に当たり、弥生時代後期の常盤式に比定できる。383は380と同時期、384は破片資料だが、382と同形あるいは同一破片の可能性が高い。

Bに当たる土器を、遺構内で探せばSK116土坑出土の327・328、SK123土坑出土の333・334、H柱穴状土坑群2PP114出土の357がある。これらは弥生土器の可能性が高い土器であるが、明確ではない。

C 時期不明の底部資料および破片資料

385が、363（中期末葉土器）と同一個体の可能性がある以外は、時期は不明である。しかし、386～388は、上記371と同一グリッドで出土しており、371と同期に収まる可能性が高い。遺構内で時期の不明な土器は、分類上ではCとなっている。

D 古代土器

390は、口縁部が短く外反する須恵器壺の破片で、口唇部があまり凹まず、内面が平坦になる特徴がある。539集で報告されているS109・10堅穴住居跡出土には無い資料で、これらとは時期差があるかもしれない。392はかわらけで、手づくねと思われる。

E 中近世の陶磁器・その他

393は16世紀、394は18世紀代の国産陶磁器で、395は近代遺物である。

②石器

402の石鎚は、製作途中のものと思われ、基部が片方のみ抉られている。403のスクレーパーは縱長で、両面に剥離調整が観察できる。404～406は不定形石器である。表中の分類は、IV(6)不定形石器の分類を元にしており、すべて写真掲載で実測図はない。404は、縁辺に微細に剥離調整がなされている。405は、剥離調整は観察されない。406も同様だが、何らかの石製品の未製品かもしれない。砾石器は8点掲載した。407は砾石と思われ、断面形が方形となる。408～411は凹石、412～414は敲石で、その内414は火熱を受け黒色になっている箇所が認められる。石質は表の通りで、剥片石器は頁岩が卓越する。

③羽口・鉄製品

羽口432は、炉壁溶滓が付着する。外径8.4cm、残存長8.7cmの大型である。433～439は鉄製品であり、433～436は釘、437は針金と思われる。438や439の板状は、穂摘具の可能性がある。

④鉄滓類

鉄滓類は遺構内出土のものを写真掲載している。440・445・446が炉壁の溶着滓で、441～443が塊形鐵治滓である。小鍛冶が行われていた可能性を示す遺物である。

第9表 F柱穴状土坑群

P'	分類	被災箇	L×W(cm)	深さ(cm)	回数	堆土 出土遺物 その他
1	Ⅲ A10a	V	34×30	38.6	71	10YR2/4
2	Ⅲ A10a	V	30×28	31.4	71	10YR2/4
3	Ⅲ A10a	V	33×30	30.4	71	10YR2/4
4	Ⅲ A10a	V	29×28	30.7	71	10YR2/4
5	Ⅲ A9b	V	36×34	57.0	71	10YR2/4
6	Ⅲ A9b	V	27×26	16.7	71	10YR2/3
11	Ⅲ A9b	V	47×44	18.5	71	10YR3/4
12	Ⅲ A9b	V	33×32	33.3	71	10YR3/4
13	Ⅲ A9b	V	42×36	19.9	71	10YR3/4
14	Ⅲ A9b	V	25×25	27.6	71	10YR3/4
15	Ⅲ A9b	V	26×28	7.5	71	10YR4/3
16	Ⅲ A9a	V	23×41	46.2	71	10YR2/3 15.3gの上品片出上
17	Ⅲ A9b	V	42×40	28.8	71	10YR3/3
18	Ⅲ A9b	V	29×27	29.1	71	10YR3/3
19	Ⅲ A9a	V	31×33	43.1	71	10YR3/4
20	Ⅲ A9a	V	48×40	25.7	71	10YR3/4
21	Ⅲ A9a	V	33×30	12.7	71	10YR3/4
22	Ⅲ A10a	V	36×30	38.6	71	10YR2/3
23	Ⅲ A10a	V	52×47	13.3	71	10YR2/3
24	Ⅲ A10a	V	26×34	24.5	71	10YR3/4
25	Ⅲ A10a	V	36×36	25.4	71	10YR3/4
26	Ⅲ A10a	V	27×26	38.4	71	10YR2/3
27	Ⅲ A10a	V	41×32	23.0	71	10YR2/3
28	Ⅲ A10a	V	27×27	35.9	71	10YR3/4
29	Ⅲ A10a	V	38×34	32.3	71	10YR3/4
30	Ⅲ A1a	V	21×30	23.9	71	10YR3/4
31	Ⅲ A10a	V	27×25	26.0	71	10YR2/3
32	Ⅲ A10a	V	26×26	12.4	71	10YR2/3
33	Ⅲ A10a	V	49×46	18.8	71	10YR2/3
34	Ⅲ A9b	V	49×36	20.5	71	10YR3/4
35	Ⅲ A10b	V	41×35	20.8	71	10YR3/4
36	Ⅲ A10b	V	35×34	27.0	71	10YR3/4
37	Ⅲ A10b	V	34×32	17.2	71	10YR2/3
38	Ⅲ A9c	V	25×21	29.6	71	堆土不明
39	Ⅲ A10a	V	25×21	33.7	71	10YR3/4
40	Ⅲ A10a	V	25×21	23.8	71	10YR3/4
41	Ⅲ A1a	V	48×40	36.3	71	10YR2/3
42	Ⅲ A10a	V	31×29	23.0	71	堆土不明
43	Ⅲ A9a	V	34×33	37.3	71	10YR3/4
44	Ⅲ A9a	V	36×36	9.5	71	10YR3/4
45	Ⅲ A9b	V	60×52	25.8	71	10YR3/4
46	Ⅲ A9b	V	41×39	24.0	71	10YR3/4
47	Ⅲ A9b	V	42×30	17.3	71	10YR3/4
49	Ⅲ A1a	V	29×25	31.8	71	堆土不明
50	Ⅲ A9b	V	45×30	24.1	71	10YR2/1 木根?
51	Ⅲ A9b	V	44×32	28.0	71	10YR2/1 木根?
52	Ⅲ A9c	V	18×17	17.0	71	10YR2/1 木根?
53	Ⅲ A9c	V	25×24	16.7	71	10YR2/1 木根?
54	Ⅲ A9c	V	27×26	14.2	71	10YR2/1 木根?
55	Ⅲ A9c	V	23×21	19.3	71	10YR2/1 木根?
101	Ⅲ A8g	V	26×25	34.6	71	10YR2/2 & 4/4 混合土
102	Ⅲ A8g	V	27×26	41.4	71	10YR2/2 & 4/4 混合土
103	Ⅲ A8g	V	28×26	20.8	71	10YR2/3 & 4/4 混合土
104	Ⅲ A8i	V	30×27	19.2	71	10YR2/2 & 4/4 混合土
105	Ⅲ A8i	V	30×28	29.5	71	10YR2/2 & 4/4 混合土
106	Ⅲ A8i	V	36×32	19.3	71	10YR2/2
107	Ⅲ A8j	V	31×29	28.8	71	10YR2/2
108	Ⅲ A5c	V	36×36	27.9	71	10YR2/2
109	Ⅲ A6c	V	36×36	20.8	71	10YR2/2
110	Ⅲ A6c	V	30×28	23.3	71	10YR2/2

PP	位置	検出面	口径(cm)	深さ(cm)	回数	埴土	出土遺物	その他
I11	II A2e	裏	23×33	40.9	71	10YR2/2		
I12	II A2c	裏	32×32	27.0	71	10YR2/2		
I13	II A3d	裏	42×33	42.6	51	10YR3/3 SK105に開通?		
I14	II A3d	裏	35×32	26.9	51	10YR3/3 SK105に開通?		
I15	II A3d	裏	36×27	17.1	51	10YR3/3 SK106に開通?		

第10表 H柱穴状土坑群1

PP	位置	検出面	口径(cm)	深さ(cm)	回数	埴土	出土遺物	その他
1	N-B9-a	V	41×40	51.7	72	10YR3/3		
2	N-B9-a	V	39×37	40.6	72	10YR3/2・10YR4/4 頭蓋骨 瓶		
3	N-B9-a	V	30×20	36.5	72	10YR3/3		
4	N-B9-a	V	39×37	27.3	72	10YR3/4		
8	N-B9-a	V	39×37	71.9	72	10YR3/3 土器12.3g		
9	N-B9-a	V	41×39	39.7	72	10YR4/4		
10	N-B9-a	V	61×46	61.4	72	10YR3/3		
11	N-B9-j	V	32×30	21.3	72	10YR2/3 1器1点・鉄製品1点		
12	N-B9-j	V	28×28	33.4	72	10YR3/3		
13	N-B9-j	V	22×20	31.1	72	10YR3/3		
14	N-B9-j	V	25×25	25.7	72	10YR3/4		
15	N-B9-j	V	29×<14>	132462	72	10YR2/4		
16	N-B9-j	V	19×17	42.1	72	10YR3/3		
17	N-B9-i	V	33×31	31.5	72	10YR2/2・10YR4/4 鉄製品2点		
18	N-B9-i	V	31×28	26.4	72	10YR3/3		
19	N-B9-i	V	38×28	30.5	72	10YR3/3・10YR4/4		
20	N-B9-i	V	45×38	33.5	72	10YR3/3		
21	N-B9-i	V	24×23	45.8	72	10YR2/3		
22	N-B9-i	V	50×38	36.2	72	10YR3/3		
23	N-B9-a	V	21×<15>	74.2	72	10YR3/2 10に切られる		
24	N-B9-b	V	43×37	26.0	72	10YR3/3 1器6.1g		
25	N-B9-b	V	23×22	12.0	72	10YR3/3		

第11表 H柱穴状土坑群2

PP	位置	検出面	口径(cm)	深さ(cm)	回数	埴土	出土遺物	その他
39	N-A6-d	V	16×14	23.3	73	10YR3/1		
41	N-A6-e	V	46×32	42.0	73	10YR2/3・10YR3/1 陶片13g 1器17.9g		
42	N-A6-e	V	31×29	36.1	73	10YR3/3 土器12.3g		
43	N-A7-f	V	34×29	53.9	73	10YR3/3		
44	N-A6-e	V	20×39	29.4	73	10YR2/2・10YR3/4 土器6.8g		
45	N-A6-d	V	42×40	89.8	73	10YR4/6 1.271g		
46	N-A6-d	V	32×30	35.6	73	10YR2/3 土器9.8g		
47	N-A5-d	V	40×38	37.5	73	10YR3/3		
48	N-A5-c	V	42×34	47.9	73	10YR2/3 羽口片85.4g		
49	N-A5-c	V	23×23	34.0	74	埴土不明		
50	N-A5-c	V	30×29	41.0	74	10YR3/3・10YR3/4		
51	N-A5-c	V	25×25	32.8	74	埴土不明		
52	N-A5-c	V	24×23	36.7	74	10YR3/2・10YR4/2		
53	N-A4-c	V	32×30	43.2	74	10YR2/3		
54	N-A5-c	V	38×32	35.9	74	10YR3/2		
47	N-A5-b	V	34×33	32.2	74	埴土不明		
49	N-A5-c	V	26×20	37.6	74	10YR3/3		
50	N-A5-b	V	27×24	34.9	74	10YR3/4		
51	N-A4-b	V	39×36	65.1	74	10YR3/3・10YR3/4		
52	N-A5-b	V	27×25	31.4	74	10YR3/3		
53	N-A6-c	V	30×29	33.5	74	10YR3/4		
54	N-A5-b	V	60×30	44.6	74	10YR3/3 鉄津0.7g 土器1.6g		
55	N-A7-d	V	31×29	38.2	73	10YR2/2・10YR4/1 146に切られる?		
56	N-A6-c	V	46×41	43.6	74	10YR3/3 陶片15.9g		
57	N-A8-e	V	38×(31)	53.0	73	10YR3/3 土器55.9g		
58	N-A8-f	V	35×34	41.3	73	10YR3/3		
59	N-A7-b	V	30×29	27.0	73	10YR3/3 土器34.4g		
60	N-A3-a	V	87×76	74.9	74	10YR3/3 鉄製飲食具1点(73.0g)		
61	N-A3-b	V	60×48	68.7	74	10YR3/1・10YR3/1 土器5.8g		
62	N-A3-b	V	35×34	33.2	74	10YR3/3		
63	N-A3-h	V	32×28	30.2	74	10YR3/3・10YR3/4		

PP	位置	検出番	寸法(㎝)	深さ(㎝)	回数	所持、出土品物 その他
65	N-A 3-b	V	32×32	48.2	74	10YR3/4
66	N-A 7-c	V	31×31	36.0	73	10YR3/3
67	N-A 6-c	V	32×32	31.7	73	10YR3/3
68	N-A 8-g	V	38×31	67.5	73	10YR3/3
69	N-A 8-f	V	32×31	50.4	73	10YR3/3 断続鉄製品1点 (8.1g) 土器24g
70	N-A 7-f	V	28×25	40.2	73	10YR3/4
71	N-A 3-b	V	36×34	37.0	71	10YR3/4
72	N-A 6-c	V	30×29	29.1	74	10YR3/4
73	N-A 6-c	V	37×35	39.5	74	10YR3/4
74	N-A 6-c	V	28×25	33.7	74	10YR3/3
75	N-A 6-e	V	35×35	53.9	74	10YR2.5/3・10YR3/4
76	N-A 6-e	V	35×30	50.1	73	10YR2.5/3・10YR3/4 土器27g
77	N-A 6-e	V	34×27	37.3	73	10YR2/3
78	N-A 6-e	V	30×30	43.5	73	10YR3/3 1.4g27g
79	N-A 6-c	V	28×25	18.3	73	10YR2/3 土器113g
80	N-A 6-e	V	27×23	29.3	73	10YR2/3・10YR3/4
81	N-A 6-e	V	28×27	28.0	73	10YR3/3 土器2.0g
82	N-A 6-e	V	27×27	29.8	73	10YR3/3 土器44.8g
83	N-A 7-e	V	48×47	33.7	73	10YR2/2
84	N-A 7-e	V	39×35	37.8	73	10YR3/3 311を切っている 上巻131g
85	N-A 7-e	V	31×30	37.3	73	10YR3/3
86	N-A 8-e	V	45×45	34.9	73	10YR3/3 1.1g198g
87	N-A 7-c	V	25×25	29.5	73	10YR3/3 土器6.6g
88	N-A 8-f	V	29×(25)	36.0	73	10YR3/4
89	N-A 8-f	V	29×27	54.7	73	10YR3/2
90	N-A 8-f	V	25×25	30.7	73	10YR3/4
91	N-A 7-f	V	30×30	24.3	73	10YR3/3
92	N-A 7-f	V	29×29	28.3	73	10YR3/3 土器8.2g
93	N-A 7-f	V	39×37	46.8	73	10YR2.5/3
94	N-A 3-b	V	29×19	11.8	74	10YR2/3
95	N-A 8-e	V	25×28	40.7	73	10YR3/3
96	N-A 7-c	V	31×28	55.8	73	10YR3/3 土器19.6g
97	N-A 7-e	V	28×28	24.9	73	10YR3/4・10YR3/3
98	N-A 7-f	V	30×27	17.7	73	10YR3/3
99	N-A 7-f	V	30×28	76.9	73	10YR3/3 土器11.9g
100	N-A 7-f	V	45×38	41.4	73	10YR3/3・10YR3/4 洗浄3.0g 土器41.2g
101	N-A 7-f	V	25×25	9.0	73	10YR3/3
102	N-A 7-f	V	28×25	42.4	73	10YR2/3 土器3.8g
103	N-A 7-f	V	27×23	22.5	73	10YR2/3
104	N-A 7-f	V	32×(30)	18.5	73	10YR3/3 105に切られる
105	N-A 7-f	V	33×27	27.3	73	10YR3/3
106	N-A 7-e	V	24×23	24.1	73	10YR2/3
107	N-A 8-f	V	(35)×33	72.8	73	10YR3/3・10YR2/3
108	N-A 7-e	V	28×23	19.4	73	10YR3/3
109	N-A 7-e	V	34×31	29.0	73	10YR3/2・10YR3/4
110	N-A 7-e	V	(28)×25	22.0	73	10YR2/3
111	N-A 7-c	V	40×(38)	29.7	73	10YR3/2・10YR3/4 110に切られる
112	N-A 7-f	V	30×25	28.9	73	10YR3/3 1.5g89g
113	N-A 7-f	V	21×20	21.7	73	10YR3/3
114	N-A 7-e	V	27×26	28.1	73	10YR3/3 土器781g
115	N-A 7-e	V	41×39	60.7	73	10YR2/3 土器12g
116	N-A 7-e	V	38×36	36.9	73	10YR4/2 土器120g
117	N-A 7-d	V	37×36	42.4	73	10YR2.5/3・10YR2/3
118	N-A 7-d	V	29×24	10.1	73	10YR2/3・10YR4/4
119	N-A 7-d	V	41×40	63.8	73	10YR4/4・10YR3/1
120	N-A 7-b	V	43×34	47.7	73	10YR3/3 土器20g
121	N-A 3-b	V	30×28	26.3	74	10YR3/3
122	N-A 6-d	V	22×21	16.2	73	10YR2/3
123	N-A 4-c	V	27×25	28.8	73	10YR2/3
124	N-A 4-c	V	32×30	45.0	74	10YR2/3
125	N-A 3-b	V	27×23	74.8	74	10YR2/2
126	N-A 5-e	V	63×52	40.6	73	10YR3/2 133を切る

PP	位置	検出面	寸法(cm)	深さ(cm)	回数	灰土	土器	その他
127	N-A 4-c	V	22×21	15.3	74	10YR2/3		
128	N-A 4-c	V	31×27	15.3	74	10YR2/3		
129	N-A 7-f	V	23×20	36.5	73	10YR2/2 土器25g		
130	N-A 3-b	V	19×17	19.7	74	10YR2/2		
131	N-A 7-f	V	25×22	27.3	73	10YR2/3		
132	N-A 5-c	V	29×26	41.0	73	10YR2/3		
134	N-A 6-b	V	26×24	17.6	74	10YR2/3 土器30g		
135	N-A 4-c	V	32×29	35.4	74	10YR2/2.5		
136	N-A 4-c	V	25×24	24.3	74	10YR2/2・10YR3/4		
137	N-A 6-c	V	30×24	41.4	74	10YR2/2.5		
138	N-A 7-d	V	33×22	28.3	73	10YR2/3		
139	N-A 7-d	V	30×29	35.0	73	10YR3/3 土器2.6g		
140	N-A 7-d	V	(50)×46	71.3	73	10YR2/3・10YR3/3 139に切られている		
141	N-A 7-d	V	28×22	33.1	73	10YR2/2・10YR3/3		
142	N-A 7-d	V	27×26	22.5	73	10YR2/4		
143	N-A 7-d	V	34×27	60.9	73	10YR2/3		
144	N-A 7-d	V	34×39	29.7	73	10YR2/3 土器10.2g		
145	N-A 7-d	V	27×18	29.2	73	10YR2/3		
146	N-A 7-d	V	35×29	32.3	73	10YR2/3 土器6.6g		
147	N-A 6-d	V	34×26	49.8	73	10YR2/3		
148	N-A 7-d	V	38×<21>	65.6	73	10YR3/3		
149	N-A 7-d	V	43×<25>	68.6	73	10YR2/3		
150	N-A 7-d	V	30×27	31.1	73	10YR3/3 鉄錆17.8g		
151	N-A 6-b	V	29×26	45.3	74	10YR3/4		
152	N-A 6-b	V	33×34	62.3	74	10YR3/4		
153	N-A 7-d	V	40×36	60.6	73	10YR3/3 土器7.3g		
155	N-A 5-d	V	31×25	15.4	73	10YR3/3		
156	N-A 5-b	V	24×22	19.7	74	10YR3/3		
157	N-A 5-d	V	26×24	28.5	73	10YR2/3 土器20.9g		
158	N-A 6-c	V	19×17	24.8	74	10YR3/3・10YR3/4		
159	N-A 6-c	V	21×17	22.4	74	10YR3/3		
160	N-A 7-d	V	29×26	48.2	73	10YR2/3・10YR3/3		
161	N-A 6-c	V	30×25	38.6	74	10YR2/4 鉄錆6.5g		
162	N-A 6-h	V	(33)×36	58.9	74	10YR2/3 163と重複		
163	N-A 4-b	V	41×(40)	48.0	74	10YR3/3・10YR3/4 162と重複		
164	N-A 4-b	V	(35)×32	36.1	74	10YR3/3・10YR3/4 163に切られる		
165	N-A 4-b	V	40×31	69.4	74	10YR3/3		
166	N-A 6-b	V	34×32	53.9	74	10YR3/4		
167	N-A 5-a	V	26×24	27.9	74	10YR3/3		
168	N-A 7-a	V	35×27	17.1	74	10YR2/3・10YR4/4		
169	N-A 7-b	V	35×32	26.2	74	10YR2/3		
170	N-A 7-e	V	24×23	24.1	73	10YR2/3		
171	N-A 5-b	V	30×28	27.4	74	10YR3/3		
172	N-A 4-b	V	24×(21)	43.8	74	10YR2/3		
174	N-A 7-b	V	23×22	22.7	74	10YR2/3		
175	N-A 5-b	V	21×19	28.3	74	10YR3/3		
176	N-A 5-b	V	29×27	33.9	74	10YR3/3		
177	N-A 5-c	V	22×22	31.3	74	10YR3/3		
178	N-A 5-c	V	35×30	39.4	73	10YR3/3		
179	N-A 5-c	V	45×43	44.8	73	10YR3/3 土器1.8g		
180	N-A 5-c	V	33×30	50.9	73	10YR3/3・10YR3/4		
181	N-A 5-c	V	26×24	19.8	73	10YR2/3		
182	N-A 5-c	V	29×27	37.6	73	10YR3/3		
183	N-A 5-c	V	28×26	38.9	74	10YR3/3		
184	N-A 5-c	V	25×25	20.2	73	10YR2/3		
185	N-A 5-c	V	31×30	26.1	74	10YR2/3		
186	N-A 5-b	V	27×27	43.3	74	10YR3/3 239を切っている		
187	N-A 4-c	V	24×22	30.3	74	10YR3/2		
188	N-A 4-c	V	31×29	32.7	74	10YR3/2		
189	N-A 5-c	V	47×40	62.5	74	10YR3/4		
190	N-A 5-c	V	41×31	55.9	73	10YR2/3		
191	N-A 5-c	V	30×26	31.0	73	10YR2/3		

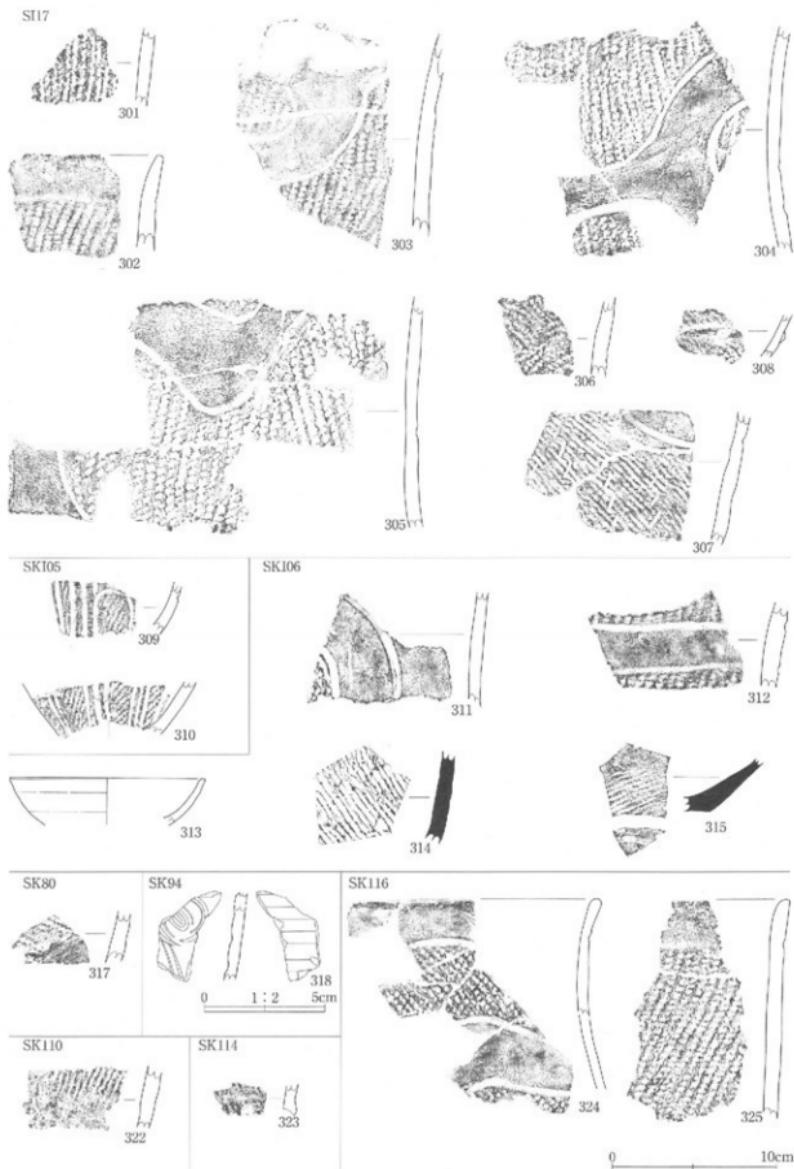
PP	位置	検出面	口径(cm)	深さ(cm)	回数	堆土 堆土造物 その他
192	N-A 5-b	V	29×26	36.2	74	10YR3/3
193	N-A 6-b	V	28×24	33.7	74	10YR2/3
194	N-A 6-b	V	28×28	13.4	74	10YR3/2
195	N-A 4-b	V	24×24	38.1	74	10YR3/3
196	N-A 4-b	V	37×33	50.3	74	10YR3/4
197	N-A 4-b	V	31×28	33.2	74	10YR3/3
198	N-A 4-b	V	25×23	47.5	74	10YR2/3
199	N-A 6-b	V	29×29	28.8	74	10YR3/2
200	N-A 6-b	V	34×32	41.2	74	10YR3/2
201	N-A 6-b	V	25×24	18.3	74	10YR2/3
202	N-A 6-b	V	29×22	21.0	74	10YR3/3 独特2kg
203	N-A 4-b	V	23×23	29.0	74	10YR3/3
204	N-A 5-b	V	27×27	24.4	74	10YR5/4・10YR3/2
205	N-A 4-b	V	27×24	24.3	74	10YR2/2
207	N-A 4-b	V	25×23	48.9	74	10YR3/3
208	N-A 6-a	V-I-VII	27×26	19.5	74	10YR3/4
210	N-A 4-a	V	39×35	48.0	74	10YR2/3
211	N-A 4-a	V	42×35	37.2	74	10YR2/3 210に切られている
212	N-A 5-c	V	33×28	9.0	73	10YR3/2
213	N-A 5-c	V	29×28	18.5	73	10YR3/2 稕土1.5g
214	N-A 5-c	V	21×20	19.3	74	10YR3/2
215	N-A 6-c	V	17×17	28.4	73	10YR2/2
216	N-A 5-c	V	22×22	19.8	73	10YR3/3
218	N-A 6-c	V	(27)×(23)	19.1	73	10YR3/2・10YR3/1
219	N-A 6-d	V	28×20	27.4	73	10YR3/1 1.5kg
220	N-A 4-c	V	20×18	6.1	73	10YR3/2
221	N-A 6-a	V	28×24	13.6	74	10YR3/4
222	N-A 5-a	V	37×35	50.3	74	10YR3/4・10YR5/4
223	N-A 6-a	V	39×37	36.5	74	10YR3/3・10YR3/4
224	N-A 6-b	V	40×34	21.4	74	10YR3/4
225	N-A 6-a	V	29×26	23.5	74	10YR3/3 1.5kg
226	N-A 6-a	V	42×34	18.0	74	10YR3/4 土器41kg
227	N-A 5-b	V	29×27	33.7	74	10YR3/3
228	N-A 6-a	V	39×27	25.9	74	75YR3/3
229	N-A 6-b	V	28×28	19.8	74	10YR3/4 230に切られている
230	N-A 6-b	V	20×(17)	13.9	74	10YR3/4
231	N-A 7-b	V-I-VII	58×39	43.7	74	10YR3/5・10YR5/6
232	N-A 7-b	V	30×29	21.0	74	10YR3/4
233	N-A 6-b	V	23×19	20.2	74	10YR3/4
234	N-A 6-b	V	25×25	28.0	74	10YR3/4
235	N-A 6-b	V	24×23	28.2	74	10YR3/4
236	N-A 7-c	V	25×25	21.0	74	10YR3/4
237	N-A 6-b	V	33×30	39.9	74	10YR3/1・10YR4/4 斧状鉄製品1点(30g)
238	N-A 6-c	V	30×28	28.9	74	10YR3/4
239	N-A 5-b	V	36×32	29.7	74	10YR3/4 166に切られる
240	N-A 5-a	V	29×27	34.4	74	10YR3/4
241	N-A 4-a	V	29×26	36.2	74	10YR3/5/1
242	N-A 5-a	V	23×18	8.6	74	10YR3/1
243	N-A 6-c	V	27×26	23.2	74	10YR3/4
244	N-A 5-a	V	20×19	16.9	74	10YR3/4
245	N-A 6-c	V	18×17	14.9	74	10YR3/2
246	N-A 6-c	V	32×28	30.5	73	10YR3/4
247	N-A 6-c	V	21×18	25.4	74	10YR3/4
248	N-A 4-a	V	36×34	32.0	74	10YR3/2
249	N-A 6-c	V	31×28	20.5	73	10YR3/2・10YR2/25
250	N-A 6-c	V	20×19	12.7	74	10YR2/2
251	N-A 4-c	V	22×20	9.9	74	75YR3/3
252	N-A 4-b	V	21×23	28.7	74	10YR2/3
254	N-A 4-a	SK117底	14×11	18.0	74	10YR3/3
255	N-A 4-a	SK117底	30×25	17.7	74	10YR3/4・10YR5/3
256	N-A 6-d	V	26×24	13.7	73	10YR3/3
257	N-A 6-c	V	29×29	26.2	73	10YR3/3

PP	位置	検出面	口径(cm)	深さ(cm)	回数	地層	出土遺物	その他
238	N-A 6-d	壁	23×23	12.8	73	10YR3/3		
239	N-A 6-b	壁	30×29	40.2	74	10YR3/3		
260	N-A 6-d	壁	38×33	21.1	73	10YR4/6		
261	N-A 4-b	壁	26×23	16.7	74	10YR3/4		
262	N-A 7-d	壁	35×24	18.9	73	10YR4/4		
263	N-A 4-b	壁	19×18	20.5	74	10YR3/4		
264	N-A 7-d	壁	29×21	16.2	73	10YR3/3		
265	N-A 6-c	壁	33×31	21.1	73	10YR3S/4		
266	N-A 6-c	壁	31×31	34.7	73	10YR3/4		
267	N-A 6-b	V下～壁	24×24	10.8	74	10YR3/3		
268	N-A 4-b	壁	25×23	21.0	74	10YR3S/4		
269	N-A 3-b	壁	21×21	22.8	74	10YR3/3		
270	N-A 7-d	壁	34×34	23.0	73	10YR3S/4		
274	N-A 5-c	壁	27×25	22.6	73	10YR3/3.5		
298	N-A 6-d	V下～壁	43×33	42.4	73	10YR4/3		
299	N-A 6-d	V下～壁	32×28	37.8	73	10YR4/3		
300	N-A 6-d	V下～壁	39×35	59.8	73	10YR4/3		

第12表 H柱穴状土坑群3

() 基定値

PP	位置	検出面	口径(cm)	深さ(cm)	回数	地層	出土遺物	その他
301	N-A 8-f	壁	36×36	25.3	72	10YR4/3		
302	N-A 8-f	壁	36×22	13.7	72	10YR4/3		
303	N-A 8-f	壁	25×23	12.2	72	10YR4/3		
304	N-A 8-f	壁	30×28	22.8	72	10YR4/3		
305	N-A 8-f	壁	27×26	28.7	72	10YR4/3		
306	N-A 8-f	壁	39×29	17.9	72	10YR4/3		
307	N-A 7-f	壁	30×28	16.6	72	10YR4/3		
308	N-A 8-f	壁	16×10	19.3	72	10YR4/3		
309	N-A 8-f	壁	29×25	14.7	72	10YR4/3		
310	N-A 7-e	壁	34×27	20.3	49・72	10YR3/4 SL17に関連?		
311	N-A 7-e	壁	(40)×35	28.3	49・72	埴土不明 84に切られている		
312	N-A 7-f	壁	39×36	76.9	72	10YR4/3 99下限検出		
313	N-A 7-e	壁	35×54	12.6	72	10YR4/4		
314	N-A 7-c	壁	38×55	不明	72	10YR3/4		
317	N-A 7-e	壁	33×29	不明	72	10YR3/4		
318	N-A 7-e	壁	41×30	18.3	72	10YR4/4		
319	N-A 7-e	壁	39×25	19.6	72	10YR3/4		
320	N-A 7-e	壁	46×45	不明	72	10YR4/4		
321	N-A 7-e	壁	44×(35)	62.3	72	10YR4/3 土器16g		
322	N-A 7-e	壁	29×28	19.4	72	10YR4/3		
323	N-A 7-c	壁	18×17	7.9	72	10YR4/3		
324	N-A 7-e	壁	47×42	23.7	49・72	10YR3/3 土器0.8g SL17に関連?		
325	N-A 7-e	壁	18×18	16.7	72	10YR3/3		
326	N-A 6-c	壁	45×40	31.3	49・72	10YR3/4 上部69.5 SL17に関連?		
327	N-A 6-e	壁	48×37	37.3	49・72	10YR3/4 SK128に切られている SH7?		
329	N-A 6-c	壁	22×20	15.3	72	10YR4/3		
330	N-A 6-e	壁	26×29	21.9	72	10YR3/3		
331	N-A 6-c	壁	(60)×55	22.2	49・72	10YR2/3 SK128に切られる 土器52.2g		
335	N-A 6-e	壁	24×21	12.6	72	10YR2/3		
338	N-A 6-e	壁	23×30	21.7	72	10YR3/4		
339	N-A 7-e	壁	21×20	11.8	72	10YR4/3 土器73.9g		
340	N-A 7-e	壁	46×39	25.5	72	壁上不明		
341	N-A 7-c	壁	53×47	20.4	72	埴土不明		
342	N-A 7-e	壁	23×20	17.1	72	埴土不明 土器51g		
343	N-A 6-d	壁	34×24	35.7	72	10YR3/3 土器49.1g		
401	N-A 7-f	V下～壁	26×20	33.8	72	10YR3/4		
402	N-A 7-f	V F～壁	22×21	26.0	72	10YR3/4		
403	N-A 7-g	V下～壁	36×35	9.7	72	10YR3/4		
404	N-A 7-g	V下～壁	32×31	2.4	72	10YR3/4		
405	N-A 7-g	V F～壁	40×37	21.3	72	10YR3/4		

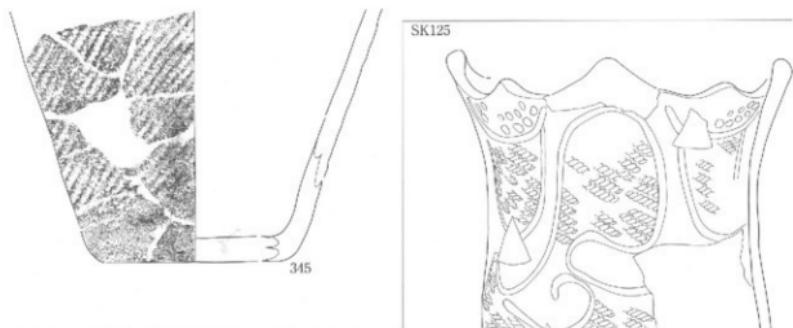
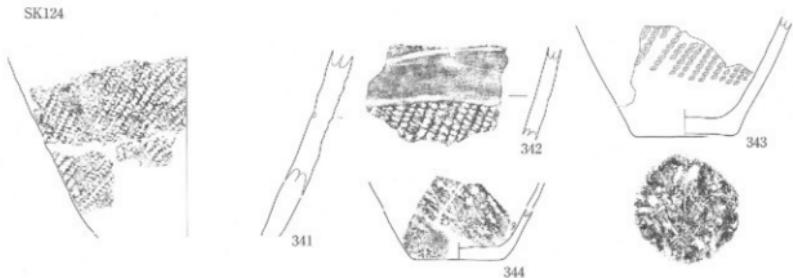


第76図 出土遺物 (1)

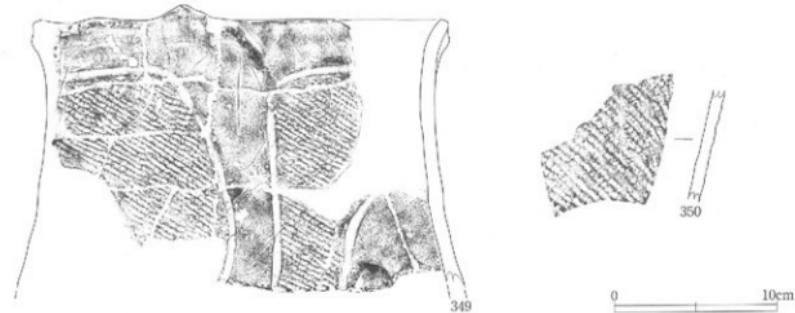


第77図 出土遺物 (2)

SK124

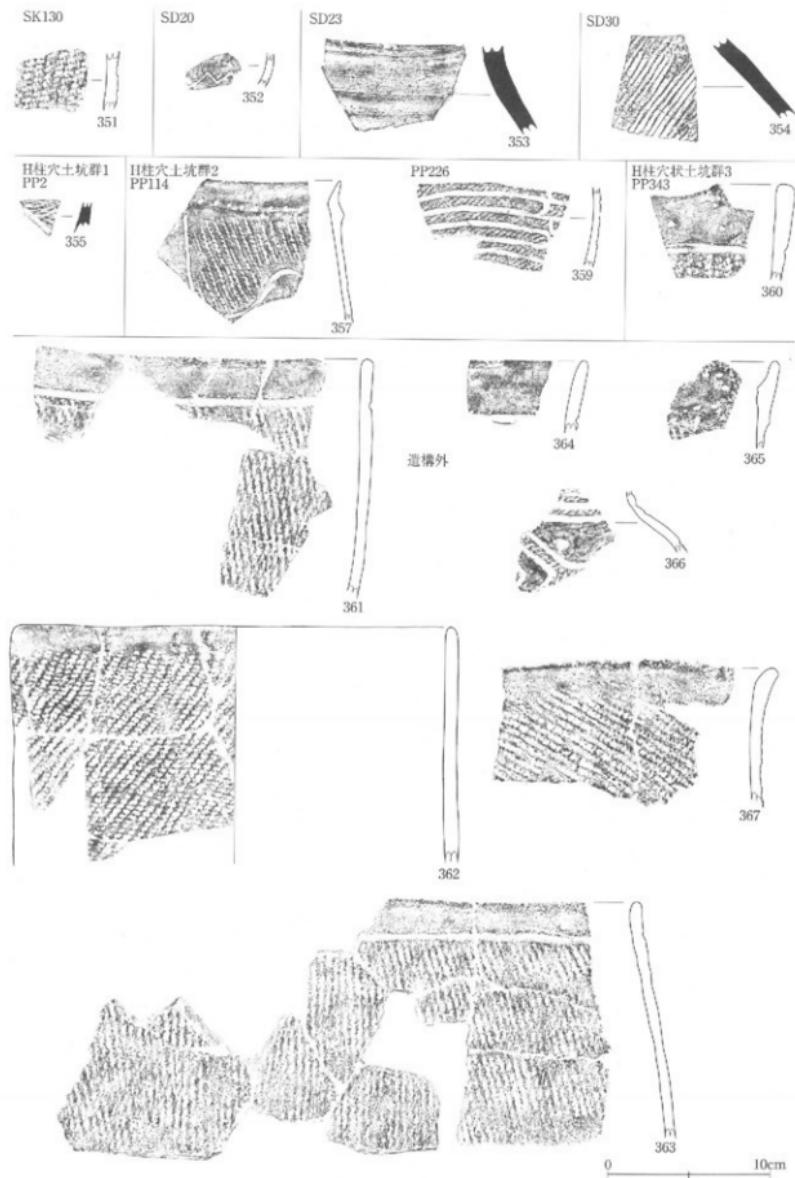


SK128

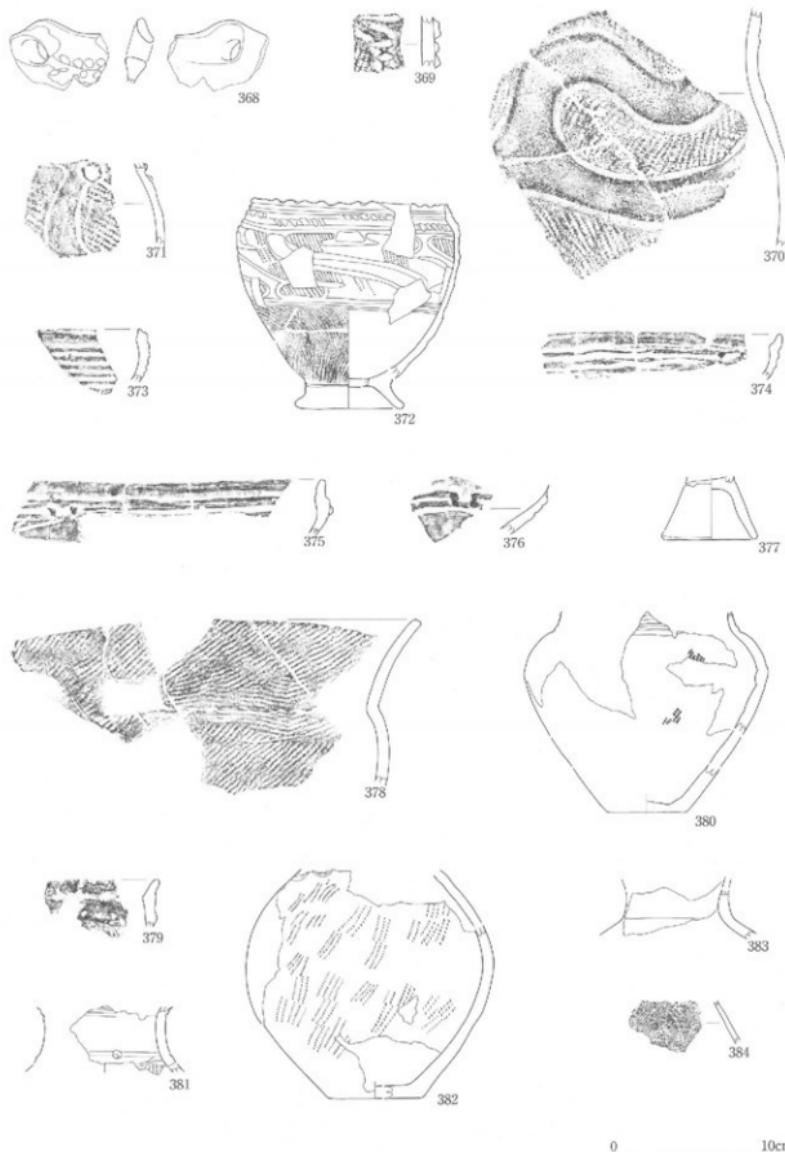


0 10cm

第78図 出土遺物 (3)

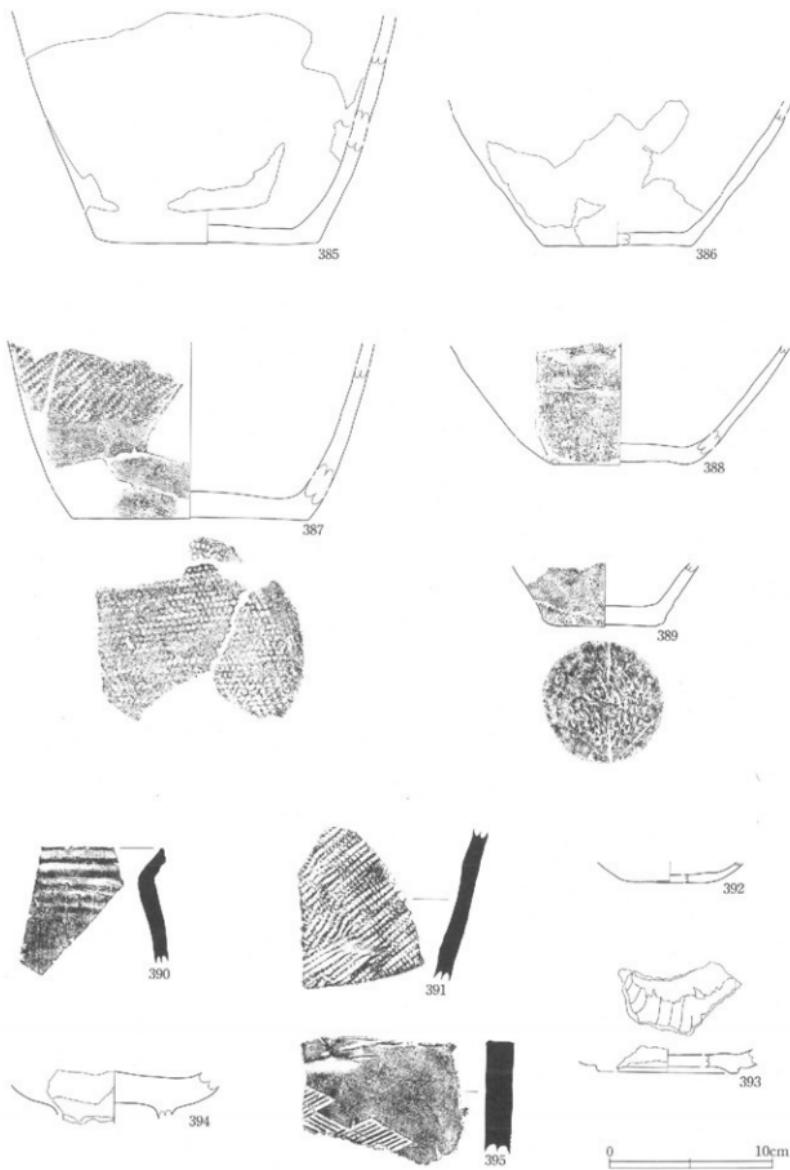


第79図 出土遺物 (4)

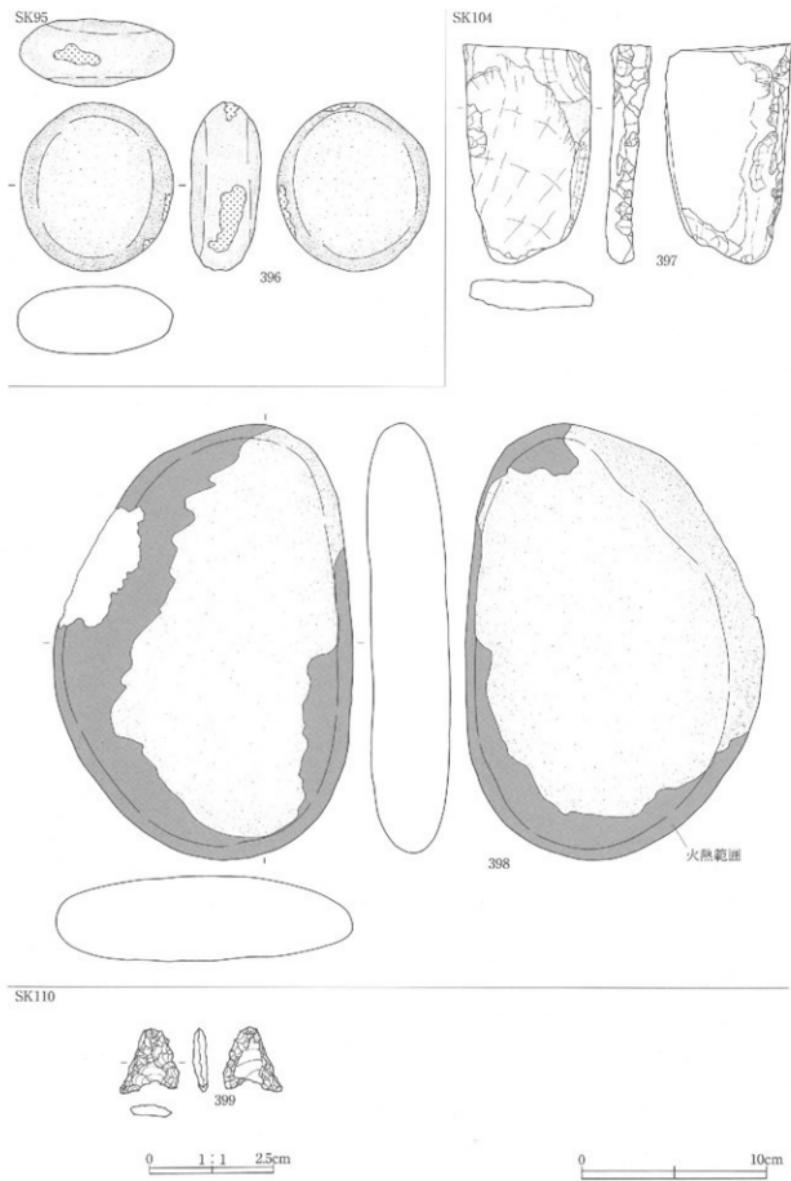


0 10cm

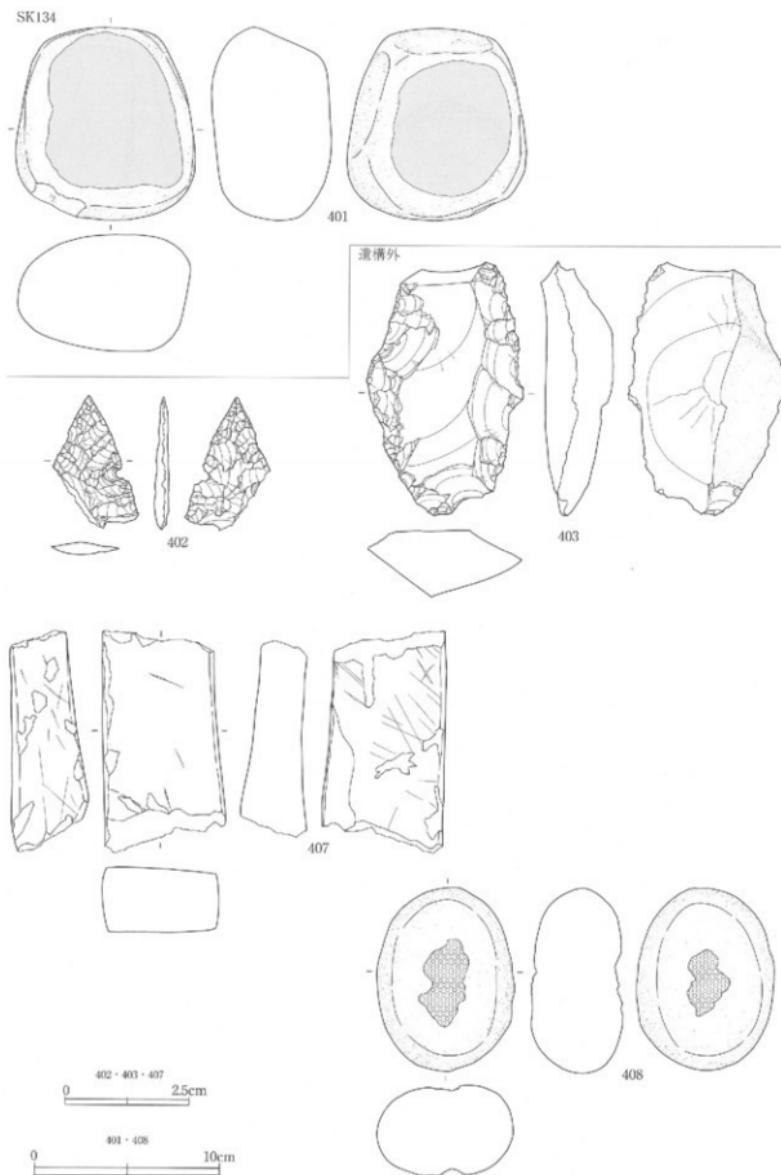
第80図 出土遺物 (5)



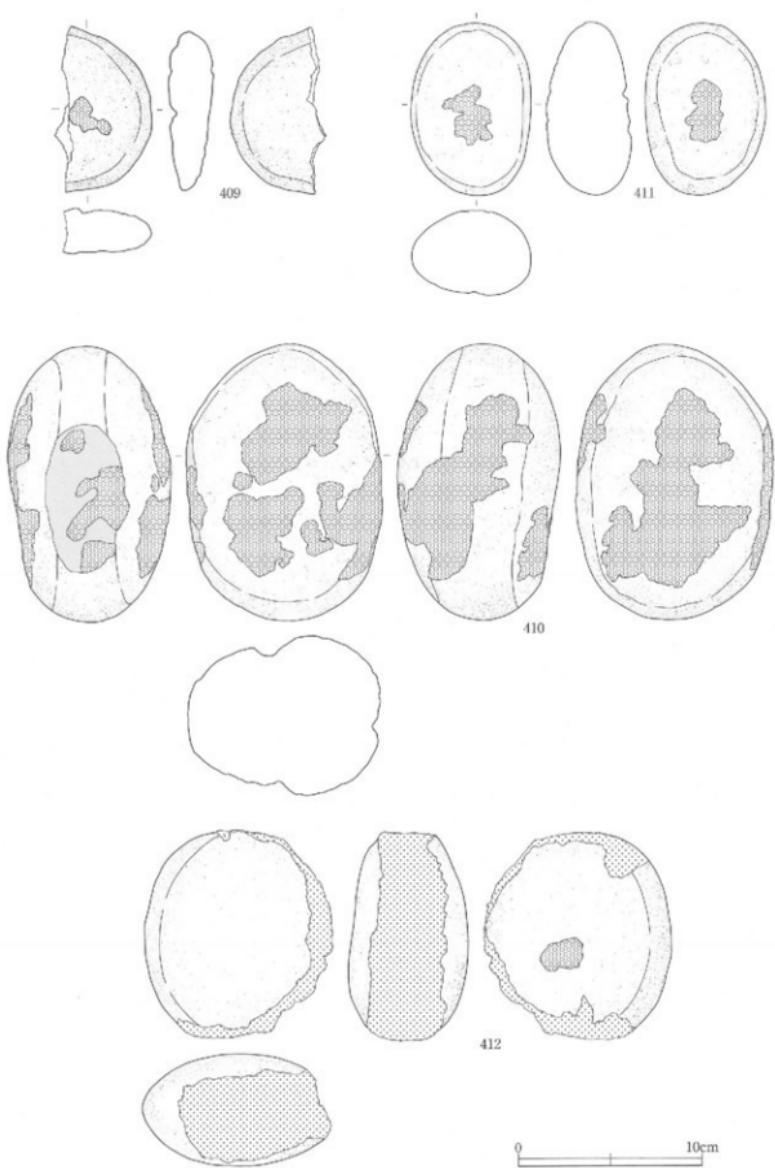
第81図 出土遺物 (6)



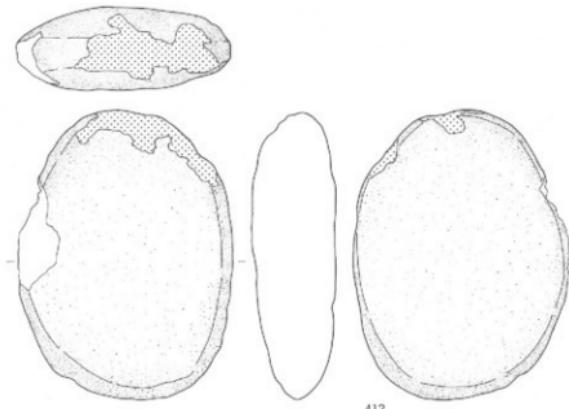
第82図 出土遺物 (7)



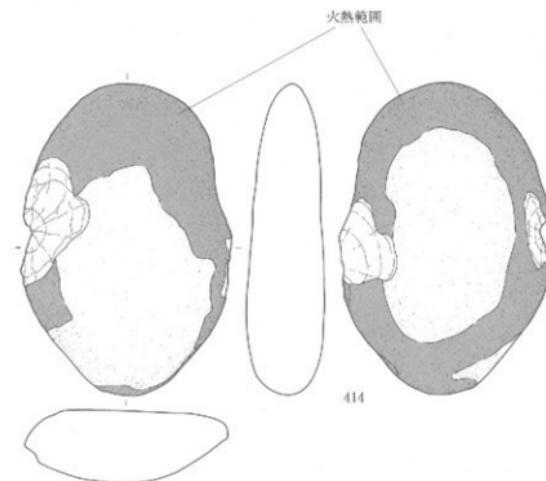
第83図 出土遺物 (8)



第84図 出土遺物 (9)



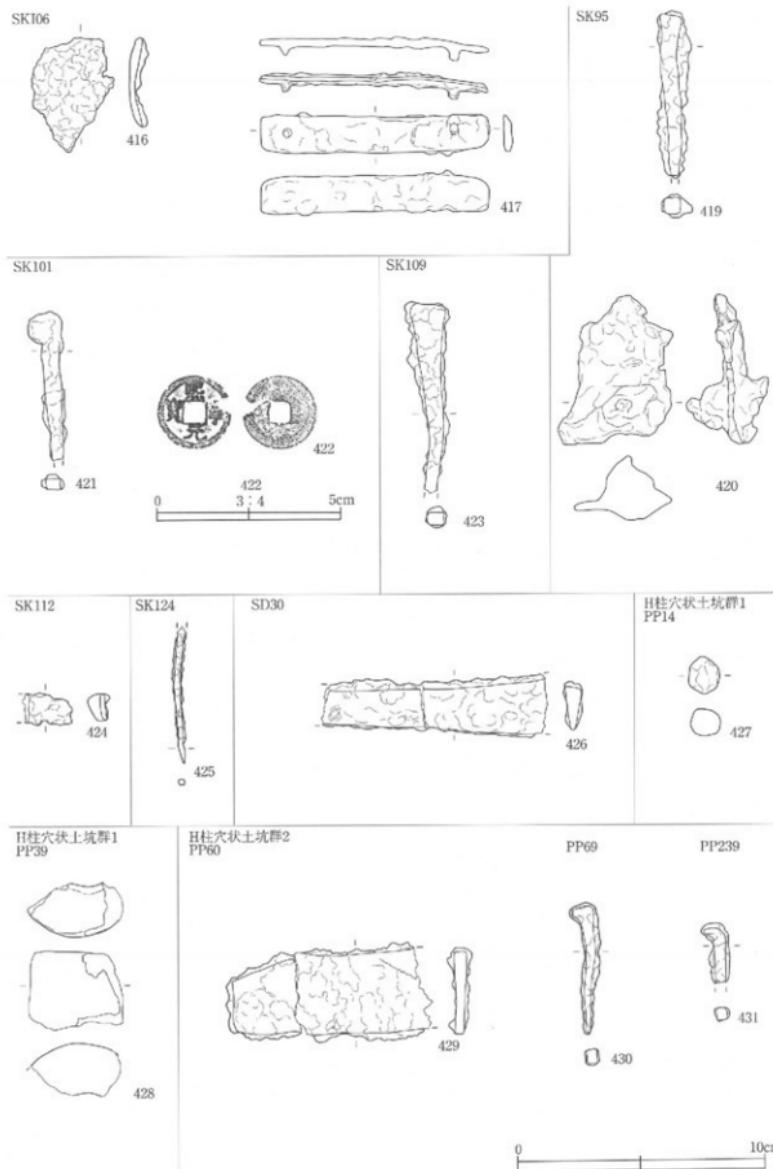
413



414

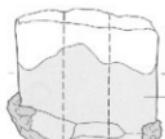


第85図 出土遺物 (10)



第86図 出土遺物 (11)

遺構外



還元部



432



433



434



435



436



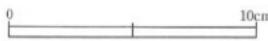
437



438



439



第87図 出土遺物 (12)

第13表 繩文土器・弥生土器・須恵器・かわらけ・陶磁器観察表

番号	遺構名	出土位置	種類	器種	部位	断面	表面色	若役	分類	備考
301	SH17	埋下土位	縄文土器	深鉢	体部	小底・石英	10YR6/4 黄褐色	作后路として留めた破片	C	
302	(N-A6-d)	壁面	縄文土器	深鉢	口縁部・石英	10YR6/6 明赤褐色	内さきされる口縁 沈鉢 L-R	A		
303	(N-A6-d)	壁面	縄文土器	深鉢	体部	小底・石英	10YR6/6 明赤褐色	沈鉢 (丁字) 磨り消し L-R 塗装	A	302と同一箇所
304	SH17 (N-A6-d)	V層下	縄文土器	深鉢	体部	小底・石英	10YR6/2 灰白色	やや剥落する深鉢の体部か、擦り消し丁字 深鉢斜 鏡文?	A	
305	SH17 (N-A6-d)	V層下	縄文土器	深鉢	体部	小底・石英	10YR6/4 黄褐色	口に消し S字? 黒旗 縄文斜彌文L-R	A	
306	(N-A6-d)	壁面	縄文土器	深鉢	体部	小底	5YR6/6 褐色	R-LとS-Lの交点 内丁字なみガキ	A	
307	(N-A6-d)	壁面	縄文土器	深鉢	体部	小底	10YR6/3 淡青褐色	沈鉢 悪りけん 縄文斜彌文L-R	A	
308	SH17 (N-A6-d)	壁面	縄文土器	鉢	体部	細砂	10YR7/4 灰白色	磨り消し R-L 尖い小範囲 内ミガキ	A	
309	SK105	炭化物内	縄文土器	鉢	作上部	細砂	7.5YR6/6 褐色	縄位の平僅竹葉による沈鉢 崩壊による区画	A	
310	SK106	炭化物内	縄文土器	鉢	体下部	細砂	7.5YR6/7 褐色	3本の平僅竹葉による沈鉢がほぼ等間隔で底部まで 伸びる	A	309と同一箇所
311	SK106	Q1灰塚 堆土下位	縄文土器	深鉢	体部	小底・石英	10YR7/3 黄褐色	円形沈縁区画 磨り消し	A	
312	SK106	Q1灰塚 堆土中	縄文土器	深鉢	体部	細砂	10YR6/4 灰白色	平行沈縁区画 悪り消し やや厚みのある凸起 L-R?	A	
313	SK106	Q5壁上3層	土師器	口縁	細砂	10YR7/3 灰白色	ロクロ 口唇丸く やや内削がれる 高さのない唇 形	D		
314	SK106	床底	灰土器	鉢	体部	小底少々 灰白色	5Y4/1 灰白色	タタキ目	D	
315	SK106	埋下土位	灰土器	鉢	体部	細砂少々 なし	10Y3/1 灰白色	はんとん 大きく外削する 悪? 雜糞調整ケズリ 手袖付着	D	
316	SK106	Q1堆土上位	陶器器	瓶口部	体部	…	7.5Y6/2 灰白色	中底粗 背粗 小底片	E	瓦質器 13~14世紀
317	SK90	堆土上位	縄文土器	深鉢	体部	小底・石英	10YR6/4 灰白色	磨り消し 原体不明	A	
318	SK94	堆土上位	陶器	細砂	体部	…	5G16/1 オリーブ 灰	中底粗 白底 内面平行な段あり 体下部か?	E	13~14世紀
319								矢背		
320	SK102	堆土中	土製品	粘土塊	細砂	7.5YR6/8 褐色	刃口に沿わる粘土塊か		C	
321	SK108	堆土	縄文土器	深鉢?	体部	細砂	7.5YR5/8 明褐色	磨り消し	C	写真掲載
322	SK110	堆土中	縄文土器	深鉢	体部	小底・石英	10YR6/4 黄褐色	337回位の痕跡か 磨り消し?	A	
323	SK114	堆土中	縄文土器	深鉢	体部	小底	10Y3/1 黒褐色	次程もしくは隆起のはがれ?	A	遺傳5360と同 二つ
324	SK116	炭化物内 炭化物裏壁上	縄文土器	深鉢	14部	粗砂・石英	10YR6/4 灰白色	円形沈縁区画 磨り消し	A	
325	SK116	負担壁際	縄文土器	深鉢	14部	小底・石英	10YR3/1 灰白色	口部無文 浅い沈鉢 ほぼ直立に上がる L-R	A	
326	SK116	東側壁際	縄文土器	深鉢	14部	小底・石英	10Y3/2 灰白色	はね部無文 浅い沈鉢 ほぼ直立に上がる L-R	A	325と同一箇所 の可能性大
327	SK116	堆土中	绳文・生土 土器?	深鉢	口縁部	細砂・石英 灰褐色	10YR7/2 灰褐色	中底粗口縁? (小さくうねり感?) 14部部無文 口 ぐるぐる	B	
328	SK116	堆土中	生土土器?	深鉢	14部	細砂・石英 灰褐色	10YR4/2 灰褐色	生土部口縁? (小さくうねり感?) 14部部無文 口 ぐるぐる	B	
329	SK116	P1周辺裏面	縄文土器	深鉢	体部	小底・石英	10YR6/6 明褐色	L-R 他の頂製土器と比較して、誰多く焼成窓	C	
330	SK117	堆土中	生土土器?	鉢	底部	小底・石英	10YR6/3 灰白色	10YR6/3 灰白色	C	
331	SK119	堆土中	生土土器?	深鉢	体部	小底	10YR5/2 灰白色	L-R? 内面に微付着 悪い	C	
332	SK120	堆土中	縄文土器	深鉢	体部	細砂	10YR7/3 灰白色	沈鉢 磨り消し	A	
333	SK123	堆土下	鉢生土器?	深鉢	口縁部	細砂・石英 灰白色	10YR7/2 灰白色	磨された口縁 隆体 うねりをもった平口	B	
334	SK123	堆土下	生土土器?	鉢	口縁部	細砂	10YR6/4 灰白色	小型 土製品? 14部内に角度を持つ L-R	B	
335	SK124	堆土下位	縄文土器	深鉢	体部	小底	10YR3/1 黒褐色	円形沈縁区画 磨り消し	A	
336	SK124	堆土上位	縄文土器	深鉢	半完形	小底・石英 灰白色	10YR3/2 黒褐色	口部基や外反、体下部とい様に昌大陸 (丁字) 捉文焼鉢 R-L 外ただれ黒斑 内ミガキ ナガ	A	

番号	遺物名	出土層位	種類	部位	出土	表面色	特徴	分類	参考
337	SK124	埋土上位	縄文土器	深鉢	下完形	小窓	10YR7/4 朱色	全体不明(透り赤?) 傷り剥しが少々 口縁部や 内側底、体中央部に墨大径 内巻き 外巻き	A 櫛標外363と同
338	SK124	埋土上位	口筒・骨盆	半完形	小窓	灰 朱色	内側底し外縁 剥り落し 朱模「丁字文」口縁外反 体下	10YR7/2 朱色	A 343を出すと 12cm? 21.5cm
339	SK124	埋土中	縄文土器	深鉢	口縫	小窓・新 口縫	10YR7/2 朱色	内側して外反 L字形 体底に最大伴か	A
340	SK124 (解説)	埋土下位 (解説)	縄文土器	深鉢	口縫	粗砂	10YR4/2 灰黄褐色	小底状口縫? (小さくうねる感じ) 隆起	A
341	SK124	埋土上位	縄文土器	深鉢	下部	小窓	10YR8/4 朱色	口縫直端の下部ミガキ 内丁寧なミガキ 厚み 透光性良好あり 大陸の土器	A
342	SK124	埋土上位	縄文土器	深鉢	体部	粗砂 石 朱色	7.5YR5/3 朱色	平行沈痕 剥り落し 朱痕?	A
343	SK124	埋土上位	縄文土器	深鉢	底部	小窓・石 朱色	7.5YR5/3 朱色	内側底剥離し ケズリ 本堂痕	A 338の底部
344	SK124	埋土上位	縄文土器	深鉢	底部	小窓・石 朱色	7.5YR6/3 朱色	内部底小さく直線的に立ち上がる 内面ただれる	A 336と同 体 の相似度
345	SK124	埋土上位	縄文土器	深鉢	底部	粗砂 石 朱色	7.5YR6/0 R.L. 墓めの下沿 体下部剥離し風痕 引り出しなし 直線的に立ちあがる 内部ミガキ 黒斑	R.L.	A
346	SK125	埋土上位 一階	縄文土器	深鉢	半完形	小窓・石 朱色	20YR5/2 朱色	山形門縫 4段足か 口縫大径 L反 体下部剥離 直線的に立ちあがる 内部ミガキ 黒斑	A
347	SK125	埋土中	縄文土器	深鉢	体部	粗砂 石 朱色	7.5YR6/2 朱色	横位沈縫跡内側彌文 L-R	A
348	SK125	埋土上位	縄文土器	深鉢	口縫	小窓 朱色	10YR6/3 朱色	直線延長人形 (10.5cm) はば齊縫的に立ち上がる。 下位ミガキ 抜け?	A 337と同 体 の相似度
349	SK128	埋土中	縄文土器	深鉢	口縫	小窓	10YR8/3 朱色	山形突起 史模(迷字)・高巻き? R-L	A
350	SK128	埋土中	縄文土器	深鉢	体部	小窓・石 朱色	10YR8/4 朱色	R.L. 下部片か 内丁寧なミガキ	C
351	SK130	埋土中	縄文土器	深鉢	体部	小窓・石 朱色	2.5YR4/4 朱色	複数? 内部丁寧なミガキ	C
352	SD20	埋土中	縄文土器	鉢	体部	小窓	10YR3/2 朱色	山形沈縫 小破片	C
353	SD23	埋土上位	便器	蓋?	頭部	粗砂 石 朱色	7.5Y4/1朱 色	瓦文 調整痕あり やや設あり 内面に拍 調整痕 大變?	D
354	SD20	埋土	便器	便	体部	小窓	N4・灰	クサキ目 内面に拍 調整痕	D
355	日柱穴吹1 柱 跡1 PP12	埋土	便器	便	体部	小窓少々	5Y4/1 朱色	タクキ目 寄い小型	D
356	日柱穴吹2 柱 跡2 PP102	埋土中	土瓶器	坏?	底部?	砂	5YR7/3 朱色	ロクロ? 小破片 かわらけ?	D 写真阙載
357	日柱穴吹柱 跡2 PP111	埋土中	便器上器?	便?	口縫	細砂・石 朱色	10YR5/4 朱色	内とぞされる1段脚 手口被 列点文 S字状沈縫 熱帯	B
358	日柱穴吹柱 跡2 PP102	埋土中	土開器?	坏?	体部	砂	5YR7/3 朱色	ロクロ直 小破片	D 写真阙載
359	日柱穴吹土柱 跡2 PP12	埋土中	縄文土器	深鉢	体部	小窓・石 朱色	10YR5/4 朱色	平行沈痕 沈文彌	A
360	日柱穴吹1 柱 跡3 PT43	埋土中	縄文土器	深鉢	口縫	小窓・石 朱色	2.5YR7/3 朱色	2枚一对の山形口縫? 諸な沈縫 剥り落し	A
361	N-A-3・6-a	V層下	縄文土器	深鉢	口縫	小窓・石 朱色	10YR5/4 朱色	日本原産に立ち上がる 沈縫内剥離し口 縫丸くなる剥り落し	A
362	N-A-5・6-a	V層下	縄文土器	深鉢	口縫	小窓・石 朱色	10YR7/4 朱色	手口被 抽象化し 剥り落し 外そぎが小さく内側す る やや手口被で彌ら形容が 重体L-R	A
363	N-A-5-a	V層下	縄文土器	深鉢	口縫	小窓・石 朱色	10YR6/3 朱色	寄りかに波打つ口縫 剥り落し 沈縫 抜け? A文	A
364	N-A-6-a	壁	縄文土器	深鉢	口縫	小窓・石 朱色	10YR5/4 朱色	手口被 太い沈縫 無文體	A
365	N-A-6-d	埋土下位 (解説)	縄文土器	深鉢	口縫部	小窓・石 朱色	10YR4/4 朱色	口縫部外反 内丁寧なミガキ 残し	A
366	N-A-6-c	V層下	縄文土器	深鉢	口縫	小窓・石 朱色	10YR2/1 朱色	折文交が円形に巡る	A
367	N-A-8-f	V層下	縄文土器	深鉢	突起	小窓・石 朱色	10YR3/1 朱色	小底状口縫 円形の人字状突起 綱目御文?	A
368	N-A-6-b	裏層上	縄文土器	深鉢	体上部	小窓・石 朱色	10YR2/1 朱色	折縫・深体 刃み	A
369	N-A-7-f	V層 F	縄文土器	深鉢	体部	小窓・石 朱色	10YR5/4 朱色	剥離し 丁字 大柄な沈縫 R-L	A
370	II-A-8-b	V層	縄文土器	深鉢	口縫	小窓・石 朱色	2.5YR6/6 朱色	剥離みを持つ上部が やや外側するが外反しない 内側がれる 残縫・斜縫・凹凸取 光須 (1方角)	A
371	II-A10a	V層 F	縄文土器	深鉢	体部	小窓・石 朱色	2.5YR5/8 朱色	円形刺突 沈縫 剥り落し 充満 内色白 (丁寧な)	A
372	N-A-6-a	V層下	縄文・弥生	浅鉢	口縫	粗砂	5YR7/3 朱色	小底状口縫 内満する 最大径は口部 半周彌文 亂 形	B
373	N-A-6-a	V層下	縄文・弥生	浅鉢	口縫	粗砂	2.5YR5/6 朱色	円形刺突 剥け? 残し 口部上げ底	B
374	N-A-6-a	V層下	縄文・弥生	浅鉢	口縫	粗砂	10YR5/6 朱色	手口被 口部 内満する	B

番号	遺構名	出土層位	種類	器種	部品	施土	表面色	特徴	分類	備考
374	N-A 3-a	V層下	縄文・弥生	浅鉢	口縁	觸付	7.5YR7/6 褐色	実形土文字 亂ねな沈痕 平口縁 内沈線	B	
375	ⅢΔ 8-b	V層下	縄文・弥生	浅鉢	口縁	触付・茎 母	2.5YR5/8 明赤褐色	実形土文字 2周同一の貼付 大きく離れる 丁口縁	B	
376	N-A 5-a	V層下	弥生土器	浅鉢	体部	觸付	10Y26/6 黄褐色	変形土文字 葉り消し 2段ある? (やや藤れる)	B	砂押式?
377	N-A 6-b	V層下	弥生土器	白付浅鉢?	台形	触付・茎 母	10Y27/4 無文	変形土文字 上位に沈痕 ミガキ	B	
378	N-A 9-i	埴輪上	糞生	要	口沿	触付	10Y30/6 褐色	今や外反しながら長く立ち上がる。肩部があり、やや膨らみが口縁部が取れただけか。少し	B	
379	N-A 7-c	V層下	糞生	要?	口縁	触付	10Y36/3 褐色	10Y36/4 褐色	B	
380	N-A 7-c	V層下	糞生	要	半完形	触付 小 口	10Y25/4 褐色	最大径は肩部 L.R. 葉り消し 伸上部に平行線?	B	
381	N-A 8-g	V層下	糞生	要形	觸部	小縁	2.5YR6/8 褐色	通常瓦体 伸脚と脚部との間に沈痕 口縁部端に洗跡、口 縁部に凹凸する? 等級	B	382の口縁部
382	N-A 8-g	V層下	糞生	要形	触部	小縁	2.5YR6/8 褐色	通常瓦体 伸脚と脚部との間に沈痕 口縁部端に洗跡、口 縁部に凹凸する? 等級	B	
383	N-A 4-c	V層下	糞生	要	触部	茎多い	7.5YR5/4 褐色	焼成よし 丁寧なミガキ	B	
384	N-A区	不明	糞生?	要?	体部	小縁	10Y32/1 黒褐色	非常に薄い。表面にベンガラ? 滲水	B	
385	N-A 5-a	V層下	縄文	深鉢	底部	触込入	10Y36/3 黒褐色	焼成よし なく、ほほぞ直線的に外傾 R-L? 内部上等層 外底直線	C	363と同 個体?
386	ⅢA 8-b	V層下	縄文	深鉢	底部	触込入	7.5YR8/8 褐色	L.R. 焼成よし 位まで施す 面盤的に外傾 内黒斑 形成か	C	
387	ⅢA 8-b	V層下	縄文	深鉢	底部	茎多い	5.6 黄褐色	L.R. 焼成よし 内部ミガキ 底部黒文 烧り出しなし ほほ直線的に外傾	C	
388	ⅢA 8-b	V層下	縄文	深鉢	底部	茎多い	6.6 明黄褐色	焼成よし 茎部に焼多い 無文	C	
389	N-A 3-a	V上	縄文・弥生	深鉢	底部	茎・石英	10Y46/6 褐色	無文 ほほ直線的に立ち上がる 壺底沈痕 换代?	C	
390	N-A 6-c	V層上	粗器	壺	口縁部	小縁	N/A 暗褐色	無曲し外傾する。口縁部斜面 ロクロ底	D	
391	N-A 5-b	V層上	粗器	壺	体部	小縫・石 英	N4-14 褐色	タタキ目痕 ヘラナデ 内面削ナダ	D	
392	N-A 5-c	V層上	かわらけ	壺	底部	小縫・石 英	10Y36/3 褐色	内面赤褐色 5YR6/8赤色	D	
393	N-A 7-e	V層上	陶器	壺	底部	—	—	腹戸尖底 線縫	E	16世紀代
394	N-B 9-a	I層	陶器	壺	底部	—	—	肥前窯 陶胎帶付壺	E	18世紀前半
395	N-B 9-a	I層	陶器	壺	—	—	—	比較的新しい近代以前の墨跡瓦?	E	

第14表 石器観察表

()は残存

番号	遺構名	出土層位	器種	計測値				石質	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
396	SK98	桃山脚下	磨石	9.2	8.3	3.7	467	安山岩 奥羽山脈新生代新第三紀	
397	SK104	植土中	磨石	11.9	6.7	2.2	179.2	碧玉 奥羽山脈新生代新第三紀	打製石?
398	SK104	植土中	石斧?	23.7	16.1	4.5	269.0	安山岩 奥羽山脈新生代新第三紀	火熱を受ける
399	SK110	堆土	石器	1.3	1.2	0.2	9.3	墨曜石 底地不明	
400	SK133	堆土	不定形	3.5	2.5	0.75	49	碧玉 奥羽山脈新生代新第三紀	分類D 与真同類
401	SK134	植土中	磨石	10.6	9.65	6.5	1062	安山岩 奥羽山脈新生代新第三紀	
402	N-A 6-c	V層下	石瓶	2.7	1.7	0.25	0.9	碧玉 奥羽山脈新生代新第三紀	製作途中
403	N-A 7-f	V	スクレーパー	5.4	3.2	1.4	19.6	良石 奥羽山脈新生代新第三紀	
404	N-A 8-g	V	磨	4.2	2.4	1.1	7.5	碧玉 奥羽山脈新生代新第三紀	分類B 与真同類
405	F区	I	不定形	5.8	4.35	1.4	20.1	碧玉 奥羽山脈新生代新第三紀	分類E 与真同類
406	F区	I	不定形	3.4	2.7	1.6	11.4	めのう 奥羽山脈新生代新第三紀	石製品? 与真同類
407	N-A 6-e	V上	砾石	6.1	3.3	1.8	56.2	ダイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	
408	N-A 7-f	V?	凹石	16.0	7.4	5.0	533.3	花崗岩 北上山地中新代白堊紀	
409	N-A 5-d	V上	凹石	9.1	(5.2)	2.5	145.5	安山岩 奥羽山脈新生代新第三紀	
410	N-A 7-c	堆	凹石	15.1	10.2	8.8	1153.7	安山岩 奥羽山脈新生代新第四紀	
411	N-A 6-d	堆	凹石	9.45	6.45	4.65	343.9	ダイサイト 奥羽山脈新生代新第三紀	
412	N-B 9-b	堆	砾石	(11.3)	(10.1)	6.2	1025.9	花崗岩 北上山地中新代白堊紀	
413	N-A 6-e	V上	砾石	15.9	11.5	4.45	1223.1	安山岩 奥羽山脈新生代新第三紀	
414	N-A 5-d	V上	砾石	17.0	11.4	4.2	1032.3	奥羽山脈新生代新第三紀	火熱を受ける

第15表 羽口・鉄製品・古銭觀察表

番号	遺物名	出土層位	遺物	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	その他	
				残存長	外径	内径		()は残存値 < >は参考値	
415	SK306	埴土下位	羽口	48	48	23	37.9	切妻漆滓付縁	写真掲載
416	SK306	Q2埴土下位	板状鉄製品	47	33	0.8	10.8		
417	SK306	Q1埴土下位	鉄製品 漆滓み具	横長 9.2	幅 18	0.4	15.8		
418	SK107	埴土	羽口	残存長 5.5	外径 <5.0>	内径	39.3	写真掲載	
419	SK93	埴土上位	針状鉄製品	(6.0)	1.4	1.0	21.4		
420	SK93	埴土上位	板状鉄製品	(6.1)	(4.7)	(0.3)	55.5	刺状	
421	SK101	埴土	針状鉄製品	(6.0)	(1.0)	(0.6)	8.8	鋸び激しく形狀は不明	
422	SK101	埴土中	古鏡	外径cm 24.37	内径mm 19.57	鏡面mm 1.35	24	北宋鏡	熊谷元寶
423	SK109	埴土	針状鉄製品	7.8	1.8	0.8	23.1		
424	SK112	埴土	板状鉄製品	(1.0)	(2.0)	—	3.6	小型	薄肉
425	SK124	埴土下位	針状鉄製品	(5.7)	0.6	0.3	4.7	先端	細い針?
426	SD30	埴土	刀子	横長 (10.15)	横長 2.6	厚さ 0.8	40.6		
427	II柱穴状土坑跡 1. PP14	埴土	玉状鉄製品	1.6	1.3	—	6.6	4点出土の内1点欠損	
428	II柱穴状土坑跡 2. PP19	埴土	羽口	残存長 4.8	外径 <8.6>	内径 <34>	85.4	切妻漆滓付縁	
429	II柱穴状土坑跡 2. PP60	埴土上位	板状鉄製品	(8.3)	横長 4.1	厚さ 1.0	73.0		
430	II柱穴状土坑跡 2. PP69	埴土	針状鉄製品	5.4	1.25	0.6	8.1		
431	II柱穴状土坑跡 2. PP257	埴土	針状鉄製品	(2.5)	1.1	0.5	3.0		
432	N-A7-d	V層下	羽口	残存長 8.7	外径 8.4	内径 2.7	385.3	出土位置 第68回参照	
433	N-A6-d	V層上	針状鉄製品	(4.1)	1.2	0.8	6.7		
434	N-A6-d	V層上	針状鉄製品	(3.75)	1.1	1.2	8.5		
435	N-A6-d	V層上	針状鉄製品	(5.6)	1.3	0.7	10.3		
436	N-A7-d	V層上	針状鉄製品	(4.8)	1.3	1.5	18.0		
437	N-A5-d	V層上	板状鉄製品	(5.0)	0.95	0.45	5.1		
438	N-B10-b	V層上	板状鉄製品	(9.2)	横長 (3.6)	厚さ 0.5	38.8		
439	N-A9-i	V層上	板状鉄製品	(2.1)	(3.1)	0.3	8.4		

第16表 遺構内出土鉄滓・その他觀察表

番号	遺物名	出土層位	器種	重さ(g)	備考	
					鉄滓類	鉄滓類
440	SK306	Q1埴土	鉄滓類	26.5	溶着滓	
441	SK95	埴土	鉄滓類	61.6	楕形鍛冶滓	磁石に反応なし
442	SK97	埴土	鉄滓類	102.4	楕形鍛冶滓	磁石に反応あり
443	SK105	埴土	鉄滓類	121.7	楕形鍛冶滓	磁石に反応あり
444	SK108	埴土	鉄滓類	10.6	鍛冶滓	磁石に反応なし
445	SK110	埴土	鉄滓類	6.9	溶着滓	
446	II柱穴状土坑跡 2. PP150	埴土	鉄滓類	17.9	溶着滓	
447	SK89	埴土	骨	7.97	人骨	火葬骨?

3 分析鑑定 一境遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定) 一

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

境遺跡は、岩手県北上市船瀬町地蔵堂190-1（北緯 $39^{\circ} 14' 24''$ 、東経 $141^{\circ} 7' 15''$ ）に所在し、北上川東岸の自然堤防に立地している。測定対象試料は、SKI06竪穴住居状遺構出土炭化物（1：IAAA-91272）、SK89土坑出土炭化物（2：IAAA-91273）、SK104土坑出土炭化物（3：IAAA-91274）、HP P147出土炭化物（4：IAAA-91275）、合計4点である。

(2) 測定の意義

遺構の年代と遺構間の年代関係を明らかにする。

(3) 化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- ② 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA : Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80°C) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、 90°C で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- ③ 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、 500°C で30分、 850°C で2時間加熱する。
- ④ 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- ⑥ グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

(4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とパックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- ① 年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- ② ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として過る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③ $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (%) で表される。測定には質量分析計ある

- いは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- ④ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- ⑤ 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の歴年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(6) 測 定 結 果

^{14}C 年代は、1が $670 \pm 30\text{yrBP}$ 、2が $700 \pm 30\text{yrBP}$ 、3が $740 \pm 30\text{yrBP}$ 、4が $670 \pm 30\text{yrBP}$ である。いずれも中世の年代を示し、历年較正年代 (1σ) で見ると、1と4が $13\sim14$ 世紀頃、2と3が 13 世紀頃である。

炭素含有率はいずれも60%程度以上で、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91272	1	遺構: SK106 層位: 塙土下位	炭化物	AAA	-24.04 ± 0.33	670 ± 30	91.98 ± 0.30
IAAA-91273	2	遺構: SK89 層位: 塙土中	炭化物	AAA	-25.90 ± 0.34	700 ± 30	91.62 ± 0.30
IAAA-91274	3	遺構: SK104 層位: 塙土中	炭化物	AaA	-26.48 ± 0.37	740 ± 30	91.18 ± 0.33
IAAA-91275	4	遺構: HPP147 層位: 塙土中	炭化物	AAA	-27.19 ± 0.35	670 ± 30	91.97 ± 0.30

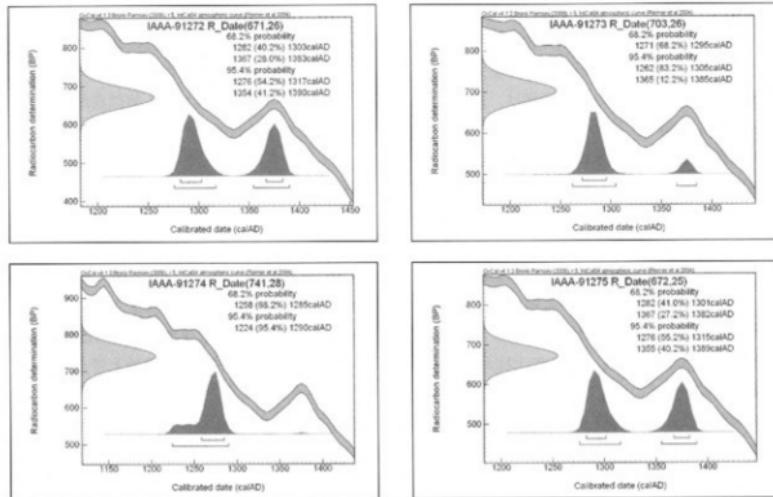
#3165

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1 σ 歴年代範囲	2 σ 歴年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-9127 2	660 ± 30	92.16 ± 0.30	671 ± 26	1282AD - 1303AD (40.2%) 1367AD - 1383AD (28.0%)	1276AD - 1317AD (54.2%) 1354AD - 1390AD (41.2%)
IAAA-9127 3	720 ± 30	91.45 ± 0.29	703 ± 26	1271AD - 1295AD (68.2%)	1262AD - 1305AD (83.2%) 1365AD - 1385AD (12.2%)
IAAA-9127 4	770 ± 30	90.91 ± 0.32	741 ± 28	1258AD - 1285AD (68.2%)	1224AD - 1290AD (95.4%)
IAAA-9127 5	710 ± 30	91.55 ± 0.29	672 ± 25	1282AD - 1301AD (41.0%) 1367AD - 1382AD (27.2%)	1276AD - 1315AD (55.2%) 1355AD - 1389AD (40.2%)

[参考値]

参考文献

- Suiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



[参考] 稲年較正年代グラフ

4 平成21年度の調査の成果

V層上面で検出・出土した遺構・遺物を古代から中近世期、その下面で検出・出土した遺構・遺物を縄文・弥生時代と分けてまとめとする。ただし、数多く検出された土坑や柱穴状土坑は、出土遺物が少なく本文でも不明とし明確ではないものもあるが、検出面を重視して積極的に時期分けしている。

(1) 古代・中近世

当期の遺構と想定できるものには堅穴住居状遺構3基、土坑35基、焼上遺構1基、溝13条、柱穴状土坑219個、炭化物集中3基がある。

堅穴住居状遺構はF区で1基、H区で2基検出されている。F区で検出したSK104堅穴住居状遺構は、平面形は隅丸の方形状で12個の柱穴状土坑が検出されている。主軸方位はほぼ北—南となると考えられる。遺物はないが中世期の堅穴建物跡と考えている。H区で検出されたSK106・07堅穴住居状遺構も同様で、これらの遺構は、比較的大規模な炭化物が集中して検出される類似点がある。しかし、SK106・07堅穴住居状遺構では埋上から鉄製品や鉄滓が比較的多く出土しており、SK104堅穴住居状遺構とは違う様相も見え、工房跡の可能性も考えられる。ただしSK106堅穴住居状遺構は平面形が円形に近く、遺物も出土することから縄文・弥生時代の遺構であることも想定している。

土坑は35基検出され、分類すると、壁が焼成を受けているもの2基、方形基調のもの21基、楕円形基調のもの7基、溝状の椭円形を呈するものの1基、円形基調のもの4基となる。焼成土坑は、平面形は方形のもの（SK88土坑）と楕円形状のもの（SK89土坑）が隣接している。2つの土坑に挟まれた区域には炭化物集中している範囲（SX06炭化物）がある。SK88土坑は、焼成よく壁に焼土がへばり付いている。西側壁は溝状の張り出しが見られ、焚口のようである。炭化物下位から微細な骨粉が出土している。おなじくSK89土坑からも骨が出土している。これらの遺構は火葬跡と考えられる。時期はSK89土坑の埋土下位から出土した炭化物の年代測定から鎌倉時代と考えられる。

やや東側に離れた調査H区南西部では、方形基調の土坑15基、楕円形基調の土坑1基が密集して検出された。これらの七坑は人為的な堆積状況を呈する、長方形基調を主体とする等の共通性が見られる。主軸方向にまとまりが見られ、1つはSK97土坑をはじめとする南北方向から若干東に傾くもの、2つめはSK95土坑をはじめとする西北西—東南東方向を向くものである。前者が主体で、SK95・97土坑、SK107・111土坑の重複関係から前者のほうが新しい傾向が見られるが、SK109・112土坑のように新旧関係が逆転しているものを見られる。底面の大きさは、長軸70～170cm前後と幅があるが、長軸90～100cm前後と140cm前後に集中する。当時の成人が140～150cm前後と仮定すると、埋葬方法は屈葬もしくは座葬と考えられるが、体幹の向きについては、不明である。出土遺物には恵まれないが、SK94土坑から中国白磁片が、SK101土坑から1点の熙寧元寶（南唐錢）が出土している。また、SK104土坑の埋土から出土した炭化物の年代測定値は、鎌倉時代の数値を示した。これらことから方形基調の土坑は、いくつかが重複し合っていることから時期差を持っているが、火葬跡と同時期の鎌倉時代の墓壙の可能性が高い。F調査区のV層面で検出された溝状や円形の土坑の内、大型のSK80土坑と隣接するやや方形のSK81土坑については、平成20年度検出のSK66・67土坑に類似しており、同様の遺構である可能性がある。その他の土坑については詳細は不明である。

焼土は1基で、焼土自体は脆く、炭化物が厚い。近隣では鉄製品などが出土することから、鍛冶に

関わるものかもしれない。

検出された溝跡13条の内、S D20溝跡を除いて、すべて古代～中世に属すると考えられる。H区北側で検出された5条（S D25～29溝跡）は、幅広で深さもなく狭い範囲での検出で延長は不明だが、周囲には柱穴状土坑が多く検出されており、古代から中世の建物跡関連のものと考えられる。またH区中央で検出された3条も中世期の区画溝様のものであろう。F区で検出された5条のうち、S D21・22溝跡も同様と考えられる。S D20溝跡はその埋土から近世に近い時期観が与えられそうで、区画というより排水目的で作られたものであろう。F区で検出された大型のS D23・24溝跡は、S D22溝跡の下面で検出されたことから、より古い遺構となる。焼成土坑であるSK88・89を囲むようであることから、2つの土坑を水から守る目的で作られたのかもしれない。

柱穴状土坑はV層面検出のものが219個ある。掘立柱建物跡の構成は判別できなかった。しかし、規模や掘り方などからいくつつかの建物跡があったと思われる。H柱穴状土坑群1のある北側では、狭い範囲であるが、大型のものが多く、建物のあった可能性を指摘できる。時期は、比較的古代の遺物が出土することから、古代から中世と幅が広くなる。H柱穴状土坑群2では、SK I 06・07堅穴状造構の北東側には規模の大きな柱穴状土坑が多く、配列が幾分認められる。一方、墓壙の東側区域で、S D31溝跡より南側では、規模も小さく並列が定かでないものが多数となる。これらのことから、建物跡は墓壙群や工房跡？（SK I 06・07堅穴状造構）の北東側にあった可能性がある。その時期は、H柱穴状土坑群2 P P147出土炭化材の年代測定値から、鎌倉時代と考えられる。

次に遺物についてであるが、古代から中世期に属する出土遺物は少ない。土器や陶磁器では、古代の土師器が2点のみの出土で壊の破片、須恵器は13点が出土し壊や坏の破片である。中世期になるとかわらけが1点と陶磁器が出土している。かわらけはSK I 06堅穴住居状造構から出土した。小破片で詳細は不明である。陶磁器は、近世を含めて7点の出土である。SK94土坑からは、中国の南宋～元朝期（12世紀後半から～14世紀前半）に造られた白磁器が出土した。梅瓶とよばれる肩の張った形式の瓶体下部片で、当時の支配階層であった東国武士に極めて顯著に愛好されたものであるらしい。また、14世紀代と思われる中国産の青磁碗（皿？）の破片も出土しており、これらの遺物は検出遺構の特徴を記すものである。国内産では、16世紀代の年代が与えられる瀬戸美濃系の灰釉陶器が出土している。その他では古銭と羽口および鉄製品がある。SK101土坑から出土した古銭は、北宋錢の熙寧元寶（初鋤年1068年）である。平成20年度調査遺構SK63墓壙からも出土しているが、計測値を比較してみると、SK63墓壙出土のものより、若干ではあるが大きめである特色を持つ。羽口は、大型のものが造構外から1点出土し、破片はSK I 06・07堅穴住居状造構からの出土が多い。鉄製品には刀子や穂装具、釘、正、板などある。鉄滓類は大型の楕円形鍛治滓なども出土している。これらの遺物の時期は定かではないが、陶磁器などと同時期と考えられ、中世期に置いて鍛冶的な作業が行われていた可能性を示すものである。

近世では、肥前産の陶胎染付碗が、近代以降では3点の陶磁器と瓦が出土している。

（2）縄文・弥生時代

当期に当たる造構としては、堅穴住居跡1棟、堅穴住居状造構1基、土坑23基、焼土造構1基、柱穴状土坑143個が検出された。

堅穴住居跡はH区の中央部で検出されている。一部掘り過ぎで半分が調査区外に広がることから、全体像は明確にできなかったが、楕円形を呈すると推定される。床面の東隅に地床炉を持つ可能性が高い。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉から末葉と考えられる。住居状造構は、F区で検出さ

れたが、やはり楕円形を呈すると考えられ、南床隅に炭化物が集中している。時期は出土遺物から縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。これら2つの遺構の時期には、遺跡の東側に樺山遺跡があり、その関連が想定され、作業場的な役割を持った季節限定のものかもしれない。

土坑は、H区の中央部で多く検出されており、土器の出土も多い。時期は竪穴住居跡と同時期の縄文時代中期後葉から末葉のものが多数を占める。大型の1基（SK116土坑）は、調査区外にプランが拡がることから明確ではないが、住居跡もしくは住居状の可能性もある。重複する2基（SK124・125土坑）は、不整ではあるが円形で、SK116土坑とS I 17竪穴住居跡の間に挟まれた位置にあり、関連が考えられる。その他中期末葉の土器を出土させる土坑も、その周辺に点在している特色が見える。時期差のありそうな土坑がSK123土坑である。底部から焼土や炭化物が検出されたもので、他の土坑と異なる特色を持つ。底部から出土した土器は、不明瞭だが弥生土器の可能性もある。同時期の土器を出土させる土坑はSK123七坑周辺にあり、検出グリッドからも比較的多くの弥生土器を出土させることから、当期の居住区がH調査区の東側（旧県道下）に広がる可能性を示唆する。

I基検出された焼土は、古代柱穴状土坑検出面より低い面（VI層下？）で検出されたことから当期に位置付けたが、周辺から羽口や鉄滓も出土し、古代から中世に当たる可能性もある。

V層下から検出された柱穴状土坑は、143個ある。詳細はV層下からV層上面検出が30個、V層上面（最終面）検出が113個である。時期では縄文時代から弥生時代となるが、上記の30個は、中世から古代の可能性を含む。集中する範囲などの特色は、本文にあるために割愛するが、住居跡などの遺構に関連するものを除くと、後期前葉の土器の出土する区域（グリッドIII A 9・10b）や晚期から弥生土器の出土する区域（グリッドIV-A 4・5-a・b、IV-A 7・8-f）にまとまりが見られ、何らかの遺構があった可能性を見いだせる。

次に遺物であるが、縄文・弥生土器は、時期や出土グリッドが限定される特色がある。最も多く出土したのが、縄文時代中期末葉の土器で、J字やS字などのモチーフが施され、山縁部の装飾体がある土器も見えることから大木10b式に比定される。これらの土器は、H調査区の西側縁、IV-A 5・6-a~fグリッドに纏まる。次に多いのが、晩期末葉から弥生初頭期の大洞A'式土器、弥生時代後期の常盤式土器である。前者はH調査区の南西側、後者はH調査区の東側県道下に纏まる。よって、中世期の擾乱の影響も多々あろうが、それぞれの土器に関わる遺構が、調査区外に存在する可能性を指摘できる。その他、少數であるが中期後葉の大木8b新式か9a式の深鉢や、後期前葉？の土器、縄文時代晚期中葉にあたる大洞C1式の台付鉢の完形品も出土している。

さて、平成18年度調査開始から4年間に得られた縄文・弥生土器は、平成18年度が23150g、平成19年度が44800g、平成20年度が82903g、平成21年度が47350gで、総数で約144kgに及ぶ。破片資料や調査員の見逃しなどもあるが、概観すると出土量の多いのが、縄文時代中期後葉から末葉、縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭、弥生時代後期となる。その他でも少量は出土しているが、空白期もあり、列記しておく。縄文土器では、中期中葉以前の土器はない。また、後期中葉～後葉の土器は見つかず、晚期前葉～中葉の土器も希薄である。弥生土器では中期に属する土器が、比較的少ない特色がある。遺跡全体の特徴とは言えないが、何らかの自然要因が関わるであろう。

石器は、剥片石器が石錐2点、スクレーパー1点のみの出土で、石錐の1点は、産地不明の黒曜石が使われており、持ち込まれた可能性が高い。定形石器3点の出土といふのは、土器の出土量の割に少なすぎるようである。しかし、剥片石器と比較して、砾石器は凹石や敲石など一定量出土している。この特色は、土器と同様に、平成21年度調査区（遺跡の中央部）の主体とする時期（縄文時代中期末葉）の自然環境と立地状況（樺山遺跡との位置関係）に関連して考慮する必要がある。

写 真 図 版
(平成21年度調査)



航空写真（俯瞰）



航空写真（真上から）



H区完掘状況



G区トレッヂ



G区基本層序



F区基本層序



H区基本層序

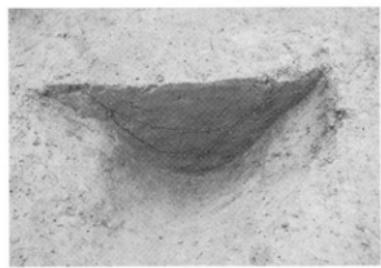
写真図版36 完掘、基本層序



平面



断面



P1断面



炉跡断面



平面



断面

写真図版38 SKI04竪穴住居状遺構



平面

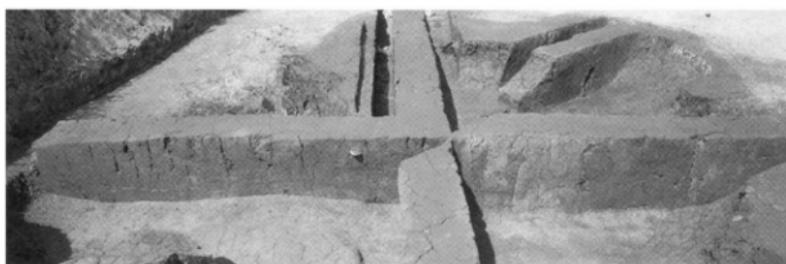


断面

写真図版39 SKI05竪穴住居状遺構



平面



断面（西一東）



断面（南一北）

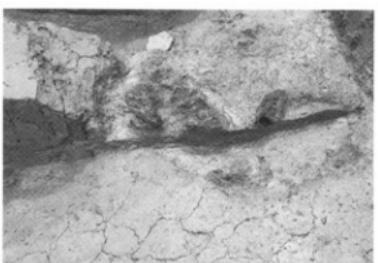
写真図版40 SKI06竪穴住居状遺構



平面



埋土断面



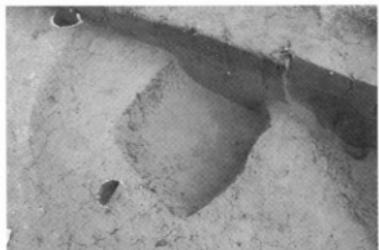
炭化物検出状況1



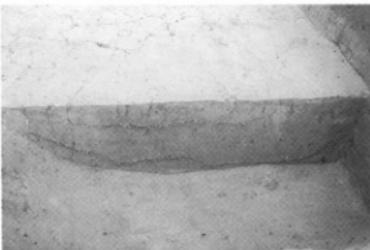
炭化物検出状況2



SKI06炭化物検出状況



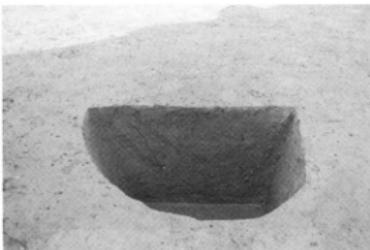
SK78土坑平面



SK78土坑断面



SK79土坑平面



SK79土坑断面



SK80土坑平面



SK80土坑断面

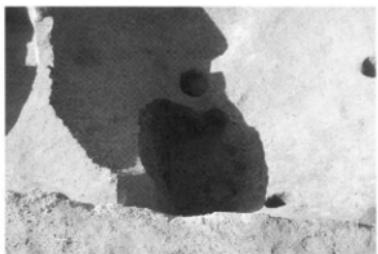


SK81土坑平面

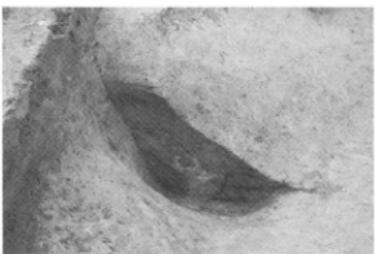


SK81土坑断面

写真図版42 SK78~81土坑



SK82土坑平面



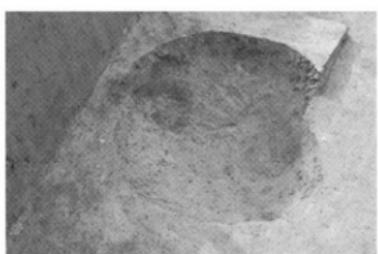
SK82土坑断面



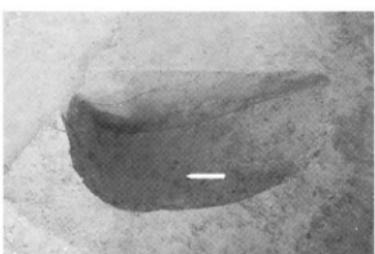
SK83土坑平面



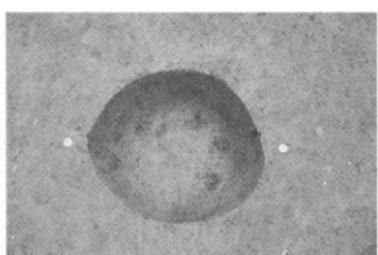
SK83土坑断面



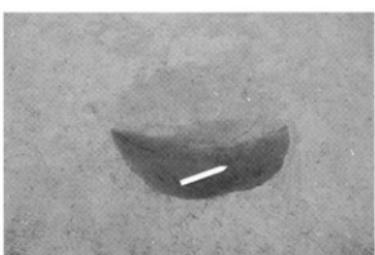
SK84土坑平面



SK84土坑断面

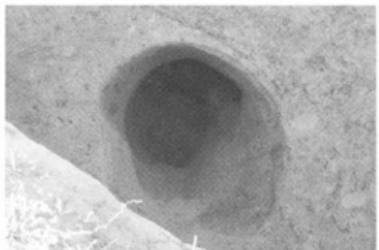


SK85土坑平面

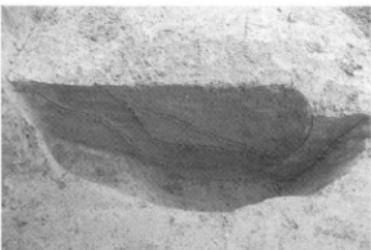


SK85土坑断面

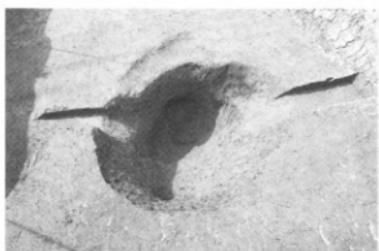
写真図版43 SK82~85土坑



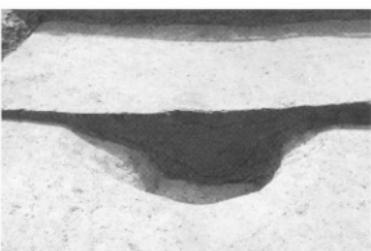
SK86土坑平面



SK86土坑断面



SK87土坑平面



SK87土坑断面



SK88土坑平面



SK88土坑断面

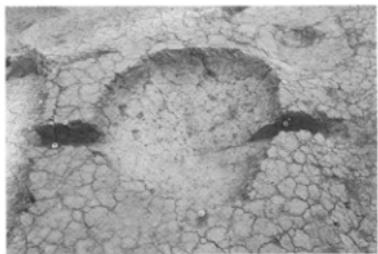


燃烧部平面

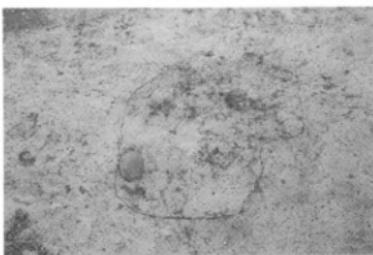


埋土断面

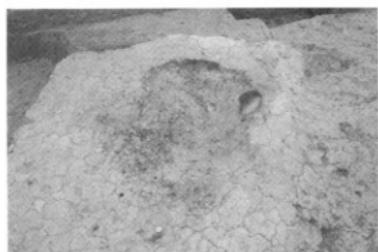
写真図版44 SK86~88土坑



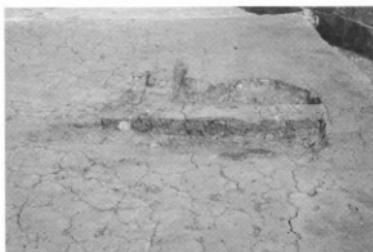
SK89土坑平面



SK89土坑棱出



SK89土坑燃烧部平面



SK89土坑埋土断面



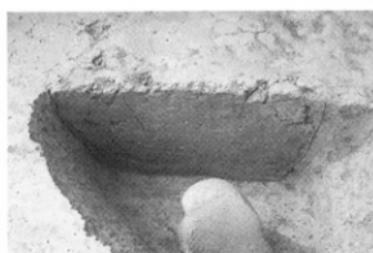
SK90土坑平面



SK90土坑断面

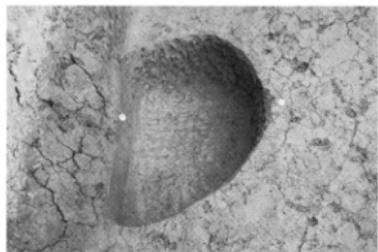


SK91土坑平面



SK91土坑断面

写真図版45 SK89~91土坑



SK92土坑平面



SK92土坑断面



SK93土坑平面



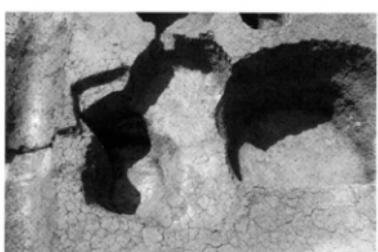
SK93土坑断面



SK94土坑平面



SK94土坑断面

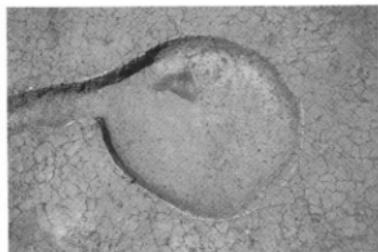


SK95土坑平面

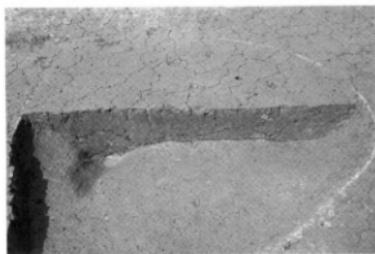


SK95土坑断面

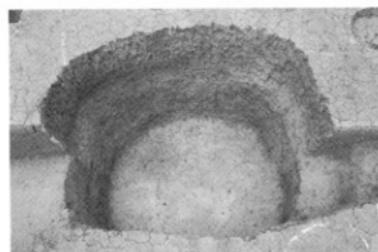
写真図版46 SK92～95土坑



SK96土坑平面



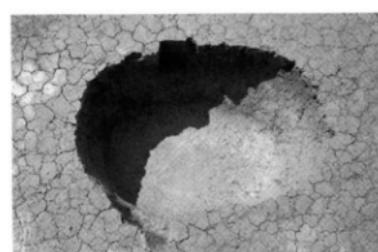
SK96土坑断面



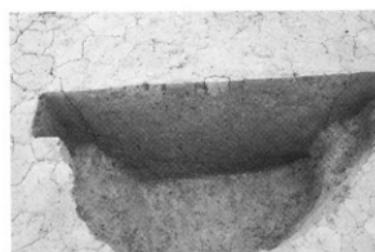
SK97土坑平面



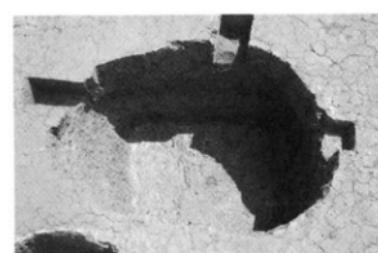
SK97土坑断面



SK98土坑平面



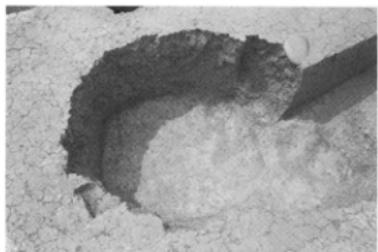
SK98土坑断面



SK99土坑平面



SK99土坑断面



SK101土坑平面



SK101土坑断面



SK102土坑平面



SK102土坑断面



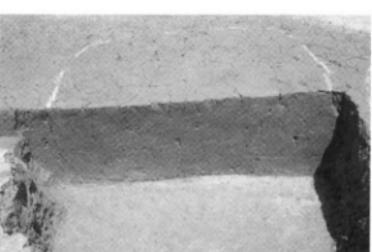
SK102上位焼土棲出状況



焼土埋土断面

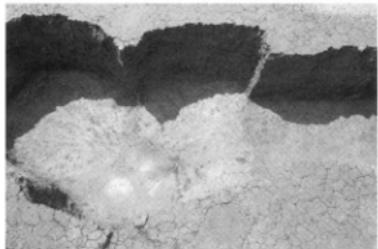


SK103土坑平面



SK103土坑断面

写真図版48 SK101～103土坑



SK104土坑平面



SK104土坑断面



SK105土坑平面



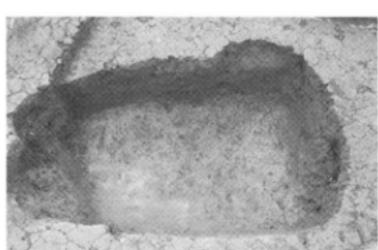
SK105土坑断面



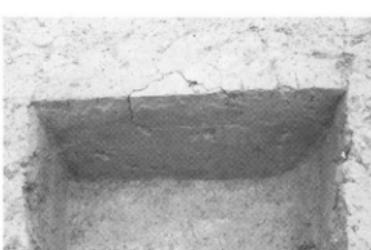
SK106土坑平面



SK106土坑断面

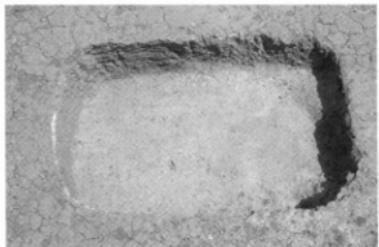


SK107土坑平面



SK107土坑断面

写真図版49 SK104~107土坑



SK108土坑平面



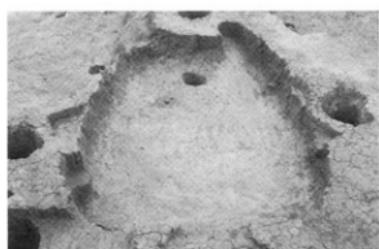
SK108土坑断面



SK109土坑平面



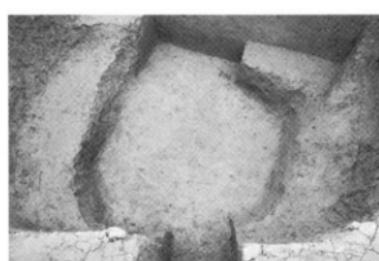
SK109土坑断面



SK110土坑平面



SK110土坑断面



SK111土坑平面

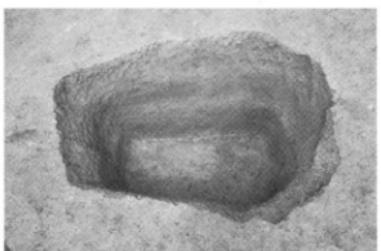
写真図版50 SK108~111土坑



SK112土坑平面



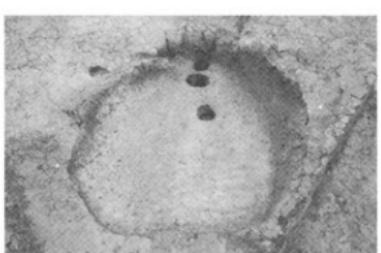
SK112土坑断面



SK113土坑平面



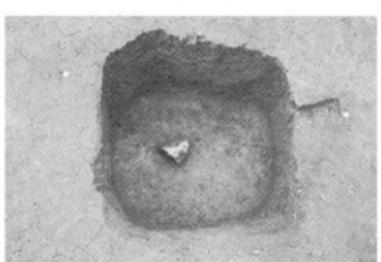
SK113土坑断面



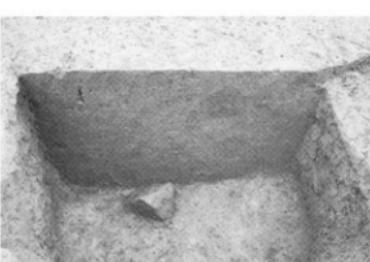
SK114土坑平面



SK114土坑断面



SK115土坑平面



SK115土坑断面

写真図版51 SK112~115土坑



SK116土坑平面



SK116土坑断面



SK116土坑底部炭化物检出状况



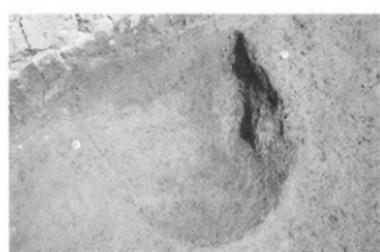
炭化物断面



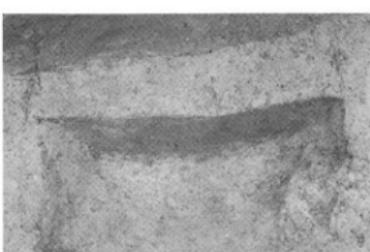
SK117土坑平面



SK117土坑断面

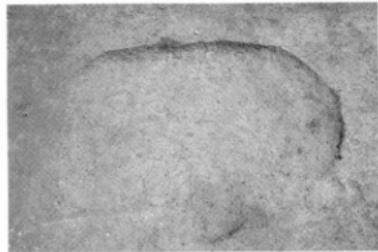


SK118土坑平面

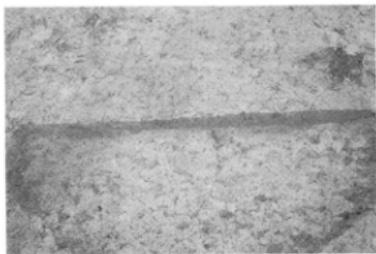


SK118土坑断面

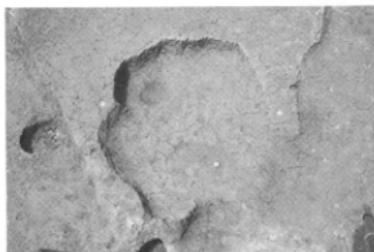
写真図版52 SK116~118土坑



SK119土坑平面



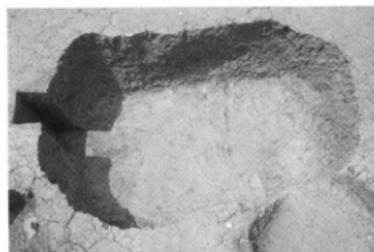
SK119土坑断面



SK120土坑平面



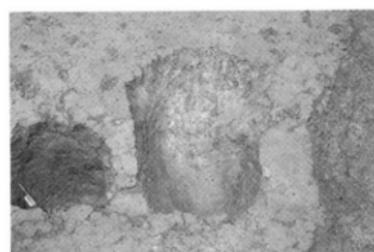
SK120土坑断面



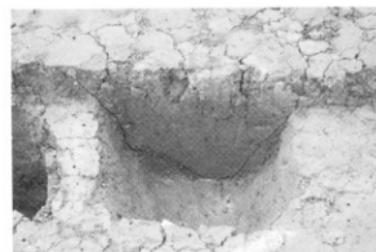
SK121土坑平面



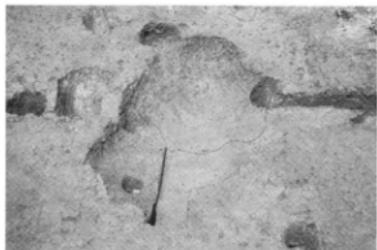
SK121土坑断面



SK122土坑平面



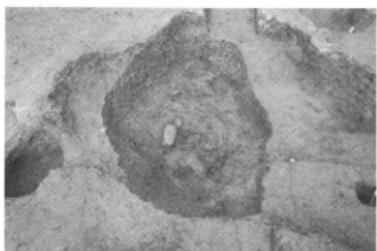
SK122土坑断面



SK123土坑平面



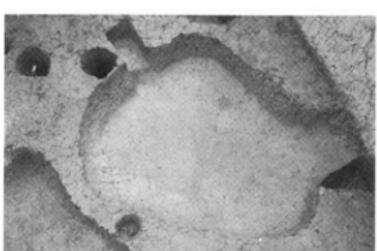
SK123土坑断面



SK123土坑完掘状况



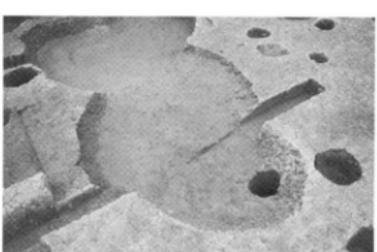
底部焼土断面



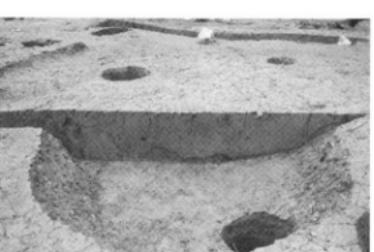
SK124土坑平面



SK124土坑断面



SK125土坑平面



SK125土坑断面

写真図版54 SK123～125土坑



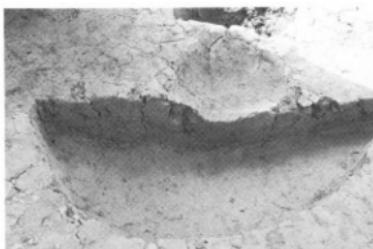
SK126土坑平面



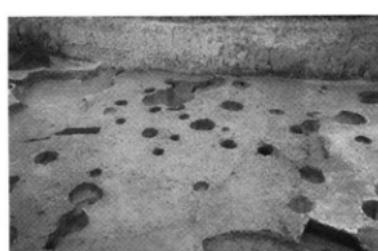
SK126土坑断面



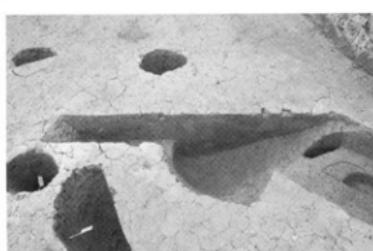
SK127土坑平面



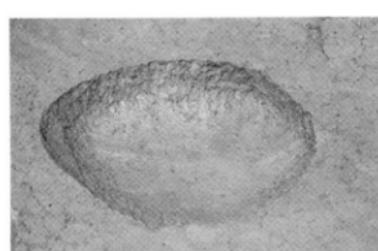
SK127土坑断面



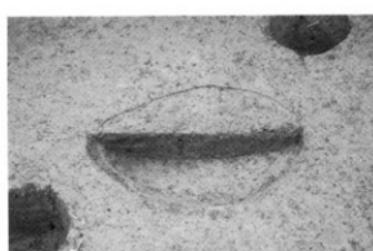
SK128土坑周辺実掘



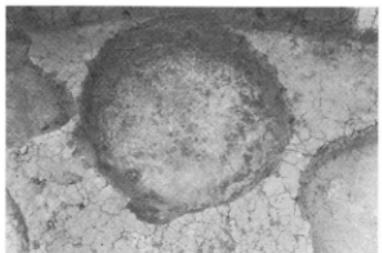
SK128土坑断面



SK129土坑平面



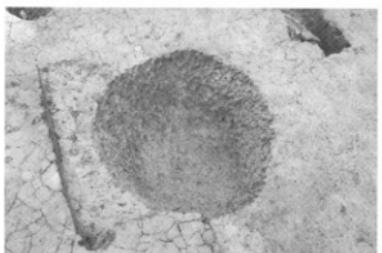
SK129土坑断面



SK130 土坑平面



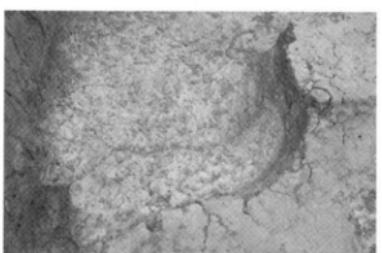
SK130 土坑断面



SK131 土坑平面



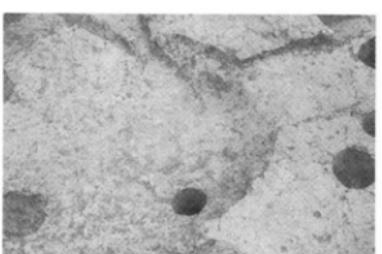
SK131 土坑断面



SK132 土坑平面



SK132 土坑断面

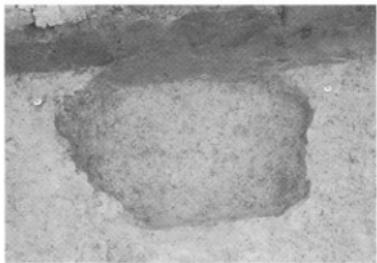


SK133 土坑平面

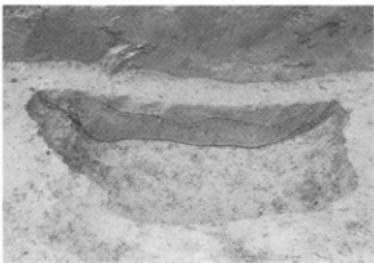


SK133 土坑断面

写真図版56 SK130～133土坑



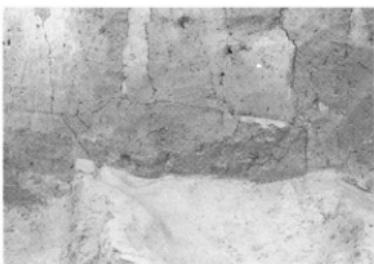
SK134土坑平面



SK135土坑平面



SK135土坑平面



SK135土坑断面

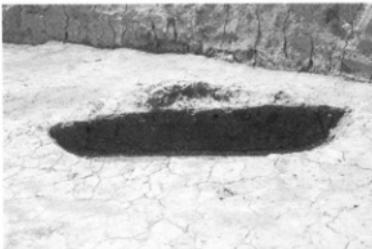


H区土坑群

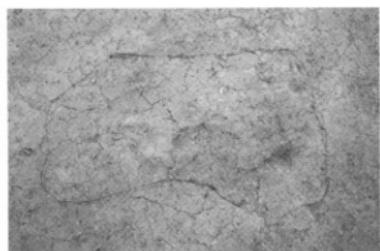
写真図版57 SK134・135土坑、土坑群



SN01焼土検出



SN01焼土断面



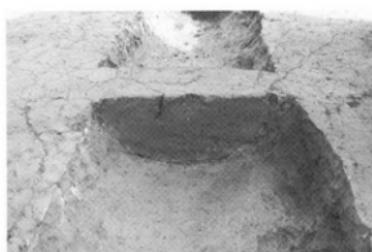
SN02焼土検出



SN01焼土断面



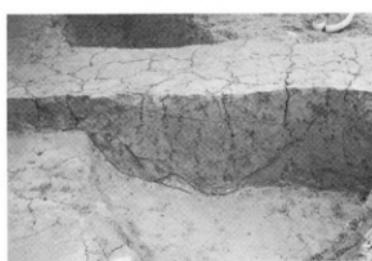
SD20溝跡平面



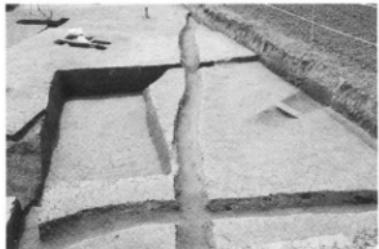
SD20溝跡断面



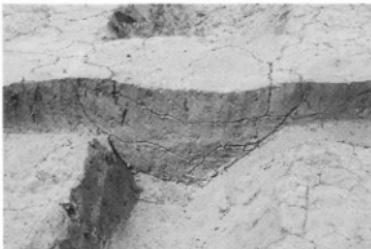
SD21溝跡平面



SD21溝跡断面



SD22溝跡平面



SD22溝跡断面



SD23溝跡平面



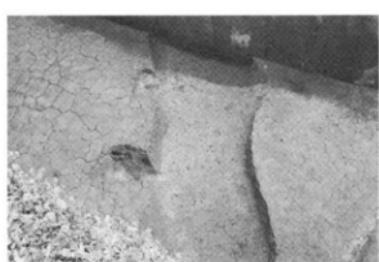
SD23溝跡断面



SD24溝跡平面



SD24溝跡断面



SD25溝跡平面



SD25溝跡断面

写真図版59 SD22～25溝跡



SD26・27溝跡平面



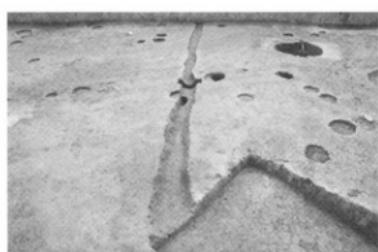
SD28・29溝跡平面



SD30溝跡平面



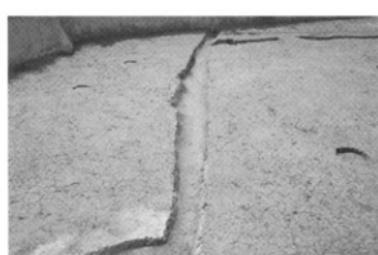
SD30溝跡断面



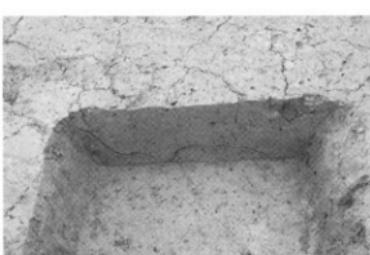
SD31溝跡平面



SD31溝跡断面



SD32溝跡平面



SD32溝跡断面

写真図版60 SD26～32溝跡



F柱穴状土坑群



H柱穴状土坑群1

写真図版61 F柱穴状土坑群、H柱穴状土坑群1

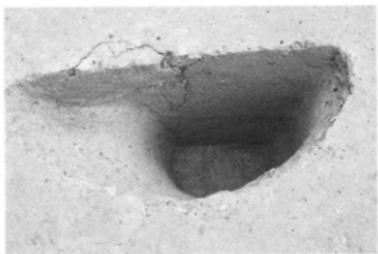


H柱穴状土坑群2（北側）



H柱穴状土坑群2（中央部）

写真図版62 H柱穴状土坑群2



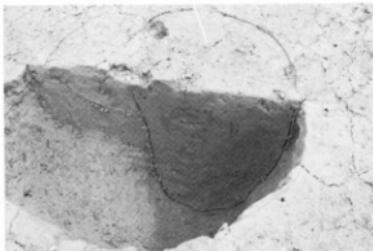
HPP10断面



HPP231断面



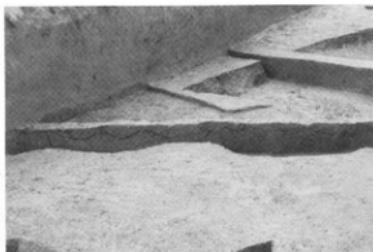
HPP62断面



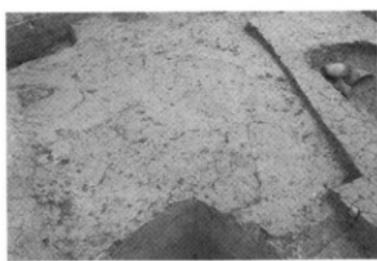
HPP326断面



SX05炭化物検出



SX05炭化物断面

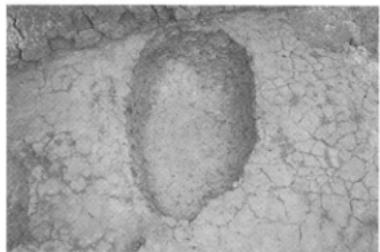


SX06炭化物検出

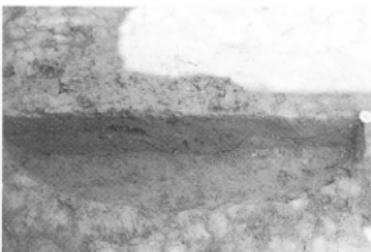


SX06炭化物断面

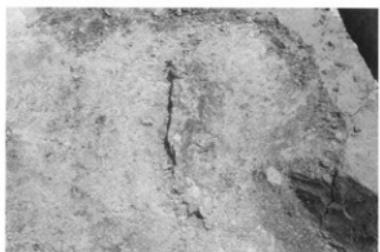
写真図版63 柱穴状土坑、SX05・06炭化物



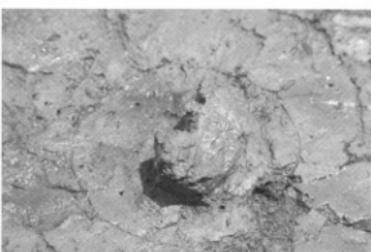
SX07完掘



SX07断面



SK106炭化材検出状況



IV-A7-dグリッド羽口出土状況



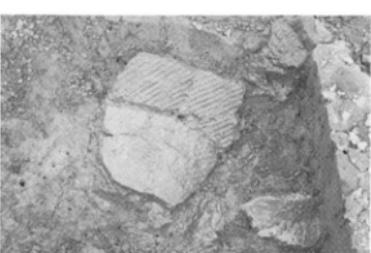
IV-A6-aグリッド土器出土状況



SK124埋土上位土器出土状況



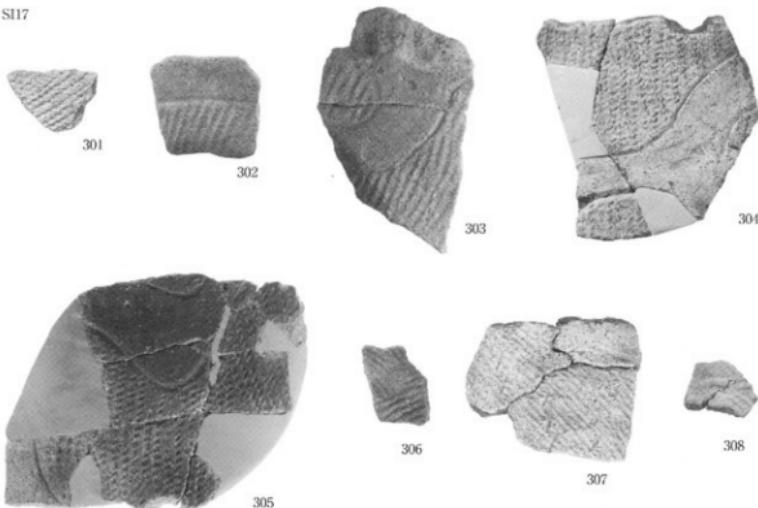
SK125埋土上位土器出土状況



SK133土器出土状況

写真図版64 SX07炭化物、遺物出土状況

SI17



SKI05



SKI06



SK80



SK94



SK102



SK108



SK110



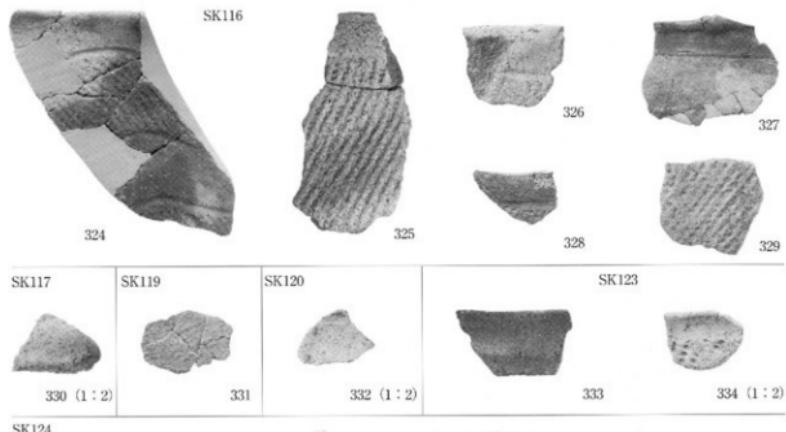
SK114



318 (1:2)

他1:3

写真図版65 出土遺物 (1)



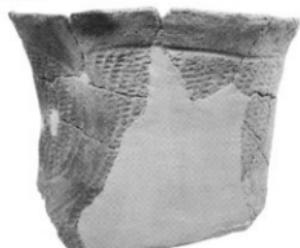
SK124



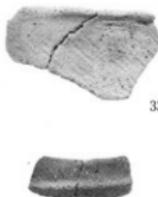
他1 : 3

写真図版66 出土遺物 (2)

SKI24



338



339

340

341



342



343



344



345

SKI28

SKI25



346



349



347

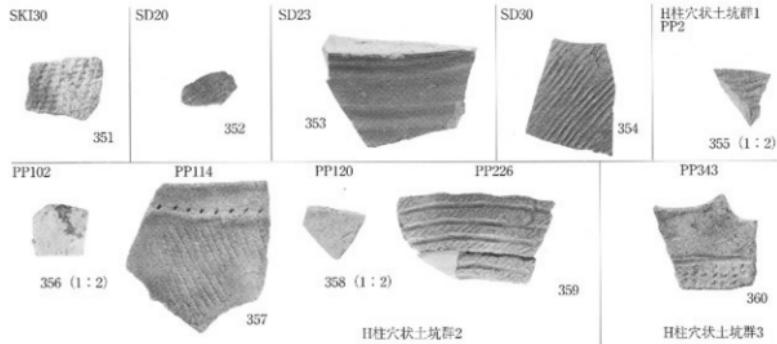


348

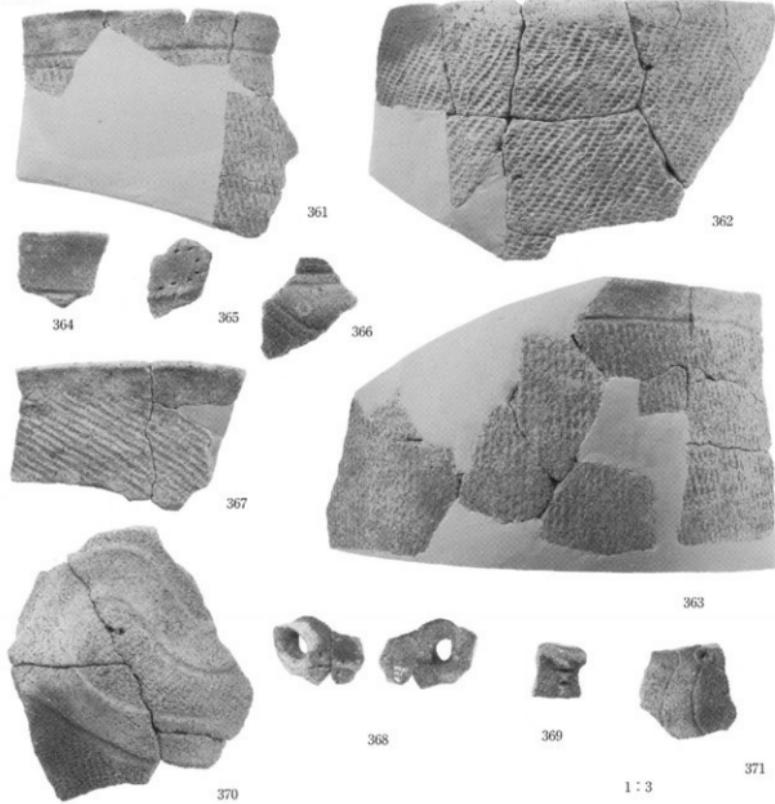


350

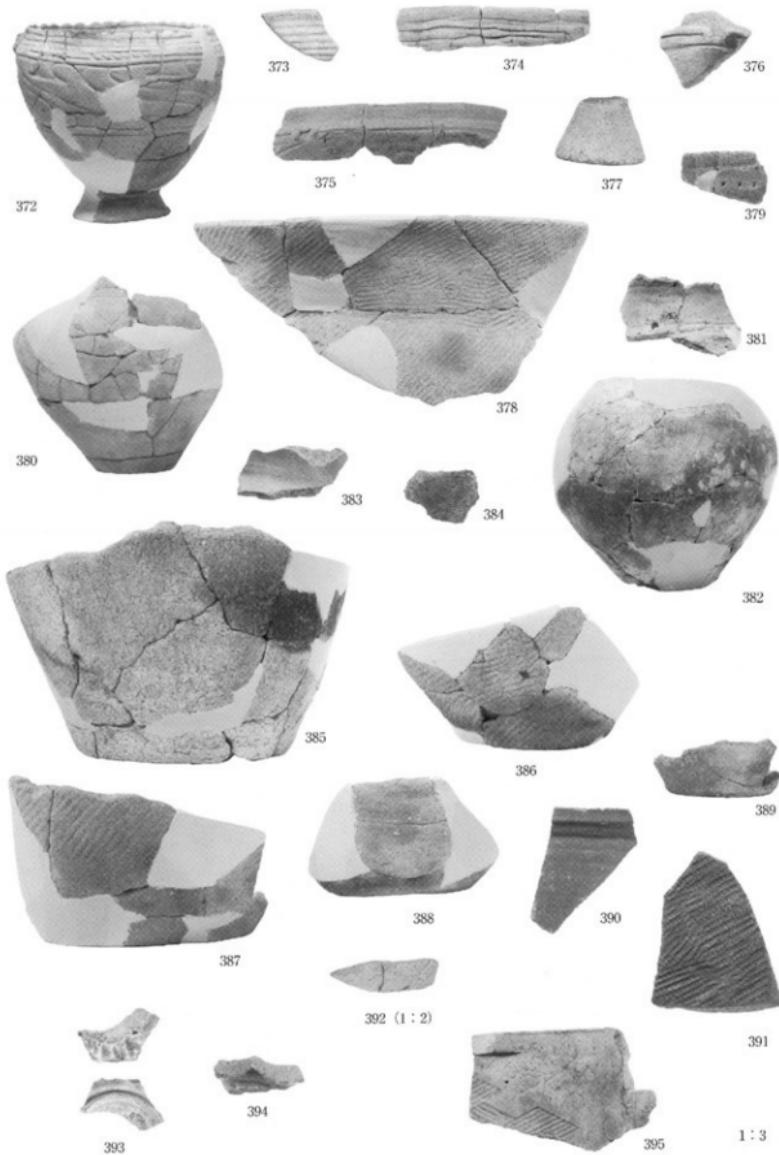
1 : 3



遺構外

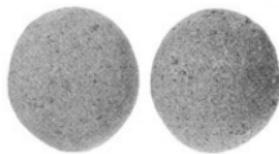


写真図版68 出土遺物 (4)



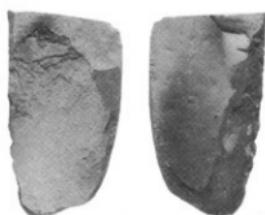
写真図版69 出土遺物 (5)

SK95



396

SK104



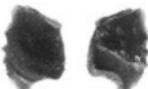
397

SK110



399 (1 : 2)

SK132



400 (1 : 2)



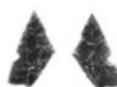
398

SK134



401

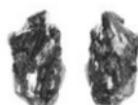
造精外



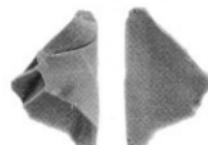
402 (1 : 2)



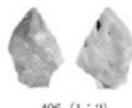
403 (1 : 2)



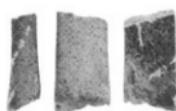
404 (1 : 2)



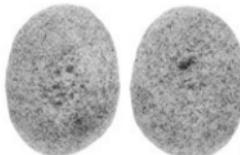
405 (1 : 2)



406 (1 : 2)



407



408

他1 : 3

写真図版70 出土遺物 (6)



409



410



411



412



413



414

SKI6



415



416



417

SKI7



418

SK95



419



420

SK101



421



422



423

SK106



424



425

SK110

SK124

SD30



426

1 : 3

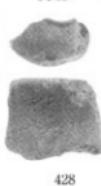
写真図版71 出土遺物 (7)

II柱穴状土坑群2

PP14



H柱穴状土坑群1



PP39

PP60

PP60

PP69

PP237

429

430

431

道槽外



433 434 435 436 437



439



432

道槽内出土铁器

SK106



440

SK96



441

SK97



442

SK105



443

SK108



444

SK110



445

H柱穴状土坑群PP150



446

SK89出土人骨片



1:3

447

写真図版72 出土遺物 (8)

VI 平成20・21年度調査の総括

2年間の調査で成果があった事項を、時代ごとに若干の考察を加えてまとめとしたい。一部に平成18・19年度に調査し、報告済みの遺構も取り上げて参考としている。

1 中世

(1) 墓塚と火葬跡

① 調査区A区（平成20年度検出）の様相

平成20年度調査に、中世末期に属する墓塚を5基検出し、当時この地点が小規模ながら墓域であったことを確認した。県内において中世墓が検出された遺跡は第1図・第11表の通りであるが、墓塚が墓域としてまとめて検出された事例は少なく、平成11・12年度の台太郎遺跡（盛岡市 第1図・第1表No3）第23次調査、12・13年度の同第26次調査、平成13年度の本町II遺跡（平泉町 No.16）第2次調査が挙げられる程度である。台太郎遺跡第23次調査においては14・15世紀を中心とする墓塚366基が検出され、それらの規模・形状を以下のように分類し考察を行っている。（2003 杉沢ほか）

大分類 A類…小型のもの（規模が1m²未溝の墓塚）

B類…中型のもの（規模が1～2.5m²未溝の墓塚）

C類…大型のもの（規模が2.5m²以上の墓塚）

小分類 1類…方形（円形や不整形を一部含む。長軸／短軸が1.0～1.2未溝）

2類…長方形（楕円形や不整形を一部含む。長軸／短軸が1.2～2.2）

3類…短軸に対し長軸の割合の大きい長方形（長軸／短軸2.2～）

第17表 岩手県内の中世墓（第1図 岩手県全図1～20に対応）

No	遺跡名	遺跡所在地	内 容
1	水井	八幡平町（旧安代町）	14基。ただし追加含む。15～16世紀と思われる5基は上部で4基がB2
2	人頭塚	奥州市	中世末～近世初期。形状不明。墓数89基とTB界隈を除く2基
3	台太郎	盛岡市	第23次調査：15世紀後半～15世紀。14・15世紀中葉366基、半数はB類、A2が次C。土管がド。皮托裏紋。
4	片吉城	紫波町	第26次調査：37基とも同傾向。
5	船原跡	新田町	JR羽越線土手墓塚群。火葬墓1基。半数以上でA2が次C。火葬場1ヶ所も。
6	大瀬川船塁	花巻市石鳥谷町	周囲が掘る3基のマウンド上に複数の墓塚。中世の古墳群。
7	小瀬川船塁	花巻市	墳墓
8	五橋廻	北上市	法和賀式の火葬墓。16世紀～江戸初期の長方形の土壇に何れも加帶する形式
9	葛西塚	北上市	13世紀。葛西系の墳墓と伝える。
10	南船	北上市	中世末～近世初期中心。火葬5基、高塚1基B2土管。
11	船尾	北上市	13世紀中略地盤火葬墓。基中井と記述。本報告では江戸時代。
12	金附	北上市	中世末～施設2基A2・B1
13	下門御ひごり塚	北上市	13世紀。河内船塁の基と認定。施設史跡。
14	柏山船塁	金ヶ崎町	中世末～近世初期8基。2基A2、6基B2、いざれも六段築。1基は右開き。
15	朴垂Ⅱ	奥州市水沢区	1基B2
16	木戸	平泉町	12世紀後半～13世紀低基、B・C1がA2・C2に移行。火葬が主。文配層板屏。15世紀1基A1火葬。
17	波戸塚	西浦大堂町	北向に石輪堂と墓地
18	伊勢船塁	一関市大水町	[古墳]「マムシ塚」などの墓地、方形墓塚1基
19	八木沢跡	吉吉市	中世末1基。B2土管。錢貨3枚と佛像
20	御村	宮古市	中世末から近世初期（中世可能性大）1基A2。波・柳皮に挟まれた副葬鏡

・2・18は岩手県の復興公施に表中の記載があるが、幾处青物を用いた計画の構造は今までさりなかった。

・3・7は奈良時代でも北上市内の馬鹿崎上の台地跡・宝積古墳界帯・兔ヶ森遺跡にもある（小田峰：2005）そなうだが、馬鹿崎上の台のものは近世に属するため削除した。

これによれば、分類がなされた273基のうち、B 2 類が44%と突出して多く、19%のA 2 類、16%のA 1 類がこれに次ぐ。この結果を受け、「B 2 類と次に数の多いA 2 類とが本遺跡で検出された中世墓の最も代表的な形状といえ、規格性も強い。他の事例を見てもこうした形状の墓壙が一般的であるといえる。」、C 類については「本遺跡では例外的な存在」と考察している。第26次調査37基についても同様であるため、詳細な記述は割愛する。

本町II 遺跡では46基が検出されており、台太郎遺跡に習った分類・考察がなされている。(2003 小笠原) 本町II 遺跡の墓壙は12世紀後半～13世紀に属するものはB類とC 1 類、13世紀のものはA 2 類とC 2 類が多い傾向があり、1 基のみ検出された六道銭を伴う15世紀の火葬墓はA 1 類に分類されている。この分類を受け、12世紀末から13世紀にかけて墓壙の規模が大型化したのち、14～15世紀に何らかの変化・断絶をし、その後、火葬・六道銭副葬・墓壙の卑小化へと推移するのではないかとの考察がなされている。また、「台太郎遺跡の火葬墓が全てA 類に分類されていることや、その中心時期が14～15世紀であるということも、埋葬形態が15世紀ごろから火葬の普及に伴って卑小化していることを示しているように思われる。」とも述べている。

これらの結果から比較検討すると、当遺跡の5基のうち全景が確認できた4基はいずれもB 2 類の土葬墓であり、残る1基も同様のようである。台太郎遺跡の考察によれば、中世の一般的な墓壙となるであろうか。反面、両道跡にみられる火葬の習慣は見られない。また、墓壙の時期決定の根拠となっている副葬された銭貨も7枚から8枚と六道銭副葬の普及とは異なる様相である。この違いの理由には地域差、時期差、埋葬された人物の違いなどが考えられるが、現時点では特定できない。

規模・形状以外の埋葬の特色に目を向けると、台太郎遺跡においては、副葬品のあった墓壙は銭貨が出土した3例のみである。墓壙の長軸は概ね南一北か東一西を向く。一定の範囲に集中して墓壙が配置され、その内で激しく重複して埋葬されていることから、周辺集落の共同墓地と考えられている。本町II 遺跡においては、当時の庶民は手に入れることができなかつた中国産・国産の陶磁器片やかわらけ・刀子を副葬し、周溝による結界がめぐる墓域の中央には形状の異なる墓壙があり、その周間に他の墓壙が整然と配置されている。中央の墓壙の周間にちは平塔婆痕かと思われる小土坑が廻り、更に方形の建物がこれを覆っていた形跡が確認されている。中央の墓壙は東側から中尊寺を押す構造となっており、墓域は中尊寺と東福山(経塚山)を結ぶライン上に位置する。他の墓壙からは側臥屈葬で西面する人骨も出土し、当時の淨土信仰がうかがわれる。複数の遺体を埋葬した墓壙が確認されている点も特徴的である。これらの埋葬の様相から、被葬者は、台太郎遺跡は庶民階層、本町II 遺跡は高位の支配階層と考えられている。

これに照らして見てみると、副葬品が銭貨のみであることから被葬者は庶民階層であると推測される。ただし、検出した墓壙全てに銭貨が供えられている点、その銭貨が袋状のものに包まれている点などは台太郎遺跡との差異を感じさせる。墓壙の配置は、2箇所に分かれているとも見受けられるが明確ではない。長軸方向は4基すべてが概ね南一北方向であるが、遺体が男性?の墓壙はやや東に傾き、女性的である?墓壙は西に傾く特色がある。これらは偶然であろうか。遺体は西を向かせているようであり、屈葬した形跡が認められるものもある。重複ではなく1基1体の埋葬である。

他の特徴として、墓壙の片側があたかも後に掘りこんだような広がりを呈している点、副葬された銭貨が袋状のものに包まれているにもかかわらず、本来置かれたであろう遺体の付近と片側の広がり付近の2か所に分かれて出土する点が気になっている。B型の墓壙と後に掘られたA型の墓壙が重複しているのに、それを把握できなかった可能性もある。六道銭副葬が普及しているのに、2基分の副葬銭が合わせて7・8枚出土していることや、足元にある古銭がやや新しいこと、そのことが複数の

墓壙で偶然一致していることから言える疑問である。一度六道錢を副葬して埋葬がなされ、その後、再度錢貨を供えて供養したのかなどとも考えてみるが想像の域を出ない。（吉田）

② 調査区F・H区（平成21年度調査）の様相 ～鎌倉時代期～（第48図 遺構配置図②参照）

平成21年度調査区で、5基の土葬墓が検出された区域から北東側に200mほど離れた、調査区F区の東側とH区の西側で、2基の焼成土坑と19基の墓壙を検出している。壙が焼成を受け、焚口と思われる張り出しを持ち、炭化物と共に微細な骨が出土している2基の焼成土坑と、埋土が人為的堆積状で、人骨などを出土させずに、方形状の平面形を持つことから墓壙とした遺構は、やや距離において立地している。

最初に2基の焼成土坑の性格を探る。（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団の樋崎修一郎氏は、「墓と葬送の中世」（狭川真一編：高志書院2007）の1項、「火葬人骨と考古学」の中で、群馬県内検出の火葬遺構についてまとめている。それによると、「火葬遺構とおもわれる土坑の性格を、火葬墓と火葬跡そして土坑墓の3つに分け、形態をタイプI〔長方形〕、タイプII〔長方形+張り出し部〕、タイプIII〔方形〕、タイプIV〔方形+張り出し部〕、タイプV〔円形〕の5つに分けて分類」している。土坑の性格の分類では、「『遺構に火葬人骨、炭化物、焼土が検出されたものを火葬跡』としている。形態では、「タイプII〔長方形+張出部〕は170基の土坑の32.3%に当たる55基が該当」し、その大きさの平均は、「長軸が119cm、短軸68cm、深さ26cm、張出部の長さ約40cm、幅30cm、長軸の方向は92.7%が南北方向を示し、張出部の方向は、東が41.8%、西が50.9%」としている。

当遺跡の焼成土坑であるSK88の長軸は135cm、短軸は77~88cm、張出は東側で、長さが45cm、幅が20~30cmとなる。SK89は長軸が96cm、短軸が62cm、張出が西で、長さが22cm、幅が18cmである。2基の平均は、長軸は115cm、短軸が75cm、張出の位置は東と西で50:50、張出の長さが33.5cm、幅が24cmとなる。長軸の方向は、ほぼ南北方向をしめす。これらのことから2基の焼成土坑は、樋崎の言う形態タイプIIの火葬跡に類似し、群馬県内の火葬遺構ではボビュラーなものに分類される。

次に、火葬跡から20m離れてある墓壙密集区についてである。纏まって検出された墓壙は、上記の分類によると土坑墓ということになるが、ここでは墓壙として取り扱う。19基検出された墓壙は、平面形や大きさはそれぞれ異なり、円形基調や小型のものもあるが、①の杉沢による分類の、B2類のものが多い、また、重複して検出されることも盛岡市台太郎遺跡と同様である。

これらの遺構の時期についてである。遺物から見てみると、2基の火葬跡からは出土遺物はなかったが、墓壙の1基（SK95）から中国産の白磁である梅瓶（13~14世紀）の破片が、墓壙から北東に離れたSK106の埋土上位からは、中国産の青磁の碗もしくは皿の破片（14世紀？）が出土している。そして違う墓壙1基（SK101）から熙寧元寶（初鉄は1068年）が1点出土した。放射性炭素年代測定（AMS測定）では、火葬跡としたSK89の埋土出土の炭化物が 700 ± 30 yr BP、墓壙であるSK104埋土中出土の炭化物が、 740 ± 30 yr BPという結果となった。

まとめる前に疑問点をあげておく。まずは2基の火葬跡と思われる遺構周辺である。1つは遺構を囲むように伸びている溝跡の存在である。火葬場？を長い間利用するために、造営されたものなのか、あるいは、方形周溝的（塹的）なものなのか判別できない。2つ目は、なぜSK88に比較してSK89が小さくて骨が多く残るのか、張出が逆なのか、そして隣接するのか。最後に2つの遺構に挟まれて検出された炭化物は何を意味するのか、誰が多い。墓壙密集区の疑問点は、遺構数の割に、遺物（副葬品）が極端に少ないとある。

多くの疑問は残るが、一連の遺構時期は、鎌倉時代（13世紀頃）であると考えられる。火葬が行われ、墓壙密集区中のいくつか（上面で検出され、陶磁器の出土したSK94など）は、火葬骨をおさめ

た土坑墓であり、墓壙密集区のいくつか（切られた墓壙で、古銭出土の S K 101や S K 104など）は、S K 88・89の火葬跡が出来る以前から共同墓地として存在していた可能性を指摘できる。もしくは同様のやや古い火葬跡が近隣にあることも念頭に置く必要があるだろう。樋崎氏によれば、火葬は、「11世紀から12世紀には衰退し、13世紀になるとまた復活する」らしい。このことは、13世紀の火葬の復活に反応でき、鎌倉時代に貴重品であり愛好された、中国産の陶磁器を持つことが出来る支配者階級の人物の存在を匂わせる。

（2）堀跡・溝跡と柱穴状土坑

前報告書（第539集）では5条の堀跡と13条の溝跡が報告され、それらは平成20年度調査で検出された堀跡や溝跡と関連すると思われる。また、中世期と想定される柱穴状土坑も多く検出されている。そこで報告済みのA・B区1号堀跡と柱穴状土坑、E区5号堀跡を参考に、新たに検出された6号堀跡と柱穴状土坑、H柱穴状土坑群1・2の特色から中世期の集落の様相を探りたい。

まずは堀跡と溝跡である。新しく検出された6号堀跡は、曲線的に延び、末端が浅くなる特色がある。これらの特色は、E区5号堀跡に類似しており、空白部が大きいが同一遺構である可能性がある。報告書（539集）や本文では堀跡としているが、溝跡とした方が妥当と思われ、溝跡の範囲は、調査区A区から南東側に約100m（検出されたものだけ）小さく蛇行しながら延長し、現在の照岡小学校付近に弧を描きながら続くと予測される。6号堀の北側は柱穴列を伴い柵列状である。この特色は、平成18年度調査の1号堀跡やB区3号堀跡同様の防御的な施設を疑う。これらの遺構の出土遺物は、5号堀跡から古代の須恵器などが、大型の3号堀跡から16世紀代の陶磁器片が出土している。

次に柱穴状土坑が多く検出された区域を見る。中世と想定される柱穴状土坑が多く検出される区域は、平成18年度調査したB区の3号堀跡の南側、そして本報告の6号堀跡の西側である。遺物は3号堀南側のB柱穴状土坑群1から明鏡が、6号堀跡の西側、A柱穴状土坑群2から北宋鏡が出土している。中世と想定される柱穴状土坑が多く検出される区域のもう1つは、平成21年調査したH区である。H柱穴状土坑群1・2とした柱穴の総数は258個で、A・B柱穴状土坑群と比較して、規模（開口部径、深さ）が大きい特色を持つ。周囲には、平成19・20年度に検出した大型の溝跡（堀跡）は見られないが、区画溝状の小規模な溝が長く延長する。調査区北側のH柱穴状土坑群1には、口径40cm前後の大型の柱穴が目立つ。それらの底面からは、直径20cmほどの柱痕が検出されている。調査区が狭く、構成がつかめなかつたが、大型の掘立て柱建物跡の存在を疑う。H柱穴状土坑群2でも同様な規模を持つ柱穴状土坑が点在する。SK I 06・07豎穴住居状遺構が検出された区域の、北側から北東側にかけては、直線的に並ぶ傾向のあるものが多く、大型の建物跡がある可能性を示す。遺物は埋土から土師器の坏？や鉄製品・羽口片など、検出面の遺構外からは、須恵器やかわらけ、13~14世紀の中国産や16世紀代の瀬戸美濃産の陶磁器が出土している。H柱穴状土坑群2のP P 147 埋土下位出土炭化物の年代測定値は、 670 ± 30 yr BPという結果となった。すべての遺構が同時期とは限らないが、これらの柱穴状土坑は、鎌倉時代（13~14世紀）に属すると考えられる。

以上の結果から中世期の集落を探ると、中世期の前半（鎌倉時代）には、H区付近に火葬跡と墓域を持つ、支配者階級の屋敷跡を中心とした集落があった可能性が考えられる。そしてA・B区付近は前報告書（第539集）で述べている通り、中世末期の居住地であり堀跡などを伴う防御的性格を持つものであった可能性がある。積極的にいえば、堀跡近くに墓域（土葬墓）を持ち、その範囲は5・6号堀跡（溝跡）の延長線内の西側、俵山の対面で照岡小学校校舎の北側になるかもしれない。堀跡や柵跡は、南部藩と伊達藩の境界紛争に関連するものとも想像するが、確証はない。

(3) 鎌倉時代の近隣の史跡から

検出された鎌倉時代に当たる遺構の内、炭化物年代測定した数値は、古いものではSK104土坑の 1210 ± 30 年、新しいものでは、PP147の 1280 ± 30 年になる。この12世紀末～14世紀初頭に当たる時期で、近隣には2つの考古資料がある。まずは、現在、及川譲氏の敷地に建つ板碑（資料1）である。前報告書（第539集）でも触れられているが、遺跡から300m西側の段丘上に丘（塚？）があり、その上に造立されてあったもの（詳細不明）を、現在の位置（第88図▲）に移設されたとするこの板碑は、正和三年（1314年）の銘が打たれており、時宗板碑の一種とされている。もう一つは、北東に約1.5km離れた丘陵部にあるひじり塚（第4図48・資料2）である。貞応二年（1223年）に没した河野通信の墓で、弘安三年（1280年）に孫に当たる一遍上人が法要したとされる史跡である。

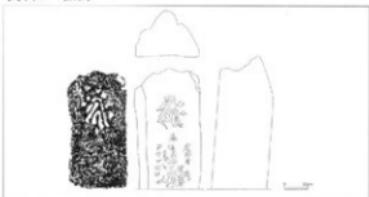
これら2つの資料と当遺跡検出の遺構は、関連付けることは不可能であるが、河野通信という御家人が、1221年の承久の乱に敗れて、遺跡近くの極楽寺に流され、死去したのち塚が作られ、一遍が法要したという文献的史実と、遺跡内に1314年銘のある時宗板碑が存在するという物的事実は、検出遺構の年代（ 1210 ± 30 ～ 1280 ± 30 年）を考えれば無視できないものがある。

ここで（1）②で示した火葬遺跡をもう一度考えると、浄土真宗の盛んな区域に発達したという考え方（狭川真一、2007）もある。浄土真宗の布教については、「親鸞聖人正統伝」に見える。それによると寛喜三年（1231年）ころ親鸞の高弟是信が和賀郡笠間の地で、阿弥陀信仰を広めたとある。その化巻市笠間の延妙寺にある「阿弥陀如来像」の胎内銘には、運慶の六男とされる康運と子息の幸賢が、遺跡近くにある極楽寺で仏像を造ったとある。寛永元年（1243年）のことである。極楽寺の一坊として栄えた如意輪寺には、その時の作と言われる釈迦如来像があり、県の指定文化財となっている。浄土真宗は、遺跡の付近でも十分に浸透していくだろうことが予測され、それは時宗の普及より、やや早い時期であったであろう。火葬遺跡が浄土真宗の影響下にあるとしてもおかしくない。

もうひとつ無視できないのが、修験者の動きである。下門岡の極楽寺は、平安時代からの山岳寺院であり、10～12世紀に最盛期を誇った大寺院とされている。周囲には多くの神社（熊野、白山など）があり、12～13世紀頃の仏像が残存している。また、国見山周辺には、修験者による塚（賽の神塚）や板碑が残されている。

（1）と（2）で、支配者階級の屋敷があったであろうことを示した。鎌倉幕府の支配下にあった時期であるから、その人物は中央から派遣された地頭クラスの実力者かもしれない。板碑の存在や一遍法要の事実は、時宗の影響下にあった可能性を物語る。しかし、検出遺構の年代は、一遍が法要に訪れたといわれる以前から浸透していると予測される、浄土真宗や熊野修験などの影響も考えなければならないことを指摘している。当遺跡で検出された火葬遺構の存在は、多くの歴史的背景を考慮する必要がある。

資料1 板碑



資料2 ひじり塚



2 縄文時代晚期末葉から弥生時代初頭

(1) 壁穴住居跡

平成20年度の調査の成果としては、縄文時代晚期末葉から弥生時代初頭期の住居跡が重複した形で検出されたことが挙げられる。これらは出土土器の特徴から新旧を判断した。どちらも壁が立たずに、また壁溝なども検出できなかったことから規模は不明であるが、平面形は2つとも円形と推定される。大きな違いは炉の形態で、古い土器を出土させる住居跡（S I 15）は円形の石囲炉、もう一方の住居跡（S I 14）は不整な梢円形の地床炉となる。ただし、重複していると判断したものであるため、上記の結果となつたが、単独の遺構で、どちらかが屋外炉である可能性もあり、とすれば新しい土器を出土させる、床面中央部に地床炉を持った住居跡（S I 14）が、石囲炉を屋外（南側）に設置していたとも考えられる。北側に隣接する金附遺跡では、石囲炉や焼土遺構を複数検出している。その中で地床炉の可能性のある焼土遺構を弥生時代初頭期～前期としており、弥生時代が一般に石囲炉が主流としている中で、弥生時代初頭期に至っては、地床炉が特色的なものかもしれない。

その金附遺跡では、石囲炉や焼土を検出しているにもかかわらず、可能性は示しているものの、当期の住居跡とはしていない。報告書の中で、金子は「金附遺跡の立地と石器組成の特殊性を考えれば、相田遺跡が本来の集落で、金附遺跡は石器製作を中心とする作業場であった可能性が高い。」と言っている。相田遺跡（第4図、46）は金附遺跡と隣接することから同意できる。しかし境遺跡は、相田遺跡から離れた位置にあり、小規模な河岸段丘の上に立地する。このことから金附遺跡と同時期ではあるが、やや性格の違う小規模な集落の可能性が考えられる。

(2) 石器製作址として（平成20年度第35図参照）

平成20年度調査A区の東側は、S I 14壁穴住居跡の石囲炉跡とS N Q 02炉跡を結んで弧を描くように集石遺構が並んでいることや、集石遺構の上位に台石や砾石と思われる礫石器があること、4号集石遺構が、磨石を集めたデボ状の遺構であること、検出グリッドで多くの破片や石核、不定形の石器などが出土していることなど様々な状況から、石器を製作していた可能性を指摘できる。その時期は、S I 15壁穴住居跡に関連付け、弥生時代初頭期であると考えられる。どのような性格をもつものであろうか。以下若干の推測を述べる。

調査区からは15点の磨製石斧が出土しており、その出土状況に特色的なものが3点ある。1点は1号集石遺構で縦に横たわっていたもの、2点目は1号集石遺構近隣の土坑から破損した状況で出土したもの、そして3点目は4号集石土坑の周囲から研磨前段階の調整を施したものである。これら磨製石斧の出土状況には意図的な感じを持つ。磨製石斧の破損品も多いことなどから、石器製作の中心は磨製石斧であった可能性が高い。4号集石土坑出土石器は、猿整形と円柱形の磨石と不定形石器で構成され、磨製石斧を製作する際の特別な道具であったかもしれない。また、1・3・5号集石遺構は作業台的な役割を担ったか、周囲の石囲炉は石器製作の際に暖を取るためや石材を加工するためのものかなどが推測として挙げられる。

3 縄文時代中期後葉以前

第539集の報告では、基本層Ⅶ層は、縄文時代後期の土器が出土する層としているが、今回の発掘調査により、Ⅶ層の下に縄文時代中期後葉の土器を包含する層が確認されている。Ⅶ層を無遺物の粘土層と固定して、Ⅶ層下（Ⅶb層）とするが、存在は調査区のF・II区（遺跡の北東側）に限られ

る。特にII区のおいては土器の出土量も多く、中期末葉の住居跡も確認している。当期の集落跡としては、遺跡の東側に樺山遺跡があり、その遺跡の範囲内（西端）に当たるのかもしれない。金附遺跡でも中期末葉の住居跡が確認されているが、中期後葉から末葉期にいては、樺山遺跡の集落は、非常に広範囲に広がっていたのではないかと推測される。

VII 境遺跡調査終了に当たって

1 境遺跡全体像（第88図）

境遺跡の発掘調査は4年間に及んだ。調査の範囲は遺跡の一部でしかないが、遺構数は多く、時期も多岐に亘っている。遺構や遺物はそれぞれの遺構配置図等に示しているが、最後に4年間の調査によって判明したことを、現代の地図上で模式化して示す。第88図は平成21年11月現在のもので、道路工事前の状況である。市道駅●のある箇所は、調査書発刊時は、すべて新しい道路下になっている。

引用：ゼンリン住宅地図・岩手県北上市2008.07 (株)ゼンリン

A 縄文時代中期中葉～晚期中葉の遺構検出・土器出土区域

住居状や土坑などが検出され、生活の痕跡がある。現在の県道下（T・S氏宅前）～東側市道下に広がる様子が見え、特に押切公民館付近で土器が集中して出土しており、中期末葉の住居跡も検出された。国の史跡となっている樺山遺跡とほぼ同時期であり、関連が考えられる。また、周囲から縄文時代晚期中葉の完形の土器も出土している。深さは現地表面より約2m下となる。

B 縄文時代晩期末から弥生時代前期の住居跡および石器製作址

円形基調の堅穴住居跡が確認された。小規模ではあるが集落があった可能性が高い。また、石器を製作していた痕跡がある。これらの集落は、北側に離れた金附遺跡となんらかの関連を持つ思われ、石器製作址は非常に大きな広がりがあることも考えられる。西側は小規模な川が流れていたであろう。南側県道と市道交差点付近にある。

C 弥生時代中～後期

明確な住居跡は確認できなかったが、住居状遺構や土坑が検出された。特記事項として、後期の遺物が纏まって出土していることが挙げられる。また旧河道に遺物が捨てられた状況が見られた。これらの遺物は、遺跡から南側に約10km離れた北上川西岸にある常盤遺跡出土の土器と同時期であり、流域の弥生時代後期の生活を知る上で、貴重な資料となった。遺構や遺物はT・S氏宅前の県道下やO・K宅前で検出されており、同氏宅から東側にかけて、当時期の住居跡がある可能性を指摘しておく。

D 古墳時代土師器出土地点

同じくT・S氏宅前の現県道バイパス下付近で出土した。5～6世紀のものである。略完形品で流れ込みと考えにくい。近辺に同時期の遺構が検出される可能性がある。

E 平安時代9世紀末から10世紀の住居跡

T・S氏宅前の現県道バイパス法面下付近で2棟検出された。墨書き土器が出土し、当時期の指導者的人物の住居跡であった可能性が高い。胆沢城が衰退した時期の住居跡であり、大規模な集落とは考えにくい。この時期でも西側は、やや窪んでおり、旧河道は埋まり切っていないと考えられ、よって、その小集落は遺跡の東側にあったと予測される。旧県道と新バイパスの間（三角形の区域）が該当するかもしれない。

F Eよりやや新しい古代～中世の集落

火山灰らしき灰褐色のテフラを埋土とする住居跡が検出されている。市道と現県道バイパス交差点付近にあり、広がりは旧河道西側に添うと予測する。東側には、やや新しい建物跡も検出されている。

G 古代から中世と想定される配石遺構と旧河道

現県道バイパスと北側市道交差点下に4基の配石遺構があり、間隔を同じくして存在していた。遺構の性格は不明であるが、古代から中世にかけての遺構で、やや中世に近い時期と考えられる。当時の旧河道は、交差点の北側に広がる田から照岡小学校西側に向かって幅10m前後で走っていたと思われるが、この時期に大きな洪水が起き、沢は埋まったと考えられる。

H 中世（鎌倉時代）柱穴群

中世期と想定される大型の柱穴が多く検出された区域である。遺構外から中国の陶磁器が出土していることから位の高い人物の座敷跡があったと考えられる。また、羽口や鉄製品・鉄滓が出土していることから、鍛冶屋のようなものがあった可能性も指摘できる。岩渕商店の南側からO・K氏宅の北側、新しい市道下に眠る。

I 中世（鎌倉時代）墓壙群

方形の土坑が、重なり合って検出された区域である。埋土から、中国の白磁片や中国銭が出土しており、その形状から中世の土坑墓の可能性が高く、墓域であったと想定される。また、遺構は重なり合っており、長い間、共同墓地として利用されていたとも考えられる。余談であるが、この周辺の字名を地蔵堂と言い、かつて祠のようなものがあったのかもしれない。

J 中世（鎌倉時代）の焼成土坑（火葬跡？）と直交する大型溝跡

2基の焼成土坑は、炭化物と共に人骨が出土しており、火葬跡と考えられる。（火葬場ではない？）

周囲には炭化物がまとまって検出されている。それらは2条の大きな溝に開まれている様相が見えた。I（墓壙群）に関わる可能性がある。K・T氏宅前で検出されている。

K 中世堀跡・溝跡

直線的に延びるものは、非常に大型で深さや幅がある。T・S氏宅の北側にあり、O・K氏宅下付近に走るかもしれない。湾曲するものはO・J氏宅付近や照岡小学校付近に延びていたと推定する。遺物には恵まれないが、直線的に延びる堀跡から16世紀代の陶磁器片が出土しており、16世紀末の遺構の可能性が高く、戦国時代の防衛施設と考えている。

L 中世末期の土葬墓

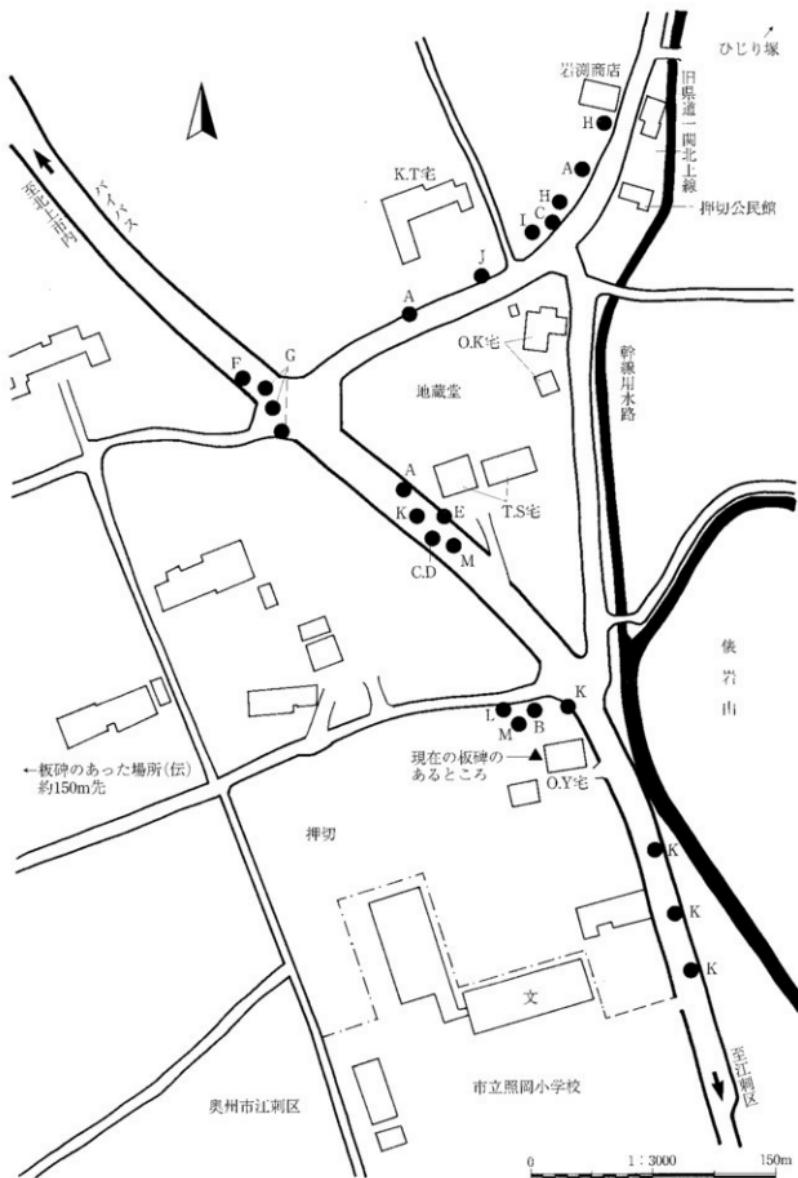
永楽通寶などの古銭とともに、5体の人骨が出土した。中世末期の土葬墓である。これらに埋葬された遺体は、1つの墓壙に1体ずつ西向きに埋葬されていた。遺体は成年～壮年男子2名?成人女子1名、熟年女子1名、不明1人である。集落の墓域なのか、「イエ」の墓なのかは定かにはできない。O・Y氏宅北側の市道下に確認された。

M 中世末期の柱穴状土坑群検出区域

中世末期の柱穴状土坑が数多く検出された区域である。KやLの遺構に関連する可能性がある。時期は戦国時代と考えられる。T・S氏宅やO・Y氏宅付近に小集落があったであろう。

2 最後に

1でまとめた通り、境遺跡は、縄文時代中期後葉～縄文時代後期前葉、縄文時代晩期中葉から弥生時代全般、平安時代、鎌倉時代～中世末期、近世にわたる大規模な複合遺跡になることが判明した。北上川流域は、北上市から奥州市水沢区にかけての西岸は、比較的発掘調査例は多いが、東岸の北上



第88図 墓遺跡全体像略図

市稻瀬町から奥州市江刺区の江刺平野中心部については希薄である。しかし、古くは奥州市江刺区の沼の上遺跡や橋本遺跡、最近では十文字遺跡や北上市の金附遺跡など、調査成果が高い（貴重な資料となる）遺跡がある。本遺跡もその1つで、北上川の氾濫が、後世の擾乱から遺跡を残す要因となっているのかもしれない。

北上川の氾濫が遺跡を残す要因となっていると述べたが、実際調査してみると、幾重にも堆積する色調の似た硬く締まった土との格闘といった感じであった。調査段階で造構なのか自然現象なのか、把握できないことがあったのも事実である。また類例の少ない造構・遺物が多かったことにも悩まされた。2巻の報告書が発刊されたが、調査員の勉強不足から、本文中で曖昧な記述になっている部分が多くあることをお詫びしたい。また、解釈が間違っていれば、今後の研究材料にしていただければ幸いである。

《参考・引用文献》

- | | |
|---------------|--|
| 井上雅孝 | 岩手県における時宗御碑の基礎的研究 板詰秀一先生古稀記念論文集
考古学の諸相Ⅱ 技術 2006 |
| 岩手県北上市 | 北上市史 第二巻 古代（2）中世 1970 |
| 及川儀右衛門 遺稿 | 江刺の歴史 江刺市史編纂委員会 1998 |
| 小林達雄編 | 縄文土器紀論 株式会社アム・プロモーション 2008 |
| 狭川真一編 | 墓と葬送の中世 高志書院 2007 |
| 鈴木公雄 | 出土儘着錢と中世後期の錢貨流通 史学第61巻第3・4号 三田史学学会 1992 |
| 帝京大学山梨文化財研究所 | 中世社会の墳墓－考古学と中世史研究3－名著出版 1993 |
| 帝京大学山梨文化財研究所他 | 中世の火葬－その展開と地域性－資料集 1995 |
| 上井卓治 佐藤米司 | 葬送墓制研究集成 名著出版 1979 |
| 平凡社 | 中国の陶磁 全12巻 第12巻 1995 |
| 本堂寿一他 | 和賀一族の興亡 前編・後編・叢集編 北上市立博物館 2000 |
| 小笠原健一郎他 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第410集「本町II遺跡」（財）岩理文 2004 |
| 小山内透 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集「鳥田II遺跡」（財）岩理文 2004 |
| 八木勝枝他 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第481集「大横遺跡」（財）岩理文 2005 |
| 金子昭彦 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集「金附遺跡」（財）岩理文 2005 |
| 北田勲他 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第499集「单小屋遺跡」（財）岩理文 2007 |

報告書抄録

ふりがな	さかいいせきはくつちょうさはうこくしょ							
書名	境立跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育会場壁面下門司地区開通跡発掘調査 主要地方道北上一関線下門司地区道路改良工事開通跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第568集							
編著者名	鳥居達人・北村志昭・古田泰治							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田1185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2010年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	度	日	m ²		
境立跡	岩手県北上市 福浦町地蔵堂 190-3号	03206	ME86-0069	39度 14分 19秒	141度 7分 16秒	2008.08.01 ~ 2008.10.10	300m ²	経営体育会場壁面 下門司地区改良工 事に伴う緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
境立跡	集落跡 縄文・ 弥生時代 縄文 土器 陶器 土器 土器	中世	竪穴住居跡2棟、多穴住居状 造2基、土坑2基、土坑2 基	大洞A・式土器、石器、磨製石 器、磨石、鐵器、鐵石 等	縄文時代後期末の住居跡と同時期 と見られる石器			
	集落跡 縄文・ 弥生時代 土器 土器	中世	縄跡1条、遺跡1条、墓塚3 基	古鏡、人骨2件	中世期の土葬墓と遺跡			
	集落跡 縄文・ 弥生時代 土器 土器	中世	縄穴住居跡3棟、多穴住居状 造2基、土坑10基、集石堆 5基、屋根上器2基	大洞A・式土器、砂押式土器 石器、磨製石斧、磨石、鐵石、 鐵器等	縄文時代後期末の住居跡及び同時 期と見られる埴石遺構と埋設土器 等			
	集落跡 縄文・ 弥生時代 土器 土器	中世	縄跡1条、遺跡5条、墓塚4 基	古鏡、人骨2件	中世期の土葬墓と痕跡・遺跡			
要約	縄文時代後期末から弥生時代初期にかけての住居跡を2棟検出した。また、集落遺構や埋設土器なども検出され、これらは石器製作に関わることが考えられる。これらのことと過去の調査から、遺跡は縄文時代後期末から弥生時代の集落跡である様相が濃くなかった。また、中世の痕跡とともに土葬墓が検出され、中世期の居住地であることも確認された。							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	度	日	m ²		
境立跡	岩手県北上市 福浦町地蔵堂 190-3号	03206	ME86-0069	39度 14分 19秒	141度 7分 16秒	2009.04.08 ~ 2009.07.14	1240m ²	主要地方道北上一 関線下門司地区改良工 事に伴う緊急発掘調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
境立跡	集落跡 縄文・ 弥生時代 土器 土器	中世	竪穴住居跡1棟、多穴住居状 造1基、土坑23基、土坑1 基、柱穴状土坑143個	大木10式土器、人頭C式土器、 縄文時代中期末の住居跡と付随 する大型土坑				
	集落跡 縄文・ 弥生時代 土器 土器	中世	竪穴住居遺構3基、土坑35 基、土坑1基、漆11条、 柱穴状土坑219個、灰化物質 中3	古鏡、中国高麗器、繩口、 火葬塚とおもわれる2基の施成土 坑と墓域と思われる墓域集中区				
要約	縄文時代中期末の住居跡や土坑が検出され、近隣にある櫛山遺跡との関連を考慮する必要があろう。また、中世(鎌倉時代)に相当する火葬跡や墓塚と共に、周囲から柱穴状土坑が多く検出された。出土遺物に、中国産の陶磁器(梅瓶)があることから、実力者の墓葬跡があった可能性がある。今までの調査結果から、遺跡は縄文時代から弥生時代、古代、中世から近世にかけての大規模な複合遺跡で、特に縄文時代後期末から弥生時代、中世(鎌倉時代)の2時期の遺構と遺物は、岩手県における当期の研究に好資料となるであろう。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第568集

境遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業下門岡地区関連遺跡発掘調査
主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事関連遺跡発掘調査

印 刷 平成22年3月23日
発 行 平成22年3月26日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
〒024-8520 岩手県北上市芳町2-8
電話 (0197) 65-5650
岩手県県南広域振興局北上総合支局土木部
〒024-8520 岩手県北上市芳町2-8
電話 (0197) 65-2738
(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 634-2235

印 刷 (株)白ゆり
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ6丁目1-50
電話 (019) 643-6060

